

リボーン×ニセコイ！—暗殺教室～卒業編～—

高宮 新太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

圧倒的に白い肌。透き通るような白い髪。それに反するように眼だけは紅く濡れている。

まるで蛇。

その出で立ちも、容姿も、他者とは違った。明確に。けれど、そのどれもが彼という人物を形作るには足りない。

彼を説明する、一番強固な要素。

暗殺者。

彼は人を殺すことを生業とする暗殺者であった。

あだ名はなく、通り名もなく、およそ有名でも、人気でもない。知っているものなど極わずか。

それでも暗殺者としての技能と技量は凄まじかった。

だけど、それだけだった。彼が持っているのはそれだけ。

イタリヤで活動していた彼は、ボスの命により日本へと赴くことになる。

そこから彼の歯車は少しずつ、けれど明確に、変わっていく。

※ニセコイと家庭教師ヒットマンリポーン！のクロスオーバーです。ニセコイのキャラは作中の年齢で登場しますが、リポーンのカラたちは十年後の姿で登場します。バズーカではなく、きっちり十年たった十年後です。

あと主人公たちは凡矢理高校ではなく、並盛高校に入学していま

す。ただ名前を変えただけなので特に深い意味はありません。リ
ボン本編に並盛高校があるのかは知りません。中学があるんだか
ら、なんか、あるだろ高校も。

ということ、どうぞよしなに。

目次

標的 1	山田涼介君とは一切関係ありません。	1
標的 2	Lettera senza l'indirizzo (宛名のない手紙)	11
標的 3	Per la prima volta (初めて)	24
標的 4	La parte posteriore della parte posteriore del dorso (裏の裏 の裏)	36
標的 5	Une indivisibile (表裏一体)	47
標的 6	La distanza diversa (違う道のり)	60
標的 7	Storia passata (過去の話)	71
標的 8	Un cambiamento e l'origine e (変化と原点)	83
標的 9	E sono collegato al prese nte (そして現在に繋がる)	97
標的 10	Consegna delle lauree (卒 業)	116
標的 11	Visitatore (来訪者)	127
もう一つのヘルリング編		
標的 12	Altro anello di Hell (もう一つの ヘルリング)	143

標的 13 Mafia italiana (イタリアマフィア)

155

標的 14 Un ruolo (一つの役割)

標的 15 L'incidente pi. cattivo (最

悪な災厄)

標的 16 Ostilit. (敵対)

標的 17 Sangue fresco (鮮血)

標的 18 Due persone di lamaggio

r parte paura (最恐の二人)

標的 19 復活 (リ・ボーン)

標的 20 Evoluzione (進化)

標的 21 Fine (終息)

修行編

標的 22 オンセン

標的 23 Informazione (修行中)

標的 24 Segno di risoluzione (覚悟の

印)

標的 25 Notti di intrigo (陰謀渦巻く月夜)

標的 26 Anello con scatoia (リングと

匣)

標的 27 Feud (確執)

標的 28 Il prologo. finita. (序章が

終わる時)

めだかボックス編

357

346

333

323

311

300

289

273

256

241

228

212

200

181

170

標的 29 「Mondo sconosciuto」(知らない世界)

387

標的 30 「球磨川禊」(Misogi Kumagawa)

398

標的1 山田涼介君とは一切関係ありません。

イタリア本土――。

今日も今日とていつものごとく、彼は仕事にいそしんでいた。

ひとときわ異彩を放つ外見。髪は不自然なほどに白く、それに合わせるように肌も透き通るような白。華奢な腕と、今にも折れそうなくらい細い体。その白いペンキで埋め尽くされたような外見に反して、瞳だけが真っ赤に濡れている。

彼はアルビノという遺伝子疾患を持っていた。アルビノとは個体の色素を司るメラニンが通常の個体より著しく欠乏しているという先天的な病気だ。

そんな珍しい病気をもってしても、それは彼の特徴のほんの一部分でしかない。

なにせ彼は、人を殺すところを生業とする暗殺者なのだから。

殺して、殺して、殺した。

自らが手にした暗鬼に黒光りする血が滴る。首の根の深いところに差すと、ドロドロとした赤黒い血が飛び出る。薄暗い路地、およそ人が通ることを目的として作られていない場所に人が一人。

いや、正確に言えば周りには既に人としての役割を終えた人形が5、6体。もう動く気配はない。

彼は暗殺者だった。人を殺してくれと頼まれ、その通りに殺す。通り名はなく、自分の名前もなく、知名度も、人気もない。

有名だったのは彼が傘下に所属しているボンゴレファミリーというイタリアマフィアだった。

「失礼します」

「おお、入りたまえ」

彼は仕事の達成報告をしに、自らの上司であるボスに面会していた。いつものことだ。

顔にはしわがいくつもあり、白ひげを蓄えている、一見すると英国紳士のような初老の男性。それがここら一帯の暗殺組織を束ねる彼のボスだった。

暗殺組織、と一言に言っても彼はその全容を知らない。いったい何人が所属しているのか、そもそも何人もいないのか、自分以外の暗殺者に会ったことがない彼には分らなかった。

「突然だが、また君に仕事だ」

いましがた達成報告を終えたばかりだというのにその矢先にまた仕事の依頼。だが彼にとってはそれが日常で何ら疑問を感じなかった。

疑問を感じたのはその内容。

「Giapponeジャポネに行つてほしい」

「Giapponeジャポネに、ですか？」

今までも国外の活動というのはあるにはあるが、精々が隣国どまり。日本なんて極東まで依頼されるのは極めて少ない。

「そうだ。詳しい事は追つて連絡する。飛行機の子ケツトは取つてあるから支度をして明日の午後12時に空港に向かつてくれ」

「ちよつと待つてください」

いくらなんでも明日？急すぎる。

「ん？何かね」

初老の男性——ボスは反論されると思つていなかったのか怪訝な顔をする。

「確か今、日本にはヴァリアーがいたはずですが。彼らじゃダメなんですか？俺である理由は？」

彼は普段命令に背くことなどしない。だが、この仕事には違和感を感じた。今までなかった地域での仕事、それも詳細を明かされずに明日にも飛び立てという。疑問を抱かない方がおかしかった。

「ヴァリアーはすでに別任務でロシアへ向かった。それに彼らは私達

の管轄外だ。それくらいはお前も知っているだろう」

独立暗殺部隊ヴァリアー。この暗殺世界においてきわめて珍しく、名の通った暗殺組織だ。普通暗殺者というのは闇にまぎれ、ひっそりと誰にも気づかれぬままに殺す者の事をさす。だが、時として暗殺者が有名になることがある。

これまで何人殺した。かの有名な○○を。そう噂が立ったのも束の間。大抵その人物は消されることになる。人を殺す職業なのだ。恨みを買う確率はずっと高い。

そのなかでもヴァリアーは異質だった。ヴァリアークオリティと呼ばれるほどおよそ人ではなしえない任務を数々こなし、なによりも驚くべきことは有名になってもなお、その存在が存在し続けていることだろう。それほどまでに彼らはとびぬけていた。

「分かりました」

納得し、仕事を引き受ける。そもそも引き受けるしか選択肢などないのだ。

「ああ、そうだ。それからリングとボックスは置いていくように」

「!?!」

この発言には、彼も動揺する。リングとボックスなんてそれこそ商売道具そのものだ。

「………わかりました」

しかし、彼は反論しない。反論することもなければ激高することもない。

それは自負であった。たとえ商売道具がなかろうと任務を遂行できるといふ圧倒的自信。

「うむ。あちらにはまだリングとボックスの技術は伝わっていないからな。念の為だ」

そんな上っ面の御託を彼は聞き流し、その部屋を後にした。

飛行機に揺られること数時間。日本に到着した彼は、早速ボスに連絡する。

「ああ、着いたか。とりあえずお前がこれから住むことになる家に荷物を置いてこい、それが終わったら並盛中学にいけ」

「はい」

指示された場所に行き、一息つく。家はそこそこの広さがあるタワーマンションだった。

疑問は山ほどある。住む、という口ぶりから察するに任務は長期的なものなのだろう。それに中学、俺に中学生になれと言っているのか。その中学に殺しのターゲットがいるのか。

考えたって仕方がない。彼はいつだってやることは一つだった。一つしかなかった。

言われた通りに殺す。きっちり殺す。ただそれだけだった。

「えーっと今日は転校生を紹介します」

言われた通り並盛中学へとやってきた彼は、そこで自らがこの中学に転入することになっている事を知った。

「名前はぴ、ぴ、ピオッティ・エミールオ？君で、あつてるかしら？ごめんなさい先生イタリア語はよくわからなくて」

彼に名前はない。したがってボスが適当につけたのであろう。ピオッティもエミールオもイタリアではよくある名前だ。日本というならば山本太郎のような、ごくありふれた名前。

というか、そもそもの問題が一つある。彼は今まで日本に来たこともなければ当然、日本語など知らない。ここに来るまでで勉強したものの、基本的な読み書きができるようになったくらいだ。現地の流暢な日本語を聞きとれるレベルにはない。

いくらなんでもこれでは不便だ。早急になんとかせねば。

横で何かを言っている教師を無視して、空いている席に座る。

「うわー、凄い髪だね!」

教師の言葉が終わり、しばし教室は騒然とする。

隣の女が何やら声を駆けてくるが何を言っているのかわからない。

「あ、もしかして日本語分らないのかな? うーんと、へアー、ベリー、マッチー!」

「春。別にマッチはすごいって意味じゃないよ?」

「え? そうなの?」

どうやらこの髪の毛の事を言われているらしいことは想像できた。なぜか後ろの席にいたもう一人の女に注意されている。

先ほど話しかけて来た女を観察する。後ろで束ねている長い黒髪。中肉中背、見るからに活発そうな女の子。

誰かに殺してほしいと思われるほど恨まれているとは思えにくい。次に、その活発少女を宥めている女。肩まである髪は茶色がかっていて、三つ編みにしてる束が一つだけ。彼ほどではないが個性的な髪形だった。背恰好は先の活発少女と同じくらい。先を活発少女とするならばこちらは文学少女といったところだった。

こちらにもまた暗殺者に依頼するほど恨まれてると思えない。

そもそもそんな奴がこの学校にいるのかさえ、分からなかった。

「あーえつと、まだ自己紹介してなかったよね。私、おの小野寺 はる春こつちは秋浪 あきなみ風」

どうやら自己紹介しているらしいことは分かる。自らと隣にいる文学少女を指さしながら喋っている。

「にしてもこの時期に転向なんて珍しいねー。もう十二月だよ?」

彼が転校したのは並盛中学三年二組。もう受験のラストスパートをかける頃合いだろう。だが彼には関係ない。この時期にわざわざ転向させたのには理由があるはずだ。高校までこちらにいるのなら何かしらの指示があるはず。

とりあえず言葉が通じない相手は無視して自らの世界に閉じこもる。自らがここへ来た意味や、今回はどういった内容の仕事なのか。そんなことは頭の中からデリートした。

いつだってやることは一つ。殺ることは一つ。

物事を円滑に進めるコツは、物事を簡略化することだ。

だからエミリーオはそれ以上何も考えなかった。ただ、殺す対象がはつきりしたときに、スムーズに事を運べるように。彼の頭にあるのはそれだけだった。

「あ、あれ？おーいエミリーオ君？それともピオツティ君のほうが正しいのかな？」

「まだ日本語わからないんじゃないかしら？」

「あ、そっか！」

相変わらず無視していると、不意に一冊のノートが目の前に広げられる。

「I'm, Haru Onoderai! Nice to meet you! (私、小野寺春！よろしくね)」

と書かれたノートと共に少女の輝くような笑顔。

第一印象として、これほどまでに完璧なものもそうないだろう。

「Non intendo andare via bene con Lei. (僕は君と仲良くする気はない)」

しかし、彼はそのノートを一瞥しただけで意に介そうとはしない。言葉を通じるかどうかなどどうでも良かった。

依頼内容が不透明な以上。悪目立ちするわけにはいかないが、不必要にコミュニケーションを持つことも避けたかった。

「??え、っと。ごめんね？なんて言ったのかなあ」

春は首を傾げ、困った様子だ。勿論、その反応に返す気は彼にはない。

ここは単なる宿り木だ。ずっとそうだったように、必要なくなれば勝手に飛び立つ。干渉も、感傷もいらぬ。

そして、授業が始まるチャイムが鳴った。

「ねえー君ー」

授業が終わり、昼休み。

クラスの連中は大抵仲の良いグループで固まってお昼を共にしている。

主な会話といえばやれ授業のどこどこが分からないだの、昨日は勉強で何時間しか寝ていないだの、典型的な受験前の中学生の会話。

そうした会話ばかりだからだろうか、なんとなくクラスの空気が悪い。それだけは言葉がわからないエミリーリオにも理解できた。

「ねえ、ねえってば」

一通り観察し終わった教室から出ていこうとしたとき、ようやく自分を引き留めるものの存在に気付く。

「学校のこと、まだよくわかってないでしょ？案内してあげる」

後ろにいたのは秋浪風。文学少女の方だ。にこにこ愛想を振りまき、何かを催促している。

(無視だな)

相変わらず何言っているのかわからないが、どうでもいいことなのでエミリーリオは無視をすることにした。

「はいはい。そんなに焦らなくてもちゃんと案内してあげるから」
したのだがなぜだか首根っこを掴まれて廊下に連れ出される。

人気のない隅っこまで連れていかれて勢いよく放り投げられる。

ドンッ！

「ねえ、さっきの春に対しての態度は何？」

先ほどから態度が一転。文学少女から笑顔は消えていた。

真横には、血筋が浮かび上がるほど力を籠められた腕がまっすぐにエミリーリオに伸びている。

「……………」

何かに怒っていることは明白だ。が、肝心の何に怒っているのかわからない。

そのことに対して相手はあらかじめ用意していただろうスマホの画面を見せてくる。

そこにはイタリア語翻訳アプリが。

そして翻訳されているのは先ほどのセリフ。僕は君と仲良くする気はないというセリフがそっくりそのまま翻訳されていた。

「——————————」

ピロント♪『春に変な気を起こして困らせたら、私が黙ってないから』

彼女の発した言葉が翻訳ソフトにイタリア語でこう翻訳される。

だからエミリーリオもそのルールに則って翻訳ソフトに翻訳してもらうことにした。

※ここからは翻訳ソフトを紹介した会話です。

「悪いが、お前が考えているような気はこっちは一切ない。できるだけ関わりたくないという点ではお前と僕は合致している。争う必要はないと思うのだが？」

「だったらちようどいいね。今後一切春には近づかないで」

「了承した」

「ああ、それと私、春しか興味ないから、君の名前覚える気ないからね。先に言っておくね」

そう言った文学少女は屈託のない笑顔だった。

ヤバい女、性格の悪そうな女。そんな第一印象。先の活発少女とはえらい違いだ。

ジャポーネの女は奥ゆかしくて男性の三步後ろを歩くという印象だったエミリーリオにとって、目の前の女はそれに外れていた。

まあ、エミリーリオにしてみればどちらも大差ない。あるのは任務に関係があるのかなのか、ただそれだけ。

話は終わったとばかりに、エミリーリオは体をずらす。秋浪を通り越して廊下を進む気だった。

秋浪の方もそれ以上興味はないのか、別段、咎めようともしない。

ここで一つ特筆しておくが、エミリーリオは暗殺者だからといって特段、戦争至上主義というわけではない。

むしろ避けるべき戦闘は極力避けたほうがいいという思考の持ち主だ。

そうして廊下を歩きだそうと一步踏み込んだ瞬間、不意に後方から数本のナイフが飛んできた。

「あーあー、惜しいー。黙って死んでくれればよかつたのに♪」

それらのナイフはエミリーリオのわずか数センチといったところを掠めていた。

もし少しでも動いていたら銀色に着飾った特注のナイフでもれなく脳天を串刺しにされていただろう。

「ベル」

そこにいたのは金髪にティアアラ。髪で隠れて見えない目元に、ポーターのシャツを着た暗殺者。

通称「プリンス・ザ・リツパー（切り裂き王子）」ベルフェゴール。ヴァリアー所属の暗殺者。嵐の守護者である。

「いやー、ベルせんぱい良い性格してますねー。ふつうーこんなところでナイフとか投げないですよー？」

そして声とともにいつの間にか後ろから現れたのはカエルの着ぐるみが頭に乗っかっている変質者。「ちよっとー、変質者とか言わないでください。ミーだってこんなダサいの着たくて着てるわけじゃないんですからー」

ヴァリアーの霧の守護者。名はフラン。

「おいこら。なんで俺のナイフわざわざ曲げてやがんだこの野郎」

「えー、だってこのナイフダサいしー。ミーはファッシュョンリーダーなのでこういうの許せないんですよー」

「だからって折る必要ねえだろー！殺すぞ！」

言いながら、すでにナイフ射出し終わっているベルに、しかしフランは動かない。

見事ナイフが頭に命中していたとしても。

「……チツ」

その姿に頭をガリガリとかくベル。傍目にもイライラしているのがわかる。

「いいから早く、用事終わらせて帰るぞ」

ボスからの言葉によれば、ヴァリアーはすでに日本を発つて次なる任務に就いていると聞かされていたはずだ。

……まあ上の情報と現場が違うことなどよくあることだ。

「そうでしたー、白髪さん。これ、依頼ですー」

白髪さん。エミリーオのことである。

フランから受け取ったのは白い便箋。死ぬ気の炎の印がしてある。つまり送ってきた本人の証である。

エミリーオはひとまず便箋をしまい込んだ。そのことを確認してから、「じゃあなオチビ♪しっしっし」フランとベルは用は終わったとばかりに立ち去って行った。

(今回の任務はヴァリアーからってことか？いや、ザンザスがこんなまどろっこしい真似をするとは思えない)

思考に明け暮れているとふと、発せられた声に中断される。

「ちよ、ちよつと何？何あれ？ナイフ刺さってたけど？」

言葉は日本語。つまり先ほどもでいた秋浪である。

一般人に見られていたのはあちらの落ち度だ。まああの二人はそんなことを落ち度とは思わないタイプだが、なんにせよこれはエミリーオの責任ではない。

そう決めつけ、彼は変わらず廊下を進む。なおも困惑した表情を見せる秋浪を放っておいて。

未だこのとき、彼を知る由はなかった。知る術はなかった。

この便箋が彼と、彼を渦巻く環境の、物語の、歯車を動かしていくことになろうとは。

未だ。

誰も。

o b e c o n t i n u e d .

T

標的2 Lettera senza l'indirizzo
(宛名のない手紙)

・
・
・
エミリーオ・ピオツテイ(仮名) 年齢、本名、出自、不明。
ボンゴレファミリー傘下所属。暗殺者。アサシン
現在、命令により日本へと到着。追加の命令まで待機中。
追って随時連絡あり。

便箋を受け取った。それもヴァリアーのベルとフランから。

この依頼はどうにもきな臭い。所々異質、ある種の不気味さまで漂ってきた。

沢田綱吉。さわだつなよし ボンゴレファミリー、現十代目。
この便箋の送り主。

「なんだっていうんだ本当に」

自室のベットに横たわり、便箋を天井に透かす。

死ぬ気の炎の印がされているということは、まず間違いなくこの便箋は沢田綱吉本人から送られてきたということだ。会ったことはないが。

しかし、本題である中身がない。

いや、比喩なしに。中身のない内容とか、他愛のない話とか、そういうのではなく、本当に、中身がないのだ。

真っ白。透かし、炙り、濡らしても、そこから何か重要な任務の内容を指し示すものが、出てこない。浮かび上がってこない。

困惑も当然の反応というものだろう。

加えて、彼、エミリーオはこの一週間で憔悴しきっていた。

日本に来てから、一週間。どれだけいるのかはわからないが、枕詞に適しているのはまだ、という言葉だろう。

まだ、一週間。だというのにこの疲れよう。

原因ははっきりしている。あの小野寺春という女だ。それに付随して秋浪風という女。

この二人。

直接の原因でいえば小野寺春。厄介さでいえば秋浪風。

「ねね、エミリーオ君は日本にはなんで来たの？お父さんの転勤？それとも何か別のこと？」

自らの白い髪と真つ赤に染まった深紅の目が珍しいことは重々承知していた。それで目立っていることも。

どこに行ってもそうだったのだ。日本だけ例外なんてことはない。その考えはまさにその通りで、やはり、日本でも彼は目立っていた。

「春。エミリーオ君は一人でいたいんだよ。構うことないよ」

「風はそういうけどさー。エミリーオ君がそう言ったわけじゃないでしょっ。」

「それは、まあそうだけど……」

(……はあ。またか)

ここでエミリーオは秋浪風から睨まれる。毎度のことだった。もはや見ずともわかる。

彼は目立つ。しかし、自覚している分、コントロールすることはできる。変にさざ波を立てずに、風景の一部と化する。

まるでそこにいるのが自然で、当たり前前の烙印を自らに押す事。

それが一番最初の仕事の準備。

いつもやっていること、それを同じようにやった。

失敗したことなどなかった。これさえ出来れば大抵の任務は楽にこなせた。

「あ、日本語もう覚えた？良かったら教えてあげよつか」

はずなのに。

にっこりと輝く笑顔は変わらない。曇ることなく、混ざることない。

この一週間で、その笑顔は変わったことがない。

まるであの男のよう。彼に便箋を送ってきた、記憶の中の、あの男のよう。

(まあ、だから何だという話だが)

日本語はこの一週間でかなりのレベルまで到達した。片言程度なら聞いて話すこともできる。

こういう手合いにはこれまでだって何度か遭ってきた。同業の暗殺者。スペインの闘牛士。フランスのコック。

けれども、そのどれもで任務失敗なんてしてこなかった。

こういうやつらには、まどろっこしい真似はするだけ無駄。

はつきりと言ってやる必要がある。

頭の中で、イタリア語を日本語に翻訳する。

そう。僕は、お前みたいなやつが一番嫌いなんだと。

「ふっふっふ。私の戦闘力は53万です」

・・・あれ？なんか違うな。こんなんだったつけ？

口に出してから気づいた。なんか違う気がする。言いたかったことと、実際口に出していったことがまるで違う気がする。

「あはははーほらー！やっぱりエミーリオ君は仲良くしたいんだよ！」

「いや、春。多分あれ違うと思うわ。だってセリフあってないもの、見るからに嫌悪感を示した表情とセリフが、あってないもの」

日本語を学ぶにはジャポーネの漫画が一番だと、ボスにそう教えてもらった。

まさかその結果がこれだなんて。

敵意を向け、距離を離すつもりがどうしてこうなった？

雰囲気でわかる。むしろ距離が縮まってしまったと。小野寺春がキラキラとした瞳でこっちを見ているから。

エミーリオは心に固く誓った。もう二度とあの漫画は開かないと。

「よしーじゃあ私の家で日本語教えてあげるよー」

なんとか聞き取れた単語が聞くからに不穏な響き。

もう一度言おう。どうしてこうなった。

「ほらー！(´▽｀)私んち」

そう言つて小野寺春が示したのはひらがなで『おのでら』と書かれた和菓子屋。

もう一回だけ言おう。どうしてこうなった。

断るつもりだった。いや、事実断った。拒否した。

だというのに現実はこれだ。エミリーオはまんまと家の前まで来てしまった。

無論、こんなことは初めてである。暗殺者として生きるようになって十年。その十年で初めてだった。

「あ、春ー。おかえりー……!!?」

自動ドアから家へと入り、母親と思しき人と目が合う。

その見開かれた眼がそっくりだと思った。

「ちよ!?!なにあんた!?!」

「お母さんお母さん。友達友達」

見るからに不審者でも見つけたような反応だ。エミリーオの浮世離れた風貌を見れば致し方ないが。

「あ、ああ……ええ!?!」

小野寺春の説明に、心底びつくりといった表情。

「あんた、こんな外国人のイケメンと友達だったの?」

「転校生なんだよ」

まるで親子。いや、まあ実際親子なんだけど。それにしても仲の良い親子、そんな印象だった。

「ほら、上がってよ」

ここまで来てやっぱり帰るといふのは不自然だし、第一に逃してくれそうにもない雰囲気だった。

春にしてみれば、ただの親切心と外国人の友達というフリーズの高揚感がすべてを支配していたのだが、エミリーリオにとってはありがた迷惑でしかない。

階段を上がり、部屋の扉を開ける。

「やっほー。春」

「風！来てたの？」

部屋の中央に鎮座ましましていたのは秋浪風。

「うん♪無理行ってお邪魔させてもらってた。ごめんね」

しかし、エミリーリオにはひしひしと伝わってくる。春の家で二人きりにさせてたまるかという怨念めいたものが。

「……嫌な女（ボソツ）」

「何か言った？エミリーリオ君」

「別に」

こうして、奇妙な勉強会が始まった。

エミリーリオは思った。

適当に聞き流して、満足したところで用事があるといつて抜けようと。

「そういえばエミリーリオ君はさ。高校どうするの？」

高校。そういえばそうだ。一体全体僕はどうするのだ？

適当に決めてもいいのか、それとも指定した高校に入学しなければならぬのか。勉強は？

山積みになっていた問題が、改めて自らのしかかってくる。

「つて言ってもまだ日本に来たばかりだからわかんないよねー」

さきほどから、春は喋ってばかりだった。

エミリーは会話する気がないのか、ただ一人で黙々と日本語を勉強していた。完全に集中していたのに先の春の言葉で足元が揺らぐ感覚に陥る。

「春は並盛高校行くんでしょ?」

「うん!お姉ちゃんとおんなじとこ。風も一緒のとこだよね?」

「そうね。春と一緒にのところが」

完全に空気から締め出されている。それも意図的に。

居心地が悪い。

まあ、居心地が良かったことなんてこの人生で一度だってないのだが、にしたって悪い。悪すぎる。

人生で三本の指に入るくらいには悪い。

「はあ……」

思わずため息をつく。見えない不安と、慣れないことをしたせいで心労がたたっているのが嫌でもわかる。

わかる分、なおきつい。

「あれ?エミリー君もしかして疲れた?…そうだ!今、甘い物持ってきてあげるね。ダイジョブ、家、和菓子屋だから」

ドヤ顔。

その顔は、自らの家を誇っているようで、自慢げだ。

エミリーは何も言っていないのに、どたどたと部屋を飛び出していく春に、また、ため息。

窮屈だ。それでいて退屈だ。

日本という国にきて、平和だと思った。

夜に、一人で出歩いていても平気だし、何かあっても大抵警察が何とかしてくれる。腰に財布を差していてもスられないし、危機感も緊張感もない。

それはきつといいことなんだろう。努力の結晶。平和バンザイ。だけど、退屈だった。彼は、彼には、退屈でしかなかった。

「ねえ、一体全体どういうつもりかしら?春と二人つきりで勉強会だなんて、一体なにを勉強するつもりだったのかしら。保健体育?」

「うるさい女だ」

「なんですつて?」

今度は聞こえるように言ったので、風の目線がきつくなる。

「別に、来たくて来た、違う。無理矢理、連れてこられた」

「あつそ」

どうやらこちらの片言の意見など聞いてはいないようだ。

どうあれ彼女は春と二人つきりになろうとしたその事実が腹立たしいらしい。

ついでに春がエミーリオのために労力を強いられているのも起因しているだろう。

強いた覚えはないのだが。

「はあ……」

また、ため息。

今日何回目だ?

「もう、帰る」

そうだ。なんで僕はこんなことに付き合っているんだろう。

彼は馬鹿らしくなって自らの手荷物を肩に下げる。

ここには仲良しこよしをしに来たわけじゃない。

「え? 本当に? じゃあねー、バイバイ♪」

見るからに弾んだ表情と、それに伴った声。

「……Donna veramente sgradevo

le (ホント、嫌な女)」

ドアが完全に閉まったのを見計らって、口にした。

聞こえるとまた厄介だから。

そしてもう一人。小野寺春に帰るところを見つかってもまた厄介。

ま、こういう時のための匣ボックス兵器だ。

「……あ、リングとボックス没収されてるんだった」

再度、ため息。

「……ジーズ」

匣兵器がなくなつて、任務はやれる。

その証拠に、今だつて小野寺春に見つからずにあの家を抜け出すことができた。

だから今、彼は気分がよかつた。

先の見えない任務に対しての不安とか、道がないことの焦りも。とりあえず頭の隅っこに追いやるくらいには。

「やいやいやい。お前ちよつと面かせや」

しかし、その良い気分も持つて数分。やはり慣れないことはするものではない。

分不相応だつたのだ。まさに。

和菓子屋を出て数分のところ。4、5人の男に囲まれ、路地裏に連れていかれた。

見たところ全員中学生。

「てめえ、小野寺とどういう関係だ！」

見たところリーダー格の人間が大きな声で怒鳴り散らす。怒っているようだ。

「なんで二人つきりで家にお呼ばれしてんだつて聞いてんだよ！」

無視、というかあまりに早口でなんて言っているかまだ聞き取れない。

厄介なことに巻き込まれた。ただそれだけが分かつた。

「ぶべらっ！」

瞬間、大声で喚いていた中学生をぶん殴る。

「あーあーあー、なんなんだよ。便箋には何にも書かれてねえし。次どうしろつっ！命令も来ねえし。俺は一体なにすればいいんだお！教えろよ！この豚があ！」

馬乗りになって殴る蹴るの応酬。彼は完全に切れていた。度重なるストレスと、不安で彼の心は限界だった。

加えて、せつかくいい気分だったのに妨害された。その気持ちが最後のスイッチを押ししてしまった。

押させてしまった。

「あの女もちつとは空気読めや！近寄るなオーラビンビンにだしてんだろーがよお！」

「お、おい！やめろ！」

側近と思しき男はすでに意識を手放したリーダーを見て、恐怖に足がすくみながらも勇気をもってエミリーオにタツクルを仕掛けた。

それは、リーダーを思つての純然たる仲間意識。助けたいという願いから起こった行動だ。

「……ああ？」

だが、彼には関係がなかった。

タツクルをかましてきた男の背中を両手で固定し、膝蹴りで鳩尾を一発。

呻きながら体を曲げたところを、顔につま先で蹴りを一発。

開いた上体を足で押し倒し、的確に急所をストンピング。

「……」

声もしなくなつたところで、「う、うわああああ」一気に男子たちはなだれかかってきた。

恐怖でまともな思考が凍り付いてしまった。どうみてもそれは得策じゃなかった。

襲い掛かつてきた二人の頭をがっちりヘッドロックし、もう一人を壁に足をつけ、体を一回転。

ぐるりと回る。当然、ヘッドロックを極められている二人も同じく一回転。そして勢いよく地面に叩きつけられる。

そしてそのまま真下に全体重をかけ肘内。ゴキリという嫌な音が路地裏に響いた。

「ひっ。あ、ああああああ!!」

壁にされたもう一人は、絶叫しながら路地裏の奥に逃げようとする

る。

仕込んでおいたナイフを握り、構える。

逃がす理由は、ない。

「はい。そこまで」

ナイフを構えた手が動かない。

見るとムチで巻き付かれていた。

「………跳ね馬」

路地に現れたのは、跳ね馬。跳ね馬ディーノ。ボンゴレファミリーと同盟を結んでいるキャバッローネファミリーの十代目ボス。

通称『跳ね馬』。

「おーおー、派手にやったな」

後ろに控えていたのはその跳ね馬の部下。名をロマーリオ。

逃げ足が速いのか、もう逃げていった一人の影はない。

「………」

ムチに絡まれた腕をだらりと下げ、天を乞う。

狭い空。ビルとビルに挟まれた空は窮屈で空虚。

真つ白なその外見に、まるで筆で散らしたように点々と赤が混ざ
る。

その様はある種、妖艶で、ニタアと笑う姿が彼の異常さを際立たせ
ていた。

「………あーあ、やっちゃった」

現在の自身における立場的に、こういうのはなるべく避けるべき
だったのだが。彼に悔いはない。

あるのは圧倒的快感。それのみ。

「相変わらずだな。ガキンチョ」

笑いながら頭を撫で繰り回してくる跳ね馬に、彼は不機嫌になる。

無駄に爽やかだ。まさにイタリア男子を具現化したような人物。

「やめろ、その呼び名。もう俺………僕は子供じゃない」

「なあその一人称。なんか意味あんのか？」

エミリーオには癖があった。興奮すると一人称が俺、になる。という変な癖が。

彼はあまり俺という一人称を好まなかった。が、なによりいくら直そうとしても無理だったので、仕事のスイッチを入れるという意味で今は逆に徹底して一人称をわざと変えていた。

「うるさい。で、なんだ。何の用だ」

「いや用ってわけでもないんだが、偶々通りがかつたんでな」

笑うその笑顔が嫌に眩しい。

ていうか嘘くさい。

「ふん。じゃあもういいだろ。僕は帰る」

「その格好で？」

赤い血が点々とこびりついている自らを見下ろす。

確かに、このまま街に出ると多少ざわつきそうさ。

「良かったら、送っていいこうか？」

そういつて指さすのは黒塗りのハイヤー。そっちはそっちで目立ちそうさ。

「……チツ」

その快活な笑顔に舌打ちする。こうなってくると目の前でノびているこいつらもサクラだったんじゃないかと疑いたくなる。

「で？どうだ、もうこっちの生活には慣れたか？」
「ボチボチ」

「そっか、そりやよかった。並中にはあいつもいるしまあ問題はないだろ」

「……、」

「日本語は、もう少しつてところかな」
「うるせえ」

車から見える景色は瞬間、瞬間で切り取られていく。

横の男がうるさい所為でせつかくの高級車が台無しだ。これならパトカーの中のほうがまだマシに思える。

スツ、と車が止まる。どうやら着いたようだ。

無言で降りて振り返りもせずそのまま歩いた。振り返るとまたとやかく言われそうだったから。

「じゃな！ガキンチョ」

「うるせえよおっさん」

「おいおい。俺まだ三十なんだけど？ま、お前から見れば三十はもうおっさんかー」

しまった。また火をつけてしまった。

苦い顔になっている。マンションのガラスに映った自分の顔だった。

「本当にじゃあな。また明日」

半ば聞き流し、オートロックを解除。

したところで、違和感に気付いた。

「……また明日？」

その明日。

つまり今日。

「あ、エミリーリオ君。昨日はごめんね、用事があったのに無理に誘っちゃって」

小野寺春が開口一番謝っている。

は？と、呆けた顔をしていると、後ろの風がべーつと舌を出してい

るのに気が付いた。

昨日、風はいなくなったエミリーリオの事を若干はフォローしていたらしい。

彼にとつて、いらぬ世話なのは変わりないが。

「はい、君たち席についてー。新任の先生のあいさつをするよー」
聞き覚えのある声、感じたことのある爽やかさ。背中がぞわっとする感覚。

「どうも、英語を担当することになりました。気軽にディーノって呼んでくれると嬉しいな。卒業までの短い間だけどよろしく♪」

女子どもの色めきだつ声と、男子どもの興味なさそうな反応。

そのどれとも属さない彼の反応は、語らずともわかる。
相変わらずの、苦い顔だ。

o b e c o n t i n u e d .

T

標的3 Perla prima volta (初
めて)

うまく満ち潮に乗れば 成功するが、その期をのがすと、一生の航海が不幸災厄ばかりの浅瀬につかまってしまう。

by シェイクスピア。

「どうも、英語を担当することになりました。気軽にディーノって呼んでくれると嬉しいな。卒業までの短い間だけだよよろしく♪」

女子どもの色めき立つ声。男子どもの興味なさげな空気。

そしてあつけにとられる彼。エミリーオ。

跳ね馬ディーノ。スラリと伸びた長身と、金髪に眼鏡。ああ見えて、マフィアのボス。

目が合った。ウインクされた。

苦い顔になっている、鏡を見なくなつてわかつてしまうのが悲しい。

「わー、イケメンだー」

隣で小野寺春が感嘆の息を漏らしている。

後ろの風は興味なさげ。

いや、この二人の反応など、どうでもいい。

「はい、静かにー。早速一時間目から英語だからディーノ先生よろしくね」

「はい」

担任とのやり取りからも、いつもの爽やかさに拍車がかかっているような気がする。

いや。

だから。

それも。

どうでもよくて。

今重要なのは、なぜ、あいつが、跳ね馬がここに、並盛中学に先生として赴任してきているのかということだ。

これも任務？

「はい、じゃあ早速だけど教科書を開いてー」

普通に授業を始める跳ね馬に、彼の内心は猜疑心に募る。

妄想と想像が繰り広げられ、彼の心は暗雲でいつぱいだ。

黒板にチョークで英単語を書きながら説明している跳ね馬を見て、
一つ気づく。

(あいつ、ドジしてないぞ・・・?)

跳ね馬ディーノには一つの特徴がある。

それが部下の見ている前でないと力を発揮できない、より細かく言うのならありえないレベルでドジを連発するのである。

つけられたあだ名が『へなちよこディーノ』。

だというのに、今の跳ね馬はそんなそぶりを一切見せない。できる教師って感じた。

周りに部下の気配などは感じない。

(まあ、あいつも成長したのか。もう三十だしな)

三十でへなちよこはない。流石に。

授業が終わった直後、普通に教室を出ていく跳ね馬に後ろから歩幅を合わせる。

「おい、なんだこれは。説明しろ」

静かに、けれど的確に情報の開示を求める。

「あー、俺ちよいと昔この学校に赴任したことがあってな。だから今回割とすんなり入れた」

「いや、どうやってアンタがここに来たかの説明を求めているんじゃない、なんであんたがここににいるのかの説明を求めているんだ」

「日本語。もう少ししつてどこか？」

こっちの質問には答えずあくまでマイペースを崩そうとしない。

「昼休み、理事長室に来いよ。日本語教えてやる」

がらりと職員室の引き戸を開けながら、変わらぬ笑顔。爽やかさが鬱陶しい。

扉が閉まる。

結局、疑問は募るばかりで。誰一人、何一つ、ヒントの欠片すら見当たらない。

白紙の便箋を受け取った瞬間から、何かがおかしい。そう思う。が、彼にはどうすることもできなかった。

昼休みになって、大人しく彼は理事長室に向かう。

正直、行く道理などないのだがもう一度だけ事の真相を聞き出しておきたかった。

このままもやもやしたままだといざという時に対処できないと判断したからだ。

ノックをして、入る。

「おつ。ホントに来たか」

跳ね馬が意外そうな顔をする。

そしてそこにいたのはもう一人。

「なに？君達、群れるのなら咬み殺すよ」

トンファーを両手に、有り余る殺気を発揮する人物。
ひばりきょうや
雲雀恭弥。

十代目ボンゴレファミリー雲の守護者。

黒髪短髪に黒いスーツを着こなしている。

孤高の浮雲という雲の守護者の格言を体現しているかのような人物。

“記憶の中では見たことあったが、会うのはこれが初めてだ”。

「おいおい、ちよつと待て。言つといたろ。今日ここ使うって」

「……ふん」

やはり記憶より成長している。まあ十年経っているのだから当たり前だが。

雲雀はエミリーオの方を一瞥すると、それ以上興味を失くしたのか肩に乗せた黄色い小鳥、『ヒバード』と戯れている。

エミリーオの方もそれ以上は気にしない。突っつきすぎると藪から蛇どころか大蛇が出てきそうだったから。

雲雀恭弥はこの中学の理事長であり、現風紀委員長であり、秩序である。

なぜ理事長が風紀委員長も兼任しているのか。その疑問を解消しようとするやつなどこの学校にはいない。

人はそれを愚行と呼ぶ。

着信音。聞いたことのあるメロディー。

並中の校歌だ。

そんなものを着信音にするやつなど一人。

「……ああ、わかった」

雲雀である。

誰と電話していたのかは知らないが、用事ができたらしい。スタスタとまるでエミリーオ達などいないかのように部屋から出て行った。緊張感が緩和する。

「よし、じゃあ日本語講座開講するか」

嬉しそうに言う跳ね馬に、しかし、彼はそれを遮る。

「さて、その前になんでアンタがここにいるのかちゃんと説明しろ。新しい任務なのか？」

一度だけ、瞳を鋭く尖らせ反応を見る。

これではぐらかされたらもう諦めるつもりだった。

「……はあ。分かった。言うよ」

観念したように瞳を閉じる跳ね馬。

その言葉によくやく彼は安心した。自身の殺るべきことをようやく実行することができるから。

「ただし、お前が日本語をちゃんと習得してからな」ニッコリ

「……はあ」

もう、舌打ちする気もなかった。

昼下がりの日差しが廊下に差し込む。

その日差しに当たらないよう端っこを歩きながら、彼はまたため息をついた。

跳ね馬の日本語講座をみっちり昼休み中受けていればため息をするのも致し方ない。

どこか、人気のないところに行きたかった。もう昼休みも終わるが、彼にはそんなのどうでもよかった。

校舎の裏。ちょうど日陰になっている場所。いい感じに人気がない。

校舎を壁に背を預け、ゆっくり息を吐く。

最近急速に周囲を取り巻く環境が変わって、疲れていた。

いや、変わったことそのものに疲れているわけではない。そのこと自体は今までと一緒、変わることが日常だった。

だけど、依頼がない日々。任務がわからない日々。目的が、見えな
い日々。

そんな日々を過ごすのは、初めてで。

どうすればいいのかわからない。

「やいやいやい、黄昏てんじやねえぞ。おい」

聞いたことのある声。どこでだったか、思い出す必要は、なかった。

どごそのチンピラが十数人。なぜか既に傷だらけの中学生が数人と、どうやら他校の生徒が混じっている。どうかほとんどだ。

背格好を見るに、多分、高校生くらい。

「てめえだな。うちの後輩をボコボコにしたつてのは」

その中の一人、太ったさまがまるで豚のよう。見覚えがあるような

気がしないでもない。

「どちらさま？」

とりあえず、名前くらい聞いておこう。

「お前がこの前、ボッコボコにしたやつ先輩だよ！」

後ろにいる連中は全員武装している。やれ金属バットだ、やれチエーンだと物騒だ。

あからさまな敵意。

「……………覚えがねえな」

「……………ほう。それが遺言と受け取っていいんだな」

相手はこめかみをひくつかせ、完全にキレていた。

憂鬱だ。

前回はおよそ人の気配のない路地裏。だからこそ、何も考えずにただ敵を殺しつくせばよかった。

だけど、今回はそうはいかない。

なにより舞台が悪い。学校の敷地内だなんて、うかつに問題を起こせない。

それもこれも、任務の内容さえ把握できていれば、回避、あるいは上手く対処できたことなのに。

「おらあー」

何人いるのか、数える気にもなれないが、その全員が会話もそこそこに一斉に襲い掛かってくる。

バットを振り下ろし、チエーンを振り回す。そんな集団が、個としてではなく、集団で、襲い掛かってくる。

攻撃を避けながら、それも長くは続かない。

いくらなんでもこの人数、リングとボックスがあれば別だが、それもない、暗器も使えないとなると手詰まりだ。

「……………つぐー」

後ろから、頭をバットで殴られた。

その衝撃で、頭から真っ赤な血が流れる。

彼の瞳と、同じ赤。

「ひっー」

思わず殺意を向けてしまう。鋭く尖った獯猛な瞳。赤が揺らめく。だが、それも一瞬。

最初の一撃で手ごたえを感じたのか、他の奴らも次々に殴る蹴るの暴行を加えてきた。

エミリー才はただ黙って耐えている。突つ伏した地面が、土の味が嫌に苦い。

なんでこんなことになったんだっけ？

舞う土埃の中心で、そんな無意味なことを考える。

なんでもいいから早く、意味を与えて欲しかった。この空虚な空を、眺めなくてもいいように。

「ごらー！何やってるのあんたたち！」

声が聞こえた。怒号と暴力が飛び交う中で、それでも聞こえた。

「あん？」

先の豚が反応する。

「やめなよ！寄ってたかってこんなこと！」

その声の主はいつも彼にまわりついてきた人物。笑顔に向けていた人物。

小野寺春。

「おい。お嬢ちゃん。今俺ら立て込み中だからよ。おままごとならあつちでやってくれや」

笑い声。下賤で下品な声が校舎裏に響く。

それでも、小野寺春は怯まない。いつもの笑顔とは裏腹に、眉間にしわを寄せ、似合わないほど瞳に力を込めていた。

(なにやってんだあいつ?)

彼にそこまでする義理も、道理も、彼女には存在しない。

それでも、彼から見える彼女はそこから一步も引かなかった。

「おい……いい加減にしろよてめえ」

豚は我慢の限界のようだった。せつかく気持ちよくサンドバックをタコ殴りにしていたのに、その楽しみを邪魔されるのが豚は一番我慢ならなかった。

一步、二歩と、差を詰める。それでも彼女は退かない。

からからと豚が手にしているバットの音だけが、空間を支配している。

「ねえ、君たち何してるの?」

その空間を割って入る声の一つ。

「今度は何だつてんだよ!」

豚はキレた口調で振り向く。

「群れてると咬み殺すよ」

「なにわけわかんねえこと言ってるんだ!」

威勢のいい罵倒。だが、後ろで控えていた傷だらけの中学生たちは、その姿に恐怖で足がすくんでいた。

雲雀恭弥。並盛をこよなく愛し、一人でいることを好む孤高の浮雲。

手錠を手に、体育倉庫の上から、全員を見下ろしていた。

フツと笑う。まるでちょうどいい暇つぶしを見つけたような、そんな笑顔。

「てめえなに笑ってるんだ! ああ!?!」

その笑顔に、ブチギレル豚。

「や、ヤバいつすって先輩! あれ、ヒバリですよ!」

「はあ?」

「雲雀恭弥! 並盛の秩序! 逆らったら最後、スプラッタにされて東京湾に沈められるとか」

口角の上がった表情のまま、雲雀恭弥は倉庫の上から飛び降りる。

「……ひっ!」

その威圧感に、ついに中学生たちは逃げ出してしまった。

残った高校生たちも、ようやく事の重大さが身に染みたのか、全員もれなく青ざめた表情を浮かべている。

クルクルと雲雀の手元で回している手錠は、一つから二つになり、やがて三つになって四つになった。

「な、なんだそれ! 手品か!」

アラウデイの手錠。

ボンゴレ初代雲の守護者が使っていたとされる武器。

その手錠には雲の炎が注入されている。特性である増殖を繰り返しているようだ。

ボンゴレ匣。エミーリオは直で見るのは初めてだった。

「……………むぐぐ」

あつという間に、残っていた十数人を幾層にも重なった手錠で拘束してしまう。雲雀には傷一つどころか、汚れ一つついてない。

敵に回すと厄介な人物。瞬時にエミーリオはそう悟った。

雲雀は一人残らず相手を地面に伏したところで興味を失ったのか、「次群れているのを見かけたら今度こそ咬み殺すからね」そう言っただころからか飛んできたヒバードとともに校舎裏から去っていった。

「大丈夫？エミーリオ君」

春はそんな光景に呆気にとられながらも、エミーリオのもとへと駆け寄った。

フラフラと立ち上がる彼は、春の差し伸べた手を払う。

ズズ、と校舎の壁伝いに足を引きずりながらも、それでもなんとか足を進める。

「……………」

不意に、体重が軽くなった。

見ると、隣で春が彼の腕を抱えている。

「邪魔だ」

腕をほどいて、体を押す。

必要ないと、態度で示す。

「……………」

それでもまた。彼女は手を差し伸べる。

「ウザイ。やめろ」

「やめない」

一言。けれど芯のある、一言だった。

それまでずっと地面ばかり移していた光景が、初めて上を向く。

泣きそうな顔。

けれど、

泣かなそうな顔。

「なんで？」

聞いた。ただの興味本位で。

「だって、仲良くなれそうだと思ったの」

ハンカチで、彼の血で汚れた顔を拭う。

「……やめろって」

「やめない」

さつきより、さらにずっとずっと確かな一言。

「やめないよ」

不安定に揺れる瞳は、真つ赤に濡れている。その瞳が自分のものと理解するのにそう時間はかからなかった。

日本に来てからこれまで生きてきて、味わったことのないものばかりだ。

未来への不安も、自身への焦りも、上層部への不信感も、沢田綱吉への憤りも。

何もかもすべて、初めての経験で。

どうしたらいいかなんてわからない。

今この時だって、かける言葉の一つも見つからない。

そんなもの、今まで不要だったから。

抵抗していた腕が、だらりと下がる。

だから、ただ黙って、なすがまま、拭われる。

「よし、できた」

彼女はいつもの笑顔で、そう言った。

額にはバンダナのように巻かれた彼女のハンカチ。

授業が始まるチャイムが鳴る。

「あ。鳴っちゃったね。とりあえず、保健室までいこっか」

こんな気持ちに、なったことなんてないから。

「……Grazie (ありがとう)」

「ん？」

どうしたらいいかわからないから、わからないように、わからない

ままで。

それでいい。

「お？なんだお前ら。サボりか？」

「——っ!!」

急に聞こえた声にびつくり。その声の正体にびつくり。

「デイーノ先生」

春の言葉通り、真横の廊下から窓を開けて覗き込んでいた跳ね馬。

「お？どうした？顔赤いぞ？」

「うるせえ！血だバカ!!」

恥ずかしくて、恥ずかしくて、いたたまれなくて、気づいたら逃げ出していた。

こんな気持ちも、初めてだ。

「ありがとう。ねえ」

柔らかく微笑むデイーノの目の前には、走り去っていくエミリーリオと、それを追いかけようとする春。

「あ、ちよつと。春ちゃん」

呼び止めて、振り返ったのを確認してから。

「アイツのこと、よろしく頼むな」

「……はい！」

元気な笑顔。いい笑顔だった。

「それと伝言も頼む。一週間。ちよつと空けとけて」

「わかりました！」

もう行つていいよと合図をすると、思いつき駆け出していく少女を見て、デイーノは郷愁に駆られる。

「ツナたちにもあんな時期があつたなあ」
なんて。

「おお、寒い」

カラカラと窓を閉めて。

蒼く澄み切った空に、風が舞った。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

標的4 La parte posteriore
della parte posteriore
del dorso (裏の裏の裏)

年の暮れに、学校中がなんだか忙しない。特に、三年生である彼の学年は本当に鬼気迫った空気だった。

「ねえねえ毎日毎日、デイーノ先生と何やってるの？エミ君」

「日本語の勉強なんだって。偉いよね。それでね春、昨日見たテレビがね」

だというのに相変わらず、この二人だけは変わらない。いつもと同じ、いつも通り。

「ありおりはべりいまそかり」

「いやいつの時代の日本語よそれ」

「凄い！エミ君古文まで覚えたの!？」

学校で不良どもにボコボコにされてからちようど一週間。

ハルとは何かが劇的に変わったわけではない。彼の考えも、ポリシーも何も変わらない。

ただ、ちよつとだけ。会えば一言二言、会話するだけ。それもほぼハルが一方的に喋る。

それだけ、それだけが、ただ変わった。

キラキラとした眼差しを受けるエミリーオは、なぜか勝ち誇ったような顔をフウに向ける。

当然、フウは瞳を鋭く変化させ、がるとと獯猛な唸り声をあげていた。

それら一切合切を彼は無視し、放課後、帰り支度をし廊下に消えていった。

「ねえハル。なんかあいつと仲良くなってるない？」

「うん？」

「だって、エミ君とか呼んじゃって」

「ああ、ほら、エミリーオ君じゃあ長いじゃない？」

「そういうことじゃなくてさ……」

フウはなにかあったのではないかと、そう探りを入れたつもりだったのだが。失敗。

かわされたのか、それともただの天然か。

まあきつと後者のほうだろうと、フウはあたりをつける。彼女の性格を考えればおのずと答えは見えたからだ。

それにしても、つい数日前までつつけんどんであからさまに無視していた彼が、いったいどんな心境の変化だろう。

フウは心配になる。自分の親友はモテるということを彼女は自覚していた。

もしかしたら……なんていう妄想と想像が今日もたくましく彼女の頭の中で戦っている。

「で？日本語講座はもう終わりか？」

教室を出て、彼は理事長室にいた。それがこここのところの彼の日課だった。

「ああ、流石、土台はできていたとはいえ飲み込み早いな」

目の前には跳ね馬。ごつくていかにも偉そうな机に座っているのは雲雀。

「べつに」

「それにしても、お前が普通に学校生活を送れるようになるなんてな。雲雀にしろ、お前にしろ、人は変わるってことか」

その言葉を跳ね馬が発した瞬間に、二つの殺気。

「うわー、お前ら実は仲良いんじゃないの？」

その殺気にたじたじになりながら、跳ね馬は意図してかどうか、火に油を注ぐ。

「咬み殺すよ」「んなわけねえだろ」

再度、殺気。

「とにかく、これでようやく任務が聞けるんだろな」

一週間、跳ね馬の日本語講座に付き合えば、ここに来た意味、つまり任務を覚えてくれるというそういう約束だった。

彼にとつてこの際なぜという疑問は必要だった。

任務があれば、依頼があれば、目的があれば。それだけでいい。

それさえあれば、彼は何も、考えずに済む。ただ、目の前のことに集中すればよかった。

だから、彼には任務が必要だった。

「わかってるよ。付いてきな」

そう言つてやつと、跳ね馬はエミリーオを連れていく。

黒いハイヤー。前にも乗つたその車にもう一度乗り込んだ。

「どこに行くんだよ」

「それはほら、ついでからの楽しみつてやつ」

胡散臭いその笑顔に、彼は聞く気も失せた。

なぜこうもはぐらかされなきやならないのか、彼には分らなかったが、それも詮無きことだ。

しばらく車は走つて、やがて大きな屋敷の前で止まった。

「ここだ」

跳ね馬は車を降りた。それにならつて彼も降りる。

大きな屋敷だった。ここらじや多分一番でかい。

表札をみると『一条』と書いてある。

ここに一体何があるのか、依頼人か、はたまたターゲットか。

なんにせよ、彼はスイッチを入れた。仕事のスイッチを。

目には見えないそれを、だが確実に押した。

ピンポンと間延びした音がする。

一瞬、自分が押した仕事のスイッチが音がしたのかと思つたが違つた。

跳ね馬が玄関のチャイムを鳴らしたのだ。そりやそうだ。

「はいはい」

出てきたのは制服を着た高校生くらいの少年だった。

「えつと、親父さんいる？跳ね馬つていえば、話通ると思うんだけど」

「ああ、はいはい。いますよ。こっちです」

その少年は、彼らを家の中へと案内する。不信感などはなさそうで、どうやら今日の事は事前にセッティングされているらしいことが分かった。

大きな屋敷の、一際大きな居間。畳何畳分もあるその居間には、高級そうな壺や掛け軸。縁側から見える庭は綺麗に手入れされているのがわかる。

「おい、親父。お客さんだぞ。えつと・・・」

「跳ね馬。跳ね馬ディーノです」

その今の中央に鎮座していたのは、襟足の長い白髪に老けた顔。着物を羽織ったその人物は、明らかに堅気ではない雰囲気。

「おお、お前さんが・・・そうか」

反応を見るに初対面。

この居間に来るまでに何人かすれ違った。その全員が、入れ墨やら剃り込みやら。

「どうやらここは、ヤクザの家らしい。それも相当な規模。」

「じゃあ、俺は部屋に戻るから」

何か気を利かせたのかここまで連れてきた少年は居間から出ていく。

高校の制服と、立ち居振る舞い。そのどれもにヤクザの家に弟子入りしに来たようには見えない。

この家にも慣れてきているようだった。お手伝いならもうちよつと愛想を振りまく。

ということは、元から家にいたのだ。だから慣れているし、変にヤクザらしくもない。

(息子、それか孫かな)

彼の観察と推察は当たっていた。が、今は跳ね馬とヤクザの組長の会話に戻そう。

「それで、ウチのキャバッローネファミリーと同盟を組んでくれるという件でしたが、答えはただけそうでしょうか？」

(・・・っ!?)

彼、エミリーオは内心で驚嘆した。表情として表に出るくらいに。

「うん。その話、受けよう」

あっさりと話が決まる。

「ちよ、ちよつと待て。何の話だ」

口を出すつもりはなかったし、今だっていないのだが、思わず跳ね馬の裾を引っ張っていた。

それくらい、衝撃で、おかしな話だった。

なぜって、まず土地がおかしい。キャバツローネは比較的日本での活動も多いファミリーだが、イタリアと日本じゃいくらなんでも遠すぎだ。そのヤクザと同盟を結ぶなんて完全に裏、つまり別の目的がある。

「同盟について、キャバツローネからは『こいつ』を好きに使ってくれていい。うちの屈指の殺し屋だ」

「はあ!？」

跳ね馬は彼の反応を知りながら、それでも無視して話を続ける。

彼の性格は一言でいえば冷静だ。その彼が、思わず大きな声を上げた。

それくらい衝撃だった。自分がキャバツローネ所属のつもりはなかったし、同盟相手に渡されるとも考えていなかった。

死角からパンチをもらった気分だ。

(あーだからこいつ今までドジしなかったんだ!)

つまり、跳ね馬は彼のことを部下としてみていたのだ。跳ね馬は部下の前では本来の力を発揮できる。

キャバツローネファミリーのボスとしての力を。

いや、そのことよりも大事なことがある。同盟相手に渡されるということは人質という図式が成り立つ。

戦国時代ではよくあることだ。徳川家康など。

「そうか。じゃあお前さん。よろしくな。名前は?」

突然の展開に、開いた口が塞がらないような感覚。

「・・・エミリーオ・ピオツティ」

が、そんなものは彼の生きている裏社会では常なる常識だ。

留まっている木がどんな木だろうと関係ない。その木が枯れていようがいまいが、殺ることに変わりはないのだから。そう思いなおすと彼は落ち着いた。

「長いな。エミーでいい」

返事をする前に爺さんは勝手に決めてしまった。

「おい！楽を呼べ」

「へい」

楽？

誰だ。幹部とかか？

その名前に不審に思っていると、数分もしないうちに先ほどの少年が現れた。

「なんだよ親父。つて、あれ？まだお客さんいるじゃねえか」

「おう、お前に紹介してえやつがいてな」

「なんだよ、また千棘みたいなのは勘弁だぞ」

「ちげえよ、今度は男だ」

息子と思ってみると、完全に親子の空気感。

「これから家族になるエミーだ。年は……いくつだ？」

「そちらのお子さんの一個下ですよ」

彼の代わりに跳ね馬が答える。

「だ、そうだ」

「だ、そうだ。じゃねえよ。これから家族になるやつは年齢くらい覚えておけよ」

「まったく、と、ガリガリと頭をかく楽。

「ま、急だけどき。よろしくな」

腰を屈んで、屈託のない笑顔をさらす楽に、しかし、当然のごとく彼は応じない。

「お前と仲良くする気はない。帰る」

「おいおい、ちよ。はあ……すいません。じゃ。俺もこれで」

スタスタと歩いていく彼に、後ろから跳ね馬も追いつく。

「どういうことだ？なぜ俺がお前の命令下に入ってる」

「あれ？ツナから聞いてねえの？」

「聞いてない。来たのは白紙の便箋が一つだけだ」

「白紙？なんだそりゃ」

「俺に聞くなよ」

どうやら、情報系統で齟齬が生じていたようだ。

本当に、そういうのはしつかりしてほしいと思う。

「つておい。またどこ行くんだよ」

「あ？もう任務内容は分かった。これ以上お前と一緒にいる意味が俺にはない」

彼はただでさえ混乱して機嫌が悪い。

「ぼか野郎。まだ任務は全部じゃないっつの」

「あん？」

そういつて、跳ね馬は強引に彼をまた車に乗せた。

「なんだってんだよ」

ボスである直属の上司ならともかく、跳ね馬にこき使われるのは癪だった。

「まあ聞けつて。これから行くところは『ビーハイブ』つーアメリカのギャング組織だ。最近勢力を広げてきてその手がイタリアにまで伸びてきたんだ。つってもそこはさっきの『集英組』とすこぶる仲が悪くてな。しよっちゅう小競り合いを起こしてた。そのおかげでそこまでの脅威にはならなかった。事実、そう判断した」

黒いハイヤーが動きだす。舎弟と思しき厳つい男たちが何人か頭を下げ、見送っているのが分かった。

「そこまではよかったんだがな。今年の春。集英組とビーハイブが手を組みそうだって情報が入ってきたんだよ。そうなるコトは厄介だ」

彼は、ただ黙って話を聞いていた。任務内容と言われればそうせざるを得ない。

「調べたらさっきの楽とビーハイブの嬢ちゃんが付き合ってるらしいんだ。それで和解しようって腹だろいうな」

「あ、そう。結局俺の任務は何なんだよ」

しまった。我慢できずに口をはさんでしまった。

「そう、そこでお前の出番だ。上手く両者に潜り込んで関係を悪化させてほしい。できればビーハイブのほうを潰してもらえると助かる」

つまり、一言で言ってしまうえばスパイ。と、そういうことだ。

「ふーん。でもそういうの、沢田綱吉は嫌いだろう?」

ボンゴレ十代目は変わり者。それが裏社会での話のネタだ。

沢田綱吉は争い事が嫌い。極力すべて平和的に解決する。

けれど、仲間が傷つけられたときはその力をもって相手をたたく。

まったくもって、まるで物語のヒーローのようだ。

調和の大空の名にふさわしい。

力を持った者の特権だ。

「ああ、ツナはな。だから、戦争になんかならないために、今から牽制しとくのさ」

ツナは。その言葉は言外に、自分はそうでもないと言いたげだった。

同じ大空なのに。

「ツナにはツナの、集英組には集英組の。そんなもってビーハイブにはビーハイブの、守りたいものってのがあるのさ」

守りたいもの、ねえ。

別に、それを糾弾する気も、憤慨する気もない。それを悪いことだとは思わない。

ただ、自分とは違うだけで。

彼が思うのと同時、車は止まった。

先と同様に、話を通して中に入れてもらう。

西洋風の豪邸。内装も外装も違うのに、中にいる人間は似たようなものだった。

「おお、来たね。キャバツローネ」

金髪をなびかせやってきたのは、ビーハイブのボス。爽やかな優男といった感じだ。

この世界、これ見よがしな外見をしてるほうが珍しいが。ザンザスとか。

「ここでもまた、集英組と同様に同盟がまとまる。と、思いきや。」

「いや、君等とは同盟は組まない」

「……なぜです？」

「どうやら、雲行きが怪しくなってきたようだ。」

「僕らはね、イタリア進出を考えている。そりゃキャバツローネ。ひいてはボンゴレの後ろ盾があれば鬼に金棒だが、ボンゴレには昔痛い目にあわさっていてね。九代目のときだけど」

「それじゃあ」

「いや、ダメだよ。感情というのはそう簡単に変えられないんだ。特にうちのクロードは憎んですらいるようだし」

「……では、この話は無かつたことになさると？」

話が長くなりそうだなと、彼は一つあくびをした。異国の地で仕事をするといつもこうだ。若干寝不足になる。

ふと、視線を感じた。

視線を横に流すと、腰まである長い金髪。端正な顔だち。およそ低く見積もっても美人。そして何より、頭に浮かぶ赤いリボンが印象的なその女の子。

視線の正体だった。

『か、かわいい……!』

建物を隔てたそこに、女の子はいた。声は届かないが、口の動きと表情でおおよそ何を言っているのかはわかった。

ガラガラと窓が開く。もちろん、その少女が開けた。

嫌な予感。彼のこういう予感は、不思議とよく当たる。

「う、っん」

彼女は咳ばらいを一つ。

「あんだ、ちよつとでいいからモフらせてくんない？」

目は血走り、息は荒く、手は忙しない。

「いやだ。ヘンタイ」

彼は、容赦なく言葉の鉄槌を下す。

「ちよつとーちよつとでいいからー!」

男がラブホ前で女の子にせがんでいるような、そんな感じだった。

「……じゃあこうしましょう」

その光景を見ていたビーハイブのボスは、口を開く。

「あれ」はウチで預かります。娘が気に入ったようだし」

この任務の本来の目的は、彼をスパイとして内側からビーハイブのイタリア進出を阻止するというものだ。

つまり、この提案は跳ね馬にとって、願ってもないものだ。先ほどまで、それが叶わなかったのだから。

「そんな都合のいい話を通るわけないだろう」

しかし、跳ね馬はそんなことおくびにも出さずに、提案を一蹴する。ここで鵜呑みにしてしまえば不信感を持たれやすい。

「もちろん、タダでは言わない。そうだな、代わりにウチのポラをやろう。あれは優秀だから、足手まといにはならないと思うよ」

内心、跳ね馬はガッツポーズをした。

「……わかったよ。それで手を打とう」

渋々といった様子で、跳ね馬とビーハイブのボスは握手を交わした。

契約成立である。

「ねね、名前は!?!」

「……エミリーオ・ピオツティ」

なんだかデジャブ。

「長い！エミーでいいわね！私は桐崎きりさき 千棘ちとげ」

これもデジャブ。

「おい！ちよ！コラ！首元を引っ張るな」

なんだかキラキラとした目で連れ込まれそうになる。

「言っておくがな！お前らの任務は受ける。完璧にこなしてやる。だが、それでお前たちと仲良くなるつもりは毛頭ない！」

捕まれていた手を勢いよく払いのけ、彼は大声でそう認識させる。ハルのせいで、彼は自身の思いにストッパーがかからなくなってきた。

自覚はないが。

「かわいいー」

「なんでだ!!」

だというのに、一向に千棘からの視線は変わらない。どうやらそんなつつけんどんな姿勢も、逆効果だったようだ。

「じゃあ、そういうことで」

「はい。あいつのこと、よろしく頼みますよ」

その光景の裏で、跳ね馬は勝手に帰ろうとする。最後に、ちらりと彼を見送って。

「あ！おい！バカ！俺を置いていくんじゃねえ！」

「貴様！お嬢から離れろ！」

声とともに、銃声が二発。彼の足元に着弾した。

銃弾の射線を追うと、そこには一人の少年？少女？

「ちよ！^{ツグミ}鶯！」

「離れてくださいお嬢！そいつはボンゴレの手先です！」

ああ、まためんどくさくなった。

新たな登場人物に彼は、天を仰ぎ、ため息を漏らすのであった。

To be continued.

標的5 Une indivisible (表裏
一体)

「貴様！お嬢から離れろ！このボンゴレの手先め！」

拳銃を構えながら、そう叫ぶ男。のような女？

肩までの短い短髪に男の制服、言動。だが、よくよく見てみると確かに女。胸とか。

「ちよつと鷓！どうしたっていうのよ！」

桐崎は射程から隠すようにグイグイとエミーリオを自身の背に隠す。

「お嬢！そいつはあの憎きボンゴレの手先なのですよ！ボンゴレがしたこと、忘れたのですか!?!」

「??？」

忘れていたようだ。

「ボンゴレは度重なる商売相手を潰し、わけのわからぬ兵器で戦場をかっさらう。拳銃の果てには我らと同盟を組もうなどと丸め込もうとしているのですよ！」

怨恨、それも相当なものが感じられる。きつと嫌な事でもあったのだろう。

今にもエミーリオを打ち抜きそうなその空気に、桐崎は待ったをかける。

「待って！見てよ鷓こんなに可愛いだよ!?!」

「お嬢！背丈と外見に騙されてはいけません！」

そろそろめんどくさくなってきた。

エミーリオは深くため息をつく。

「殺れるもんなら殺ってみな」

挑発、そんなこと鷓も重々承知だった。だが、それでも彼女はその額に、拳銃を突きつける。

「……………」

重苦しい空気が、その場を支配する。どちらも譲らない。目線と目

線がぶつかり、動かない。

シンとした静脈音。

「はいはい。そこまでよー」

パンパンとその静脈音を打ち破ったのは、ビーハイブのボスの優男。

「この子は大事な預かり物なんだから丁重にしないと駄目だよ鵜」

「で、ですが・・・」

「鵜」

「っ！」

その一言で、あれほど熱を上げていた彼女が黙りこくる。

「それとそこにいるクロードも。手荒な真似したら、ダメだからね」

「———な！何をおっしゃいますやら！大事な客人にそんなことするわけないでしょう!?!」

「だったらその物騒な縄と睡眠ガスしまつてくれるかな？」

「・・・はい」

「それとエミーも寝床はこちらで用意するかい？」

「いや、いらぬ。こっちはこっちで勝手にやる。用がある時だけ連絡してくれ」

「貴様！ボスに向かってその口の利き方はなんだ！」

「クロード」

「・・・ぐっ！」

なんだかややこしい所に来てしまった。エミーリオはそう思ったが、事はもう遅い。

真っ白い天井に、ため息が浮かんで、消えた。

それからのエミーリオは多忙を極めた。

学校のほうはといえば、もうすぐ入試。ラストスパートを掛けるべく、教室は、いや学年中がピリピリとした険悪なムード。あのフウとハルでさえ普段よりも会話が少なかつた。

エミーリオはというと。

「高校は、並盛高校がいいんじゃないか？お前の学力的にも」

「いいのか？そんな適当で」

「ああ、お前の任務から言って桐崎譲と一条の倅と一緒に高校のほう
が何かと都合いいしな」

「あっそ」

跳ね馬に言われ、高校はそこを受けることにしたのだが、いかんせん受験など初めての経験だ。準備をしておくに越したことはない。

そして学校が終わればビーハイブからの任務。簡単なものから入念な準備が必要なものまで、様々。

そして現在も、その任務の真つ最中。

『敵影確認。ターゲットロック』

あたりは真つ暗。向かい風吹くビルのその屋上。大口系の
アンチマテリアルライフル
対物ライフルから覗く景色には密輸入された軍用のヘリコプター。

ターゲットはそのヘリ。及び周辺の敵対勢力。

彼の任務はそのライフルを使って、密輸入されたブツを片っ端からぶっ壊していくことだった。

『準備完了だ。ブラックタイガー』

『………了解した』

ブラックタイガー。鵜つぐみ 誠士郎せいしろうのコードネーム。割と知られた名らしい。

『こちらは今準備完了した。作戦を遂行するぞBianco』

そのブラックタイガー様の任務は邪魔になる見張りや、戦闘員の無力化。バリバリの前線である。

ちなみにビアンコとはエミーリオのコードネームである。あの優男がつけた。意味はイタリヤ語で白。外見が白いからというズバリ

安直なネーミングだった。

別にエミリーリオというのは彼のボスが適当につけた偽名であるのだからそんなのはいらないと突っぱねたのだが、クロードの嫌がらせにより使うことが義務付けられた。実に大人げない。

しかし、彼は便宜上クロードの手下となっっているので上司の指示には従うほかないのである。

「ほんと、めんどくせえ」

そう呟く声は、風に乗って消えていく。

代わりに、ボンつという銃声音が周りに響く。

続けて二発、三発。銃声音とともに、爆発音。そして悲鳴。

数百メートル離れたここからでも燃え盛る炎と逃げ惑う人々が見える。

次弾を装填しながら次の目標にスイッチする。

目標のブツは5機。弾も丁度5発。

時間的制約と、この潜伏場所が漏れる可能性を考えるとマガジンを入れ替える暇はない。

つまり、外したら作戦失敗。

「いいねえ。分かりやすくして」

スコープから覗く景色に身を委ねながら彼はまた、引き金を引いた。

「作戦は成功だピアノコ。撤収するぞ」

目標をすべて潰し、落ち合うと事前に決めた集合場所で鵜と作戦状況の確認をした後。各自撤収する。

燃え盛る炎が闇夜に美しく揺らめく。

こういう景色と、作戦を成功させた高揚感が彼はたまらなく自身を満たした。

そうした多忙の中で、しかし唯一。集英組からは何の音沙汰もなかった。

仕事にしろ、プライベートにしろ、あの時跳ね馬と一緒に行った時以来なにもない。

別にいいのだが。こうも音沙汰がないと警戒してしまうのは暗殺者という職業病だろうか。

「ほらー！エミー君何してるの？試験会場こっちこっち！」

「……………ああ」

そう。今日は試験である。入試である。

「緊張するね」

「そうか？別に普通だろ」

「アンタに話しかけてないんだけど。私はハルに言ってるの」

「あつそ、じゃこっち向いて言うんじゃねえよ」

「なによ！大体、アンタ合格できるの？最近日本語覚えたばっかのくせに」

「抜かりはない」

その後もギヤーすかギヤーすかと緊張感に欠ける会話。まるで今から入試とは思えない。

「ホント、二人って仲良いね」

「どこが!?!」

息びったりだった。

試験会場というか並盛高校に入ると、もう既に人はいっぱいだっ

た。ここにいる人間すべてがこの並盛高校に入りたいという願いを持っていて。その事実を彼を多少圧倒させた。

が、それだけだ。

手元にある受験番号を見る。その番号と連動している席が自分の

席だ。

受験開始まではもう少し。自分の席に座る。

「なんでアンタが隣なのよ」

「こっちのセリフだ」

隣に座っていたのはフウだった。こんな偶然はいらない。

「これで集中力切れて落ちてハルと一緒に高校に行けなかったらアンタのせいだからね」

「はっ。たかが僕程度で切れる集中力なんてそんなもん無いほうがマシだな」

「なによ?」

「なんだよ?」

バチバチと今にもファイトしそうな勢い。

「ちよつと!君たち静かにしてくれないか!?!集中できないじゃないか!」

「あん?」

「ひっ!」

メガネのガリ勉はその凶悪なオーラによつてすぐに目の前の単語カードに目を移した。

「はい、では試験始めますよー」

こうして、様々な思いが入り乱れた入試が始まったのであった。

「はー、終わったー」

げっそりとした表情のハル。

「大丈夫?ハル」

心配そうなフウ。その顔には若干の疲労を滲ませつつもいつもの笑顔を忘れない。

「………チツ。しまった、あそこの回答間違えたな」

エミリーリオは既に自身の問題点を洗い直していた。

三者三様。まさに人それぞれの試験を終えて、歯車は着々と動いていた。

事件が起こったのは、それから間もなくの事だった。

試験も終わり、エミリーリオはろくに授業にも出らずもっぱら屋上の貯水槽の上で寝ていた。

「お前なー、なんで授業でないんだよ。一応俺が保護者つてことになってるんだからな。ほかの先生の風当たりが強いんだけど」

以前、跳ね馬にこう聞かれたことがあった。

「だって、試験は終わつたら。だったらもう授業なんて出る必要ないだろ」

「お前、そういうところあるよな」

エミリーリオはそう答えると理事長室を出て行った。

そんな記憶を思い出していると、ふと周りが騒がしいことに気付いた。

「うるさいなあ」

あたりを見回してみると、どうやら騒がしいのはグラウンドのようだ。体育中の生徒や教師たちが何かを叫んでいる。

よくよく耳を澄ましてみる。

「やめろー!!」「おい！はやくマット持って来い！」「降りて来なよー！」

どうやら、この屋上に向かって言葉を発しているらしい。

屋上にいるのは彼一人だ。つまりその言葉は彼に向けられているのか。しかし、彼には心当たりなどない。確かに授業をふけてはいないが、そんな鬼気迫る表情をされるようなことではない。

ということとはつまり————いた。

そこには彼以外に、もう一人いた。

きつちりと制服を着こなし、丸い眼鏡。およそ印象の薄いその人物。こんなところで授業をサボるような人間には見えない。

彼は貯水槽の上から、その人物をそう観察した。

「よし、一度寝だな」

結論を導き出すともう飽きたのか、再びごろんと反対側に寝転ぶ。まるで自分とは関係ないみたいに。

状況と、下の反応を見てきつとその生徒は今から飛び降りようとしているのだろう。

だが、そのことに気付いても彼は関係なかった。

沢田綱吉なら、死ぬ気で彼を助けただろう。

跳ね馬なら、その場でその少年を説き伏せただろう。

だが、彼はアクションを起こさない。

ガシャガシャと屋上を囲んである金網のフェンスをよじ登る音がある。もちろん少年から発せられている音だ。

その音は耳に届いているはずなのに、やはり彼は動じない。

そのとき、携帯の着信音が鳴った。

「……もしも?」

『エミリーオ。今お前が屋上にいることは分かっている。そこに今飛び降りようなんてことしてるバカがいるだろ。止めろ』

電話の主は跳ね馬だった。

「なんで電話番号知ってんだ? 教えた覚えはないんだけど」

『今そんなことはどうでもいい。いいから止めろ』

「はあ。いや、僕今日は屋上にはいないんだ」

『嘘つくんじゃない。お前のサボリスポットは屋上か校舎裏。今の時間だと校舎裏は西日がきつい。よって今お前がいるのは屋上だ』

「気まぐれで、今日は違う場所でサボっているなんてことあるだろ」
『いや、そこから聞こえてくる声は遠い。けどクリアだ。ていうことは建物内じゃねえ。もう残ってるのは屋上しかないんだよ。まだ他にも証拠はあるか?』

黙っていると、最後に、命令だ。止めろ。の一言。

「今『僕』はあんたの部下じゃないんだが？」

『名義上はな。もう一回だけ言う。さっさと止めろ。命令だ』

「……はあ」

深いため息。そこまで念を押されると彼には歯向かう理由がなくなってしまう。

仕方なく、彼は貯水槽を降りた。

「おい。お前」

彼が声をかけると、少年は大袈裟にびくついた。

「な、なんだよ！もう止めに来たのか！ほっといてくれ！僕は死ぬんだ！」

矢継ぎ早に言葉を叫ぶ。少年はひどく憔悴しきっていた。

エミリーオはガリガリと頭をかく。

「もう生きてても意味ないんだ。高校受験失敗なんて、笑いものにもなりやしない。必死でやったのに、どうせ僕なんてここが限界なんだ。だから死ぬ。死んで楽になるんだ」

どうやら受験失敗を苦に、飛び降り自殺しようというらしい。

「くだらな」

「っ!!君にはくだらないことかもしれないが、僕にはそれがすべてだったんだ！」

少年は叫ぶ。

そして、もう一人の少年は――。

「死んで楽に……ねえ」

「なんだよ」

「いや別に、実際どうなのかと思ってよ。『俺』もお前も死んだことないから分かんねえよな」

「……っ！」

「この世の中なんてロクでもない。食い物にする連中と、食い物にされる連中。どっちも星の数ほど殺したが、楽そうに死んでいった奴はいねえな」

みな、苦悶の表情を浮かべていた。マフィアのボスも、裏切った連中も。自分で自分を殺してくれと、頼んだやつすらも。

「だから、なんだよ……!」

「別に、俺の中の事実を告げたままでさ」

その少年は俯く。目線を泳がせて、迷っているようだった。

その姿を見て、エミーリオは。

「気が変わった。お前、そんなに死にたいんなら俺が殺してやるよ」

その言葉に少年はぎよつとする。それもそうだ、死ぬのを止めに来たと思った人間が自分を殺すというのだから。

「嘘じゃねえ。俺は殺し屋だ。これで喉物を搔っ切れば一瞬だ」

そういつて彼は、懐に忍ばせていたナイフを握った。

「お前、自分の死にいくら払える?」

「金をとるのか!」

「おいおい、俺は暗殺者だぜ?金をもらえなきやタダ働きじゃねえか」
「……………」

「払えないんなら、今すぐそこから退くことだな。自分にしろ他人にしろ、その死に正当な対価を払えないようならその死に価値はない。お前は無価値だ」

いつの間にか、目と鼻の先まで迫っていたエミーリオに、少年は答えない。答えられない。

「死にたいんだろ?じゃあ選べ。自分で自分を殺すか。自分で俺に殺されるか。二つに一つだ」

金網を隔てたその足場は、わずか数十センチ。足を一步でも踏み外せば落ちる。落ちれば死ぬ。助かる高さではない。

少年は金網の向こうにいるエミーリオのその真つ赤な瞳に、殺気に気圧された。

少年はその凄みに後すぎりをした。否、してしまった。

体重を支えていたはずの足場が急になくなる。

かくんと後ろに倒れ、支えるものは何もない。

悲鳴も浮遊感も何も無い。

落ちた。

瞬間的に、少年はそう悟った。

が、その思いとは裏腹に少年の体は止まる。

見ると、エミーリオのまつすぐに伸びた手が少年の腕をつかんでいた。

少年の代わりにガシャンという悲痛な音と悲鳴が響く。

下を見ると、フェンスの金網が落ちていた。エミーリオが切り裂いたものだった。

自分もあなっていたのだと思うと、背筋がぞつとする。

残ったもう一本の腕で、足場をつかみ、なんとか体を起こした。

「な、なんで……?」

少年にはわからなかった。止めようとしたり、殺そうとしたり、救ったり。

「言っただろ。選べって、俺の選択肢に足を滑って死ぬなんてのはない。自分で、自分の意志で飛び降りるか。それとも俺に殺されるか。その二つしかないんだよ」

「……ぼ、僕は！死に、たくない！やっぱ怖いよ！」

足はガクガクと震えていて、口元はどもり気味。

それでも、少年は意思を伝えた。どうしようもないほどさらけだした意思を。

「あつそ、じゃあ死ね」

けれどあつけなく、エミーリオは少年を突き落とす。

少年は何を思う前に、ただ、落下していた。

「エンツィオ!!」

よく通る爽やかな声。その大きな声よりもより一層大きな怪物がそこにはいた。

エンツィオ。跳ね馬ディーノのペットでありスポンジスツポン。

普段は肩に乗るほど小さいが、水を与えると急激に成長する。

そのエンツィオが、巨大化して少年を腹で受け止めていた。

おかげで、少年には傷一つない。

その事実を皆知るや否や、割れる歓声。下にいた人たちは何が起こったかわかっていなかったが、とにかく少年が助かったという事実だけがその場のすべてだった。

「」

少年はエンツイオの腹から、屋上を見上げる。が、そこにはもう人影はいなかった。

エミリーオはすでに校舎の中に入っていた。人気もない廊下を一人歩いていく。

「……なんだよ？不満か？」

「いや、助かったよ」

その進行方向を塞いでいたのは跳ね馬。

「ただ、別に突き落とす必要はなかったんじゃないか？」

「別に、ムカついただけだ。それに自殺を止めろとは言われてない。僕は命令通り時間稼ぎしてただけだ」

「どうやら彼は跳ね馬の言葉をそう受け取ったらしい。」

「そっか。ま、なんにせよ助かったよ」

「あ、あの！」

そこに、二人の空間にもう一人加わる。

先ほどの少年だった。

「さっきはありがとう。止めてくれて」

「だから、止めてないって言ってるんだろ。お前が死のうが生きようが僕にはどうだっていい」

早歩きで、少年の横を通り過ぎるエミリーオ。

「無様に生き残っちゃったお前は、這いつくばって苦しんで、生きていくのがお似合いだよ」

「うん。そうするよ」

その言葉は、彼に届いたのだろうか。

振り返ることなく、彼はそのまま、歩いて行った。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

標的6 La distanza diversa
(違う道のり)

入試を終え、事件もあつたが無事にいつも通りの平穩を取り戻した並中。

桜もちらほらと開花し始めた今日この頃に、彼らは物騒な話を続ける。

「はあ？ ツーマンセル？」

「そうだ。私とお前で今後は任務にあたっていくことになる。主な内容はお嬢の護衛だがな」

明らかに嫌そうな顔を浮かべながらそう告げるのはビーハイブのヒットマン。 鷓。

「なんで僕がそんなこと」

本来の任務、つまりお嬢である桐崎と一条の交際を辞めさせ、ビーハイブと集英組が手を組んで力をつけることを阻止する。そのことを思えばさして迷惑な話でもない。

が、それよりもなによりもツーマンセルということが彼はとてつもなく嫌だった。

「お前ひとりに行動させていては何をするかわからんからな！ 私が監視役というわけだ！ ちなみにこれはクロード様からの命令だ！ 背くことは出来んぞ！ どうだ！ 嫌か！ 嫌だろう！ 私は嫌だ！」

もう自分でも感情をコントロールすることが出来ないのだろう。泣きながら笑っている。

「そんなに嫌ならやらなきゃいいだろう」

「ふん。クロード様からの命令に背くわけにはいかんだ」

「いや、じゃなくて。 ツーマンセルでやってるってことにして個々で任務にあたる。 それでいいじゃん」

「なるほどー」

その発想は頭になかったようで、 鷓はポンと手を叩く。

「じゃないー！ それじゃ私がお前を監視できないではないか！」

「チツ」

バレたかというように彼は舌打ちする。監視されるなどまっぴらごめんだった。

「とにかく！お前も並盛高校に合格したはずだろう？これからはお前もお嬢の護衛についてもらうことになるからな」

決定事項らしく、例によって彼には拒否権などありはしなかった。

「……了解」

その一言を聞いて満足したのか、鶯は中学の校門から去っていく。

「あれ？エミ君？」

入れ替わりに、彼の名前を口にするのは今まさに下校しようというハル。

「どうしたの？帰らないの？」

「帰るよ。帰る」

今まで鶯に妨害されていたため帰るに帰れなかったのだ。そのせいで厄介な相手に見つかってしまった。

「じゃあ、一緒に帰ろ？途中まで一緒にでしょ？」

「はあ？」

こんなところをあいつに見られでもしたらまたキャンキャンと嘯みつかれる。

「なにキョロキョロと……ああ、フウちゃんは今日は用事あるって先帰ったよ」

「あ、そう」

「ムフフ」

「なに？」

ニヨニヨといやらしい笑みを浮かべるハルに怪訝な顔で返すエミリーオ。

「いやー、本当に二人は仲良いなーって。ちよつと妬げちやうよ」

「……あのな。お前がどういう勘違いしてるか大体想像つくが、そんなんじゃない」

そもそもフウは病的といえるほどにハルにベタベタだろう。

そう言いたいのが、それを言うともんどくさい反応が返ってくる

は自明の理なので黙る。

「ふーん……ま、いいけど?」

ウゼえ。

そう思いつつ、二人は並木道を歩いていく。

「そういえば、三人とも高校合格して良かったね」

「ああ」

「並盛高校にはね、私のお姉ちゃんもいるんだ」

「ああ」

「あ、でも高校でも同じクラスになれるかな?」

「ああ」

「フウちゃんはね中一の時から一緒のクラスだから、高校でも一緒になれるといいんだけど。もちろんエミー君もね」

「ああ」

話を全く聞いていない。右から左に受け流していた彼は、交差点に差し掛かるところで。

「じゃあ僕こっちだから」

「うん。また後でね」

振り返りもせずに自身のマンションへと彼はただ歩いていく。なびく風も、春を感じさせる桜の木も。鼻孔をくすぐる花の香りも。

彼は気にも留めないし、それらに感じていることもない。

「ん? 後で?」

いくらか歩いたところで先のハルの一言が、引つかかった。

そこで初めて振り返るも、もうそこに人はいない。

まあ、言い間違えたんだろうと勝手にあたりをつけ歩みを再開した。

「……ああ、疲れた」

ただ、ため息をつくだけだった。今までそんなこと、思いもしなかったのに。

振り返ることなんて、なかったのに。

パン 「高校合格おめでとーうー♪」パン
「……………はい？」

自宅であるマンションに帰ってくると唐突にクラッカーが鳴らされ、馬鹿みたいに頭に紙テープを乗つけられている。

呆けたような顔をしていると、先ほど別れたはずのハルの顔。頭には浮かれたように派手な三角帽子。

「えっへっへー、ビックリした？」

「……………なにこれ」

「さつき別れてから全速力で走ったんだから！」

「いや、そういうことを聞いてるんじゃないかって……………」

「よう！エミー。高校合格祝いだ」

そこには爽やかな笑みを浮かべた跳ね馬。

「いや、なんでウチ？なんで勝手に入ってるの？」

「それはほら、合鍵で」

「なんで合鍵持ってたんだ！」

「ま、まあまあ」

そこで、ようやく彼は自分の家をぐるっと見回す。

ところどころに飾り付けがされており、ほとんど物なんてなかったのに完全にパーティー仕様に変化していた。

しかも、跳ね馬とハルだけでなく、彼が突き落とした少年や、桐崎千棘。他にも鷓や一条楽。それに、知らない人が二、三人。

「ちよつとこつちきて」

フウもいた。

その集団の塊から少し離れた廊下まで引つ張られる。

「なんだよ、用事じゃなかったの」

「だから、用事よ」

「？」

いまいち噛み合わない会話。

「だーから、 “これ” が用事だったのよ」

てか、そんなことはどうでもよくて。と切り替えるようにフウはぶんぶん頭を振る。

「ディーノ先生の事なんだけど、あれ本当にディーノ先生？」

「はっ。」

またもや、彼には意味が分からない。

「アンタの部屋飾りつけするときやたら脚立から落ちるし、何もないとところで勝手に転ぶし」

ああ、なるほど。

彼は顔を背けながら心中で納得した。跳ね馬ディーノは部下が目の前にいないとその力を発揮できない。逆に言えば究極のボス体質であるわけだが、部下がいないと本当にへなちよこだ。

しかも本人には自覚なしというのが質が悪い。

学校でもちよくちよくその片鱗を見せてはいるが、フウは直で目にするのは初めてだったのだろう。

さて、どう言い訳しようものかと頭を悩ませていると。

「もしかして顔がそっくりな双子がいてディーノ先生は度々入れ替わっていたりして」

「いや、ないから」

そこで跳ね馬をちらと見て気付く。

「ほら、あいつ今日メガネしてないだろ？だから視界が悪かったんじゃないか？」

今日の跳ね馬は学校じゃないからかメガネ無しverだ。そういうことにしておいた。

「……………ったく。なんで僕があいつの尻拭いをしなきゃならないんだ」

「なに？」

「いいや、なんでもない」

とりあえずこれ以上自分の寢床を荒らされるのもいやなので、早々に戻ることにした。

「で、なんで知らないやつもいんの」

跳ね馬やフウ、ハルは分かる。少年も、まあわかる。だが解せないのが桐崎他数名。おまけに知らない奴も交じっているときた。

「あ、自己紹介まだだったね。エミリーオ君でしょ？ハルから話は聞いているよ。私、ハルの姉の小野寺おのでら小咲こさき。よろしくね」

「はあ……」

確かに、言われてみれば似ている。髪型とか、目元とか。

だが、ハルが活発少女に対して、こっちは見るからに大人しそうだ。「わたくしですか？私は楽様の未来の嫁。橘たちばな万里花まりかと申します。以後どうぞ良しなに」

肩まで切りそろえられた茶髪に清楚な佇まい。良いとこのお嬢様を想起させる。

「おいおい、未来の嫁とかあんま勝手な情報を付け加えるなよ」

そして、なぜか一条楽もいる。

「ねえ、それより早くケーキ食べましょうよ」

「お、お嬢？一応これは小野寺様の妹君たちの合格祝いなのですから……」

先ほどまで任務云々と喋っていた鶴に、ホールのケーキを目の前に瞳をキラキラと輝かせている桐崎嬢。

元々一人暮らしというのもあって、いくらなんでも手狭だった。

「ほらもやしー早く切り分けなさいよー！」

「わーった、わかったよ。だからそのフォークを置きなさいませ」

エミリーオは諦めた。どうせ何を言ってもこの状況が覆ることはない。と。

「ていうかエミ君って一人暮らしだったんだね。ビックリしちやっ
た」

「ああ、そう」

目の前に差し出されたジュースをちびちびと口にしながら答える。

「しかし、殺風景だな。家具とか全然ないじゃないか」

「うるせえな。必要最低限ありやいいんだよ」

鶯の指摘に反論し。

「でもお前テレビくらいあったほうがいいんじゃないか？ テーブルもこれ俺が用意したんだぞ」

「あんたはなんでそんなに違和感なく溶け込んでんだよ。ちったあ遠慮しろや」

跳ね馬を罵倒し。

「なにこれ？ 沢田綱吉。って、中身白紙だよこれ」

「あーもう！ 勝手に触んな！」

ハルに怒って。

「はい楽様、あーん」

「いや、ちよつと／＼」

「バカもやし！ なにやってんのよ！」

「ちよ、ちよつと千棘ちゃん落ち着いて」

騒がしくなってきたところで、とうとうエミリーリオは耐え切れなくなったのか気づかれないように玄関から外に出た。

「あー……」

なおも扉一枚隔てたそこからは喧噪が聞こえてくる。

甘いケーキの匂いとその雑音が自分に残る。 たった扉一枚向こうの世界のはずなのに、ひどく遠くの世界の出来事のように感じた。

振り返るとマンションの廊下から見えるのは市内の景色。夕焼けに彩られたその町を見下ろして、彼はひどくちっぽけな気分になった。

自分にはこの任務は向いていないんじゃないか。 そう思うほどに。 今までこんなこと、やはり思ったことなどなかったのに。

「なにしてんのよ」

後ろから掛かった声は、フウのものだった。

「別に」

「あんたの家どうなってるのよ。冷蔵庫もないんですけど。 どういう生活してるの？ おかげで私、ジュース買い出しに行かなきゃいけないんだけど」

本当のところは、一条その他の空気に耐えられなくなって自分から

言い出して出てきた。とは、言わないフウ。

「うるさいな」

「ていうか、あんたがいなくてどうするのよ。あんたの家でしょ」
「……慣れてないんだ。ああいうの」

思わず、ポロツと出てしまった。そんな感じだった。

「驚いた。素直ね」

「はあ?……今、僕なんて言った!？」

自分で気づいていないようだった。

「ふふ、顔真っ赤よ」

「っ!!うるさい!見るな!」

「あらあら、本音を語るのには恥ずかしい年頃なのかな?思春期?」

「うるさいバカ!」

からかわれ、さらに真っ赤になったその顔は茹でたタコのように。

「ずっとそうやって素直にしていればいいのに」

「……無理だね。そんなの、僕じゃない」

殺さない自分なんて、依頼をこなさない自分なんてそんなもの自分ではない。

そうだ。だから、向いていようが向いていまいが、きっちり仕事だけはこなさそう。

じゃないと、自分が自分でいられなくなってしまう。

彼の、瞳が変わった。

「なに?戻らないの?」

「買い出し、行くんだろ?」

「……素直じゃないわね」

階段を駆ける足音は、いつもと変わらず。けれど少しだけ、軽やかに聞こえた。

時は進んで、それから丁度一週間たった頃。鶯に呼び出されたエミーリオは、街中のだ真ん中。繁華街に来ていた。

休日とあつて右を見ても左を見てもがやがやと騒がしい。

「おい、こっちだ」

指定された場所で突っ立っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「なんじゃそりや……」

声をかけてきたのは紛れもなく鶯。彼のその発言は、彼女の格好についてだった。

「なんじゃそりやとはなんだ。ちゃんと任務内容は伝えたはずだろう」

鶯から伝えられた任務内容は、お嬢の護衛。それも対象には気づかれずに。

ということ、当然多少の変装は必要になってくる。事実、エミーリオも、白いニット帽にメガネという出で立ちだ。

「ああ、だから言ってるんだ。なんだそれはと」

対して鶯は、おっさんのような付け髭に、目深に被ったキャップ。いかにも年老いていそうな丸メガネ。

「なぜだ？ちゃんとクロード様に見てもらったのだが」

「いや、不自然だ。まずコンセプトから何から何まで間違っている」

「そんなことはない。完璧な変装だ。誰も私とは思えない」

なぜか鶯はその格好に自信があるようで、まあ別にバレたところはいきなり殺されるわけでもなし、さしたる不都合もないので放っておいた。

「で、対象はどこにいるんだ？」

「む。もうすぐ時間のはずだ」

鶯の言う通り。物陰で待っていると、すぐに一条楽の姿が見える。

「あん？いや、桐崎は？」

「なんだ、聞いてないのか。お嬢と一条は恋人関係なのだ」
「いや、それは知ってるけど」

そこまで言って、彼は悟った。

「ああ、なるほどデートか。それでそのデートの護衛ね」

「物分かりがいいな。そういうことだ」

任務の全容がわかると、途端に気が抜けるエミーリオ。

「うわ、どうしよう。帰りたくなってきた」

「おい。任務を放棄する気か貴様。これだからボンゴレは」

そうこうしていると、一条のもとに桐崎がやってくる。

二人は傍から見ると分には仲睦まじく出発していった。

「よし、尾行するぞ。気づかれるなよ」

「お前がな」

明らかに不審者と尾行をすることになった。

結論を出すとするならば、尾行は概ね成功だった。

ファミレスで完全に不審者扱いされたり、道行く人たちの後期の視線に晒されたりしたことを除けば概ね成功と言えるものだった。

「こんな任務初めてだ……」

「なんだ、尾行は初めてだったのか」

「そうじゃねーよ」

一番質悪いのが本人の自覚がないということ。

まあそれでも尾行して分かったことがいくつもある。

まず一つ目に、二人の仲は良好ということ。

互いに「ダーリン」「ハニー」などと呼び合い、見てるこっちが吐きそうになるほどイチャイチャとしたものだった。

家で見るときはそれほど仲が良いとは思わなかったが、二人きりになると変わるといふことだろう。

これでは、目的である二人の仲を破局に追いやることは容易ではなさそうだった。

二つ目に。

「あ、クロード様だ」

これが二つ目。

ことあるごとにクロードが二人の邪魔をするのである。邪魔と
いっても直接的なことは何もしないが、ただオーラをこれでもかとい
うほどに出す。それだけで二人のムードはブチ壊しだった。

「ていうか何やってんだよアイツ」

「クロード様は自身の時間がある限り、こうしてお嬢たちの監視を続
けておられるのだ」

「しかも常習犯かよ、手に負えねえなおい」

最早病気だった。

以上が一日で彼が感じたことだった。

「ああそうそう。なんでも一条とお嬢は幼少の頃から契りを交わして
いるらしい。なんでも永遠の愛を誓い合ったそうだ」

「なんだそれ。くだらねー」

「下らんとは何だ。良い話ではないか」

益々別れさせるのが容易ではなくなった。彼にとってはただそれ
だけの話だ。

「.....」

「?どうした?」

エミリーリオの空気の変化を感じ取ったのか、鶯は今は公園で休憩し
ている桐崎と一条から目を離し、振り向く。

「別に、なんでもねえよ」

「おい、どこに行く!」

「もういいだろ任務は。クロードの野郎もどっかいったし。もうこれ
以上は意味がない」

「おい!」

そう言い残して、彼は消えた。

「まったたく.....」

それ以降、彼は、姿を現さなかった。

学校にも行かず、ひと月の間、彼を見た者はいなかった。

そして、卒業の日がやってくる。

To be continued.

標的7 Storiapassata (過去の話)

十年前

「ちくしょう！なんだってんだ！」

「相手はガキ一人だぞ！さつさと殺つちまえ」

暗闇にはじける銃声。瞬く光。

そして、低く、怪しく、蠢く赤が二つ。

「なっ!!」

やがてその銃声は聞こえなくなり、その悲鳴も、息遣いも、何もかも、鳴りやんだ。

「……………」

彼、エミリーオ・ピオツティ。この時、名前はまだない。

自身の名前も、出生も、親も、知人も、年齢も、何もかも彼は知らなかった。

記憶というものが彼には欠けていた。ただ、彼はそのことをさして気に留めたことはなかった。

「クフフ。いやはや、まずは及第点といったところですかね」

誰一人動かなくなったはずのその場所で、唯一動く人影。

六道骸ろくどろ むくろ。パイナップルのような髪型に、オッドアイ。ボンゴレ霧の守護者。の、はずだが、その声の主はどう見ても今しがた彼が殺した仲間のおっさんだった。

六道骸の本体は今現在復讐者ヴァインディチェの牢獄の、その最深部に幽閉されている。

ので、今彼が見ているおっさんは、その牢獄から精神体となった六道骸が憑依したおっさんであるというわけだ。

「これで、ここら一帯のマフィアはあらかた片づけたようですね」

「……………」

返り血で真っ赤になったその彼の肌を、彼は拭う。

「あ、骸様あー！」

「犬、うるさい」

「うるさいとはなんだぴょん！」

「……喧嘩は、ダメ」

「あー、もう！ほんつと埃臭いんだけどここ！」

「ししよー、もうミーホテルに帰りたいんですけどー」

その後ろ、ぞろぞろと引き連れているのが六道骸のファミリーだった。

「つたく、いいから早いとこ撤退するびよん」

城島 犬。じょうしま けん。 ヤンチャ坊主のような見た目に八重歯が特徴的な男。

「同意だね。長居していいことはない」

柿本 千種。かきもと ちくさ。 冷静を体で表したかのような男。メガネ。そして目の下にバーコードという異様な雰囲気を纏う男。

「……」

クローム髑髏。まるで骸を女体化したかのような相貌。髑髏の眼帯を着用。骸の幻術で内臓を賄ってもらっている少女。牢獄にいる骸の依代。

「ほらアンタ何ボサつとしてんのよ。これだからお金持っていないこんなガキは！」

バシつと彼の頭をはたくのは、M・M。肩まで綺麗に切りそろえられた赤髪に乱暴な口調。

「ちよつとー、ミー乱暴なの嫌いなんですけどー」

頭にはなぜかリング。ふざけた格好をしているのはまだ幼さが残っているフラン。

以上、六道骸のファミリーである。

「……」

そして、彼も。

なぜ、六道骸と共に行動しているのか。そこに触れるにはまず、彼の過去から追っていく必要がある。

（一月前）

「ああん!? ロシア!? なんで“ヤツ”がそんなところにいやがんだあ!?”
長すぎる長髪に、怒気のこもったその声。

スperlビ・スクアールは自身の部下に対して声を荒げていた。

『い、いえ・・・流石にそこまでは』

声を荒げられたほうの部下は、多少びくついてしているものの、任務報告を済ませます。

「ちっ。めんどくせえな」

スクアールは部下からの通信を切って自身の椅子に深く腰掛ける。

つい先日。大きな地震があった。

その地震は、世界各国で起こるほど大規模なものでしかし被害はゼロという奇跡的なものだった。

なぜなら、理由があるから。

パラレルワールド。

この世界には、無数の世界軸があつて、この世界もそのうちの一つでしかないというもの。

そしてその世界軸の中で、文字通り世界をかけた戦いが未来であり、それに沢田綱吉らは勝利した。

その影響で未来は変わり、本来未来の出来事のはずだったものが、過去、つまり現在生きている彼らスクアールたちの記憶に刻み付けられたのだった。

その副産物での地震。

そして、その未来で彼も。

エミールオ・ピオツティも戦っていた。今から十年後の姿で。

スクアール達ヴァリアーも、例によって十年後の記憶が刻み付けられた。

そこで一人の人物の存在を知る。
フランだ。

十年後フランはヴァリアーの霧の守護者として活動していた。

人材不足に悩めるヴァリアーは早速フランのもとへ勧誘しに行つたのだが、そこには六道骸率いる一味もいて最終的にフランは六道骸

に取られてしまった。

取られたといつても、そもそもアレは記憶を失っていたし即戦力になどならんかったから結果としてはいい。

それが、つい先日の話。

完全にフランを即戦力として引き込めると踏んでいたスクアアロは、空いた人材を埋めるべくエミリーリオを同時進行的に搜索させていた。

それが、見つかったのだ。

だが正直、スクアアロは期待していなかった。

そもそも、十年後だってエミリーリオはボンゴレ側についていたしヴァリアーに入る気配などなかった。

が、それは未来の話だ。

十年後のエミリーリオは過去から来た沢田綱吉らと近い年齢のようだった。

ということは、今は子供。

実力を考えて、フランのようなアホなことがなければ少々鍛えれば十分即戦力になるとスクアアロは考えていた。

それに子供なら、未来を変えやすい。

ということまでロシア。

「もー、なんでこんな寒いのにー」

「うるせえぞルツスーリアー！ロシアなんだから寒くて当たり前だろうがあー！」

一緒についてきたのはオカマ口調のルツスーリアと、あごひげを蓄えたレビィ。

吹雪いていて、見るだけで寒いロシアに、三人は降り立った。

「つたく、ガキはどこにいやがんだ」

情報は、ロシアにいるというただ一点のみ。

ただっ広いロシアで一人の子供を見つけるなど砂漠で一粒の砂を見つけるようなものだ。

途方もない。

が、そこはヴァリアー。

「あの性格に風貌だ、絶対に目立つ。大体の目星はついてるしな」ということで、聞き込み調査を続けた結果。

ロシアの田舎。麻薬や殺しが蔓延しているその地域に、彼はいた。「えーつと、なんでも蛇のような子供が大人相手に殺して現金や食べ物剥ぎ取っていくんですって。これ絶対あの子よね」

ルツスーリアの持ってきた情報に、スクアーロの部下が精査する。『はい。どうやら本当のようです。蛇のように白い肌に赤い瞳。間違いないありません』

部下からの通信に、ようやく少々の期待がかかる。

日も落ちて、あたりが真っ暗に染まったところ。目撃証言のあった田舎に到着すると、そこは小さな村であった。

見渡す限りほぼ何もない。

だが“それ”はあった。

真っ暗な外で、目立つ赤。

何かを貪るように、その赤は動く。

何かとは、詰まる所死体であった。

「フツ。まるで死体をついばむカラスだな」

レヴィイのその一言に反応したのか、その赤がぎよろりとこちらを向く。

「うおっ！」

「うおおおい！お前、〃白髪〃だな」

スクアーロは強面オーラをふんだんにまき散らしながら一人の子供に向かう。

「……………」

すらりと、子供は持っていたであろう武器を取り出す。

「ほお、日本刀か。剣技で俺に挑もうっていうのはいい選択だぜえ！」

「ちよつとちよつと、殺しにきたんじやないでしょう？」

完全に戦闘モードに入っていくスクアアロをルツスーリアは止める。

「……っ！」

が、その甲斐むなしく子供はスクアアロに向かって勢いよく駆ける。

そして、跳躍。

全体重を乗せて、スクアアロに向かっていった。

ガギイツ！

鉄と鉄が激しくぶつかり合う音が、散る火花が静かなその村に響く。

「、」

子供の斬撃を、いなしながらスクアアロは感じた。

これは、ダメだ。と。

「アッ!？」

そう思うが早いか、スクアアロは剣技をやめ、子供を組み敷いた。

そのまま、一瞬にして首を落として気絶させる。

当たり前だが、それほどの、実力差。

「あら？ いいの？ 結構筋はいいと思ったんだけど」

「ふん、技は良くても心がダメだ」

「心・技・体ってやつ？」

「こいつには信念がねえ。剣の道だろうが殺しの道だろうが、信念がなきややつていけねえんだよ。そいつは快樂でも怒りでもいい。道を極めるには強烈な“何か”つてのが必要なんだ」

たった数秒、剣を交わしただけ。

それでもわかった。それほどまでに分かった。

この子供には、なにもない。と。

迎えるべき信念も、支えるべき怒りも。寄り添うべき快樂も。

何もなく、何もない。

「っ!!」

そのとき、真後ろから殺気。

砂利をける音。真上から振り下ろされる短刀。

「へっ。今のはちよつと良かったぜえガキい!!」

気絶したふり。敵を欺くための思考。

が、そんな子供の浅知恵も大人の前ではただの遊びだ。

スクアーロの剣によつて、いともたやすく弾かれてしまう。

「——がつ!!」

そのまま地面に叩きつけられる子供。

首元を絞めながら、それでもなお、その赤は揺るがない。色褪せない。
い。

しっかりと、こちらを睨み付けてやまない。

首元を絞める力をだんだん強くする。

ギリギリと音がして、口から唾がこぼれだす。

それでも、子供の瞳だけは。何一つ、変わらなかった。

「………止めだ」

そういうとスツと、スクアーロは首元の力を抜いた。

抜いた瞬間、その瞳はようやくやく苦痛にゆがんだ。

「あら？殺しちゃうのかと思ったけど」

「……こいつはただの獣だ。人間ですらない。そんな奴殺す価値もねえ」

横目で今度こそ意識を失った子供を見ながら、そう吐き捨てる。

「ていうか、レビイのやつはどこ行ったんだうおおい!!」

「ああ、あの子なら帰ったわよ。寒さでダウンして」

「本当に何やってんだあいつはああ!!」

田舎の隅で、一人、絶叫が響き渡っていた。

朦朧とする意識の中、子供はその言葉を聞いていた。

「……こいつはただの獣だ。人間ですらない。そんな奴殺す価値もねえ」

子供は、それまで負けたことなどなかった。喧嘩にも、かけっこにも、社会にも。

大きな大人にだって、何一つ、負けたことなどなかった。

けれど、それは小さな世界の話。世界の片隅の、片田舎での話。

それは、ある日突然やってきた。

地震。今まで経験したことのないほど大規模で、けれど不安ではない。不思議と安心できるような地震。

その瞬間に、頭に流れ込んでくるのは記憶。それも膨大な量の。そこで、自分は笑っていた。

見たこともない人間と、喋ったこともない人間と。

笑って、怒って、泣いていた。

意味も理屈もわからない。けれどそれがただの事実なんだとそう認識できる。

十年後の自分だと。

けれど頭では理解できていても、心では理解できなかった。

十年後に何があり、自分はどういう行動を選択して、どういう人間だったのか。

その全部が分かるのに、分からない。

あまりにも、現実味がなさ過ぎて。

あまりにも、今の自分とはかけ離れすぎていて。

それまで子供は笑ったことがなかった。悲しいと思ったこともなかった。

だから、十年で、たった十年であれほどまでに自分が変わることが分からなかった。

わからないまま、負けた。

うざいほど伸ばした長髪に、いきり立ったような口調。鋭い眼光。

朦朧とする意識の中で、それでもなんとかそいつの風貌だけは目に焼き付ける。忘れないように、消えないように。

そいつに、子供は生まれて初めて敗北の味を知った。

気絶するような、ひどい味だった。

子供は目が覚めた。

目が覚めた瞬間、瞬時に悟った。

そこが、子供がいた村ではないことを。

「やあ、目が覚めたかい」

そこにいたのはしわがれた声の老人。あごには白いひげが蓄えられており、一見すると優しそうな柔らかい印象を受ける。

子供はあたりを見回した。

見慣れないレンガ造りの壁。暖炉には灯がともっており、暖かい。暖かいのはそれだけではなく、自身にかぶさっている毛布や柔らかい布団。来ている白いシャツも、洗剤の香りも。

子供にとってその全てが新鮮な感覚だった。

村には、こんなものはない。

いつもぼろぼろの布切れか、よくて麻。

つまりここは、村ではない。

「うん。私が君をここに連れてきたんだ。道端に倒れていたからね」
道端？

その言葉の節々に子供は疑問を持つが、持つだけで解消することはできなかった。

不気味。

そんな言葉が子供の脳裏を掠めた。

「温かいミルク。飲むかい？」

「……………」

子供は飛び出た。

その老人の世話になるつもりはなかったし、村に戻るつもりでい

た。

戻ったところで、何も無いのは百も承知だ。その全てを自分が壊したことも。

けれど戻るしかなかった。結局あの狭い箱にしか、子供の居場所は無かった。

たとえ、そこに誰もいなくなったとしても。

だが、扉を開けたそこは子供の歩みを止めるものだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銀世界。

雪、雪、雪。重ねて雪。

そこは、一面雪で囲まれた、銀世界だった。

ここはロシアだ。雪国であるロシアでこの光景はさして珍しくもない。

が、子供がいた村ではここまで豪雪ではなかった。

道路の脇や、屋根の上にこれでもかと白が塗りたくられている。

地形に見覚えがないどころか、きつとあの村からは遠く離れていると、子供は実感した。

「どうするんだい？」

後ろから、老人の音がする。

どうするのかと。

「」

考えるまでもない。どちらに行くかなんて。

子供は飛び出した。迷いなく、疑うことなく。

「ふふ、若いですねえ」

老人は、閉まった扉を薄い目を開けて見る。

いつまでも。

いつまでも。

・・・・・・・・

子供は力尽きていた。

そもそも行く当てなどないのだ。彼には。

そうなることは、必然だっただろう。

それでも、彼は選んだ。そうなることを。

寒い。

痛い。

苦しい。

つらい。

そんな感情に、頭は支配される。

歯の根は合わないし、肌の震えは止まらない。先ほどの温もりな

ど、とうにどこかへ飛んで行った。

ここがどこかもわからない。一面が真っ白で、どこに行こうとも景

色が変わることはなかった。

このまま死ぬ。

そう思ったし、事実そうであっただろう。

子供はそれでもよかった。

死んでもよかった。

スクアア口の言葉が彼の内に残る。

その子供には何も無い。と。

そしてその通りであった。

子供には何もなかった。

生への執着も、死への恐怖も、何もなかった。

何もなかったから殺した。殺せば何か出てくるのだと思った。

それを探して、殺して、殺して、探しているうちにいつの間にか、村

の人間はもう一人もいなかった。

親も、友人も、何もかも。

残ったものは何もなかった。

そして今、彼も死に行く一人として村の皆と同じ運命を辿ろうとしている。

子供はそれに抗おうとしなかった。

ここで死ぬ。それで良かった。

白い雪に、白い肌が重なってまるで保護色。おまけに吐く息も白。

最後に残った赤が、白に埋め尽くされようとしていた。

その時。

「君、マフィアは嫌いですか？」

(・・・?)

唐突に、その声はやってきた。

天使か、はたまた悪魔か。

「クフフ。勿体ないですね。その技。僕が拾ってあげましょう」

微かに残った赤でぼやく視界を広げようとする。

パイナップルのような髪型にオッドアイ。

どんな表情をしているのか子供はぼやけて見えなかったが、その顔

は、きつと笑っていた。

まるで悪魔のように。

こうして、子供は六道骸という人物と、出会った。

u e d .

T o b e c o n t i n

標的 8 U n c a m b i a m e n t o e l ,
o r i g i n e (変化と原点)

「骸様あ！誰びよん?!そのガキは！」

「犬うるさい」

「クフフ。拾ってきました。温めてください」

「わー、師匠そんな冷凍食品みたいに」

「毛布・・・ある」

「えー、私金にならないガキは嫌いなんですけど」

子供を取り囲んでそれぞれは、それぞれの主張をする。

取り囲まれた子供は、反応することなく気を失っているが。

「クフフ。はい、もう一度」

薄暗い闇の中、時折弾ける光。

子供が持っているのは三又の槍。

相對しているのは、六道骸。こちらと同じく三又の槍を持っている。
る。

ただし、その槍は本来一つしかない。六道骸が持っているのは自身の幻術で作った虚像の槍である。

「つくー」

その虚像の槍ですら、子供は打ち破ることができない。

槍の扱いに慣れていないこともそうだが、完璧に実力差であった。

さらに実力差を示す点を挙げるとするならば、彼、六道骸は憑依していたおっさんから離れ、クロームに体を借りたいわば偽りの肉体である。

まあ、それを知る由は今の子供にはないのだが。
そう言っている間にも、子供の槍撃は続く。

「ていうかー、才能ないのよ才能」

M・Mは箱の上から、ふんぞり返ってそう言う。

「なーんで骸ちゃんはこの鍛えてんのよ」

「クフフ。こんなのは酷い言われようですね。しかし、彼は今後マ
フィアを壊滅させるうえで重要な戦力になりますよ」

「ふーん。ま、いいけど」

子供は、雪の中で六道骸に拾われた。

「クフフ、君、マフィアは嫌いですか？」

そういつて、この男は子供を介抱した。

そして、今現在。槍の技術を教わっている。

それは、教わるというほど丁寧なものではなかったが。

それでも、どうせ死んでいた命なのだ。今はこの男の命令に従って
おこうと子供は思った。

そして、一番の理由は――。

「さて、本当に槍の才能はないようですね。では次は剣を」
「……………」

こうして、先ほどからずっと手ほどきを受けている。
が。

「っ!!」

「……………フム」

「さつきよりはマシだびよん」

「そうだね」

犬と千種。食料を買い込みに行っていた二人が帰ってきた。

それでも、その剣技にさして変化はない。相も変わらず、六道骸に一撃も叩き込めないでいる。

「はい、じゃあ次は銃」

「……………」

子供は、文句も言わず、その銃を受け取る。

手に持っていた剣を放り投げ。

いや、銃を受け取るには剣を手放す。それは合理的で、理にかなった行動だ。

だが、六道骸は思った。

この子供には、執着というものがない。と。

先ほどから槍を持っても剣を手にとっても、銃をその身に構えても。

もつといえば、子供の故郷にも、親にも友にも。助けてもらった老人にも。果ては六道骸でさえ。

その全てに執着が感じられなかった。

だから、子供は才能がないと断じられようとも顔色一つ変えないのだ。

子供なのに。

反骨精神も、拗ねて腐ることもない。常に一定。揺れることのない水面。

例えば突然、彼の目の前から六道骸達がいなくなったとしても、彼は何事もなかったかのように生活を続けるだろう。

そしていずれ死ぬ。

執着がない、言い換えれば期待がない。

子供は自身に何の期待もしていないのだ。

「君は、なぜ人を殺したのですか？」

六道骸は聞いた。この子供に、今まではなんとなくの興味だった。戦力の足しになるかもしれないという思いだった。

が、子供自体に興味が沸いたのだ。

「……………別に。殺したかったから」

きつと、それが子供が発した第一声であった。

その答えに六道骸は笑う。

まるで眠かったから寝た。とでもいうように、ごく自然に。子供は答えた。

その異質さに。

六道骸は笑った。

その後も数日かけてライフルや毒、手榴弾といった暗器と呼ばれるありとあらゆるものを六道骸は子供に仕込んだ。

「さて、一通りモノにしましたね」

「(コク)」

子供はわずか数日で、ほとんどの暗器は使いこなせるようになっていた。

「では最後に、ご褒美ということを〴〵これをあげましょう」

そういって、ご飯の最中に手渡されたのは指にはめるリング。

「あー、ししよー、ずるい。ミーにもそれください」

「フラン。君にはもうあげたでしょう?」

「えー、あれダサイからミー嫌です」

「フラン! お前せつかく骸様からもらったやつになんてこと言うんだぴよん!」

「フラン・・・それは・・・ダメ」

「ごめんなさい」

フランはなぜかクロームの言うことだけは聞く。

子供はもらったリングを眺めた。手元で転がし、光に透かしたり。そして、やがて指にはめ。その感触に何とも言えない気持ちになつて。

初めてだったのだ。誰かに何かを与えられるのは。そう、自覚するのは。

「それは、〴〵大空のリング〴〵と呼ばれるものです。覚悟を持ってそのリングを手にすると〴〵覚悟の炎〴〵が噴出します」

そういわれ、子供はリングを眺める。が、特段変化はない。

「どうやら、君には覚悟が足りないようですね」

クフフと笑いながら、六道骸は簡単にそう告げる。

覚悟が足りないよ。

『こいつには何も無い、人間ですらないただの獣だ』

子供は思い出した、長髪の銀髪の男を。自らを殺さなかつた男の言葉。

子供は、自らが他と違うことは自覚していた。価値観も容姿も道徳も。だけど、違うことはわかつてもなぜ違うのかがわからなかつた。それを追い求めて、求めるものがなくなつて。子供はここにいる。「さて、ではそろそろ行きましようか。我々の本来の目的を果たすために」

六道骸は立ち上がる。

「……………」

本来の目的とは何か。そもそも、なぜ自分を助けたのか。六道骸は一体何者なのか。

尚もリングを眺めたまま、子供はそこで、最初に抱くべきはずだつた疑問を、ようやく抱いた。

「行きますよ」

その子供の遅すぎる疑問に、六道骸は気づきながら、しかし。それに答えることはなく。

眼だけで子供を促した。

「……………」

子供もまた、己の内の疑問を質問しない。

質問しても帰つてこないと思つたのか、はたまた疑問を解消する気がないのか。

どちらにせよ、子供は立った。

自分の意志ではないにせよ、けれど明確に。

大通り。人がたくさん通る所。

だいぶ暗闇に染まってきたその場所は、さすが大通りだけあって、まだ夜特有の賑わいを見せていた。

その大通りから歩いて数分。

人通りも静かになったその場所が、六道骸の目的地であった。

「ここが例のマフィア？」

M・Mが訪ねる。

「ええそうですよ。早速入っていきましょうか」

六道骸たちの後に続いて、子供もその大きな店に入る。

店構えはちよつと大きなスーパー。だが、店内に入るとお客は誰もいない。

六道骸は、確かな足取りで進んでいく。そこに何かがあると確信しているように。

やがて、業務用のエレベーター。ボタンは1から7階まで。特に怪しいものはない。

が、骸は迷いなくボタンをいくつか押していく。

子供は、ただ見ていた。何をするのか、どうするのかも知らずに。

ゆっくりと下っていくエレベーターの感覚に身を任せながら六道骸は口を開いた。

「フム。この格好ではいささか不審ですね」

子供は、白いシャツにパンツ。それ以外全員、黒曜中という日本の中学の制服を着ていた。

「ドレスアップしましょうか」

そういうと、骸はクロームを見やる。

クロームの右手にあるボンゴレリングに、骸が手を添えると霧の炎が拡散される。

その炎は、優しく全体を包んでいき。
やがて……。

「ふーん。ま、骸ちゃんにしてはいい趣味してるんじゃない？ お金もタダだし」

M・Mはスリットが入った真っ赤なドレス。

「なんかごわごわするぴよん」

「犬、我慢して」

犬と千種は黒いスーツ。ちなみにお揃いだ。

「うわー、ぷぷ。犬似合ってない」

「うるさいぴよん！」

「ちなみにミーは自分で作りました」

そういうフランの格好は、頭に付けたアップルと、体に付けた大きいアップルがまるで雪だるま。

「チェンジです」

「うえー、ししよーの意地悪」

「あ、あの……骸様これは／＼／」

「クフフ。よく似合ってますよクローム」

クロームは黒いドレス。胸元がバックリと開いている。その仕様にクロームの顔は真っ赤だ。

で、なぜだか子供だけ元の白いシャツ。

「……」

「クフフ？ 不服ですか」

「……別に」

「残念ですがこれ以上はクロームの炎が持ちませんからね」
「……ごめんね」

「だから、別にいいって言ってる」

どうやら丁度、エレベーターが止まったようだった。

エレベーターが開くと、店の正体は、カジノだった。

「(キラキラ)」

M・Mが、やけに瞳を輝かせている。

「え！なにこれ！骸ちゃんのおごり!？」

「なわけないでしょう。僕が破綻してしまいますよ」

「ちえ。なーんだ」

「ここはマフィアが経営している裏カジノです。今からここを、僕らで潰します」

「!？」

そう聞いて、動揺したのは子供だけだった。

ほかのメンバーは聞いていたのかいないのか、いつもと変わらずけれどいつもよりちよつとだけ、真剣な表情。

元々からまともな連中ではないと思っていたが、とてもじゃないが正気の沙汰とは思えない。

自分を外せばたった6人でマフィアを壊滅させる。それも本気で言っているのだ。本気で言っているのがわかるからこそ、子供は混乱した。

「クフフ。では手始めにカジノでもやりましょうか」

「俺この回すやつやるぴよん」

「じゃあ僕はポーカー」

「私はもちろんブラックジャックよ！カジノと言ったらこれよね！」

各々好き勝手に六道骸に指示されたまま、カジノに興じる。

「ミーはカジノとかあんま好きじゃないんでー、こっちでジュース飲んでよーっと」

ほら、白い人も来ます？

と、フランは子供を共に誘う。

「、」

子供は、大人しくフランに従う。

異様なカジノの隅っこの休憩スペースでそこだけまるで兄弟のように隣並んで骸たちを眺めていた。

「……………(っ)いっいっ」

「はい、大歓迎ですよ。ね？」

「……………」

クロームや、なぜか瞳を輝かせているフランのことなど意にも介さず、子供はじつと、食い入るように骸たちを眺めていた。

今から、何が行われるのかと。

「なんだよー、かわいくない子供だなー」

「ふふ。大丈夫だよ、骸様は強いから」

その表情は、まさに全幅の信頼を置いているといった様子。

まさか、このカジノの全容を暴くなどというつもりではないだろうな。と、子供は思考を巡らせる。

裏カジノ相手にボロ勝ちするなんてこと、考えられない。

「うえーん！負けたー」

「ありや。もうなくなっただぴよん」

「犬。お菓子ばかり食べてるからそうなるんだよ」

「そういう千種だつてすつからかんだぴよん」

「犬、うるさい」

「いだだだだ」

・
・
・

「ま、負けてんじゃねえか!!」

子供は、思わず突っ込んだ。

「クフフ。いいえ、ここからが本番ですよ」

六道骸は不敵に笑う。

「六道輪廻。天界道」

そういうと、骸の右目の紋がゆらゆらと揺れ、「六」に変化した。すると、骸の目の前にいたスキンヘッドの青年が。

「おい！なんだこれは!!イカサマだろー!」

急に人が変わったかのように大声を出し始めた。

「ああ!?なんじゃワレ」

「つて、この子供が言っていました」

「……え?」

その青年は打って変わって子供を指さす。

「おお、いい度胸だなガキ!!」

明らかにカタギではない血の気の多そうな大柄なお兄さんが、裏からぞろぞろと。

「では、頑張ってください」

「なっ!」

六道骸はそういうと、霧に消える。

「クフフ。私は活動限界です。あ、ちなみにクロームたちはできるだ手を出してはいけませんよ」

声は、どうやらクロームの肩に乗っているフクロウから発せられているようだ。そのフクロウも、六道骸と同じくオツドアイ。

そうこうしているうちに、どうやら囲まれてしまったらしい。

子供が持っているのは懐に忍ばせた短剣と拳銃が一つ。

対して奴さんは数が二十、三十、かそこら。斧やら拳銃やら物騒なものを持っている。

子供と大人という点を差し引いても、勝てる戦ではなかった。

「おうおうおう!よくもまあ、いい加減な難癖つけてくれたもんじゃない」

「.....」

子供は、覚悟を決めたのか、それともただ単に諦めたのか。

ようやく、敵に向き合った。

「やれ」

敵の中の一人がいうが早いか、カジノの中は怒号と喧騒に吹き荒れる。

「っ!!」

子供は、その喧騒に押されながらも、赤い瞳を鋭く尖らせ。

右手に短刀。左手に拳銃。

その二つを携えて敵の塊に突っ込んでいった。

「な!なんだこいつ!」

銃口と引き金を引くタイミングを合わせて銃弾を短刀でかわし、返す刃で拳銃を突き出し、引き金を引く。

一人、二人、三人。

「おらあー」

後ろから。刀が飛んでくる。

「ぐっ！」

それを肩で受け止めながら、後ろ向きのまま、拳銃をぶっ放した。そのまま、自らの鮮血もいとわずに刀と銃を振るう。

「クフフ。ほらね。戦力になるといったでしよう」

子供は笑っていた。これまで、泣こうとも笑おうともしなかった子供が。

修羅の戦場で、初めて。

「ふーん。ま、いいけど」

M・Mも、同じ言葉を返す。変える気はないと示すように。

「いけー、白いひとーそこだー」

「フランうるさいぴょん！」

「そういう犬もうるさい」

「おいおいおい！やたら余裕だな！貴様らあの子供の仲間だろ！助けてやったりしないのか！」

敵の一人が指を刺しながらそういう。

「ミーはヤダ」

「いやだぴょん」

「めんどい」

「骸様が・・・言ったから」

「お前ら道徳心とかないのか!!」

マフィアに道徳心を説かれた。

「そんなこといいからやっちなまえ！」

周りにいた五、六人の連中も加わり、クロームたちに襲い掛かってくる。

「はあ、めんどい」

が、しかし。

「ゴングチャンネル」

「ヘッジホッグ」

それぞれに武器を砕かれ、あっけなく倒される。

はたと子供を見やると、残りはすでに十数人が。

「はっはは！どうした弾切れか!？」

「.....」

カチカチと、引き金を引くもそこから銃声はしない。

「よし！殺せ!!」

「チッ!」

軽く舌打ちをした瞬間、子供は走り出す。

男の持ったサブマシンガン。空になった拳銃を投げつけ、相手の拳銃を一瞬凍らせる。

そしてそのサブマシンガンをうまく扱えていないと判断し、突っ込む。

「な!」

小さな体を駆使し、肘と脇に手を入れ、そこから相手の体を百八十度回転させる。

バババババ!とサブマシンガンの引き金はひかれたまま、天井にあたって四方八方に散る。

その散った銃弾がカジノの明かりを奪った。

一瞬にして真っ暗。

だが、そこに唯一光る赤。

「ぐうう!!」

いつの間にか、残るのはたった一人になっていた。

「なにやっつてんだよ!相手はガキ一人だぞ!」

当然、その声に答える者はいない。

暗闇に、荒く響く息。恐怖がここまで伝わってくる。

「.....」

何を感じているのか、何を考えているのか。子供は先までの笑顔はない。

やがて、その鼓動も息遣いも、何もかも、消えてなくなった。

「クフフ。まずは及第点といったところですかね」

いつの間にか、六道骸はフクロウからクロームの体を借りて一時的

に実体化していた。

活動限界など嘘だったということだ。子供に“これ”をやらせるために。

真っ暗の中で、赤が揺れる。

「うえー、グロ」

フランがもう動くことのない体を突つつく。

「それでは、帰りましょうか」

「あー、結局一銭も勝てなかったぴよん」

「ふふ」

「なに笑ってるのM・M」

「この私がタダで帰るわけないでしょ！ほら！あんたらも持ちなさ
い」

どこかに消えていたと思っていたら、M・Mは両手に札束を抱え。

「うーん。この匂いがたまらないのよ！」

抱えた札束に顔をうずめて、恍惚の表情を浮かべるM・M。

「めんどい」

「ほら！早く持つつ!!あんたも！」

「……やだ」(ツーン)

子供は、自然とその輪に加わっていく。

違和感なく、自覚なく。

「骸様……」

「クフフ。結局、“アレ”は出てきませんでしたね」

後ろの会話には気が付かずに。

そして、一か月が立ったころ。

「……クロームが、攫われた」

事件は起こる。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

——裏カジノ。監視ルーム。

ロシアンマフィアであり、裏カジノを経営していた一人の男。

その男は今現在、ありえない光景を目にしていた。

それまで、裏カジノを死角なく見渡せる監視ルームにその男は優雅に佇んでいた。

今日も今日とていつも通り。馬鹿な客が、適当に勝って、そして最後には大損して帰る。けれど、その損には気づかない。それがいつも通りのこのカジノの常だった。

そんな“いつも通り”が今日もやってくると思っていた。いや、思っただけでなかった。なにせそれが当たり前なのだから、そこに疑問を持つこともなければ考えることもない。

そんな男の目の前に、そいつらは現れた。

最初は周りの客と同じようにただカジノをして、そして多額の金を落としていく。いいカモが来た。そう男はほくそ笑んでいた。

だが、もの数分もしないうちに状況は一変した。

客の一人の言動がおかしくなったと思ったら、いつの間にか、銃撃戦が繰り広げられるまでに。

一人、離れた場所で様子を伺っていた男は、監視ルームで全体を見渡せたおかげで異変に気付いた。

そう、こいつらは何かがおかしいと。

最初に声を荒げていた男も、その後に銃を乱射し始めた部下も。混乱を拡大していた右腕とよべる人間も。

全員、何かがおかしかった。

まるで、わざとそこを戦場に行っているかのように。

だが、それがなぜそんな風になっているのかまでは男にはわからなかった。

ただ、漠然とした違和感が男を襲う。

けれど、男にはどうすることもできない。ただ、画面を食い入るように見つめることしか出来なかった。

なぜなら、その戦場とも呼べる銃撃戦の中で、ただの子供が。全身を真っ白いペンキで塗りつぶされたかのような真っ白な子供が制圧しているのだ。

仮に、男一人が銃を持って戦場に加わったとしても変わらない。そう実感させるほどに、子供は怯えることなく、見事に戦場を手玉に取っていた。

それは何かが欠けているとしか思えないほどに、なんの躊躇ちゆうちゆうも躊躇ちゆうちゆうもない。

まるで息をするかのように、殺していく。

その光景に男は恐ろしくなった。きつとあの場所を制圧されたら、次にたどり着くのはここだ。

きつと、あの連中は“アレ”を奪いに来たのだ。

そう思うが早いか、男は逃げ出していた。

部下も右腕も全てを戦場に置き去りにして。ただ、男は逃げた。

そこにおいても殺られることは明白だった。

男は着の身着のまま、そこを逃げ出した。

あてもなく、ただ恐怖という感情に支配されて逃げた。

ただ一つ、恐怖に支配された頭でも“アレ”だけは忘れずに持つて。

「……あとはキャベツとお肉」

そして時は進んでそれから一月ほどが経った頃。

子供はクロームと一緒に夕飯の買い物をしていた。

ロシアの中でも活気ある市場。

そこでクロームがメモを見ながら買い物袋を引つ提げている。

「……………あ。ありがとう」

子供は、クロームが持ちづらそうにしていたのを見かねてか買い物袋を無言で持っていく。いや、奪い取るといったほうが適切か。

「……………別に。早く帰ろう」

子供は喋るようになっていた。

といつてもまだまだ人を選ぶし（主に犬）、言葉足らずなところもあるが。

それでもクロームは嬉しいと感じた。

クローム自身、そこまで口が達者なほうではないが人との関わりを避けているわけではない。

特に未来に行つて三浦みうらハルや笹川ささがわ京子といった友人を得ることによつて、それが顕著になっているのだろう。

「なんだよ」

そんなクロームの感情が表情に出ているのだろう。子供は不機嫌そうに口を開いた。

「ううん。なんでもない」

「チツ」

舌打ちをする子供を、微笑ましく見守りながら彼女。クロームは気づいた。

「あ、チョコレート、忘れた」

今日の夕飯は鍋である。鍋にチョコレートは勿論不要だが、チョコレートは六道骸の好物。それが切れていたことを思い出したのだ。切らしたままでは六道骸が拗ねてしまう。そんな光景を想像してクロームは急いで回れ右をする。

「……………ごめんね。ちよつとここで待つてて」

「あん？」

確か、チョコレートはこの市場を抜けて角を曲がったあたりに専門店があつたはずだ。

そう記憶を掘り起こし、クロームは子供を置いて走り出す。

「あ、……まあいいや」
子供は追いかける気力もなく、ただ、道の端つこに座り込んだ。
どうせ、チョコレートを買うくらい数分で終わるだろうとそう決め
つけて。

が、いつまで経ってもクロームは戻ってこなかった。

一時間か二時間か、子供は時間を知る術を持っていなかったの
で正確ではないがとにかく待つて待つても彼女は帰ってこなかった。
道の端つこで活気ある市場を目の前にしながら子供は考える。

(……捨てられた、かな)

チョコレートを買いに行くというのは体のいい口実で、本当は自分
をここに置いていくつもりだったのではないかと。

別に、子供は悲しくはなかった。

そもそも拾ってもらったのも、今日まで一緒にいたのもなにか特別
な理由があるからではないのだ。

家族でもなければ、元々知り合いでもない。通す義理などどこにも
ない。

なら、めんどくさくなって捨てられてもそれはしょうがないこと
だ。文句を言うのは筋違い。

だから子供は別に悲しくはなかった。

剣を教えてもらった。銃を教えてもらった。食卓の囲み方を教え
てもらった。読み書きを教えてもらった。お金の数え方を教えても
らった。

そのどれもが、子供にとっては初めてで。

「あれ……っかしいな」

視界が滲む。地面のアスファルトがゆらゆらと滲む。

そんな感情自分にはないのだと思っていた。村の全員を殺してお

いて、今更何を言っているのだと。

都合のいい話だと分かっているのに、止められない。止まらない。ぐしぐしと目を擦る。

そして、子供は立ち上がった。

とにかく、クロームが行ったチョコレート店まで行ってみようと。そこでいなかったら諦めるために。

そしたらまた、あの日々に戻るだけだ。

きつと永遠に見つからない何かを探して、何かとはわからないままに探して、そんな日々。

結論から言うと、クローム髑髏はいなかった。

だが、代わりに一つの便箋が店の店員から子供に渡された。

中身は。

『彼女は預かった。返してほしければ子供が一人で港の埠頭まで来い』

要約するとこのようなこと。

その全文を読み終えたとき子供は困惑した。

なぜなら自分の頭にそのような選択肢はなかったからだ。

もしもクロームがいた場合は多少文句を言ってこれまで通り。

いなかった場合は、捨てられたと判断しましたあの日々に戻る。

それが子供の頭で想定していた場面であり、その上での選択だった。

が、今のこれは全く予想できていなかった。

だから、困惑した。

そして――。

子供は決断することが出来なかった。

咄嗟に選択をすることが出来なかった。

便箋に書かれていた文面通りに、一人で埠頭に行くのか。

それとも一度持ち帰って六道骸たちと共にクロームを救出しに行

くのか。

全てを投げ出して逃げ出すのか。

そのどれもが、頭では想像できるのに。実際に決断して、行動することが出来ない。

出来なかつた。

脳裏に、銀髪でウザイほどロンゲの男の言葉が反芻する。

『お前には何も無い』

子供は、ただ佇んだ。

どうすることもできないまま。どうしようというこゝともないままに。

そして、子供は帰ってきた。六道骸たちの根城に。

それは自ら選択したわけではなく、もうそうするより他になかつたから。

「おや？どうしたんですか、そんな顔をして」

クフフと笑いながらそう問う骸に子供は俯くばかり。

そして、骸は子供が持っている一枚の便せんに目が留まつた。

「……クロームは？」

「……クロームが、攫われた」

「そうですか。そういう手で来ましたか」

六道骸はそのことに対して事前に察知していたとでも言いたげに大した反応もせず便箋に目を通す。

「……なるほど、向こうはどうやら君だけを指定しているようですね」

ぐしやりと便箋を握りつぶし燃やす。

「どうするんですかー、しししょー」

「決まっているでしょう。取り返しますよ。クロームは僕の体ですからね」

「でも、こいつ一人でできるのかしら？明らかに罠よ」

M・Mの言う通り、子供にクロームを救出できるのかどうかこの場にいる全員が不安視していた。

当の本人でさえも。

けれど、その空気に加わらないものが一人。

「クフフ。大丈夫ですよこの一か月、僕がみっちり鍛えましたからね」

六道骸は自信満々に一点の揺らぎもない。

「ねえ？君は今まで何かを選択したことがない、だから自分の中で空っぽのように感じるんでしょう？だったら、選択してきなさい。選択せざるを得ない、そういう状況でしょう？これは」

ちなみにと、六道骸はまだ言葉を続ける。

「クロームを死なせたら、僕が君を殺しますから。覚えておいてください」

たらりと、子供は冷や汗が頬を伝う。

これは、云々言っていていられない状況になってきた。きっと六道骸は本気だ。そしてきつと、その殺しは世界のどこよりも。

地獄だ。

「M・M。送ってあげなさい」

子供の目を見て、六道骸は指示をする。

「えー？私ー？」

「お駄賃を出しましょう」

「ほら！早くしなさいガキ！」

変わり身早いな。

子供は呆れながらもM・Mについていく。

どうやらそう決めたようだ。

「ああ、ほら。忘れものですよ」

そう言って六道骸は何かを子供に投げる。

「リング。それ、肌身離さず付けておきなさいと言ったでしょう」

子供は受け取ってしかし、反論する。

「けど、これ僕は扱えたことないぞ」

そう、このリングを一か月前前に受け取ったのはいいが受け取っただけで扱えたことは一度もない。

『このリングからは死ぬ気の炎が出る。炎を出す条件は「覚悟」ですよ』

そう説明されたはいいものの。その後一度だって炎が出たことはなかった。

M・Mが運転する車に乗り込む。

今も、じつと見つめはするが、子供の手から炎が放出されることはない。

理由はわかっている。

文字通り覚悟が足りないのだ。

「ほら、着いたわよ」

結局、考えても炎は出ずに目的地へと到着する。

辺りは既に真つ暗。埠頭には潮風がなびいて肌寒い。

「じゃ、アタシここで待つてるから。勝手に頑張つてね」

まるで心がこもっていないエールを受け取り子供は歩く。

指定されたのは確実にこの埠頭だ。が、具体的にこの埠頭のどこにクロームがいるかはわからなかった。

光もなく、真つ暗闇のなか当てもなく彷徨う子供。

見渡す限り怪しいものは何もない。

一周したところで先ほどM・Mに下ろしてもらった場所まで戻ってきてしまった。

M・Mはもういない。巻き込まれないようどこかに退避しているのだろう。

その時、突然子供の視界を光が奪った。

真つ白に埋め尽くされた視界の隅で、黒い影が動く。

「はは！本当に一人で来るとはな！バカなんじゃないか!？」

聞き覚えは・・・ない。

犯人として子供は自分に恨みのある人物を考えていた。そんな人物に該当するのが誰であるのか子供はわからなかったが。

そして、今。目の前にいる人物にやっぱり子供は心当たりがなかった。

「ダメ・・・！来ちゃ！」

しかし子供にとってそんなことは些細なことだった。クロームがそこにいる。そして自分のやるべきことが分かっている。それだけで十分だった。

真つ白な光の波は未だ押し寄せて止まない。

が、そこに映る黒い影はいつの間にか一つから、無数に増えていた。

「おし！お前ら！蜂の巣にしちまえ!!」

その陰の数を数える間もなく、銃火器を構える音。

「つくは」

子供は、笑った。

無数の銃火器に囲まれながら、今にも死がそこに迫っていながら。それでも不敵に、そして大胆に。

笑った。

「~~~~~!!撃て!!」

男は叫び、命令する。自身のかき集められるだけ集めた部下たちを。

もし、ここでカジノをぶち壊したこの子供を仕留められなければ、逆に自分の首が飛ぶことを男は知っていた。

だから、男は必死に叫んだ。

と同時に男の叫びを掻き消すようにうるさく鳴り響く銃声音。

ぐるりと子供を囲むように配置された部下たち。万が一にも生き残るなどありえない。

そう。ありえないのだ。

子供は、飛んだ。

何が起こったのか、男は最初わからなかった。

銃声音が響き、男は耳を塞ぎながら子供が死体となってそこに倒れるのを待った。

のだが、子供は銃弾を受けることなく、自ら後ろに飛んで消えた。そこで男は気づく。子供のすぐ後ろが海だったことに。

地面はそこで終わりを告げ、あるのは揺れる水面のみ。

「う、撃て撃て撃て!!」

縁から覗き込んでいた男は我に返り部下に指示する。

部下はそれに倅い縁から暗い水面に向かって銃を乱射する。
.....

やがて、弾を打ち尽くし確認のためしばし静脈が支配する。
ガガガガガン!!!

一瞬。

まさに一瞬だった。

覗き込んだ部下たちが一齐に頭を撃ち抜かれたのは。

その銃弾の線をたどるとたどり着くのは海。

つまり。

「くそーまだ生きてやがるー撃て!!」

男が叫んだ瞬間、辺り一帯の光が失われる。

クロームの手によって、照らしていたライトが倒され壊されたのだ。

「この!!クソアマア!」

男は叫ぶが、急激な変化に目が慣れておらずクロームの位置がわからない。

「もういい!とにかく撃て!!」

再度始まる銃声と、手榴弾のようなものまで持ち込まれた。

爆発音と、上がる水しぶき。

「残念。そっちは外れだ」

その声に、男は振り返る。

「.....んな!!」

そして、驚愕に目を見開いた。

そこにいたのはずぶ濡れになった子供だった。

多少の傷はあるものの、致命傷には至っていない。

そして、当然のように残っていた部下が軒並み殺られる。

「なんで.....!?!」

「なんで。なんて疑問はどうでもいいだろ?どうせ終わりだ」

子供が発砲したのは最初の一撃。部下をヘッドショットで打ち抜いたそれだけだった。

そのあとはクロームの助けもあって、ただ気づかれないように泳い

で陸まで上がってきた。ただそれだけだった。
ガチャリと、子供はサブマシンガンを構える。

「くそー！」
男は吐き捨てる。そして、なんとか「アレ」を。せめてもの報いとして海に投げ捨てようとするものの。

「………！」
男は気づいた。
アレがないということに。

確かに胸ポケットに入れておいたはず……と、胸ポケットに手
を突っ込むとなんだか違和感。

その正体はすぐにわかった。穴が開いていたのだ。
アレがなければ、結局自分は子供を殺しても助からないではない
か。

脂汗が止まらなくなったとき。

——車の走る音が聞こえてきた。

「……ははー！どうやら終わるのはガキイ！お前の方らしいな」
「あっ！」

子供が答えるが、その途中で理解した。
増援が来たということ。

車の扉を閉める音。数人の靴音。銃火器を構える音。

ゆっくりと後ろを振り向く前に、殴られた。

「………っ！」
子供の軽いからだなど簡単に吹っ飛んでいく。
「骸様………！」

クロームは願う。一人の男に。
が、六道骸がこの場に現れることはない。

「まったく！ビビらせんじゃねえよ！この！ああ!？」

吹っ飛んだ子供を執拗なほどに蹴り続ける男。

子供はウンともスンとも言わない。

蹴られ続けながら、子供はぼうつとなる意識で考えた。

また、負けたのだと。

これまでただの一度も負けたことがなかったのに。ここ一か月ほどでウザイ銀髪に負け、六道骸に負け、負け負け負け。

負けて。

ここでもまた負けている。

苦い。この味は何度味わっても慣れない。嫌な味だ。

その味を噛みしめながら、子供はやがて意識を手放した。

「クフフ。もう、辞めるのですか？」

そこは小さな畔だった。

自分はそうだが、周りまで真っ白で境目がよくわからない。

「死ぬ気の炎。結局出ませんでしたねえ」

「何が言いたい」

その声は、回りくどく笑う。

「覚悟が、足りないんですよ。君には」

「関係ないだろ。あんたには」

「ええ。関係ありません。が、今はクロームを救ってもらわなくてはならないですから」

覚悟。

ずっと、そう言われて意識したけど駄目だった。

駄目だったのには理由があるはずだ。

「生きる覚悟も、死ぬ覚悟も。君にはない。君は空っぽです」

声は、子供が答えようと答えなかりうとただ響く。

「そら、もう一度。最後のチャンスをあげましょう」

「うわっ!!」

子供は目が覚めた。

丁度、死んだかどうか確認していた男が覗き込んでいたので急に眼が開き驚いて尻餅をつく。

「………つたく。上からゴチャゴチャと」

「な、なんだよ!!化け物め!」

真つ白いシャツがボロボロで、所々に血が滲んでいる。

「生きる覚悟?死ぬ覚悟だあ?そんなもん、いらねえよ」俺には「

響いてきた声に、子供は答える。

「どっか変だったんだ。ずっと他人から言われたこと気にして。そればっかになってた。他人の言葉に惑わされてた。けど、そんなの俺じゃねえだろ」

やがてその声には意思が宿り。

「誰かを殺すのも、誰かと一緒にいるのも、全部俺がしたいからやってんだ。生きる覚悟も死ぬ覚悟も他人の言葉に意味はねえだろ。俺の覚悟は、そんな借り物で出来る中途半端なモノじゃねえだろうよ。全部、自分の言葉で、自分の意志で決めろよ」

炎が灯る。

「生きる覚悟だ、死ぬ覚悟だ?どれもピンと来ねえ。俺の覚悟は、そうさなあ。『諦める覚悟』かな」

生きていくのにも、死ぬのにも、殺すのにだって執着も流儀もない。だから覚悟と言われてもピンと来なかった。

あの声に言われて、ようやくそのことに気付くあたり自分は本当に馬鹿だと自虐する子供。

リングから轟々とまばゆく炎に、男はたじろぐ。

「やっぱりアレを狙ってたのか!」

「はっ。」

やっと、リングに炎が灯った子供だが男が言っている意味は分からない。

「だがな！アレはお前なんぞに開けられる代物じゃねえ。手に入れたところで意味なんかねえぞ！」

「なんか話が噛み合ってるねえがまあいいや」

「っは！だがな依然こつちが有利なのにかわりやしないんだよ！」

一斉に、銃口がこちらを向く。

数はざっと二、三十ほど。暗闇に目が慣れたせいも、数えるだけならできた。

だが、男の言う通り依然子供不利に変わりはない。持ってきた武器もどうやら先ほど没収されたようだ。

あるのは死ぬ気の炎を灯したリングだけ。

(とにかく・・・逃げるか)

どうすることもできないと決めた子供は、クロームを抱えて一時退散を図る。

「させるか！撃て！」

当然、男は部下に指示をし、盛大に火花が散る。

「仕方ないですねえ。クフフ」

「な！なんだこのフクロウ!!」

「？」

銃声が止んだことに不思議に思いつつも、子供はクロームと共に倉庫の中に逃げ込む。

「あ、あの・・・これ」

荷物の陰に隠れながらさしてどうするかと思案していると子供はクロームから、一つの箱のようなものを手渡される。

「これ、さつき拾ったの」

それは手のひらサイズほどで四角形のデザインされた箱だった。受け取ると案外ずつしりと重い。

「なにこれ？」

「それは、匣兵器って言ってそこに炎を注入すると武器が出てきたり動物が出てきたりするの」

「はあ」

子供は、手の中にあるその箱を見つめる。これが？武器に？

「とにかく、使ってみて。私には無理だから」

何のことかよくわからなかったが、とにかく、今はそれ以外方法がない。

「おい!!早く出てこい!」

おあつらえ向きに男が倉庫へと突入してくる。

「……てめえ、それ何処で手に入れた」

子供が姿を見せると、男の顔は豹変した。

それまでの子悪党のような顔から、真剣なマフィアそのものの顔に。

「別に。言う必要があるか？」

「それはな、それ一つでこの世界の常識が丸々ひっくり返っちゃうような代物だ。今のところかなりの値段で取引されている。ガキが持つにはまだ早えよ」

「そうか。じゃあ尚更手放せねえや」

「……だったら殺して奪い取るまでだ。どうせ使えねえだろうしな」
「どうだかな」

やり方は、先ほどクロームに聞いた。

「匣、開匣」

その言葉とともに、リングを中央の穴にはめ、ありったけの炎を注入する。

「……な、んだと」

匣兵器から出てきたのは。

真っ白い肌に、赤い瞳。

正に彼を体現したかのような、額から炎を放出している真っ白い大

蛇。

「馬鹿な！貴様、まさか希少な大空属性の炎の持ち主だともいうのか！ウチのマフィアの人間がこぞって挑戦して誰一人開けられなかったボツクスだぞ！」

「・・・これが、 匣兵器」

「シー」

蛇は子供を見つめる。子供も、蛇を見つめた。

「そ う か。 じゃ あ お 前 の 名 前 は、
Serpente di cielo (天空蛇) だ」

「なに名前まで付けてんだ！」

何はともあれ、これで子供に勝機ができた。

「くそ!!もういい！手に入らないならば撃て！殺したほうがマシだ！」

飛んでくる銃弾を蛇は口を開けると何か超音波のようなもので黙殺した。

「ま、まじか」

相手がたじろんでいる隙に、蛇は大空の炎で相手の自由を奪う。

「い、息が・・・」

大空は調和の炎。周りの地形と同化させる特性を持つ。

この場合、海と同化させて酸素を奪ったのだろう。

「・・・あ、ありえん」

「はは。形成逆転だな」

蛇をその身に纏いながら子供は笑う。

「くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！くそ！」

「じゃあな。小悪党」

こうして、彼は、覚悟と兵器を手に入れた。

「こうなるってわかってたの?」

「クフフ。いえ、死ぬ気の炎を体現できるかどうかは賭けでしたよ。ですが、貴重な大空ですからね。多少骨を折ってでも手に入れておきたかった」

倉庫から多少離れた場所で、一羽のフクロウとM・M。

「それで?」 本当にあの子を捨てるの?」

「おや?今頃情がわいてきましたか?」

「別に。そんなんじゃないけど」

「クフフ。彼には孤独でいてもらったほうが強くなれる。それに、最低限の事は教えましたしね。僕が牢獄から抜け出すその日まで、彼にはしっかりと戦力になってもらわないと」

「ほんと、良い性格してるわよね」

暗闇の中で悪態をつくM・Mと、それを受け流し笑う六道骸。

不穏な会話は、まだ、彼には届いていない。

そして、彼はまた、孤独に戻った。

少しは、居心地の良さというものを感じていた。ここで一生を過ごすのも悪くないと思い始めていた直後だった。

根城に帰った彼に待っていたのは、圧倒的孤独と虚無感。それだけだった。

六道骸はおらず、M・Mは見当たらず、クロームがいる気配がなく、フランは居なく、千種の存在はなく、犬のうるさい声が聞こえてはいない。

そこにいるのは、紛れもなく子供一人だけだった。

「ああ、そっか」

捨てられたのだと。そう理解した。

その時、後ろから、根城の扉を開く音が。

まさか――。

そう思っただけ振り返った。

が。

「いやはや。可哀想に」

そこにいたのは、お爺さんだった。

そのお爺さんは、あのウザイ銀髪に負けたとき助けてもらったお爺さんだった。

「何の用だ」

「おお、怖い怖い。年寄りには労わるものですよ」

よっこらせと、そのお爺さんは適当なところに腰掛ける。

「さて、アナタこれからどうするのですか？」

「……てめえに指図される言われはない」

「フフ。良かったら、ウチにきませんか？」

「ああ?」

「ウチはイタリアにあるマフィア。ボンゴレファミリーというマフィアの傘下でしてね。なにぶん、仕事上人手不足が解消されないのですよ」

ボンゴレ。その名前は確かどこかで聞いた気がする。

どこだったか、子供が思い出す前にお爺さんは言葉を続ける。

「どうせ、行く当てなどないのでしょう?」

「……」

子供は、確かにその通りだった。

「あの日本刀も、まだ返していませんでしたしね」

「!!」

子供は、その一言に反応した。

その日本刀は特別なものではない。たまたま、村にあったものを凶器として使用しただけだ。

が、それは子供にとって村と自分をつなげる唯一の糸だった。手放すわけにはいかない。

「——わかった。アンタについていこう」
「交渉成立ですな」

こうして、以降十年間子供はこのお爺さんのもとで暗殺者として生きることになる。

これが、子供の決断だった。

くそして、今現在。

あれから、十年の月日が経った。風の噂で六道骸が復讐者の牢獄から脱出したと聞いた。きっとフランの仕業だろう。復讐者を欺けるほどの幻術士など他に彼は知らなかった。

家にも帰らず、学校にも行っていない。

彼は、夜の街をブラブラとほっつき歩いていた。

こうなった原因がなんなのか、彼はもう忘れていた。それほど些細なことだったのだろう。

「で？アンタは何してんのよ」
「………フウ」

こうして、彼の物語は様々な思惑をもってようやく動き始める。

To be continued.

標的10 Consegna delle lauree (卒業)

「・・・フウ」

目の前にいたのはフウ。ただ適当に気の向くままに歩いていたの
にどうしてか、エミリーリオの目の前にその少女は現れた。

「アンタ、なんで学校来ないのよ。このままじゃ卒業できないわよ」

「はっ。お前がそんなこと言いに来るなんてな。仲良くでもなったつ
もりかよ」

「は?」

その言葉にフウの顔は曇る。怒っていると彼は嫌でもわかった。

「・・・別に、アンタが来ないと「ハルが悲しむ、か?」

フウの言葉に彼はかぶせる。わざと、怒らせているようだった。

「なにアンタ、反抗期かしら?」

「どうとでもいえ、学校には行ってやる。そうディーノにも伝えろ」

あつさりど、フウの言葉を聞く彼にフウは少し拍子抜けだった。

彼に、執着はない。行きたくなければいけないし、行けと言われ
ば行く。そんな人間だった。彼は。

(どうせ、そろそろ来る頃だろうと思ってたけどな)

フウが来るとは、想定外だったが。

彼は頭の中でそう付け足し、夜の街へ消えた。

なぜ、思い出したりしたのでだろう。過去のことを。

もう、過ぎたことなのに。未だに引きずっているとでもいうのか。

あんな些細な一言、鵜が言った一条楽の幼き日の出来事に感化され
たなんて笑えない。

彼は、目を覚ました。

久々に家に帰って、学校に行く支度をし、物が無い家を出る。
今日は並中の卒業式だった。

「おっ。来たか」

教室の扉を開けると、跳ね馬が出迎えた。快活な笑み。いつもの爽やかな笑顔だ。

見ると教室には自分以外の人間はいない。跳ね馬と二人だけだった。

「アンタだろ。フウをよこしたのは」

「・・・フウ？」

なんだ？と、彼は目を細める。てっきり、ディーノが自分のところに彼女を寄越したのだと思っていた。学校に行かせるために。

だが、ディーノの反応はなんの話題だと心当たりがない。

「まあ、なんにせよ。今日くらい大人しくしてろよ。もう並高いつたら俺はいないんだからな」

「別にお前がいようといまいとどうでもいいが、どういうことだと一応聞いてやる」

「そろそろイタリヤに帰んねえと。仕事溜まってんだ」

ポリポリと頭を搔くディーノに、彼は適当に相槌を打つ。

「————頑張れよ」

「はあ？」

一瞬何のことかわからずに、素っ頓狂な声を上げてしまう。
が、任務のことを言っているのだと彼は当たりをつけ。

「ああ、はいはい」

やはり、適当に相槌を打つのだった。

そして、卒業式は開式した。

ハルト、フウと、そしてエミリーオ。自殺未遂を起こしたメガネの男も、クラスメートも、跳ね馬も。みんないる。

「続きまして、理事長からの祝辞」

理事長、理事長といえば雲雀恭弥だ。

(・・・っはあ!?)

頭にその名前が浮かんだ瞬間。彼は座っている椅子からずり落ちそうになった。

あの人が、祝辞とか読むタマか!?

想像できないような、案外まともにこなしそうな。

どうなるのか彼は初めてこの卒業式に一抹の興味を抱きつつ、スーツ姿の雲雀恭弥が壇上に上がった。

「君たちは、もう今日この日から並中生ではない」

あれ? 始まりは意外とマトモだと、彼が思った瞬間。

「だから、次僕の目の前で群れてたら容赦なく、咬み殺す」からね。気を付けておくように」

違った。やっぱりマトモじゃなかった。やっぱり雲雀恭弥は雲雀恭弥だった。

そんなトラブルは起きつつも、和やかに卒業式は終わる。

「フハハ。貴様もこれでようやくお嬢の任務から逃れることはできなくなつたな。今までサボつてた分を取り返してもらどうぞ」

卒業式も無事終わり、さあこれでようやく束縛から解放されるとエミーリオが大きく伸びをした瞬間、目の前に不敵な笑みを浮かべた鵜が現れる。

ちなみに、校門前である。どんだけ任務やらせたいんだこいつは。

「.....」

「そんな嫌そうな顔してもどうにもならんぞ! ここで会ったが百年目だ」

勝ち誇つたかのように見下ろす鵜に。

「いやー、悪いなー今から送別会なんだよー、いやほんと、わるいけど一人で行つてくれ」

そんな鵜に対して彼も不敵な笑みで返す。送別会なんぞに興味は

ないし行く気もないが、桐崎千棘の任務に駆り出されるより数倍マシだ。

「おーい！エミー君！」

「悪いな。呼んでるんで、じゃ」

「ぐぬぬ」

悔しがる鵜の顔にあっひやっひやっひやと高笑いして去っていくエミーリオだった。

「で？どこに行くんだ」

「すぐそこだよ、お寿司屋さん」

まあ、送別会などフケてもなんら影響はないが、鵜の手前店に入る姿勢ぐらいは見せておいた方がいいとエミーリオは結論付けて、ハルについていく。

「へえー、寿司か」

そういえば日本に来てからまだロクに日本食というものを食べていなかった気がする。

まあ、ちようどいい機会だと、彼の心は寿司一色になった。

「ほらここだよー」

「・・・うん？」

そこは『竹寿司』と書かれた寿司屋さんだった。

物凄いデジャブ。

物凄い嫌な予感。

「へいーらっしやいー」

しかし、彼はそんな予感を振り払うように勢いよく扉を開いた。

「しししっ♪おっちゃん、大トロ」「ベル、いい加減にしてくれ。僕の奢りだからって」「だって、マーモン賭けに負けたじゃん♪」「せんぱーい、ミーのマイ醤油とってくださいー」「お前のじゃねえだろ」「大体！キミの分は僕は奢る気はないからね！」「いいじゃないかチビッコー、お金いっぱい持ってんだろー」「ちよ！触るな！グリグリするな！ベル！」「しっしっしっ♪」「ちよっと！あんたあの時校内でナイフ投

「げてた不審者でしょ!?!」「なーんかうるせえコバエがいるんだけど? フラン」「駄目だよー? 不審者じゃなくて先輩は駄王子って言うちやんとした名前があるんだから」「それ名前じゃねえだろ!」「あいた」「ぎゃあ! またナイフ刺さってる!」「おいおい、なんでヴァリアーと一緒になんだ?」「仕方ねえですぜボス。あちらさんが先に来てたんだから」

「……………」(ピシヤリ)

嫌な予感、見事的中。

「どうしたの?」

後ろから、閉じた扉を覗き込むハルに頭を抱えるエミーリオ。

「いや、今からでも間に合う。場所を変えよう」

「え? でも、フウとかクラスの子とか呼んじやったよ?」

「んなの無視でいいだろ」

「駄目だよ! そんなの! いいからいこー!」

「あ! バカ!」

彼の忠告も空しく、ハルは扉を開いてしまう。

「へい! らっしやい!」

「予約してたハルですけど」

「はいはい、こっちだよ」

ハルとともに座敷に通される。

「あれー? 白髪さんじゃないですかー」

「…………チツ」

なんとか見つからないようにと気配を消していたのに、フランに目ざとく見つかってしまう。

「あん?」

「ム?」

ベルにマーモン、フランがカウンターで寿司をつついている。そしてなんとなくヤバめの雰囲気を感じ取っているのだろう。座敷にいるクラスの連中もお通夜のようにテンションが低い。

「へー、珍しいなお前はサボるんだと思ってた」

「…………ディーノ。てめえ、イタリア帰るんじゃないのかよ」

「今日とは言っておえよ」

ちらりと流し目で彼を見るその瞳はしてやったりといった風。

「へー、キミがあのお六道骸の秘蔵っ子?」

「誰がだ!」

マーモン。黒いローブに藍色のおしやぶり。元ヴァリアー霧の守護者。元、というのは今はフランだからだ。そして最強の赤ん坊^{アルコバレーノ}。

元々、アルコバレーノの呪いで赤ん坊にされていたが十年前その呪いが解け、今はエミリーオと同じ年くらいに成長している。

エミリーオが知っているのはそれくらいの情報だ。他に詳細な情報など知らなかったし興味もなかった。

「違うの?」

「……違いえよ」

秘蔵っ子って、隠して隠して一生明るみに出ないならそれはいないのと同義だろう。

まったく笑えない。

「まあいいさ。僕は金にならないこと以外興味ないんだ」

「おお、それは奇遇だな。僕もわりかし興味ない」

「ちよつとアンタこつち来なさいよ!」

ああ、まためんどくさいことになった。

マーモンと話している姿を目にしたのだろう。フウに呼ばれ、渋々彼は座敷に向かう。

「なに?」

「なに? じゃないわよ! なにあの物騒な人たち! 知り合い?」

「全然。赤の他人」

「嘘! さっき親しげに話してたじゃない」

「おい、親しげとかいうんじゃねえ」

「うわー、リアルJCだー」

彼がフウと話していると、後ろからひよつこりと彼の肩に頭を乗せたフランが顔を出す。

「おい」

ざわざわと、クラスの連中がさざめき立つ。大方頭の上のカエルが

珍しいのだろう。

「ほらー、先輩が無理やり着せてるこのカエル、中学生たちにも不評じゃないですかー」

「しししっ。いい気味♪」

「・・・チツ」

「なんか言ったかフラン？」

「いえー、言ったんじゃないくて舌打ちしたんですー」

「素直に言うんじゃないやねえ」

ストトと、カエル頭に綺麗に刺さるナイフ。

「きゃああああ!!」

クラス連中の悲鳴が響く。

「大丈夫だよー、あの先輩ああ見えて自分のこと王子とか言っちゃうち中二病だからー」

「その悲鳴はお前に向けられてんだっつもの！っーか俺は中二病じゃねえ、本物の王子だ」

再度、突き刺さるナイフ。

「せんぱーい、ミーにも痛む心とかあるんですよー」

「痛めてるのは心じゃなくて体だけだな」

「っておい！いい加減にしるよ。説明がめんどいんだよお前ら。人前でナイフとか出すんじゃないやねえ」

っーか、と彼はベルの隣に視線を向ける。

「アルコバレーノ、お前が指導しろよ」

「イヤだね。そんなお金にならないこと」

なんだかこいつM・Mに似てる気がする。心のどこかで彼はそう思った。

「ディーノ」

「いやー、まあ危害を加えているわけじゃねえしな」

疲れんだよ僕が。

なんて心の声は、きつとディーノは見透かしている。

「おっ♪なんだ、賑やかだなー！」

そこに加わる新たな声。その声に、既視感に襲われる。

この感覚は知っていた。十年後のあの世界で会っているのだ。そして今ここが『竹寿司』だという事実。

それらを照らし合わせれば、自ずと声の主がわかる。

「山本だ」

「ほ、本物の山本やまもと 武たけしだ……」

山本武。

高い身長に板前姿。精悍な顔だちに顎に傷をつけたプロ野球選手。ボンゴレ雨の守護者にして裏社会ではスクアードとともに二大剣帝として恐れられている。

会うのは初めてだった。

「おう♪ウチに来てくれてあんがとな。卒業式だったんだろ？」

「は、はい！」

どうやらクラス連中は完全に意識が山本武に向いたらしい、彼はほっと一息つく。

「じゃあ、マーモン♪お勘定♪」

「くっ。ベル、わざと高いものばかり頼んだね」

「はー、王子満腹」

そういつてベルは店を出た。お金を出しているマーモンを置き去りにしながら。

しかしまあ、これでようやく一息つける。

と思ったのは間違いで。

「じゃ、ミーもこれで」

「おいおい、お客さん。お代がまだだぜ」

和気あいあいと、談笑していた山本だったがフランを見る目が鋭く変わる。

「はっ？」

これにはフランも目が点になっている。

「いやいや、やだなー野球バカさん。さつき赤ん坊が払っていったじゃないですかー」

「さつき払ったのはマーモンとベルの分だ。フランの分だけは払ってない」

どうやら、そういうことらしい。

「……………」

黙るフランというのも中々珍しいかもしれない。

「よし、白髪。お前払え」

「はあ!?!」

急に矛先が向けられ、彼は素っ頓狂な声をあげてしまう。しかも、心なしか口調が荒い。

「ぎげんな、なんで僕がお前のために金を払わなきゃなんないんだ。デイーノ」

「わりい、今月俺ちよつと厳しいんだ」

「…………ツケ」は、ウチやっつてねえんだ」

はははと笑う山本に、彼のこめかみはヒクヒクと動き出す。

「ていうか、フランてめえ普通に払えんだろうが」

「兄弟子の言うことは聞いたくもんですよー」

「どこの世界に弟弟子に奢ってもらう兄弟子がいんだよ。つーかお前のごと兄弟子なんて思ったことねえよ」

「ひどい、ミーはずつと兄弟のように思ってたのにー」

おいおいおいと、誰の目にも明らかかなウソ泣きの演技。

「ひどーい!エミーリオ君払ってあげなよー」

「そうだよー、バイトしてるんでしょ?」

「は?バイト?」

デイーノをチラ見すると、パチパチと察しろという目線。なので察した。きつと、サボりの理由をそんな感じにでっち上げたんだろう。

いやその前に、なんでフランの味方してんだこいつら。

不思議に思ったそのとき、疑問は解決した。

「こんな可愛い子に払わせるなんてひどいよ」

「もう中学も卒業するんだから、兄弟の面倒くらい見てあげなよ」なるほど、幻術か。

ベーつとこつちに向かって舌を出すフランに、エミーリオは流石にカチンとくる。

「この野郎……………」

「まあ、後で俺が払ってやるから。今は建て替えといってくれ。な？」

今にもぶん殴りそうだった彼の手を掴むディーノに彼は舌打ちする。

まあ、そんなこんなでお寿司屋を解散になりようやく今日という日の終わりが見えてくる。

「はあ……疲れた」

「はは、わりいな建て替えさせて」

「別に、どうせ金の使い道なんてねえし」

ただ、自分がフランのために何かをするという行為そのものが嫌だった。

まあ、それを言うのと目の前の男は笑いそうなので言わないが。

「なあ、いつちよスパパーリングやるか？最近では恭弥に襲われることもなくなってるんだ」

「ああ？……悪いが今は無理だ。リングとボックスねえし」

「ん？なんだお前無くしたのか？」

「なわけねえだろ。没収されたんだよボスに」

帰り道を歩きながら、彼は特に変わらずにそう言った。

変わったのは、跳ね馬だった。

「……没収された？」

「あ、ああ。日本にはまだリングと匣兵器はないからって」

その険しく真剣な表情に、思わず彼は言い淀む。

「なんだよ」

歩みを止め、考え込んでいる跳ね馬に彼は訝しむ。

変なこと言ったかと、彼は自分の言葉を今一度思い出すもいたって不審な点はない。嘘も言っていない。

なら、なんだというのだろう。

「……なあ、ツナから来た手紙。あれ白紙だったって言ってたよな」

「ああ、炙つても透かしても水につけても駄目だった」

「それは今も変わらないのか」

「あん？時間経過だつて言いたいのか？残念だが相変わらず真っ白なままだな」

「ツナの手紙が届いたのは？」

「日本に来てからベルとフランに渡され……って、ほんとになんだこれ」

質問の意図が全く読めずに彼はついに振り返る。

「……いや、なんでもねえ。忘れてくれ」

「うわ……めんどくさ」

ここまで思わせぶりに思案しといて、それはない。

が、忘れてくれと言われれば忘れるのが彼。エミリーリオである。

「ま、ここでしばらくお別れだな。高校でもサボんなよ」

「ああじゃあな」

もうさつさと一人になりたかった彼は、振り返った体をまた前に戻して歩みを進める。

ハルもフウもほかの友達とどこかに行つた。どこにいくかなんて興味もないし、ついていく気もなかったので彼はこうして帰路についている。

これでようやく、彼の序章は終わる。

ここから、本当に彼の物語が始まる。

この世界線での彼の物語が。

徐々に、徐々に。

o b e c o n t i n u e d .

T

標的11 Visitatore (来訪者)

高校生活一日目。

彼、エミリーリオ・ピオツティの高校生活は波乱の幕開けから始まる。

「……………いやいや」

教室の目の前で、彼は首を振った。ありえないと、現実を拒否するようになら。

なぜなら。

「あ！エミリー君！遅いよー」

「入学早々遅刻とは、いいご身分ね」

違った。こいつらじゃなかった。いや、こいつらも十分彼の頭を悩ませるタネではあるのだが、今回はそれよりも特大級のタネだ。

「ちやおつす。ようやく来たな。もう二時間目だぞ」

「……………久しぶり」

過去の話などしたからか、いつからかフラグが立ってしまっていたのか。彼はまず、激しく後悔した。

いや、薄々感づいてはいたのだ。クラス発表の紙を一人遅れて確認した時から。

「はい、じゃあ自己紹介を再開しましょう」

どうやら、エミリーリオが遅れてきたせいで自己紹介が止まっていたようだ。

「ちやおつす。イタリアから来た、名前はリボンだ。気軽に呼んでくれ。特技は暗殺。趣味も暗殺。以上だ」

リボン。それが本名なのか、偽名なのかは知らない。黄色のおしゃぶりを持つ最強の赤ん坊。暗殺のスペシャリスト。会うのはこれが初めてだ。認識があるのは未来であったから。

ていうか、いきなり暗殺とかいうもんだからクラスの連中がドン引きしている。あいつ頭おかしいのか。

背は中くらい。くるりと巻かれた揉み上げに黒のハット。鋭い眼光はそれだけで鳥も殺しそうだ。

アルコバレーノの呪いが解け、高校生ほどの体格となった今。確か

にここにおいても不自然ではない。

「……いや、やっぱりおかしい。どう考えてもあいつの仕業だ。あいつ、つまりは沢田綱吉。」

なぜそう思うかと聞かれれば、それはリボーンが沢田綱吉のかてきよーだからだ。

ちらと、一瞬目が合つてすぐに逸らした。まったくもってたまつたもんじゃない。あんなのと関わるのはごめんだ。

そして、目を逸らした先でまたまた見知った顔。

「……クローム・髑髏。えつと、よろしく」

おずおずと相変わらずなクロームを、彼は軽い舌打ちで迎えただけだった。

十年ぶり。だというのに、彼女は変わらない。

「……いや、変わらなすぎじゃなからうか。」

十年前。彼女は中学生ほどだった。今は、多少は成長しているようだがそれでも普通に考えれば二十歳そこそこのはずだ。

だが、目の前にいる彼女はどうみてもお酒が飲める年齢には見えな

い。どうやら、高校生になつても彼の渦巻く環境はそうは変わらないらしい。

「ポーラ。ポーラ・マツコイ。仲良くする気はないから、気安く話しかけないでね」

白い髪。その髪はエミリオとそっくりだった。まあ、そっくり。というただそれだけなのだが。

いやそれよりなにより、彼はどこかで聞いたような気がするその言葉に首を傾げていた。

ポーラ……ポーラ……。まいつか。

結局思い出すことを諦めた彼にしかし、彼女のほうは視線を送ることを諦めてはいなかった。

「で? いったいどういうことだこれは」

昼休み。彼は当然、リボーンとクロームに話を聞いていた。

「ん? なんだ、聞いてないのか?」

意外といった様子のリボーンに、彼はイラつく。

またこれだ。情報の共有というか、どうも連絡に齟齬が生じている気がする。

まあ、今そのことを論じたところで意味はない。彼は話を先に進めるよう促した。

「今日から俺がお前の家庭教師だ」

「………は?」

意味が分からずに、素っ頓狂な声をあげてしまう彼。

「どういう意味だ?」

「どうもこうもねえ。お前の任務、思ったより時間かかりそうだからな。緊急に俺がお前の家庭教師をしてやるつつつてんだ。ツナのほうももうとつくに手がかからなくなったからな」

意味が分からなかったが。

「……ああ、そう」

決定事項なら、彼は従うほかにない。いつだってそうだった。今回もそうなだけだ。

「んで? お前はなんでいんだよ」

次なる疑問。クローム・髑髏。

「……私は、もう霧の守護者じゃないから」

六道骸が出所している現在。ボンゴレ霧の守護者は晴れて六道骸本人だ。元々、クロームは骸の代わりだったのだからこれは自然だと見えよう。

「で?」

それが、今回クロームが高校に通うこととどういう関係があるのか。

「あなたと、一緒にいる」

・・・六道骸に追い出されでもしたのか。彼はため息を一つついただけでそれ以上は追及しなかった。追及したところでこれ以上何か出ると思えなかったし。なによりもめんどくさいと思ってしまうから。

「その恰好は？」

「幻術」

「あつそ」

幻術で姿を高校生ほどにくらましているわけだ。

「ま、とにかくこれからはこの俺様がビシバシと鍛えていくからな。覚悟しとけよ」

そういうわけだった。

高校生活二日目。

彼、エミリーオは早速サボった。

昨日の出来事で疲れていたというのもあったが、何よりアルコバレーノがいるあの学校にいかねければならないというのが思ったより苦痛だったのだ。
が。

「ちやおっす」

口を開けて、加えていたアメをポロリと落とす。

町の繁華街を適当にブラブラしていた。

適当にあてもなく、気の向くままに歩いていたはずなのに。ピンポイントでアルコバレーノ、リボーンは現れた。フウといいリボーンといいストーカーかと疑いたくなる。

「なんで？」

「お前がちゃんと任務をこなすかどうか、それを監視するのも俺の役目だ」

うわー、と。彼は天を仰ぐ。

リボンという男の性格上。逃れられるとは到底思えない。

「さあ、行くぞ」

「……めんど」

だが、そうもいつてられないのがリボンという男の放つプレッシャーだった。

変わりゆく日常を痛感しながら、それでも彼はまだ変わらない。

「はあ？なんじゃそりや？」

放課後。いつものように鵜と共にお嬢。つまり桐崎を護衛するという任務に勤しもうというところ。

鵜から聞かされたのは全く別の任務だった。

いや、別の任務に準じることはまあある。

「つまり、ホワイトフアング白牙と共に最近妙な動きのあるチンピラを調査してほしいのだ」

彼が気になったのはその内容である。

「ホワイトフアング？誰だよ」

この鵜とペアを組まされてから、他の人間と仕事をするなんてのは初めてだ。

しかも、チンピラを調査？どうにもきな臭い。

「聞いたことないか？」

「ないね」

あつさりと、考えることもなく彼はそう答える。

「そうか。確かお前のクラスは1-Aだったな」

「だから？」

意図の読めない質問は、もはや慣れてきていたエミーリオ。

「いや、ならいずれわかる。とにかく、これはクロード様の命令だ」

また、あいつか。頭の中に浮かぶメガネの高笑いに辟易しながら、

彼は了承した。

夜も更けてきたころ。指定された場所についたエミーリオは完全に白けていた。

なぜか。

「……………はあ」

目の前にはクロードが用意したであろうメモに、「素顔をさらすな。この仮面を被るように」といった内容が書かれていた。お面はそのメモに重しのように乗せられている狐の面のことだろう。

理由なぞどこにも書いていない。心当たりもない。

もう一度だけ、大きくため息をついて彼は仕方なくそのお面をかぶる。

「あなたがビアンコね」

声が聞こえ、振り返ると。彼は目を見張った。

「……………ポーラ・マッコイ」

エミーリオと似たような白髪。白い肌。ポーラ・マッコイがそこにいた。

「なるほど」

ホワイトファングと呼ばれる暗殺者は彼女だということだろう。こんな人通りも何もない路地裏。他に勘違いのしようもない。

「ああ、そうだ」

だから、彼は答えた。

「ふーん。あんたがねえ……………」

ジロジロと全身を観察される。

「忌々しいわね」(ボソツ)

「あ?」

ボソリと、聞こえるか聞こえないか微妙なラインで発せられた声にしかし彼は敏感に反応した。

「……忌々しいって言ったのよ。アンタのせいで私は……！」
どうやら、ポーラは彼に個人的な恨みでもあるようだ。その瞳はメラメラと怒りで燃えている。

だが、彼のほうにはそんな恨みなどない。恨まれるようなことでもしたのか、彼女にゆかりのある人物でも殺したのか。

「ボンゴレ共に子ども扱いされるわ……！任務はロクにさせてもらえないわ……！イエミツとか言うおっさんに頼ずりされるわ……！ボンゴレ？イエミツ？」

その単語に、なんとなーく彼の頭の中で点と点が繋がった。

「ああ、アンタ俺とトレードされたポーラか」

ビーハイブに潜入するときに出された条件に、確かそんなもんがあった。

「ぐぐぐ！そうよ！せっかくブラックタイガーと再戦しようと思ったのに！アンタが来たせいで半年も遅れたじゃないの!!」

わーきやーと喚くポーラに耳をふさぐエミーリオ。

「あとなんでアンタお面なんかかぶってんのよ!!ふざけてんの!？」

ああ、きつとこれはクロードの仕業だ。俺をこうやって疲弊させるためにわざと今回こんな無理やりな任務を組んだんだ。

それが知れたところでどうしようもないのだが。

「いいだろそんななんでも。ほら、早く仕事終わらそうぜ。こんなしょうもないことに時間使うなんてバカだバカ」

言うが早いか既にエミーリオは歩き出していた。

「ちよー！待ちなさいよ！絶対アンタには負けないからね!!」

「あー、はいはい」

「で？不穏な動きを見せてるらしいチンピラってのは？」

「つか、チンピラってなんだよ。と思うエミーリオであるが声には

出さない。

「はっ。教えるわけないでしょ!? 私がゼーんぶ手柄を立ててブラツクタイガーと再戦すんのよ!!」

ペーつと舌を出しながら走り去っていくポーラ。

「……ま、仕事してくれるってんならねえ」

無理に止める必要も自分が頑張る必要もない。

こりやー楽でいいや。なんて思いながらゆっくりポーラの後を追っていくエミリーオ。

月明かりに照らされた夜道。ポーラが走っていった先を見据えながら歩く。

それにしても。と彼は思った。なぜ自分の周りにはロクな女がないのかと。

グイグイと人のパーソナルスペースに入り込んでくるハルに、そのハルにべったりなフウ。やたら敵視してくる鶯。

そこにポーラなどといううるさい女まで加わった。

まともな女が一人もいねえ。

辟易しながらもポーラが入っていったと思しき廃ビルにエミリーオも侵入する。

したはいいものの。彼は首を傾げた。

なぜなら、ビルは不自然なほどに静かだったからだ。

静脈が支配するビルは暗闇がまとわりつき、嫌な雰囲気だ。

ポロポロの壁に、所々割れた窓。本来、およそ人のいる気配などないそのビルが静かなのは当たり前。

ポーラが入る前までならば。

微かに、砂の落ちる音。つまり、彼のいる一階よりも上に人がいる。

ポーラは武装していた。懐に拳銃を二丁ほど隠し持っていたはずだ。それが鳴らないとなると、既に戦闘は終わっているのか。

チンピラと鶯が称したからには、そう手こずる相手ではないのだろう。ポーラが入ってそう時間は経っていないはずだがどうやら既に仕事は終えたらしい。

気の抜けたあくびをしながら、それでも一応状況だけは確認しよう

と彼は錆びた鉄製の階段を上がる。

カンカンと音が鳴り響いて、ああまたドヤ顔で自慢されでもするのかなとその後の状況を予想するエミーリオ。

だが、その予想は大きく外れることになった。

「っ!!」

死角からの攻撃。

(・・・嵐の炎!?)

間一髪で避けたエミーリオはその襲ってきた敵の正体を見るなり冷や汗を流す。

嵐の炎。それ自体に特に変わったところはない。だが、それがそこにある。その事実がなにより彼の背筋を寒くさせた。

「・・・こりゃ、どういうことだ?」

「あーおっしいいいいい!」だからよく狙えって言ったべ!」「まあまあ、どうせ次で終わりだ。さっきの嬢ちゃんのようにな」

階段の上から声が三つ。

つまり、人が三人。

「リングと、匣」

全員、その二つを持っていた。

それはまだ日本には伝わっていない技術だとボスから言い渡されたはずだが。

「二匣、開匣」

「チツ」

舌打ちしながら、階段を飛び降りる。

一秒前まで彼のいた場所は木っ端微塵に穴が開いていた。

飛んできた瓦礫で仮面が欠け、右目だけ視界良好になる。

パラパラと粉塵が舞うその場所で、ターゲツトらしき人物たちの声

だけが響く。

粉塵の隙間から見える匣兵器は二つ。

嵐の炎を纏ったサソリ。

雨の炎を纏ったハリセンボン。

だが、受けた攻撃は三方向から来た。・・・はずだ。数が合わない。

「おいおいおいおい、死んでねえじゃねえか」

「避けたんだべ。あいつ」

「へー」

上から覗き込んでいるチンピラ共。だがそのおかげで分かった。もう一つは晴れの炎を帯びたムチだ。

つまり、アニマルタイプが二つにサポートタイプが一つ。といったところか。

「つたく。聞いてねえぞ」

彼はてつきりクロードの嫌がらせの一つだと思ってたが。

これは、そうも言ってもらえない状況らしい。

「おい！一つ聞くが髪の毛の白いちっこい女が来なかったか？」

「あん!? てめえなに口きいてんだああ!？」

「・・・ま、素直には答えてくれないわな」

ポリポリと頭をかく。

「つーかなんだその仮面!？」

ゲラゲラと笑うチンピラたちに、こめかみをひくつかせるエミリーオ。その顔はもちろん仮面に隠れてチンピラたちには見えない。

匣兵器相手にいくらただの武器を使っても敵わない。それは純然たる事実だった。

「とんでもねえブスなんじゃねえのおお!？」

「恥ずかしくて晒せないってか」

「よし！その仮面はぎ取ってやるべき」

考えるよりも先に、相手が動き出す。

脳のない猿のように一辺倒に匣兵器をぶつけに来るチンピラに、走りながらエミリーオは考えた。

(なぜ、まだ広まっていけないはずの日本に匣兵器がある。ボスが嘘を

ついていた？なら、なぜ？俺からリングと匣を奪うのが目的・・・だとしてもやつぱりなぜ？だ)

薄暗い環境が功を奏していたのか、運よく攻撃は当たらない。

「ムツキー!!」

(それに、奴さんどうやら慣れていないらしい)

匣兵器は開けるのに条件がある。自身に流れている波動と、リング、そして匣。それら全ての属性が一致しないと開けられない。そして、開けた後も炎の出力、純度によって兵器の力は上がりも下がりもする。

彼らは、匣兵器を一々匣に戻している。注入しないと炎が限界を迎えるんだ。となると、彼らの炎はようやく匣を開けられる程度のもの。脅威ではない。

(が、それが知れたところでつてやつだよな！)

何度目かの攻撃を避けたときに、後ろの壁に激突してしまう。

「がはっ！」

「やりー！おいつめたああ!!」

痛む背中を庇いながら、相手を睨む。

一応先ほどから拳銃で射撃しているものの、晴れの炎でコーティングされたムチで弾き飛ばされる。

元々、チンピラと聞かされていたため。ほかに大した武器も持ってきてはいない。

(・・・どうすつかなあ)

このまま、逃げ続けるだけではジリ貧だ。

じりじりと差を詰められていたとき、それは鳴り響いた。

銃声。

「なっ！」

チンピラAが声を上げるよりも早く、その銃弾はチンピラの腕を貫いた。

貫かれたのは晴れ属性の奴だった。

「てめえええ!!」

銃声のした方向を見ると、そこにいたのはポーラ。

ま、ポーラしかありえない。

「……ぐっ」

どうやらボコボコにされたらしい、いたるところに擦り傷が付いている。

だがそんなことは彼にはどうでもよかった。ただ、一点だけを見つめていた。

「ほら！手柄はアンタにやるから！早く何とかしなさいよ！」

「うるせえ！」

「痛っ！」

雨の男がポーラの髪をもつてぶん投げる。ちょうど、エミリーリオがいる場所に吹っ飛んできた。後ろの壁に再度叩きつけられる。

「ケケケ。二人まとめてぶっ殺してやんよ」

隣にはボロボロのポーラ。こいつはリングも匣兵器のことも知らないだろうから、この状況は仕方ないだろう。

「どうすんのよ……なにか策はあるんでしょね」

小声で囁くポーラ。

「……ああ。まあな」

痛む背中、しかしニヤリと何かを思いついたような顔をするエミリーリオに、ポーラは意外そうな顔をする。聞いたはいいものの、あるなんて思ってたなかったのだ。

「ただし、チャンスは一度。失敗したら終わりだ」

「……分かったわ。私は何をすればいいの？」

今度は、エミリーリオが驚く番だった。

こんな素直に言うことを聞くとは思ってなかったのだ。

「」。

「……それでどうなるの？」

「いいから」

手早く作戦を伝える。

「おい！なにコソコソやってんだ！ていうかお前は早く来いよ！」

「……ああ。ちよっと、疲れたべ」

雨の男は先ほどの階段から動かない。嵐の男がいるここから、距離

は数メートル。

「今だ！」

「なっ！」

合図とともにエミーリオとポーラは一直線に雨の男のもとに走る。

慌てた男は、急いで炎を注入し匣を開けた。

「はっ！バカめ！突っ込んできたべ！」

「俺とお前で挟み撃ちだああああ!!」

雨ハリセン。そして嵐サソリを射出と同時に勝利を確信した男たちだった。

その確信はすぐに疑念へと変わった。

「な、なんで立ってんだ……?」

確かに正面から雨ハリセンの特攻を、嵐サソリの攻撃を食らったはずだ。だが、そこには薄笑いを浮かべるエミーリオが悠然と立っている。

「く、くそ！もどれハリセン！」

だが、いつものようにそれは匣の中には戻らない。

「な、なんで……?」

「よく見てみるよ。自分の匣を」

そう彼に言われ、馬鹿正直に匣をみる。

「あ！」

その匣は綺麗に壊れていた。丁度リングをはめるための穴が。

「ぐへっ！」

下を見たせいで、一瞬、エミーリオが視界から外れた。その一瞬、もう顔を上げた時には拳が迫っていた。

顔面にクリーンヒット。大の大人が吹っ飛んだ。

エミーリオの後ろ。嵐のほうも、ポーラが無事仕留めたようだ。

残るは、晴れただ一人。

「……ひいっ!!」

晴れは自分の右腕、先ほど貫かれた腕をかばいながら後ずさりする。

「な、なんで!?直撃したはずだろ!」

「そうだな。まあ、お前には教えといてやる。お前のおかげだからな」
「はあ!？」

意味の分からない発言に、声が割れる。

「最初に変だと思ったのは、匣兵器の使い方だ。馬鹿みたいに一辺倒にただぶつけてくるだけ。そこで思ったよ、ああこいつらまだ日が浅いんだと。それを使いこなせてないんだってな」

「そ、それがなんだっていうんだよ!!」

凶星だったのか、声を荒げる男にただし彼は冷静に言葉を紡ぐ。

「だったら、炎の特性も知らないんじゃないかってな」

「特性?」

どうやら、彼の言っていることは当たっているらしい。

初めて聞いたというように顔が示してしまっている。

「ああ、お前の右腕。普通、っていうのかどうかは知らんが、少なくとも特性を知っていれば直そうとするはずだ。その晴れの『活性』でな」
晴れの炎の特性は『活性』。全身の細胞を活性させて、超回復させる。

「だから、右腕をほったらかしてお前を見て、その仮説を確信した」
「だ、だからって直撃して無事でいられるわけが——」

「はいはい、人の話は最後まで聞くものだぜ。晴れが『活性』。じゃあ、あと二人のお仲間の嵐と雨は何だと思う?」

「.....」

男が答えられるわけがない。知らないのだから。

「正解は『分解』と『沈静』だ。嵐と雨つてのは相性が悪くてな。嵐の分解も雨が沈静しちまう。炎の出力が違えばそつちに傾くんだろうが。生憎とお前らは三人ともしよぼかったからな」

雨の男が疲れていたのも、炎の使い過ぎ。

つまり、直撃する寸前に雨と嵐がかち合って勝手に相殺された。そのおかげで二人とも無事だったわけだ。

「さて、楽しい授業はこれでおしまい。次はお前の番だぜえ!？」

「.....っ!」

悪魔のようなその笑みに、完全に腰が抜けてしまっている男。

「リングとこの匣。どこで手に入れた？」

それだけが疑問だった。

「お、俺知らねえ」

「あ？」

凄むエミーリオ。

だが。

「知らねえんだ。俺たちここら辺でいつもみたい・に夜遊びしてたら変なガキに貰って・・・それで・・・」

変なガキ？なんだそりゃ。

出てきた単語に疑問がさらに深まってしまいうエミーリオ。

「わかんねえよ！けどそれが事実なんだ！もうこれ以上俺は知らねえ！」

男の言葉に嘘はなさそうだ。こんな切羽詰まった状況で彼を混乱させるために作り話をできるほど目の前の男は器量は大きくはないだろう。

「だけど変なガキって・・・ 事實は小説よりも奇なりというのがこれはもう途方に暮れるしかない。」

そんな謎はひとまずぶん投げて。

「なあ！喋ったんだから助けてくれよ。な？悪かったから、謝るから」

先ほどまでの冷静さはどこへやら。完全に行方不明である。

「残念。俺ゲームとか宝箱全部取るタイプなんだ」

「だからなん——」

顎にアッパーがクリーンヒット。

「よし、任務完了つと」

最後の一人をのしたところで、彼は男たちのリングを回収した。

「なにやってるの？」

「まあ、一応な」

今回の騒動、というか日本に来てからずっと。どうにも変だ。

（これくらいの保険はかけておいて損はないだろう。つっても俺は全部使えないけど）

嵐も雨も晴れも、彼には使えない。

さして、と帰ろうとしたところ。

むんずつと、首根っこをつかまれる。

「ごほつごほつ。てめえ、なにしやがんだ」

「説明して」

「あ？」

「なにこれ、なにあれ、なにそれ!!」

順番に壊されたビル内、匣兵器、そしてリングを指示しながらポラは説明を求めた。

「…….……あー」

説明しなければならぬのか。これを？一体どこからどこまで？

「お前さ、俺とトレードされてイタリアの、それもボンゴレにいたんだろ？」

「え？ああ、まあそうよ」

だったらリングと匣兵器の情報くらい知ってそうなものだけど。あそこじゃこんな珍しくもなんともないだろうに。

「じゃ、そこで聞いてくれ」

めんどくさくなつて、彼は全部投げた。

「ちよつとーまだ聞きたいことはあんのよー」

「あーもう、うるさいなあ。なんでこうお淑やかな女の一人や二人いねえんだ」

ガリガリと頭をかく彼に、ポラは眼前で立ちふさがった。

「なに——」

言い終える前に、彼の視界は開けた。ずっと仮面だったため晒した素顔が風に気持ちいい。

つまりはまあ、そういうことだ。

「…….……やっぱりね」

その言葉と、彼の白黒とした瞳が、ビルの中に残った。

どうやら彼の学校生活はまた一つ、おかしな方向へ進んでいくらしい。

To be continued.

もう一つのヘルリング編

標的12 Altr o a n e l l o d i H e
1 (もう一つのヘルリング)

カランコロンと間抜けな音が最早誰もいなくなったビルに虚しく響く。

「・・・やっぱりね」

ポーラ・マツコイ。眩しいほどに白い髪にちっこい背。不遜な態度が顔に出てしまっている少女。

暗殺者である。

その少女はエミーリオか被っていた狐のお面を剥ぎ取り、そう言った。

「・・・」

エミーリオはしまったというような、でもまあ別にバレたところだという一種の諦めのような。どっちつかずの表情で目の前の少女を見ていた。

それよりも気になったのは。

「やっぱりって？いつから知ってたんだ？」

肩をすくめ、そう尋ねるとポーラは答えた。

「最初に会ったとき、私に乗ってないのにすぐ名前を当てられた。それも白ホワイトフアング牙というコードネームじゃなく、本名で」

ああ、そういえば思わず口をついてしまっていた気がする。これもこれも鵜が変に隠しモヤモヤさせたせいだ。

心の中で鵜への悪態を突いていると、「それよりなにより」ポーラがビシツと指をさしてきた。

「あん？」

「その頭よ」

ああー。これは納得ですわー。

「私の本名を知っている人なんて学校で自己紹介した時くらいのものよ。まあビーハイブの人間もいるけど、そんな真っ白い髪の人、私は

知らないわ」

そしてクラスでこんな髪してるのなんて僕以外あり得ない。というわけ。

まったく。こんな恥を忍んで仮面までつけたつてのに、意味がなかったじゃないか。

そもそも、なぜクロードはこんな仮面を用意したのか。

まあ、それもこれももうどうでもいいことだが。

「じゃ、僕の正体も知れたところでもう帰ろうぜ。ここに長居したつてしようがな――」

言葉をつづけようとして、できない。

なぜなら。

目の前に、少年がいたから。

「……っ！」

いつからいたのか。どこからいたのか。

気づいたらいつの間にかいた。気を抜いていたと言われればそれまでだが、仮にもプロの殺し屋が二人いてそのどちらにも気づかれずにこんな人気のないビルに入ってくるなど並大抵ではない。

彼は確信していた。先のチンピラから聞いた少年の情報。そして目の前にいるのも、また少年である。

これが、偶然であるはずがないと。

「やれやれ。こつちも駄目ですか。中々思い通りにはいきませんねえ」

その姿にも、声質も笑い方も何もかも、知らないはずなのに。知っている。

そう、彼は知っていた。目の前の少年を。

「その中でも、ここはまだマシのようですね。一つ、収穫はありましたから」

「ちよつと、アンタなに？ガキがこんなところ来るんじゃないわよ」

どうやらポーラは目の前の少年を警戒しているらしい。口ではそ

う言いながらその瞳は、細く、鋭く光らせている。

「ねえ。久しぶりですね、今は“エミールリオ”と呼んだほうがいいでしょうか？」

ポーラの言葉を無視しクフフと笑うその少年。

「は？なに？知り合い？」

ポーラは少年の言葉にキョトンと警戒を解いて振り向いてきた。

「バカ!!」

その姿を、目の前の少年は見逃すはずはない。

ありえないほどの脚力で、一瞬で目の前に迫るとポーラが振り向く間もなく、後ろ向きに組み敷かれる。

「きやつー!」

「クフフ。いけませんよ。子供だからと油断しては」

ニツコリと笑うその顔に、ピツと赤い血が飛び散る様子は悪魔そのものだ。

軽く舌打ち。これから起こる現実には辟易する。

予想通りバタリと少年は倒れた。そして入れ替わるようにポーラがユラリと立ち上がる。

「ふむ。良い体だ」

男にとってなにをもつてして“良い”のかどうかは知らないが、どうやらおめがねには叶ったらしい。

グルグルと肩を回し、コキコキと首を回し、そしてフツと笑った顔は紛れもなくポーラそのものである。

であるのだが、放つ雰囲気は全く違う。

瞳が片方だけ赤く染まる。

それは最早別人と称すべきものだった。

「六道、骸」

こんな芸当ができる人間を、彼は他に知らなかった。

「クフフ。どうでしたか？彼らは」

「やっぱ、あんたの差し金か」

ちらと、伸びているチンピラたちを見る。

「で？なんの目的があつてこんなこと」

「教える義理などありませんよ。と、言いたいところですがね。今日は特別に教えてあげます。なんとと言ってもあなたは僕の弟子ですから」
笑うポーラ。いや、六道骸に彼は表情を変えない。

「いえ、なにも難しい話ではありませんよ。単純に戦力が欲しいのです」

「戦力？」

「ええ、ご存知かとは思いますが日本にはまだ本格的に匣兵器は出回っていませんからね。日本のマフィアより先にどんな人間が戦力になるのか、独自に調べているのです」

まあその人たちは使い物になりませんでした。

そう付け加える六道骸は、言葉とは裏腹にとっても笑顔だ。

「で？なんでそんな話を僕にする？」

「言ったでしょう？弟子だからですよ」

「僕はそんなつもり一ミリもないが」

「クフフ。ええ、正直に話しましょうか」

そしてエミールイオは続く言葉に驚愕に目を見開いた。

「あなたも、その一人なんですよ」

意味が分からずに。

「あ？」

「隠しても無駄でしょうから言いますが、あなたをあの時拾ったのも、殺しのイロハを教えたのもその後置いて行ったのも。全部この時のためです」

六道骸はポーラの体で、エミールイオに近づく。

目と鼻の先、息がかかるその数センチ先で六道骸の口は動く。

ポーラの匂いで、ポーラの声で、ポーラの顔で。だけど、その思想も言葉もポーラのものではない。

「私と一緒に、マフィアを潰しましょう」

ニツコリと可愛い笑顔で。

物騒なことを言う。

「……………」

彼は、黙っていた。

ずっと、黙っていた。

そして、ようやく口を開く。

開いて出た言葉は。

「ヤダネ」

キョトンと鳩が豆鉄砲を食ったような顔。まさか断られるなどは微塵も思っただけさそうな顔だ。

「僕には今任務があるんだ。アンタの趣味に付き合っている暇はない」

「趣味、ですか」

「大体、僕を置き去りにしたアンタについていくと思ったのかよ」

「君は、そういうのを気にしないタイプだと思っていました」

「わりいな。案外女々しいんだ」

「この子がどうなってもいいんですか？」

「脅しのつもりか？ だったらそいつは選択を間違えたな。僕にとってそいつなんて道端に転がる石ころだ」

「……………」

今度は六道骸が押し黙る番だった。

「ふむ、まあいいでしょう。今日は再会できただけ良しとします。ですが」

語尾を強めた六道骸はそのまま鋭い声で。

「僕から逃げられるとは思わないことだ。どんな手を使っても僕は君を手に入れますよ」

「あっそ。どうでもいいわ」

できるだけ適当に、神経を逆なでするように挑発したような声。

「クフフ。そういうところは、相変わらずですね」

そう言うと、フツとポーラの体が傾く。

「うおっ！」

「では、僕はこれで。ああ、アルコバレーノによろしくお伝えください」

知ってるのか。リボンが日本に來ていると。

ま、当然と言えば当然か。六道骸は今はボンゴレの守護者なのだから。

「ああそれと、クロームのこと。頼みますよ」

それを最後に、少年は霧の中へと消えていった。

「幻術、か」

いったいどこからどこまでか。と、考えるのは意味がない。それこそ奴の術中にはまるだけだ。

彼はポリポリと頭をかく。

「……………帰ろ」

氣絶しているポーラをおぶりながら、月夜の明かりが照らす夜道を歩くエミーリオ。

「疲れた……………」

思わずそう声がでるほど、彼は疲れていた。

肉体的にも、精神的にも。

背中ですーすーと息を立てているポーラを苦々しく思いながら、六道骸に憑依されたのだから致し方ないと自分の心を慰めていた。

「……………エミ」

歩いていると、暗がりからクローム髑髏が。

「……………なんでここに？」

「骸様の気配が、したから」

ああそう。と疲れた顔で生返事をするエミーリオに事情を聴こうとするクローム。

「待った。明日にしてくんない？もう疲れたんですけど」

「……ごめん」

俯くクロームになんとなく、目線を逸らすエミーリオ。

続く沈黙に、耐えきれなくなったエミーリオはだーっと大声を挙げ
て。

「わーったよー歩きながら話す！それでいいな！」

「……うん」

見るからに華やいだクロームに舌打ちしながらズンズンと進むエ
ミーリオにクロームは足早についていく。

「——つーっこった。つまり六道骸は今この街にいて、そ
んで何か動いてるってわけ」

夜道を歩きながら彼はクロームに大雑把に説明した。

終始黙って聞いていたクローム。暗がりのせいとその表情はよく
読めない。

どういう事情で日本に来て、どういう事情で六道骸と別行動を取っ
ているのか彼には分らなかつたがどう考えても穏やかな雰囲気では
ないだろう。

彼はその事情に首を突っ込む気はなかつたがそれだけは分かつた。

「……骸様はマフィアを嫌っているから」

一歩後ろでそう言葉を絞り出すクローム。

「知ってるよ」

理由は知らない。六道骸という人間がどうという人生を送ってきた
のかも知らない。

過ぎた時間はわずか数か月だけ。

それでもわかる。それですらわかる。

六道骸という人間の根底に流れる憎悪というものが。

「あ——んん」

「あ」

「……やっと起きたか」

ずっと背中で気を失っていたポーラがまぶたを擦りながら目を覚ます。

「……降ろして」

「あ?」

ボソリとポーラは口を開くと、一気にまくし立てた。

「いいから降ろしてよ!なんでアンタにおんぶされなきゃいけないわけ!?!」

カチン。

エミーリオのこめかみは血管が浮き出るほどピキピキとなっていた。

「あのなあ。誰が気絶したお前をここまで運んでやったと思ってる。

あのまま暗がりの中、あそこに放置でもよかったんだぞ」

「うるさいうるさいうるさい!大体なによ!わけわかんない任務に急に呼ばれたと思ったらあんなわけわかんない奴らに手も足も出なくって!」

よほどフラストレーションが溜まっていたのだろう。若干涙目になりながら激しく己が内に沸く感情を放出していた。

あんな見た目完全にザコなチンピラに負けたのが相当悔しかったらしい、ギリギリと彼の肩に爪を食い込ませては歯を食いしばっている。

「あーもう!悔しい悔しい悔しい!!」

「あーちよ!コラ!暴れんな!!」

ジタバタと背中で暴れるポーラ。仕方なく、エミーリオは彼女を降ろす。

降ろした瞬間自身の状況を冷静に感じてしまったのだろう。今度はじわじわと目に涙を浮かべてガチ泣きしてしまう。

「どんだけ悔しいんだお前……」

そんなポーラに呆れた声を出す彼。

「だってえ……ブラックタイガー以外にい……負けたことなんてなかったのに……!」

グジグジと涙を落とすポーラに彼とクロームは互いに目を合わせ
る。

はあと一つため息をつく彼を尻目にクロームは宥める。

「……大丈夫。あの人たちはリングと匣を持ってたから。あなたが敵わなくても変じゃない」

どうやらその言葉は逆効果だったようだ。

ぐぐぐと下唇を噛んでいたポーラは耐えきれなかったようでつい
にうわーんと走り去って行ってしまった。

それほど自信と確信があったのだろう。

まあそれも致し方ないことではある、エミリーオだって油断と自信
があったわけだ。相手はたかだかチンピラだと聞かされていたのだ
から。チンピラだと称され、相手を格下に認定してしまっただがため、
ポーラの傷もまた深くなってしまったのだろう。

「……私、失敗した?」

「まあ、あの場合誰が何言ってもああなってたろうし。別にいいん
じゃね?」

走り去って行ったその背中を見ながら、彼は反対方向。つまり家路
につこうとする。

それよりも、なにより問題なのは――。

「クフフ。これで四十人目」

エミリーリオとポーラが解散していたころ。薄暗いどこかの倉庫。

「結局、適合者は現れなかったぴよん!?!」

「……まだ、四十人だよ」

野生的な瞳に特徴的な八重歯。

眼鏡の下にバーコード、その瞳は石のように冷たい。

そんな二人の男と、少年が一人。

「やはり中々、難しいものですね。わかっていたことですが」

少年の瞳は、薄暗い倉庫で怪しく光る。

「あ、M・Mが帰って来たぴよん!」

「ちよつとなに?こんな埃っぽい」

文句を言いながら、入ってくる女の子。ギヤルのような格好をした赤髪の女。その脚には武器であるフルートが仕込まれている。

これで、四人。

現在並盛高校に通っているクローム、そしてヴァリアーに在籍しているフランを除けば六道骸ファミリー勢揃いだった。

六道骸本人が憑依体だということを除けば。

「まだそんなガキンチョに憑依してんの?」

「しようがないでしょう。今僕はイタリヤから離れられないのですから。腐ってもボンゴレの監視は一流ということですよ」

やれやれと言った様子で少年は話の先を促す。

「で?例のアレは見つかったのですか?」

「フフン。私を誰だと思ってるの?タダで帰ってくるなんてこと、このM・Mちゃんがするわけじゃないじゃない」

得意げに鼻を鳴らすM・M。

「いいから早く話すぴよん!」

「うっさいわね!急かさないでよ!」

一つ、咳払いをして。

「まったく、私がどれだけ頑張って探し出したか、一から愚痴ってやろ

うかしら」

ブツブツと口元で陰気なオーラを発しているM・Mだったが周りの早く家という空気にハツとなりまた咳払い。

「クフフ。いえいえ、いいんですよ愚痴の一つや二つ。最も重要な任務をあなた一人に任せてしまいましたからね」

「……別に。そのことに関して不満はないのだけれど」

あっさり認められたからだろうか、M・Mは罰が悪そうに口を尖らせる。

「それで、結局どこにあるのですか？ずいぶん所在不明となっていた最後のヘルリングは」

ヘルリング。この世界に死ぬ気の炎が認識される以前からあつたとされる六種類の霧属性最高のリング。

その二つを六道骸が、一つはフラン、二つを幻騎士と言うミルフィオーレの幹部が、そして最後が川平というおじさんが所有している。

しかし、それは未来での話。十年前の十年後の話だった。

現在、そのヘルリングは一つが行方不明となっている。

その行方不明のヘルリングを我が物するため、六道骸たちは動いているのだった。

「ヘルリングは、ここにあるわ」

「もう、ゲットしてきたの？」

M・Mの言葉に千種が訪ねる。

「ううん。正確にはこの土地、つまり日本の並盛にあるわ」

「……並盛に？」

「ええ。並盛のヤクザが持っているらしいわ」

「ヤクザ？ヤクザがヘルリングを持つてるぴよん？」

「して、そのジャパニーズマフィアの名前は？」

「その名前は、“一条楽”」

「……ほう」

怪しく光る眼、オッドアイのその目が細くそして笑みに変わった。

n u e d .

T o b e c o n t i

標的13 Mafia italiana（イタリアマフィア）

日本で六道骸たちが不穏な動きをしている頃。イタリアでは。

「ヤバイな。モタモタしてたら会議に遅刻しちまう」

森の中を走り去っていく青年が一人。年は二十代前半といったところか。

銀髪でまるで触覚を生やしたかのような髪形にスラリとした高い身長。鋭い目つきのその青年は、焦ったかのように額に冷や汗をかいていた。

そんな男を狙う影が一つ、二つ。

狙撃銃を掲げ、スコープ越しに青年をのぞき込むその男たちは、無線で連絡を取り合う。

「コードaターゲット確認。ロック完了」

「コードb同じく」

「コードcも同じく」

「よし。これより作戦に入る。ボンゴレファミリーにおいて最重要人物であるボンゴレ十代目の右腕、ごくでらはやと獄寺隼人暗殺任務を」

そう男が呟くと無線から「了解」の声が。

それっきり、無線は音を発さない。静かな森のさざめきと、小鳥たちのさざ波があるだけだ。

整えられた呼吸が、男の頭に響く。男は頭の中を空っぽにして、ただ、引き金を引くことだけを考えた。

そして、銃声音。

は、しない。

「……な、んだと」

サプレッサー付きの銃など彼らにとつては当たり前だった。

なので、それに驚いたわけではない。

驚いたのは、確実に射抜いたはずのターゲットがその場に佇んでいたからだ。

銃弾が外れたわけではない。走っている対象の速度と地形を計算して照準を待ちかまえ、ジャストで引き金を引いたはずだった。男は三人一組のチーム。いわゆるスリーマンセルを組んでいた。彼はその中の実行犯。残り二人は彼が狙撃失敗した時の保険。獄寺を暗殺すること、それはすなわち、裏社会の勢力図を塗り替えることを意味している。

なぜなら実質ボンゴレは獄寺が回していると言われているからだ。裏社会が嫌いなボンゴレ十代目はめったに顔を見せない。その代り獄寺がボンゴレの手となり足となつてゐる。

それが裏社会での通説。

そんな獄寺を殺せば、間違いなくボンゴレに大打撃を与えられることは必至だろう。

名も持たないマフィアはそうすることでしか生きられない。

男も、そんなマフィアの一員だった。

任務失敗＝死。簡単な図式だった。

だから、このチャンスをも、獄寺隼人が一人になつてゐるこのチャンスを彼らは逃すわけにはいかなかった。

照準を合わせて、頭を空っぽにして、引き金を引いた。

ただ一人の男を殺すべく、殺意を持って。

撃つた。

だが、男は死んでゐない。ただ、じつと背中を見せてそこに立っているだけだ。

彼は訳が分からなかった。スコープ越しに見るその光景に。

何度も瞬きして、ようやく狙撃が失敗したのだと理解した。その原因まではわからなかったがするべきことは明白だった。

仲間に連絡すること、ただそれだけだ。

「おい、コードb、c！聞こえるか！狙撃が失敗した！俺はこれより二人のサポートに回る！即刻対象を暗殺せよ！」

・・・返事は、帰ってこない。

砂嵐のようなザーっとした音が返ってくるのみである。

「コードb、c！」

再度呼んでみるも、やはり返事はない。

「いったい何が……」

現状を把握しようと、彼はスコープ越しに獄寺を見ようとした。

「ガオオオ!!」

「おわっ!」

彼がいたのは、森の中の見晴らしの良い崖だった。ここからターゲットまでは数百メートルはある。

にもかかわらず、彼は飛びのいた。

なぜなら、目の前に豹がいたから。

ここは森である。獣の一匹や二匹。いたってなんらおかしくはない。

その豹が嵐の炎をまとっていないければ。

パンターラ・テンベスタ
「嵐 豹!」

その匣兵器は見覚えがある。獄寺の傍にいつもいる有名な匣兵器だ。

「な、なんでここが!」

先も言ったがここから獄寺がいる地点は数百メートルも離れている。肉眼で視認することなど不可能に近い。もちろん彼はカモフラージュに土と同化しているように見えるマントまで装着済みである。

見つかるわけがない。彼はそう思っていた。

いや、仮に見つかったのだとしても対応が早すぎる。事前に察してもしていない限りこの迅速さはあり得ない。

だが、現に目の前には今にも牙をむきそうな嵐豹。

早くなる鼓動と、したたり落ちる冷や汗。嵐豹と目と目が合う。少しでも離せばその瞬間に殺されるだろう。

(なにか、なにか打開策を……)

詰まる脳みそでそれでも必死に考える。

懐には拳銃とナイフがそれぞれ一丁ずつ。だがこんなもので匣兵器と戦おうなどは彼は考えていなかった。

「くらえ!」

素早く拳銃を引き抜き、照準を合わせる暇もなく引き金を引く。

嵐豹は当然のようにその銃弾を避け、そのままの勢いで彼を引き裂こうと右腕を振り下ろした。

……が、そこに男はいない。

キョロキョロと探し、そして見つけた時には既に男は崖の下。

拳銃は牽制。男はイチかバチか、崖を転がり落ちていたのだ。

「グルルルル」

下を見る。男は落ちたままピクリとも動かない。

死んだ。そう判断した嵐豹はシウルシウルと体が縮んでいく。

男は死を覚悟して崖を飛び降りた。どうせこのまま睨み合っているも待っているのは死のみだっただろう。

ならばと、イチかバチかの賭けに出たのだ。

結果は、バチのほうだったようだが。

「ニャア！」

そんなことを考えていたのかどうかは分からないが嵐豹は、嵐猫に姿を変えた。

トコトコと主のところに戻るために。

「――――― S I S T E M A C . A . I . (システムシー
エーアイ)」

獄寺隼人はそう呟く。

腰にはいくつもの匣。その匣のいくつかを開匣して、獄寺は刺客を退けていた。

S I S T E M A C . A . I . (システムシーエーアイ)それは
獄寺自身が開発した瞬時武装換装システムのこと。

いくつかの属性リングと匣を順序良く開匣していくことにより力

を發揮するシステムだ。

これにより、戦闘では使えない炎圧の属性の炎も、互いに互いを補い合うための戦闘で使えるレベルまで引き上げられる。

獄寺は嵐、雨、雲、雷、晴の五つの属性を扱うため、もってこいのシステムを開発したといえよう。

「つたく。こちとら急いでるつてのによお」

そんな獄寺の側には伸びている刺客が二人。

森に溶け込むようにご丁寧に迷彩柄の戦闘服まで身に着けている。

そんな二人をしかし獄寺は右腕にセットされた髑髏型のガントレットで退けた。

までは良かったのだが。

獄寺は周りを警戒した。

一番最初に狙撃された時、獄寺はシールドで防ぐことができた。のは、相棒である瓜ウリという嵐猫が教えてくれたからである。

その瓜の気づきがなければ、獄寺は致命傷を受けていたことだろう。

獄寺を狙う刺客がこれで終わりだとは限らない。

イタリアマフィアの中でボンゴレは地位を確立し、その地盤を固めてはいるが未だこういったゲリラ的な暗殺が後を絶たない。

狙われるのが日常と化して幾数年。最早こういった事にも慣れてきている獄寺ではあるのだが、油断した瞬間バン！なんて笑えない。

「………周囲に炎反応はなし、か」

ジャンニーニと呼ばれるボンゴレの開発顧問が開発した携帯型炎感知システム。その端末を手に、獄寺はそう呟く。

その携帯端末は周囲半径三キロ以内の炎を、場所、種類、炎圧の三つの観測値で所有者に教えてくれる優れものである。

今日び、リングを持つていないマフィアなどこのイタリヤにはおらず、よってほぼすべての戦闘を事前に知らせてくれるわけだ。

「にしても故障か？反応がなかったんだが——」

舌打ち交じりに獄寺は不満を口にする。帰ってジャンニーニをとつちめようと心の中で決めるとき、ガサゴソとした物音が側の茂み

から聞こえた。

「——っ！」

即座に、右腕に携えたガントレットを怪しい茂みに向けた。銃弾はセツト済み。あとは、姿を見せたところをズガンと、一発ぶち込むだけ。

わずかな沈黙。

「ニヤア」

「瓜！」

その沈黙を破って、茂みから現れたのは瓜だった。

額の炎は微弱なもので、瓜はシュパシュパと眠そうだ。

「やっぱ、まだ嵐豹は完全には制御できねえか」

嵐猫の瓜はS I S T E M A C . A . I . の一部であり、怒涛の攻撃の核となる存在だ。その嵐猫に、他と同様晴の炎を注入すると嵐豹に変化するのである。

だが、正直なところ、このシステムだけはまだまだ未完成な部分があり変化すると多量の炎を消費してしまうのだ。

そのせいで、嵐豹の姿を保つのも持って数分。そしてその代償としてしばらく瓜は眠ってしまう。

「修行つつても、もう昔みたいに時間を自由にできねえからな。すまねえ瓜」

「ニヤア……」

瞼をぐしぐしとこする瓜は今にも眠りそうにこっくりこっくりと頭を揺らしている。

普段はずつと外にいる瓜を匣に戻し、さて。と改めて獄寺は前を向く。

「やべえ、マジで遅刻する」

そう呟いて、獄寺はもう一度走り出す。

目的地である。屋敷に向けて。

荘厳な建物。煌びやかな土地。

それがここイタリアの都市部の印象だった。

歴史と伝統を受け継ぎ古くからある都市だった。

自然も豊かで住みやすいと評判で人口は多い。

人は活気にあふれ、街には笑顔が絶えない。時より物騒なことも起こる。

そんな普通の町、その普通の町の少し離れた郊外。

静かな森の中にその建物はあった。

荘厳な建物と煌びやかな土地。

とは少し毛色が違った。

建物は広いといえばそうなのだろうが、荘厳というよりは質素で周りも草木やその土地特有の花で覆われている。

美しい自然には囲まれているものの、一言で言ってもとても地味な建物だった。

これがイタリアマフィアを取り仕切っているボンゴレの本部の一つと言われて信じるものなど極僅かであろう。

「うお？おい！こんな田舎みてえなところで会議やるのか!？」

「もうー、そんなこと言っちゃってしょうがないでしょ？ここがセキリュティ的に一番なんだってー、言われたのよ?！」

長い銀髪に、猛々しく吠える声。

オカマ口調にオカマ。

スクアーロとルツスーリア。その二人が、バンで森の中に来ていた。

理由など一つしかない。

「スクアーロ、とルツスーリアか。もうそんな時間か。しくったな」

「あゝあゝ?！」

森の中、道ならぬ道から頭に葉っぱや枝をくっつけて獄寺隼人が登場した。

「なーにやってるの？そんな汚い格好して？」

「けっ。ちよいと野暮用だ」

そこで、獄寺は一つ気づいた。

「おい。ザンザスの野郎はどうした？」

「ボスなら来ねえよ」

獄寺は一つため息をつく。

まああのザンザスの性格を考えたとき、素直に来るほうが驚きではある。

「それよりも、緊急会議、それも私たちヴァリアーまで召集されるほどの会議って何かしら？内容も知らされてないんだけど？」

「それでボスが来るわけねえぜ」

「それは、十代目から話がある。とりあえずついてこい」

獄寺は二人を背に、十代目のいる屋敷へと入っていった。

屋敷の中は生活感が漂っていて、どちらかというの家という認識のほうに正しいように思える。

「当たり前だ。ここは十代目が在住なさっている家だからな」

「へー、そんなところに呼び出されたの？私たちは」

「仕方ねえだろ。極秘案件なんだ。ここが一番安全だ」

獄寺は居間を通り二階に進む。

廊下を歩き、二つ目の扉を開く。

すると、一階とは違いいかにも会議用の縦長の木製の机と椅子がいくつつか。

「あー獄寺殿！お久しぶりです」

そこには先客がいた。

一昔前の武士のような口調に人懐っこい笑顔。碧眼に肩ほどに伸ばした亜麻色の髪。

バジル。本名バジリコン。ボンゴレ外部組織・門外顧問組織CED EF（チエデフ）に所属するイタリア人の少年である。

「……………」

後ろにいるのは同じくCED EFのラル・ミルチ。

藍色の長髪に鋭く切れ長の瞳。控えめに見積もっても美人な軍人

である。

そつぽを向いて、ちらりとこちらを見るだけで大した反応はない。

「なんだ。もう来てたのか」

「はい。数分前に」

そう答えるのは、オレガノという眼鏡をかけた金髪のOL風の女性。勿論CEDDEFである。

「ここで待ってる。今十代目をお連れしてくる」

獄寺は、その部屋を後にし十代目である沢田綱吉を呼びに行く。

残ったのはCEDDEFの三人とヴァリアーの二人である。

「……ザンザス殿は、来られないのですか?」

「来るわけねえだろ。大体、オレらは今日の内容すら把握してねえんだ」

スクアア口はドカツと椅子に腰かけると、不機嫌そうにそう悪態をついた。

「それは、拙者たちも同じです」

「……なんにせよ、沢田が来ないと話にならん」

背を壁にもたれかかったままラルはそう言う。

「つたく。くだらねえ話だったら承知しねえぞお。沢田あ」

静かに怒りを燃やしながら、スクアア口の目つきは数倍悪くなっていくのであった。

「……十代目。獄寺です」

コンコンとノックをして、獄寺は名乗る。

廊下の奥にある部屋。執務室となっているそこに十代目、沢田綱吉はいる。

「どうぞ」

「失礼します」

乱雑に散らかった書類があちらこちらに散らばっているその部屋の中央。

重厚なイタリア製の机の上、山積みになされた書類と書類の間から声の主、沢田綱吉は顔を上げる。

「C D E F、ヴァリアー。両組織ともお見えになりました」

「ごめん。この書類が終わったらすぐ行くから」

「あのアホ牛……ランボの奴はどうしたんですか？確かこの屋敷に居候していましたよね？」

ランボ。ボンゴレ現雷の守護者。15歳。

もじやもじや頭に牛柄のシャツをよく着ていることから獄寺は普段アホ牛とよんでいる。アホなのはめんどくさがりで泣き虫という性格だから。

「ランボ？ランボは……えっと、どこに行つたのかな？」

どうやら沢田綱吉はここ最近ずっと書類と格闘しっぱなしだったらしい。申し訳なさそうにポリポリと頭を搔いている。

「あの野郎……！大事な会議があるって伝えといたろうが……！」

獄寺はプルプルと握ったこぶしを震わせ、それを綱吉が宥める。

「まあまあ。目を離れた俺の責任でもある。それに最近構ってやれてなかったから」

「十代目が気にすることではありません。あのアホ牛。いくつになってもアホのまま……！」

ジャンニーニと共にとちめる奴が一人増えたと頭の中で決めた獄寺はそのまま綱吉の書類が片付くまで見守る。

どの書類もボンゴレ十代目である沢田綱吉が目を通し、ハンコを押さなければならぬ重要なものだ。手伝えるようなことは何もなかった。

（くっ！右腕である俺がもつと早く屋敷についていけば。いや、もつと早く任務を片付けていけば、十代目をこんな急かすようなことなかったのに）

自分の不甲斐なさに奥歯をぐつとかみしめる獄寺。

そんな獄寺をよそに、綱吉は書類に見切りをつける。

「よし、こんなもんかな。待たせてごめんね」

「いえ！十代目のためなら俺はいくらだって待ちますよ」

胸を張ってそう答えた獄寺に礼を言いつつ、綱吉は待ち人のことを口にする。

「バジル君も、ヴァリアーの人たちも待たせちやったかな」

「いえ、それくらいどうってことありません。十代目を待つなんて逆に名誉なことです」

逆に、の意味がよくわからなかったが綱吉はいつも通りな友人に苦笑する。

「さて、じゃあ行こうか」

数メートルほど廊下を進み、ライオンの頭を模した飾りがドアに飾られている部屋。普段重要な会議やなにか機密事項を話すときなどに主に使用する部屋に沢田綱吉はノックもせずに入った。

「お待ちせ。待たせてごめん」

「沢田殿！お久しぶりです」

「久しぶり、バジル君。二年ぶり、くらいかな？」

「そうですね、最後にあっただのはアメリカでの任務でしたから」

「ラルも久しぶり」

「……ふん」

「ぶお？おい!!遅せえぞお！沢田あ!!」

久しぶりの旧友との再会に会話も弾むがスクアアロの一言でそれも中断される。

「待ちくたびれたわ」

「二人も、相変わらずだね。……ザンザスは、やっぱり来なかったか」
あたりを見回すまでもなく、綱吉は真ん中に腰掛ける。

椅子に座っているのは、C E D E F代表のバジルとヴァリアー代表代理のスクアーロ。そして綱吉だけだった。他の面々は壁にもたれかかっていたり、横に立っていたりと様々だ。

「たりめーだ。こんなわけのわからん会議にボスがわざわざ来るわけねえ」

スクアーロは不機嫌そうに肘をついてそう言う。

「何をおっしゃいますか。沢田殿が緊急に、それもご自分のお屋敷に召集なされたのですよ。重要な案件に決まっているでしょう」

「うん。まあじゃあ早速その件について話そうか」

ようやく腰を落ち着けて綱吉は口を開く。

「早速で悪いけど、みんなヘルリングのことについては知っているよね」

ヘルリング。綱吉がそう口を開いた瞬間。それまでの空気が一変、緊張が走る。

「・・・なにか、情報をつかんだのか？」

神妙な面持ちで訪ねるラル・ミルチ。

「確か、ヘルリングは霧のリングの中でも最高峰のリングで、その歴史は古くは死ぬ気の炎が観測される以前からあったとそう親方様から聞いたことがあります」

親方様。C E D E Fの元ボスで沢田綱吉の父親。現在は日本で妻と有意義に少し早い老後を送っている。

元、というのは現在のボスはバジルだからだ。一年前にその座を綱吉の父、家光から譲り受けた。

「うん。未来ではそれを六道骸と幻騎士、フランに川平のおじさんがそれぞれ所有していたんだけど」

「現在、その中の一つが行方不明になってる」

綱吉の言葉を獄寺が引き継ぐ。

「・・・確かに、あれは使用者の精神を崩壊させる。放っておくのは得策ではないな」

ラルが神妙な声でそういうと。

「ウチのフランはちゃんと持ってたぞ。666のヘルリングをなあ

トリプルシックス

ッ！」

なぜか少し自慢するようにスクアーロは声を張り上げた。

「うん。骸も二つ持ってた」

「川平の叔父殿も持っていたのをC E D E Fが確認しています。一つ、ですが」

「と、なると怪しいのは幻騎士ってわけかぁッ！」

「幻騎士は、現在行方をくらませている。ミルフィオーレファミリーにもジツリヨネロファミリーにも所属していない」

ラルの言葉を最後に現場はそこでいったん静まり返る。

次に口を開いたのはスクアーロだった。

「てことはもう決まりじゃねえか」

「ええ、ほぼ100%。幻騎士殿が関連していると見ていいでしょう」

「どうやら、早々に会議は終わりそうだった。」

「それで？ 私たちを呼び出したってことは、その幻騎士を見つけて殺せばいいのかしら？」

ルツスーリアが物騒なことを口にする。

「殺すまではしなくていい。ただヴァリアーには幻騎士の搜索と情報を聞き出してほしいんだ」

「……はっ。相変わらず甘っちょろいぜ」

「沢田殿。もう一つのヘルリングの在処は判明しておられるのですか？」

「うん。その目星がついたから今日こうして集まってもらったんだ」

綱吉が言い終えるか否かのところで、タイミングよく獄寺が一枚の紙と写真を二人に渡す。

「場所は日本、並盛。そこにヘルリングはある」

その言葉に、その場にいるものは多少の動揺を隠せない。

「並盛に、ですか？」

「うん」

「……今、並盛にはどれくらいの戦力があるんだあ？」

「ボンゴレから、雨、雲、霧の守護者。そして先日加入したホワイトファンクがいる」

スクアアロの問いに、獄寺が答え、と同時に詳細な資料をバジルとスクアアロに手渡す。

「それと、報告書によると、たしか例の白い子供も並盛ではなかったか？」

確認のためラルが、綱吉を見る。

「うん。別任務、だけどね」

「……偶然か？」

訝しんだ眼を送ってくるスクアアロに綱吉は答えた。

「偶然だよ。俺の超直感に別にエスパ―ってわけじゃないんだ」

首を振る綱吉を以前冷めた瞳で睨みつけながら、スクアアロは鼻を鳴らした。

「とにかく、ヴァリアーからも戦力は送る。それでいいな沢田あ！」

「うん。よろしく頼むよ」

それだけ言うと、スクアアロとルツスーリアは身を翻して帰ろうとする。

危なげなく会議が終わったことにほっと一息胸をなでおろしたところで、側近にいた獄寺から耳打ちされる。

「十代目。あの男の事話さなくてよろしいんですか？」

その言葉で、綱吉は忘れてたと慌てて二人を呼び止める。

「あ、待って！ヘルリングの今の持ち主は——
「写真の男、だろうか？」

ピツと後ろ手に先ほど渡した資料の中にあつた写真を見せる。

写っているのは——。

「うん。その男の名前は、『一条楽』。」

i
n
u
e
d.

標的14 Un ruoio (一つの役割)

これから極秘任務、一条楽の人間性を報告するため観察目録をつける。以降、作成者はエミリーリオ・ピオツティとする。

この任務の意図は明確とされてないため、独自に作成者が集めた情報を統合したモノとすることで任務をこなす。

並盛、am6:00。

一条楽の朝は早い。ふわあと大きなあくびを付きながら、廊下をペタペタと歩いていく。

なぜなら、一条家の朝食や弁当は大体彼が作る。そのため、早起きを強いられることになるのだ。

「おはよーござえます。坊ちゃん！」

「あー、竜。はよー」

キッチンというよりかは厨房といったほうが当てはまるような、そんなでかきのキッチンで一条楽は目の前にいる人物に呆れていた。

佐々木竜之介ささきりゅうのすけ 集英組の若頭で血の気の多い組連中を上手くまとめ、同時に切り込み隊長のような役割も担っている。

「今日は何か手伝えることはありませんかね？」

一条楽は憎んでいるという様子は見受けられないが、他人の目から見てもこうして少々干渉のすぎなきらいがある。一条楽は昔からやめてくれと言って憚らないのだが、治る気配がないらしい。

「いや、あんましないな。つーか、お前まで一緒に早起きしなくてもいいんだぞ。どうせ仕込みなんて昨日のうちにほとんど終わらせてるし」

「いえいえ！坊ちゃん一人にやらせるわけにはいきやせん！何せ坊ちゃんは集英組の次期組長ですから！」

「いや、だから俺は組長にはならねえって……」

朝から声のでかい佐々木竜之介に小さく抗議しながら、一条楽は朝食の準備をする。

朝食を終え、時間も差し迫ると彼は学校へと登校する。

「遅いわよ！バカもやしー！」

「すまん。ちよつとバタバタしてて」

彼女の名前は桐崎千棘^{きりさきちとげ}。碧い瞳。綺麗な金髪を腰まで伸ばし、赤いリボンがトレードマークの控えめに見積もっても美人である。

この桐崎千棘と一条楽は交際をしている。

そこまでは別に問題ではないのだが、問題は桐崎千棘がアメリカに本拠を置くビーハイブというギャング組織の一人娘だという点だ。

集英組もビーハイブも裏社会において単体ではそれほど脅威にはならないが、これらが手を組むとなれば話は別になる。

今まではなんの接点もない、どころか合えば一触即発の両者だった一人娘と一人息子が交際、後に結婚なんて話にもなれば和解の架け橋となるだろう。

少なくとも、今までのように潰し合うわけにはいなくなる。

その為、我らボンゴレはこれを阻害することにした。脅威の種は摘み取っておくに越したことはない。

・・・話が逸れた。本筋に戻そう。

一条楽は毎朝、彼女とこうして（同封の写真参照）仲睦まじく登校している。多少聞こえる罵声なども親愛の証と思われる。

以下、会話の一部を抜粋。

「本当にもやしね。朝くらいきちつと起きなさいよ」

「起きてたんだよ、ただ飯作ってたら思いのほかかかっちゃって」

「はあ？飯？飯ってアンタ、朝ご飯自分で作ってんの？」

「ん？ああ、まあな」

「・・・料理男子ってやつ？なに？モテたいわけ？」

「ちげえよ！ウチの奴ら料理できる奴少ねえから、それで仕方なくだよー」

「ふん！どうだか！」

男女の機微というのはよく分からないので、それはこの書類を送付した先の専門家に任せるとして。会話を聞く限り険呑な雰囲気というわけではない。

このことから一条楽が傍若無人な人間ではないと考えられる。それでは、ポイントを絞って一条楽という人間性を確認していきましょう。

am9:00

まずは一条楽の交友関係。

「楽」

廊下の先からブンブンと手を振っているのは一条楽の幼稚園からの幼馴染だという舞子集まいこしゅう。特徴は眼鏡。その他には眼鏡と、あと眼鏡。そして眼鏡を掛けている。

「なんだよ集、そんな大きな声で」

「いやいや、それが大きな声では言えないんだが・・・また良い裏写真が撮れたんでね」

下卑た笑みでヒソヒソと耳打ちをする舞子集。一条楽の方はとうとうと、またか。と呆れた様子だ。

「お前、女子達にバレたら殺されるぞ」

「ふふん。そんなヘマはせんよ。それよりどうだい？これなんか」

「おま！これは・・・！お、おの」

「今なら友人割引でお安くしとくぜ」

手元の詳細な写真は取れなかったものの、会話からどうやら女子の卑猥な写真を売買しているらしい。一般男子のそういう欲情は持ち合わせているようだ。

このような悪友と呼ぶ人間の他にも、クラス内外問わず会話をする程度の友人関係は築けていると見える。よって、あくまでも表面的に

は対人関係にも問題は見られない。

a m 1 0 : 0 0

次に授業中の態度及び学力という面においての調査結果だが、学力は中の上といった程度で授業中もいたって真面目に講義を聞いているようである。

ヤクザの息子ということだが、将来の夢が公務員ということで見目で堅実な性格だということが窺える。

そのため、体育や運動神経という面では特筆すべきことはなにもなく、流石にヤクザの息子ということもあつて運動音痴ではないようだが特別優れているというわけでもない。

また教師からの信頼もあり、何かと雑用を押し付けられることもあるようだ。

このことから、対人関係は良好と言える。一人になる時間も少なく、狙える時間は限られてくるだろう。

p m 1 2 : 3 0

そして最後に、最重要かつこの一条楽という人間を語るうえで不可欠な要素を上げることにする。

ガヤガヤと騒がしい教室で一条楽は昼食を取っていた。共に机を並べているのは彼女である桐崎千棘。そして友人である舞子集。

ここまではいい。同じクラスであるし彼女と昼食を共にすることくらいは不思議ではないだろう。
が。

「あれ？千棘ちゃんお箸は？」

一条楽という人間の問題は、彼女だけに飽き足らず多種多様な女子をその身に囲っているという点だ。

まず一人、会話の口火を切ったのは小野寺小咲。おのでらこせき肩までのシヨート

へアに大きな瞳、柔和な笑顔。人柄が良さそうな雰囲気、実際のこの調査中にも他人から頼まれごとをされたり飼育されている動物に好かれていたりとその片鱗を確認している。

「え？・・・あつー！忘れた!!」

「はっ。なんだよ、人には朝きちつと起きろとか言つといて、自分だつて寝ぼけて忘れものしてんじゃねえか」

「お嬢、ではこちらを」

そして鶴誠士郎。コイツに関してはこちらで調査をするまでもないので割愛することにする。

「駄目よ。それじゃ鶴が食べられないじゃない」

「そうですよ。桐崎さんはお弁当くらい”素手”で食べられるくらい手先が器用でいらつしやいますから、お箸など必要ありません」

次に橘万理花^{たちばなまりか}。茶色がかつた長髪に、イタズラっぽい笑顔。随所に一条楽を恋愛対象としているような発言が目立つ女の子である。調査中も常に距離が近く(資料参照)、下手すると浮気という可能性もある。

このように、一条楽という人間は彼女がいるにも関わらず、数人の女性と親密な関係にある。もし、一条楽の弱点を挙げると問われればまず間違いない女性関係におけるだらしなさを上げるだろう。

色仕掛けという作戦をとる場合に関してはなんとも言えないがきつとあまり効果はないと思われる。前述と反するようだが、なぜなら女性に関してアグレッシブとはとても言い難く、困っている割には純粹というか一種の潔白差が見えるからだ。

さて、ではどうやってこの女子たちを集めたかと言えば、鶴に関しては自身の主である桐崎千棘に付き添っているだけにしても日本の風土、常識、環境を見ても一介の高校生とは思えない。親のヤクザであるということと権力に振りかざしているわけでもなさそうで、純粹に一条楽の周りにこれだけ女性が集まったということだろう。

なので、一条楽を弱体化させるとするならばこの女子たちから崩していくのが得策のように思える。

「どういふ事よ万里花!」

「あ、あの二人とも喧嘩は……」

「まったく、くだらないわね。お箸なら購買部にでも割り箸があるんじゃない?」

ああ、忘れるところだった。最後に宮本るりという人物も一応報告しておくことにする。

ポニーテイルを腰の辺りで揺らす眼鏡の少女。毒舌的であり、小野寺小咲とは友人関係である。

ただ、あまり一条楽と親し気というわけではないので、調査対象からは外してもよいと考える。

さて、ここまで一条楽という人間を要約して調査報告をまとめてきたが、ここからはエミリー・ピオツティ自身の見解を述べさせてもらおう。

この任務が緊急でボスから発令され、今までおよそ半月程度調査をしてきたわけだが、結果を述べさせてもらうと一条楽は、ボンゴレの脅威とは考えにくい。

別に情にほだされているわけでも、裏があるわけでもない。というかそもそもあまり親密になると任務に支障が出るとの考えから、任務対象とは数回喋った程度であり、顔見知り程度の関係である。

ただ純粹に疑問なのだ。

イタリアマフィア最強と謳われ、最早裏社会では強敵も少ない。そんなボンゴレが直々にしかも緊急にこのような任務を発令する意味、意図が読めない。末端である自分にそれが伝わってこないのは珍しくないが、今回ばかりは我慢できないのでこうして書面で直訴することにした。

回答を求む。

調査の報告に戻るが、一条楽にヤクザの二代目を継ぐ意思はないと思われる。根拠は一条楽は自身の平凡を願い、前述したように公務員を目指しているということ。これらは調査の中にもあるように非常に信憑性は高い。

よって、ヤクザの二代目を継ぐ可能性は限りなく低いと思われる、また一条楽の手でビーハイブと手を組み、ボンゴレを脅かす可能性も、

また低い。

では、桐崎千棘はどうかと問われれば答えは分からない、だ。一条楽を調査するにいたって、当然この疑問に行き着くわけだが、桐崎千棘を調査してもその断片は得られなかった。

将来の夢。過去のトラウマ。現在の立場。家庭環境から性格まで。得られる情報は限りなく集めたが、桐崎千棘が集英組と手を組みボンゴレを脅かす。という点においては不明瞭なままであった。

エミリーオ・ピオツティの立場として、今はビーハイブ所属となっていることから、上司の眼などもあり調査はここまでが限界だと感じる。

が、しかし。

少なくとも、片方にその意思が感じられない以上、やはり脅威は限りなく低いのではないかと述べさせてもらおう。

加えて、ここ数か月見張りや桐崎千棘が在住している家で接して、性格というただ一点に絞ればそういった画策が出来るタイプには見えずまた、野望があるようにも見えない。

結論として、一条楽と桐崎千棘が手を組みボンゴレを脅かす可能性は低いと思われる。

ただ、これはあくまでも任務の内容。つまり一条楽という人間に基づいて行った調査であり、結論だ。これと現集英組組長と、ビーハイブのボスがどのように考えているかは未だ不明である。もしも許されるなら追々そちらも調べていくことにする。

これがボンゴレ十代目からの直属の任務ということは、何かしら重要な案件なのだろう。白紙の手紙といい、今回といい随分と情報統制が厳しいようだ。ボンゴレ内部に裏切り者でもいるのか、それとも――

とにかく、これで調査報告を終了とさせていたたく。

エミリーオ・ピオツティ

裏切り者云々の一文を、迷った末に削除して。エミリーオ・ピオツ
テイは一つ大きく息を吐いた。

時は既に六月。入学から二か月あまりたった現在では新入生も新
生活に慣れてきて、交友関係も大体グループが固まって来る頃だ。

一方、エミリーオはというと。相変わらず友人と呼ばれる存在はな
く、こうして任務に費やす日々である。

「……終わった？」

「ぬわああ!!」

ずっと見ていたのか唐突にひよつこりと顔を覗かせたのはクロ
ム髑髏。居候である。

「お前さ！急に現れるのやめてくんない!!」

「……ごめんなさい」

なぜクロム髑髏が居候をしているかというと、単純に住む家がな
いからだ。

六道骸から追い出されたのか、はたまた自分の意志か、二か月ほど
たつてなお真意は分からないままだが放っておくことを家庭教師で
あるリボンが許さず、こうして居候という形で同居しているわけ
だ。

「ていうかビショビショじゃねえか」

ちらと外を見ると、霧雨のようにうつすらと雨が降っている。両手
に抱えた荷物は無事なようだが、変わりにクロムが濡れていた。

「大丈夫、ちょっと買い物に出掛けただけだから」

クロムが来るまで彼の食生活は、それは酷い有様だった。カップ
麺に冷凍食品、たまに外食。ただ、外に出ると外見から目立つので極
力、家で済ました。

その結果、卒業してわずか数週間で台所はカップ麺の残骸で埋もれ、立派なゴミ屋敷と化していた。

エミーリオだって、最初は綺麗に使おうと努力をしていたが、段々めんどくさくなり結果家事を手放した。

勿論、クロームが居候してきた日もその有様だった。それを見かねたクロームが今は家事全般を手伝っているわけだ。

「良いからシャワーくらい浴びてこい」

荷物をひったくって彼は乱暴にそう言う。

「うん」

傍目から見れば仲の良い姉弟に見えなくもないそんな光景に、しかしクロームはパソコンの液晶に映し出されているモノを不思議に思う。

「それは・・・？」

「なんでもねえよ」

パタリとパソコンを閉じる彼に首を傾げるクローム。

「いいから、さっさとシャワー浴びてこい！」

そんなクロームにグイグイと風呂場まで押していき、やや強引に扉を閉める。

「・・・はあ」

いくら元、霧の守護者とはいえ極秘扱いの任務内容を知られるわけにはいかない。

エミーリオは閉じたパソコンを再度立ち上げ、一枚印刷する。そこに死ぬ気の炎を――。

「そういえば、リング没収されたんだった」

そこではたと気づく。こういった極秘の任務の場合偽造を防ぐため本人だと証明するために死ぬ気の炎を烙印するのが常だ。

だが、彼にはリングがない。

一つ、深いため息をついて彼は考える。

「・・・一度ボスのもとに送るか」

ボスから沢田綱吉の元に送ってもらい、それを証明代わりにする。これが次点で有効な策だろう。

ボスには連絡を入れるとして、彼はもう一度自分の報告書と向き合った。

この任務を発せられたのがつい半月ほど前。送られてきた一通の便箋。宛名も住所も記載されていないそれには大空の死ぬ気の炎と共に、一条楽の身辺を報告せよ。との一文のみ。

その意味も意図も明確にされないまま、調査を進めてきたが、任務内容とズレがないなんて確証はない。自分としては多角的に調査を広げつもりではあるが。

「まあ、最低限の仕事くらいはしてるだろ」

もしズレが生じていたとしても、それは明確にしなかったあちらの不手際であり、こちらの落ち度ではない。

まあ、最後の十代目批判とも取れる一文は削除しておいたし、書いただけで満足なのであとはどうでもいい。

そう結論づけ、エミリーオは素早く報告書を折り畳み、早速ボスのもとへと送るため雨の中外に出るのであった。

日本。とある空港。

「しししっ♪カムバック」

「せんぱーい、ミーの足踏んでるんですけどー。ちよつとー、ねえ、聞いてますっ。」

「うるさいぞフラン。これはボス直属の命令なのだ。迅速かつ丁寧に仕事を終わらせボスに報告するまでが任務だ。まあ、日本のガキ一人くらいすぐに終わらせられるがな。ガハハ」

「やだ、もう。油断しちゃダメよ。一応ヤクザの息子なんだから」
「まったく、報酬が低いこんな任務なんて”ヴァリアー” 全員でか
らなくてもいいと思うけどね」
「うゝ おおおい！うるせーぞてめえら！いいからさっさと行くんだよ
！” 並盛高校” になー！」

T o b e c o n t

i n u e d .

標的15 L'incidente pica
tativo (最悪な災厄)

「おーい！エミーリオ！」

「・・・あん？」

少し離れた廊下の先、大きな声で彼の名前を呼ぶのは一条楽。

学校の校舎内で、一年生の教室が並ぶこの一角に、二年生である彼は少々目立つ。

「おい。見ろ、あれ・・・」

「ああ、『一条先輩』だ」

「すげえ、初めて見た」

「やっぱり侍らせてんのかな？」

「そりやそうだろ、聞くところによるとハーレム王になりたいらしいぞ」

「まじかよ、引くわー」

あちこちで聞こえるヒソヒソ話。大半は男子の嫉妬によるものでエミーリオとしてはふーんって感じなのだが。

「・・・」(ヒクヒク)

当の本人である一条楽はどうやらそうもいかないらしい。傍にいるエミーリオに聞こえているのだから、当然一条楽にだって聞こえている。

ヒクヒクと口角を歪ませ、少し涙目である。

そんなにダメージがあるのか。とエミーリオは少し意外だった。自分にはよく分からなかったから。

そして新たな発見を自分が持っている「調査ノート」に書き加える。勿論先日任務を言い渡されてから作ったノートで、その任務は既に完了しているのだが、ノートは手放してない。

「ん？なんだそれ」

先ほどまで俯いて見るからに傷ついていたのに。目ぎといいうかなんというか。エミーリオは呆れたように答えた。

「勉強ノートだよ。日本語の。まだ不完全だからな」

「そうか。結構上手っていうか、日本人並みに上手いと思うけどな」

「そりやどうも」

勿論嘘である。

「あと敬語だな。俺一応先輩だぞ。出会いが出会いだったし、別にいいけどさ」

ネチネチと説教のようなものを垂れる一条楽に内心でエミリーリオは深くため息をついてから。

「いや、つかさ。何の用？」

会話をぶった切る。どうやら一条楽の言葉は彼には届かないらしい。

一条楽は調査対象であり、任務対象である。が、ビーハイブの任務といい、集英組から音沙汰がないことといい、これまでほとんど接点はなかった。

よくよく思い返せば、今これが初めて二人で喋った瞬間である。

そんな人間に説教されても、彼は何も感じられない。

「ああ、そうだった。お前さ、今日暇か？」

エミリーリオは首を傾げる。質問の意図が読めなかったからだ。集英組からの任務であれば、直接組長から連絡があるだろうし、一条楽から言い渡される理由がない。

「……まあ、暇っちゃ暇だけど」

訝しむもエミリーリオはとりあえず答えた。どのみちわかることだ。

「良かったーそれじゃ放課後、俺ん家に来てくれ。頼むな」

「……ああ」

一条楽はエミリーリオが答えると安堵したように笑い、それじゃ手を振って去っていった。

「で、結局、なんなんだよ？」

てつきり内容を聞かされるものだと思っていたエミリーリオは深いため息をつく。これで家の草むしりとかだったらあの高そうな壺を割ってやろうと画策しながら。

振り返って、教室に戻る。

と。

「・・・・・・・・!!」

「春」

振り返ってそこにいたのは、教科書を床にバサバサと落とした小野寺春だった。

「え、エミ君!! 一条先輩と知り合いなの!!?」

「え? ああ、まあ。知り合いつつうか、まあ、知り合い?」

彼と一条楽の関係をなんと云えばいいのか言葉が見つからない彼に、春は構わず一人で衝撃を受けている。

「だ、駄目だよ! あの人は!! あんな・・・あんな・・・詐欺師みたいな人!!」

ガクガクと肩をつかまれ揺さぶられる。いつもの笑顔からは想像できない程、真剣で険しい顔つきだった。

「いや、なにが?」

現状といい先ほどのヒソヒソ話といい一体全体自分の任務対象はどのような評価を受けているというのか。

先日の任務には不要というかめんどくさくて省いていたが、これは本格的に調査しなければいけないと思い始めるエミリーオ。

「一条先輩は、あの人はね! 綺麗で可愛くて美人な彼女さんがいるのにも関わらずお姉ちゃんを狙っている狼みたいなのなんだよ! 最低なんだよ!」

「はい。どうどう。落ち着け落ち着け」

とりあえず荒ぶる春を落ち着かせ、深呼吸させる。

(ふむ。小野寺小咲・・・か)

一応そういう方面、つまり他の女をけしかけて修羅場を作る。といった方向から一条楽と桐崎千棘の仲を引き裂こうと考えたことはあるにはあるけども、エミリーオは断念した。

まず第一にエミリーオは男女の機微というものがイマイチピンとこず、誰をどうやってけしかけるのが一番効果的か、答えが出なかった。今までの人生にそういうことと縁がないことと、そもそも彼自身興味がなかったのが災いした。

第二に、そもそも一条楽という人間を観察している中で、それはあまり効果がないと判断をしたのだ。周りには常に美少女といって差し支えないレベルの女の子たちに囲まれてそういう修羅場になっていないのだから。いや、本当は既にそうなっていてエミーリオが分からないだけかもしれないかもだが。

どのみち断念するのにそうやぶさかではなかった。

だが、目の前でいかに一条楽がクズで最低な奴か熱弁されては本当は効果があるんじゃないかと疑いたくなってくる。

「それに、春のパンツも見たのよね」

「おわっ!!」

急に背後から声がしたので振り返ると。

「ふ、風ちゃん!!／＼」

そこにいたのは澄ました顔をした風。

「パンツ?」

気になるのはその単語。

「この前春のお気に入りのクマちゃんパン」わわ!／＼なんでもないよなんでも!」

顔を真っ赤にした春は慌てて風の口を閉じる。

ムガモゴと口を動かす風は滑稽でエミーリオはふっと笑う。

「なに?なんで笑った今?何に笑ったの今?」

若干こめかみに筋を浮かべる風。

「いやいや別に、変な顔だな。あ、わり。元からだったわそれ」

「は?どういう意味よ」

「そのまんまの意味に決まってるだろ?日本語わかる?unders t a n d d?」

バチバチとメンチを切りあう二人に恥ずかしがっていたのも忘れ、春が止める。

「わーもう!二人とも喧嘩しない!」

「ちっ!」

「ぺっ!」

呆れる春が話題を変えようと頑張る。

「そ、そうだ！エミ君、ポーラちゃんのこと何か知らない？」

「ポーラ？ポーラがどうしたって？」

急な話題にも対応するあたり、一応のコミュニケーションの雨量は向上したようだ。

「いや、ポーラちゃん入学初日以来全然学校来てないよね？心配で」

心配？なにを心配することがあるのか。エミリーオは首を傾げた。

あの月夜の一件でポーラは少なからずケガを負った。ついでにプライドも傷ついたはずだ。

プライド高そうだったし、今まで負けを知らない人生だったのではないかと想像できる。だからそれを知っている彼やクロームが心配するのはまあわかる。

だが、それを知らない目の前の彼女はなにを心配することがあるのだろう。先ほど彼女が言った通り、ポーラが来たのは学校初日のみだ。そんなポーラと親しいわけがないし、親しくなければ心配する要素が見当たらない。

「エミ君、何か知ってる？」

だが目の前の彼女は本気で心配している様子で、ここでエミリーオ相手に嘘をつく理由もない。

「あー、」

彼は逡巡する。別に隠す必要も逆に言う必要もないのだが、どうしたものと目を泳がせる。

「あれだ。体が弱いんだよ」

「やっぱり！肌とかすごく白かったもんね！」

「そうそう。病気なんだよ。すっごい重い病気」

適当に法螺を吹いていると春は納得したのかウンウン頷く。

「あ、チャイム鳴っちゃった」

教室戻らなきや。と春は律儀に手を振って廊下を走っていく。同じクラスだというのに。

「……………」

「……………」

場に残ったのは沈黙。良くも悪くも会話の主導権を握っていたの

は春で、二人はそもそも二人きりでは会話をすることが珍しい。「あのさ」

そんな沈黙の中、口火を切ったのは風のほうだった。

風の言葉に彼は答えず、それでも言葉は続く。

「なんであんな嘘ついたの？」

「嘘？」

「ポーラちゃんが重い病気だって」

ああ。とようやく合点がいったように彼はつぶやく。

「つて、なんで嘘つてわかるんだよ」

先述の通り、ポーラは学校には入学式の初日にしか姿を現していない。風だって春と同様ポーラという人について知っていることなど皆無に等しいはずだ。

「だって私この前ポーラちゃんが学校で鵜先輩とか一条先輩とかと暴れてるの見たもん」

「・・・なにやってんだあいつ」

てつきり傷心中だと思っていたのに。どうやら傷は癒えたらしい。

「で？・なんで？」

背はさほど変わらないくせに、まるで見下ろしているかのように言う風にエミリーリオは舌打ちをしながら。

「別に、ただの嫌がらせ」

ポーラに対しての。と付け加えると風は「ふーん」と存外そっけない。

「仲いいのね」

「ぎげんな」

「ま、なんでもいいけど春を必要以上に不安にさせないでよね」

それだけを言い残すと、風も廊下の先に消えていく。

「いやだから、同じクラスだろうがよ」

教室など目の前にあるというのに、何をそんなにかっこつけているのか。

エミリーリオは勿論そんなことはせずに素直に扉を開ける。

「・・・あり？」

が、教室内は整然としたもので、誰一人いなかった。おかしい。だってすでにチャイムは鳴っており、もうすぐ始業のベルさえなってしまうこの時間に誰もいないなどということは……。そこまで考えてエミリーオは気づいた。

――移動教室……。かよ――

誰も教えてくれなかった。いかにエミリーオがクラス内で浮いているかがわかってしまう。

走り去っていく姿がなぜか哀愁帯びているように感じるのはきつと見てる側だけだろう。

そして、学校が終わり約束の放課後。

いつものエミリーオなら直行直帰もしくはビーハイブの任務に勤しむのだが、今日はそのどちらでもない。

「……えーつと？んこか」

地図とにらめっこしながらたどり着いたのは集英組の本部。つまり一条楽の家。

相変わらずバカでかい。豪邸と呼んでも差し支えないほど、静かな煌びやかさに包まれていた。

前回来たのは約半年ほど前のことで、しかも跳ね馬に連れてこられたそれ一回のみである。

「よっこいせ」

だというのに、まるで緊張感も何もなくエミリーオは扉を開きズカズカと侵入していく。

「おいこら！ガキイ！なに勝手に入ってきてんだ！」

「ここを天下の集英組と知つてのことだろうなあ？ あん？」

玄関を開けたら二秒で極道が。

スキンヘッドにサングラス、パンチパーマに顔に傷というコツテコテの外見をした極道が二人。エミーリオの行く手を遮る。

「……………」

ぼけーつとした瞳で二人を見つめるエミーリオ。日本に来る前に見たマンガに確かこういうやつらが出てきたなーなんてそんな的外れな感想を抱いていた。

「おいてめえ言い訳くらいしたらどうだ？」

「まあどのみち、天下の集英組に無断で不法侵入したんだ。無事に帰れると思うなよ」

コキコキと首やら指やら鳴らす二人。

「いや、不法侵入つて普通無断だろ。どこに今から不法侵入しましすつて宣言するやつがいるんだよ」

そんな二人を無視するようにエミーリオは空気を読まず指摘する。

その指摘に、エミーリオの目の前にいる二人はこめかみに青筋を浮かべる。

「上等じゃコラア!! いてもうたれや!!」

これまた分かりやすくキレた二人は自分たちよりも明らかに体躯の小さい子供を潰すべく突進する。

「ふっ。馬鹿が」

ニヤリと口角を上げるエミーリオは突進してくるスキンヘッドの懐に潜り込み勢いを利用して一本背負い。

「がはっ!!」

自分の体重と突進した力を利用して思いつきり床に叩きつけられたスキンヘッドは灰の中の空気をすべて外に出した。

「なっ!」

それを見て、パンチパーマの男は一瞬で危険と判断したのだろう。突進しようと突き出した足を踏みとどまり急ブレーキをかけた。

が、急ブレーキしても勢いは完全には殺せず体重の重心は前へ。

それを見逃さないエミーリオではない。一本背負いした体制のま

ま右足を回して後ろ蹴り。

見事かかどがあごにクリーンヒットしたパンチパーマは横からの急な衝撃に耐えきれず体が崩れ落ちる。

「はい、一丁上がり」

ゆらりと立ち上がり、手を払う。目の前には気絶しているパンチパーマ。後ろにはこれまた気絶したスキンヘッド。

これにて極道の気絶落ち、二人前の完成である。

「なーんてな!!」

「っ！」

と、エミールリオが油断した隙を狙っていたのだろう。気絶したかに見えたスキンヘッドが低い姿勢そのままに手元に隠していた小型のナイフでエミールリオの喉元を狙う。

一瞬の油断を狙われたエミールリオは成す術なくナイフの錆となる。

「なーんてな」

「なにっ！」

まるで意趣返しのように同じセリフを発するエミールリオはパシリとナイフを指の間に挟み、自分より明らかに大きい拳を握る。

「うぐっ！油断したことさえも、撒き餌!!」

完全にとつたと思っていたスキンヘッドはあまりの驚きに思わず口から言葉が漏れ出る。

指の間に挟まれたナイフはまるで手元で生きているかのように滑らかにエミールリオの手元に収まる。

「形成逆転、って感じ?」

「」

上から見下ろされるスキンヘッド。その喉元に自信のナイフが持ち主を変えて突き出されている。

数センチでも動けば頸動脈がスパツと。

その数センチを目の前のガキはやる。仮にも極道に身を染めた身。その判断くらいはできた。

ごくりと、生唾を飲み込むことすら許されない。そんな距離。

「いらいら、なにやってんだお前は」

完全に場をエミーリオが支配していたところで、邪魔。

「……一条楽」

エミーリオの後ろにいたのは頭にタオルを巻き、作業着のようなものに身を包んだこの集英組の一人息子。

「ウチのもんをあんまりいじめるんじゃないよ。って、お前も”ウチのもん”だったな」

ガリガリと頭を搔く一条楽にエミーリオは向けていたナイフをだらしと下げる。

余程の緊張だったのだろう。スキンヘッドはその下げられたナイフを見るや否や大量の冷や汗と共に力なくうつ伏した。

「……で？その格好はなんだよ」

そんなスキンヘッドを見て興味を無くしたのかエミーリオは先ほどのような力強さは一切なく、一条楽に質問した。

「あ？ああ、これか。まあついてくればわかるよ。お前も着替えるか？」

スキンヘッドを担ぎ、もう一人を運ぶため組の連中を呼んでいた一条楽はクイクイとエミーリオを誘う。

「いやいい」

即答で断って、彼はふと思う。つーかこいつ、今俺の後ろをとったか？と。

(いや、油断していただけ、か)

深くは考えないことにして、とりあえずついていくことにした。元々事を荒立てる気はない。

スキンヘッドたちを部屋に寝かせてからたどり着いたのはでつかい庭。

素人目にも立派に見える鯉が泳いでいる池や、しっかりと手入れが行き届いている木（なんの種類かはわからない）。

そんな庭の片隅に、これまたどでかい木組みの土蔵のようなもの一つ。

「あー！エミーじゃん!!」

「うげ」

そんな土蔵の前でブンブンと手を振っているのは一条楽の彼女。桐崎千棘。

がばりと覆いかぶさるように抱き着いてくる桐崎千棘はどうやらエミーリオが大のお気に入りらしい。

「もう！なんであれ以来ウチに来てくれないの？待ってるんだからね！」

エミーリオの心底嫌そーうな顔に気づくことなく桐崎千棘はプンスカと怒る。

「ちやんとご飯食べてる？お風呂は？家計は？」

「オカンかお前は」

「モヤシには聞いてないわよ」

注意を逸らした瞬間になんとかエミーリオは桐崎千棘から脱出。

「ちっ。なんでまたこうめんどい奴が」

ある程度の距離をとって頬を伝う汗をぬぐっていると、後ろからガチャリと鉄の音。

「貴様・・・！事もあるうかお嬢に抱き着くとは・・・！自分の立場がわかってるんだらうな？」

「いやどう見ても俺が抱き着かれていたようにしか見えませんでしたか？」

後ろにはリボルバーを突き付けている鵜。

両手を挙げて抵抗する意思の無さを表明するエミーリオに銃口はなおも動かないままだ。

「ふふ。丁度いい機会だ。貴様には今後のためにみっちり教育して

おいてやろう」

歪んだ笑顔を浮かべる鵜。

「それはいやだなあ」

「はっ！貴様の意思など関係ない。二度とお嬢に不遜な態度をとらせんよう調教するだけだ」

「この野郎。ぶっちゃけやがったな。調教って言ったな！」

エミーリオとて、このまま黙って調教されるのは嫌なので。

「っ!!」

「なにっ!？」

後ろ向きのまま、かかを振り上げ鵜の持っていたリボルバーを真上に飛ばす。

「くそっ!」

鵜はまさか反撃されると思っていなかったのだろう。焦って懐に持っていたもう一丁の拳銃を引き抜こうとするも。

「させるかよー!」

すでに振り向いていたエミーリオの右手に抑え込まれ阻止される。

そして残った左手で、彼は飛んできたリボルバーをキャッチし目の前に突きつける。

「油断大敵って知ってるか？」

「こんのお・・・!」

ピキピキと額を歪ませる鵜と対照的に嘲笑っているかのようなエミーリオ。

「こら！鵜！エミーに乱暴しない！アンタのほうがお姉ちゃんなんだから！」

「い、いえお嬢！これはどう見ても私が乱暴されているようにしか見えないのですが！」

涙目で訴える鵜。まさか自分が責められるとは思ってもいなかったのだろう。

「あ！エミー君も来てたんだ！」

「春・・・に風もか」

「ふん、アンタも頼まれたのね」

「お姉ちゃんを守り隊。ここに結成だね」

なんだかよくわからんが、どうやら二人は小野寺小咲の為にここに来たらしい。

改めて周りを見回すと、他にも小野寺小咲や橘万里花もいる。

「なんだこの人選」

てつきり任務でも言い渡されるのかと仕事モードにしてきたのだが、どうやら違うらしいというのはまあだいたい土蔵に連れてこられた時点で感づいてはいたが。

「あー！アンタ!!」

その中でも一際大きな声でエミーリオを呼ぶのは。

「・・・ポーラ」

華奢な体に整った顔立ち。エミーリオと同じく真っ白い髪の毛の女子。

ポーラ・マツコイがそこにいた。

怒った顔で。

「ん？なんだ？二人は知り合いだったのか」

「知り合いじゃない」わ!!」

息びったりで否定する二人。

「わー、やっぱり仲良いんだ」

「どこが!!」

再度、春の言葉も同時に否定。

「ちよつと、真似しないでくれる？ちよつと一回私に勝ったからって調子に乗らないでよねー!」

「おいおい。自意識過剰なんじゃねーの？誰もお前のマネなんかしてねえし。つーか勝ったって何の話だ？なんか俺たち勝負したっけ？」

ガルルルと飢えた野獣のように唸るポーラを煽るエミーリオという図式が成立していた。

「やっぱり仲良いじゃない!」

「春。もうその辺にしたほうがいいと思うよ」

呆れた様子の子の風が春に忠告したところで、一条楽が口を開く。

「えーつと、皆集まってくれてサンキュな。これから土蔵の整理をや

るから。悪いけどよろしく」

そんな一条楽の言葉を聞いて、エミーリオは素っ頓狂な声を上げる。

「はあ？土蔵の整理？」

「ああ。あれ？言ってなかったっけ？」

言ってなかったよ。と、明らかに下がっているテンションで告げる。

「ああー、なんか親父が急にな。この土蔵広いし一人じゃ無理そうだったから」

バツが悪そうに言い訳する一条楽に、不満をこぼす。

「組員にやらせりやいいじゃんか」

「いやーあいつらに任せると・・・」

目を逸らす一条楽の目線の先には桐崎千棘。

「？」

「いや、なんでもない！とにかく、頼むよ」

申し訳なさそうに懇願するので、ため息をつきながらエミーリオは折れた。

「いやー、悪りな！サンキュ！あ、そうだ！お礼ってんじやないけどさ、どうせここにあるの要らないもんばっかだし、なんか気に入ったのあつたら持って帰っていいから」

「あ、そう」

興味がない。そんな態度と足取りで彼はわーきやー騒いでる連中のもとに。

土蔵に入ると、多少埃っぽいものの中々綺麗で整理するほど散らかっているわけでもなかった。

「春？」

「そういえばさー。なんかさつきから桐崎先輩と一条先輩変だよね」

春と風は外で空箱を片付ける役目だった。

そんな春が土蔵の中を見ながら訝しむ。

確かに彼女の言う通り、二人はどこか変だった。恥ずかしがっているようなギクシヤク感。

「ここでなんかあったんじゃないの?」

どさりと、中から空箱を運んできたエミーリオが会話に参加する。

「なんかって・・・なに?」

「そりやお前、彼氏と彼女が一つ屋根の下、つつうか土蔵の密室の中することといたら一つだろ」

「??」

春はエミーリオの言っている意味がイマイチわからないのか頭の上になんかマークを浮かべている。

「だから「セクハラ」」

言葉を遮るように風の顎を狙った見事な上段蹴り。

それをかわし、んべーつと舌を出したエミーリオはそのまま土蔵の中に。

「まったく。珍しく自分から喋ったと思ったらロクなこと言わないんだから」

「??結局何?」

「いいんだよ。春はわからなくて」

「まったく、ロクなもんねえな」

先ほどからエミーリオはめぼしいものはないかと土蔵を探っているが、出てくるのは古びた時計やら鉄くずやらガラクタばかり。

「おっ」

そんな中で見つけたのは、武器の貯蔵だった。

「こんな中にあるものはもらっていいってことは、これももらっていいってことだよな」

武器はビーハイブから支給されてはいるが、任務の時にしか使えない。一応自分が自由に使える武器というのもあつて損はないだろう。「つっても、どれもこれも使えねえな」

所々錆びていたり、手入れが必要だったり、パーツが欠けていたり。ひと手間かけようと思うほどの執着は今の彼にはなかった。

その中で、唯一使えるものが。

「日本刀……？本物か？」

すらりと伸びる刀身。見た感じまだ新しい。つい最近まで使われていたようで刃こぼれもない。

（まあ、いつも使ってたやつは没収されたからな。しばらくはこいつを使うか）

幼少の頃から持っていた日本刀は日本に来るとき、リングと匣と共に没収された。

気に入ったのか、そのままエミーリオは持ち帰ることに決めた。

「はー、終わったー」

「大丈夫ですかお嬢？終始何かを気にされていましたが」

「へっ!?／＼／平気よ！」

「わりいな小野寺。手伝わせちまって」

「ううん。楽しかったし、良かったよ」

「一条先輩！お姉ちゃんから離れてください！この色欲魔！」

「春。そういう言葉は知ってるんだね」

「そういうえば、橘がないようだが？」

「あー、あいつは途中具合悪くなって本田さんに迎えに来てもらった」

ワイワイと談笑する中。エミーリオは一人、木陰に佇んでいた。まだ五月だというのに少し運動すると汗が滲む。

「よっ。お疲れ」

涼んでいると、人の塊から一人こちらにやってきた。

「……一条楽」

「楽でいいぜ?」

「何の用?もう仕事は終わったはずだろ?」

「ん、お前さ。指輪とか興味ある?」

「指輪?」

突然何をいいたすのかと怪しげな視線。

「これさ、さつき土蔵で見つけたんだよ」

そう言って差し出された掌に乗っかっているのは禍々しい形をした指輪。

「なんか変なデザインだけどさ、好きなら持って行ってくれよ」

太陽に照らされて、眩しく光る笑顔に押されてそれを受け取る。

「じゃ、今日はありがとな」

手を振っていく一条楽を見送りながら、掌の指輪を空にかざし眺める。

その指輪は紫色の水晶のような石がはめ込まれており、その石の中には霧のようなもやが渦巻いている。

「……チェーンがついてんのか」

その指輪を全体的に覆っているのは鎖のようなチェーン。

ぼーっとした頭で、なんとなくそれを指に嵌めた。

「——反応しないな」

もしやと思い、指に嵌めてみたのだが、これは炎を宿すリングではないらしい。

リングはその性質上、常に微弱な炎を発している。その炎を感知されれば敵に見つかる恐れがあるため、エミリーオのような暗殺者は特殊なチェーンを装備してその炎を隠すのだ。

だが、隠すといっても完全ではない。指に嵌めれば多少なりともそれがリングかどうかはわかる。まあ、リングに嵌めるというシチュ

エーションがもう既にありえないので、やはりこのチェーンは完璧といえよう。

だから、彼もこれがリングかただの指輪か見分けるためその指に嵌めたのだが、反応も感じ入るものもなかったためただの指輪と判断した。

「はあ、疲れた」

とりあえず用は終わったみたいだし、帰ろうと砂を払いながら立ち上がる。

ちらと騒々しい方を見れば、また何か一条楽がやらかしたらしい。春が顔を真っ赤にしながら怒っているのが遠目でもわかる。

「……あんな顔、するんだな」

ぼそりと独り言。彼が見ていた春というのは、お節介で、バカで、いつも笑顔なそんな女の子だった。

だが今見ている春は、今まで見ていた春とは違う。まるつきり。

「なに？嫉妬？見苦しいんだけど」

「……お前さ、僕をイラつかせることにおいては天才だよね」

いつの間にか近づいてきていたのは風。腕を組んで、相変わらずじとつとした視線を彼に送っている。

「お前こそいいのかよ。愛しの春が襲われてるぞ」

「ばっ！愛しのとか、そんなんじゃないわよ！」

「そうなの？てつきり百合キャラかと思ってたわ」

「——アンタこそ、私をイラつかせる天才ね」

「わーいやったー褒められたー」

まるで感情の乗っていない声でさらに風をイラつかせるエミーリオ。そんなエミーリオに文句を言おうと閉じた口を再度開こうとする

風。

「アンタね——」

だがその言葉は最後まで紡げなかった。

なぜなら。

「なにこれ！爆発?！」

そう、一条邸の玄関辺りで目に見えるほどの爆発が起きたからだ。
燃え盛る炎。上がる煙。一瞬で、日常から非日常に。

「……まさか」

エミリーリオには情報も確信もなにもなかったが、それでも気づいた。勘というやつだったかもしれない。

「まさか!!」

「なによ!」

一人狼狽している彼に、焦燥感に駆られる。

「うゝおおおい!」一条楽はどこだああああ!?!」

そして、災厄がやってくる。

T o b e c o n t i n u e d .

標的16 O s t i l i t ・ (敵対)

突然の爆発音、普通に生きてればまず間違いなく訪れることのないだろうレベルでの爆音。

その衝撃は一条邸にいた全員が疑いようもなく危機感を抱くには十分だった。

「な、なんだよ。これ・・・」

一条楽の目には、轟々と燃え盛る自分の家。今まで暮らしてきた思い出が脳裏にフラッシュバックしていく中で、彼は何もできずにただそこに立ちすくんでしまうしかない。

なぜなら。

「うゝおおおい！一条楽はどこだああああ?！」

燃え盛る炎を背景に、ひび割れる声。その声はただはつきりと、一条楽の名前を呼ぶ。

「・・・人?」

燃え盛る炎に黒い人影。建物の屋根の上に佇むその人影は、ただまっすぐとこちらを見ていた。

「見つけたぜえ。おいルツス、あいつで間違いはないな」

「ええ。写真とぼっちし。それにしてもよく撮れてるわねー。この写真」

「うゝおい！今は、そんなことどうだっていいだろうが!」

この極地的な空間で、普通に喋っているあの人たちはなんだ?

当然の疑問が一条楽の頭を占拠する。逃げることも、目の前の脅威の判定もできずに。

「す、スクアアロー・・・」

そして、もう一人の男。

真っ白な肌と、真っ白な髪その男は突然現れたその男たちに驚愕を隠せない。

なぜ?どうして?」

そういつた疑問が頭を渦巻いて離れない。

そんな硬直状態の二人に、さらに畳みかけるように状況は変化する。

「そんな・・・うそ・・・!」

「お嬢? どうかなされたのですか?」

その声に一条楽は振り返る。見ると、桐崎千棘が脱力したように顔からすっぽり表情が抜け落ちている。

だらりとだらしなく下げられたその右手には、携帯電話が。

「ビーハイブが・・・うちが、何者かに襲撃されてるって・・・」

「お、おい! それ本当か!!」

さつきまで動けなかった一条楽が、その情報を聞いて桐崎千棘に詰め寄る。

「・・・い、行かなきゃ! 千棘ちゃん」

小野寺小咲の声は、不安と恐怖に震えている。

それでも、友達の家が襲われていると聞いて行かなきゃと鼓舞できるのは相当な強さだろう。

その声に桐崎千棘の顔にはいくらか生気が宿る。

「でも・・・」

が、それを強烈なプレッシャーで追い払うのは建物の瓦の上に立っているだけのスクアードだ。

「・・・行けよ」

「エミリー?」

ぐっと奥歯を噛みしめて押し殺したようにエミリーリオはそう言った。

「何がどうなってんのか、全然わかんねえが。これだけは言える。行け」

つい先ほど手にした日本刀を、すらりと鞘から抜く。

その刀は、カタカタと音が鳴るほど震えているにも関わらず。

「・・・」

その様子に春と風が目を見開く。この中では一番エミリーリオと関わった時間が多い彼女たちだが、彼のそんな姿見たことも感じたこともなかった。

なにかに恐怖することなど、この人にあるのかと。

それほどまでに、目の前の銀髪の男は人並み外れているのだと。

「……うん。ごめん、みんな」

桐崎千棘、それに鶯が勢いよく走りだす。

「あら？ いいの？」

「うるせえ、放っておけ。どうせあつちは」アイツらだ。万が一なんてねえ」

スクアア口は先ほどから微動だにしていない。ずっと睨み付けているのは、ただ一人。

真っ白な少年、ただ一人だった。

「……え、エミ君」

「いいかお前ら」

桐崎千棘と鶯の背中が消えた頃。春の言葉を遮って、エミリーリオは残っている連中に告げる。

「各自、逃げることを考えろ。この状況下で生き残れたら御の字だつてな」

たらりと、落ちる冷や汗をぬぐうことすら許されない空気でエミリーリオの言葉は重かった。

およそ十年ぶりにあつたスクアア口は、相変わらずの長髪と鋭い目つきで殺気もまったく衰えていない。どころか十年前よりも厳しく感じる。

カタカタと体の震えが止まってくれない。体の奥底までに染み付いた恐怖。

敗北の恐怖。見限られる恐怖。失望される恐怖。殺気すら霞むほどの言葉の恐怖。

それらがエミリーリオを一度に襲い、蝕む。逃げたい。

正直に言えば全身全霊で今すぐこの場所から逃げ出したかった。いつもの余裕など、楽しむなどとふざけたことなどぬかせない。

こんなもの任務でも何でもないし、何より本当にスクアーロが何をしに来たのかがわからない。もしかしたら案外フレンドリーに接してくれるのかも。

(なんていうのは、夢のまた夢だよな)

それがありえないと、なにより物語っている。彼が放つのが紛れもなく殺気だという時点で。

「ねえ、もしかしてあれって」

「ああそうだよ。『ヴァリアー』だ」

ポーラの問いかけに、エミリーリオは親切に答えた。

ポーラ以外の全員はなんのことだと意味が分かっていないが、ポーラは裏社会に身をやつしているだけはあるだけであってその名前に「そう」と半ば諦めたような表情を見せる。

ヴァリアーが出向いてきたということとは、目的はどうあれ自分たちはただではすまないのだろうと。

「なあ、そのヴァリアーっての、なんなんだ」

一条樂が問う。

「お前、一応ヤクザの息子だろ。知つとけよ、常識だぞ」

「うゝ おおい！おしゃべりはそろそろお終いだあ！」

心の底から震える声。何もかもがエミリーリオから殺る気を削いでいく。

「なあアンター！一体何しにこんな所まで出張ってきたんだよ！」

必死に自身を奮い立たせようと、彼はわざと声を張り上げた。

(土蔵に入って鍵を閉める。気休めだろうが何もしいよりましだ)

隣にいた風に聞こえるように小声で喋る。もし戦闘になればまず間違いなく殺されるだろうし、なにより足手まといだった。

「春、行くよ」

「風ちゃん？でも……」

春が気にかけていたのはエミーリオだったが、当の本人は後ろのこなど気にかけている余裕はない。

そんなことをしてる間に、スクアアローはしゅたりと屋根の上から飛び降り、こちらに歩み寄って来る。

「一条楽というのは、テメエか？」

「一条君!!」

「先輩!!」

すらりと長い剣の切っ先を鋭く向けるスクアアローに、一条楽は「そうだ」と気丈にも答える。腐ってもヤクザの息子、そこいらの子供よりはこうした修羅に慣れている。

「ちっ！おいスクアアロー！俺の質問に答え——」

「きやあー！」

小野寺姉妹の悲痛な悲鳴が場に響く。

なぜなら、エミーリオの言葉の途中で、一条楽に向いていた剣がエミーリオの腕を掠めたからである。

ぱつくりと、来ていたシャツが裂け肌が露出する。

「今は、テメエに用はねえ。こつち」が終わったら殺してやるから黙ってる」

ぎろりと、サメのような鋭さを見せる視線がエミーリオを射る。

それだけ、たったそれだけでエミーリオは全身が硬直したように動けなくなった。

小さい頃の、敗北の記憶。噛みしめた雪の味。力を込めた握りこぶしの硬さ。

ずっとずっと、忘れたことなんてなかった。頭の片隅には常にそれがあった。

(にも関わらず、ビビっている。俺は今まで、何やってたんだ)

それらの恐怖を払しよくするために、自分は弱くないとそう思うた

めに今まで任務に時間を費やして、鍛錬に集中してきたのに。

なのに、今現実には目の前に現れると自分は簡単に動けなくなる。

なんて無様。なんて滑稽。

やがて、エミーリオはだらりとだらしなく天を仰いだ。

エミーリオから戦う意思がなくなった。

そうスクアアロは感じていた。

一度向けた視線を、再度目の前の一条楽に戻す。もう二度と、後ろを振り返ることはない。そう直感しながら。

だが。

ゾクリ。

と。

スクアアロは襲われた。

「っ!!」

瞬間的に振り返る。

無論、実際に襲われたわけではない。

襲われたのは後ろで放たれている殺気に、だ。

「あー、腕痛え。なんかもうどうでもいいわ。全部どうでもいい。誰かを守りながら戦うとか、やっぱ柄じゃねえや」

「……ほう。どうやらただ十年間ぼけっと過ごしてきたわけではないようだな」

そう呟くと、スクアアロはくるりと後ろ、つまり一条楽と向かい合った。

「がはっ!!」

「一条君!!」

小野寺小咲の悲痛な叫びも虚しく、スクアアロの蹴りは、見事に鳩尾に決まり一条楽は意識を手放した。

そして、意識のなくなった一条楽を片手で小野寺小咲達のいるもとへと放り投げる。

「うゝおい！てめえら！そいつを死なねえ場所に放り込んで！そいつにはまだ聞かなきゃいかねえことがある！」

「か、勝手なこと言わないでよ！」

「ちよ、春！」

そのスクアアロの横暴に異議を申し立てるのは怒り心頭といった表情の春だ。

「勝手に来て、こんなに家をめちやくちやにして一体全体どういうつもり！」

あのスクアアロ相手にずんずんと距離を詰める春。物怖じという言葉を知らないのか。

目と鼻の先、スクアアロの顔の目の前には春がいる。そんな距離で。

「お、おい！ルツスー！このガキどうにかしろ！！」

スクアアロは心なしか慌てた様子で、仲間に助けを求めた。

「はいはい、まったく、女は嫌いなのに」

後ろからゆったりとした歩調でこちらへとやってくるのは、変なモヒカンとグラサン、締まった体をしたオカマだった。

「なに!?あなたもこの人の友達!？」

後ろにいる風や小野寺小咲は感じ取る。明らかに、この人もヤバイと。

だが頭に血が上っている春はそのことに気づけない。

が故に。

「春!!」

近づいてきたルツスーリアの膝蹴りをまともに食らってしまふ。

「私、あなたみたいな可愛いお顔をした女の子嫌いな。あと五月蠅いガキも。あら？あなた両方当てはまるわね」

「この・・・!!」

親友の春を文字通り足蹴にされ、風は怒りで足を踏みだす。

が、それを一人の女の子に制され風の足はそこで止まった。

「ム力つくし、殺しちやつていいわよね？あの男の子を生かしておけばいいんだし」

そう言つて、ルツスーリアは春の首を絞めにかかる。絞め殺す気なのだろう。

「・・・ぐ、うぐ」

微かに残る意識で、春はうめき声をあげながらもただしつかりと敵意のこもった視線でルツスーリアを睨んでいた。

「・・・・・・・・カッチーン」

その視線はルツスーリアを怒らせるには十分だったようで。

「いいわ、そんなに死にたいなら殺してあげる!!」

さらに春を高く持ち上げ、いよいよ息の根を止める気だ。

ここで、話は逸れるが人間、集中力と注意力はイコールでは結べない。

普通集中するということとは一本に絞るということで、注意力というのは逆にそれを散漫とさせることだ。

だから、集中するのと周りを注意するのは全く別の行為なのだ。

それを踏まえた上で話を戻そう。

今、ルツスーリアは完全に集中していた。仮にも人一人を殺そうというのだ、集中するのも当たり前だろう。

加えてことヴァリアーのメンバーである。殺すのに長けている、つまり殺すのに慣れているルツスーリアは至極当然にいつものように集中した。

その結果。

ルツスーリアは周囲への注意力が消えた。

「っ!!」

飛んできた銃弾を横に躲す。その瞬間手に持っていた荷物、春を手放さざるをえなかった。

銃弾を放った主は勿論その隙を見逃さない。というよりかはその隙を作り出すための銃弾だったようだ。

「・・・チツ。あなたやるわね」

「お褒めに預かりどーも」

春を奪還したのは、できたのは。この中では一人しかいない。

「ポーラちゃん。あり、がとう」

白い肌に白い髪、ホワイトフアングと呼ばれるポーラ・マツコイただ一人。

「完全に意表を付いたつもりだったのに、当たるところか掠りもしないなんて、流石はヴァリアーといったところかしら？」

「・・・なあに？アナタ」

ルツスーリアは対峙する。二丁の拳銃を構える女の子と。

「ホワイトフアング、って言えばわかるかしら？」

たらりと落ちる冷や汗を無視して、ポーラは無理に笑った。

「まったく、なんでこう女が多いのかしら？虫唾が走っちゃう」

そんな彼女をもともせず舌なめずりと共に緊張感が増す。

ポーラもその例外ではなく、拳銃を握る両手は汗でふやけていた。

「風・・・と言ったつけ？この娘をお願い。それと、早く安全な場所に逃げて。このままじゃ殺される」

ポーラはルツスーリアから視線を外さぬままそう告げた。一瞬でも気を抜けば全滅すると、肌で感じていたから。

「・・・わかったわ。行きましようお姉さん」

風はこくりと頷くと小野寺小咲と共に春と一条楽を抱えて走り出す。安全な場所、エミリーリオに言われた通り土蔵くらいしか思い当たらなかった。

「……よし、行ったわね」

ポーラは一つ胸をなでおろす。一先ず一番のネックを解決できたのは大きい。

「あらあら、何を安心しているの？」

タンツタンツ、とボクサーのように拳を構えたルツスーリアは軽快にタツプを踏む。

「匣兵器が主兵器になってからは後方支援ばかりになってたし、こんな風に前線に出るのは久しぶりだわ」

今から殺し合いをするというのに、ルツスーリアのその表情は本当に楽しいと言いたげで。

その異質さに、異様さに、ポーラは思わず生唾を飲み込んだ。

(私だって……私だって!!)

怖気ついでしまいそうになる自分を、必死に鼓舞し、ギリツと拳銃を握る手に力がこもる。ポーラにも自負というものがある。プライドというものがある。

この日本に来るまでポーラは自分が一番だと思っていた。鵜に負け、力を磨き、裏社会の地位と名声を得て。

それが、日本に来てから揺らぐばかりだ。鵜に諭され、わけのわからない力でチンピラに負け。

だからこそ、もう二度と、負けるわけにはいかないのだ。自分のためにも、後ろにいる力なき者たちのためにも。

例え、相手がどれほどの格上であろうと。

「さて、じゃあ始めましょう。文字通り、命がけで!!」

心を決めて、彼女はその手に握る。

自身と共に駆けてきた、その二丁拳銃を。

一方。そう離れていない裏山で。

「っ!!」

「はああああ!!」

スクアアロとエミーリオは、互角の勝負を繰り広げていた。

エミーリオが斬撃を息つく暇もなく繰り出し、スクアアロは防戦一方になる。

(行ける!押し切れる!)

エミーリオは実感していた。

もうあの頃の自分ではない。技も、力も、心も、あの頃より成長している。

「・・・もうお終いか?」

が、スクアアロはそんなエミーリオの喜びを吐き捨てるように剣を振るう。

「うぐっ!」

たった一太刀。それだけで、攻守は逆転する。

続く斬撃は、自分のものとは桁違いに段違いで。

嫌というほど、思い知らされる。自らとの力量の差というやつを。

「くそが!!」

やがて、エミーリオの剣は単調になり攻撃は攻撃の意味を成さない。

「キレたおかげで、集中できたまでは良かったがな。怒りつてのは、長くは続かねえ」

「アンタが、それを言うのかよ」

罅が明かないとエミーリオは判断して、一旦距離をとる。

「だからこそ、よく分かるんだよ」

長い髪をかき分けて、鋭い視線は依然として鋭いまま。冷静に戦況を分析している。

「・・・お前、今まで何をやっていた?」

突然、スクアアロは語りかける。不審に思いながらも、彼は答えた。

「人殺し」

と。

淀みなく、詰まることなく、考えることなく。

その返答に、その瞳に、スクアアローはくっくっくと笑う。

「そうだ。それを分かっているのなら良い」

さあ！とひとときわ声をあげ、スクアアローは剣の切っ先を目の前の彼に向けた。

「今からするのはその人殺しだあ。さて、どちらが生き残るかな!？」

ギユンと、一歩で距離を詰めるスクアアロー。

「・・・くっ!!」

相對するのは、一人の、殺し屋。

T o b e c o n t i

n u e d .

標的17 Sanguine fresco (鮮血)

エミリーリオ達が交戦している最中。

自身の家が何者かに襲撃されていると連絡を受けた桐崎千棘と鶴誠士郎は、急ぎ、ビーハイブの根城。つまりは自分たちの帰る家へと向かっていった。

あの時、電話越しに聞こえてきたのはこれまで、自分たちが生きてきた中で、聞いたことがないほど切羽詰まった声。

生き死にをかけた、男たちの声だった。

ビーハイブはギャングである。決して、人に褒められた集団であるはずがない。きつと、何処かの誰かから恨みを買ったとか、きつとそういうことなんだと、桐崎千棘は思った。

「.....お嬢」

でも、だからといって襲撃されたって良いだなんて、皆が襲われても良いだなんてそんなでできた人間のようなことは桐崎千棘には言えない。

「わかってるわよ。鶴の言いたいことは」

きつと、桐崎千棘の知らない所で沢山笑いあっていた仲間たちは、違う顔でひどいことをしてきたのかもしれない。沢山の人を泣かしてきたのかもしれない。

「でも、それでも。私はやっぱり皆が好きなの。いっぱい笑って、心配かけたり、かけられたり。そうした皆を、失いたくなんかない」

先ほどまで顔面蒼白でまるで生氣など感じなかったその顔は、今はしっかりと前を向いて走っている。

「行った所で、私にできることなんて何もなし、足手まといになるだけかもしれないけど」

それでも、友達が背中を押してくれた。自分のことでも精一杯だったはずなのに、それでも私を気にかけてくれた。

優しい友達。

だから、桐崎千棘は足を止めるわけにはいかない。押された背中を、重力を、止めるわけにはいかない。

「足手まといだなんで、そんなことはありませんよ」

鵜は穏やかな顔でそう告げる。

「お嬢がいてくれるだけで、私たちはそれだけでいい。お嬢の周りにはいつも笑顔が絶えないですから」

ギャングであろうとも、守りたいものはある。

例え汚れた手のひらでも、救いたいと願う心は本物だ。

「だから、すみませんお嬢。やっぱり私には、これしか思いつきませ
ん」

「鵜？」

走る足を止めた鵜に対し、桐崎千棘は思わず振り返る。

「――、」

「――ごほっ！」

鳩尾に、一発。

握った拳は開かれることはなく、ただ、項垂れた体を優しく受け止めた。

「な……んで？」

急なことで、まともにもガードも取れずもろに食らってしまった桐崎千棘は手放しそうになる意識の中で辛うじて問うた。

「お嬢は私たちの宝です。いつも、その周りには笑顔があった。どれほど過酷な戦場でも、どれだけの悲劇を目にしても、帰ってこれたのはお嬢がいてくれたからです。あなたが待っていてくれるなら、私たちはどこにだって行ける」

だから、と鵜は言葉が続ける。

「だから、お嬢には生きていて欲しいんですよ。変わらない笑顔のまま、私の、皆の帰りを待っていて下さい」

眩しいくらいに晴れた笑顔。

桐崎千棘は掠れゆく意識の中で、はつきりとそれだけは見た。

「……さて。ここから一番近いのは学校か」

桐崎千棘をお姫様抱っこで抱え、鵜は再度走る。

まだ見ぬ戦場へ向けて。

「ビーハイブ本拠地」

「何してやがる!! 相手はたった三人だぞ!!」

「無茶言うな!」 ヴァリアー「だぞ!!」

「くそ! こつちはもうやられた!!」

「裏から叩け! ボスのところにはいかせるな!!」

激しい銃撃音と、もうもうと立ち込める煙。硝煙の匂いと赤黒くこびりついている血が、ここが戦場だとうしろも物語っていた。

「・・・外が騒がしいね」

「申し訳ありません。外敵の襲撃を許してしまいました」

そう言っ頭をさげるのはクロード。いつものスーツを脱ぎ、腰には何丁もの拳銃が携えられている。

「・・・行くのかい?」

そんな彼の姿を見て、ビーハイブの首領、アーデルト・桐崎・ウオグナーは目を細めた。

「はい」

頭を上げた彼のその眼鏡の奥の瞳には、確実に、闘志が灯っていたのをウオグナーは見逃さない。

「彼らはヴァリアーです。生半可な気持ちでいけば、確実に皆殺しでしょう」

マガジンを確認しながら、クロードは戦闘態勢を整えている。

「ヴァリアーだと言う確証は?」

「見ればわかりますよ。そんなものは」

今さら何をと言うように、クロードは頭を振る。

「だから、私も殺す覚悟で行く。彼らが何のためにウチを襲撃するのか、同盟はどうなったかなど今は知る由もない」

そして、闘志はやがて明確な殺意に代わり確かな冷たさを生む。

「……ウチのバカが、どうやらお嬢に連絡をしてしまったようです。お嬢のことだ、血相を変えてここにくるでしょう」

「……」

「その時はあなたが止めてあげて下さい。我らのボスよ」

「ああ。分かっているよ」

爆発音と男たちの悲鳴が段々と恐怖を帯びながら近づいてくる。

「では、行って参ります」

「クロード」

扉に手をかけたところで、ウオグナーはクロードを呼び止める。

「ちゃんと帰ってくるんだよ。ウチのじゃじゃ馬を見守ってくれる物好きは君しかない」

「……約束は、しかねます」

それを最後にクロードは血風吹きすさぶ戦場へと、足を踏み入れた。

「あら？どうしたの鶯さん。桐崎さんを抱えて」

「先生、どうやらお嬢が体調が悪いらしく、暫くここで寝かせておいて

「ただけませんか？」

「ええ、別にいいけれど」

学校の保健室。窓から入ってくる風が新緑を思わせるそんな空間で鶯はゆつくりと桐崎千棘をベットに寝かす。

もうすぐ梅雨がやってくる。

「すみませんお嬢。すぐに戻ります」

小さな、本当に小さな声でそう告げる鶯の視線は窓の外へ。

ほふっ、と一つだけ息を吐いて。

彼女もまた、戦場へと足を踏み入れる。

「……行ったわね。——まったく、こんな所に置

いていくなんて案外不用心なんですなあ。学校なら安全と考えるのは愚直ですよ？マフィアの娘」

保険医の怪しく光るオッドアイには、気づかぬままに。

「はあ……はあ……こ、これは」

鶯が息も絶え絶えにたどり着いたそこは、最早自身が寝泊まりし、同じ釜の飯を共にした場所などではなくなっていた。

炎は燃え盛り、所々壁が崩壊している。一体どんな戦い方をすればこうなるのか。鶯は想像したくもなかった。

「——っ」

奥歯を噛み締める。こんな状態ではもう、仲間が残っていないかもしれない。

しかし、鵜はそんな“妄想”を「いいや」と否定する。

お嬢に誓った。すぐに戻ると。ならば、自分がやるべきことはたった一つだ。

この元凶となった人物を止めること。

俯きがちだった頭は、真っ直ぐと前を見据える。

力なく項垂れた手足は、一步一步確かに前へと進んでいく。

一步、二歩、三歩。と。

やがて間隔は短くなり、足早に駆け、最後には走っていた。

「誰か!!誰かいないか!!」

大声を張り上げて、生存者を探す。

崩れた壁から内部へと侵入して、鵜は息をのんだ。

倒れている人、人、人。

昨日まで、同じように笑っていた人。今日の朝まで挨拶を交わした人。さつきまで確かに、生きていた人たち。

なんでこうなった?さつきまで、本当についてさつきまでいつもの日常だったはずだ。今だって夢だと言われれば信じてしまいそうなくらい、目の前の光景には現実味がなかった。

むせ返るほどの血の匂い。

吐き気がするほどの死の匂いだ。

「(づ)ほ(づ)ほ(づ)ほ!」

「お、おい!大丈夫か!」

手元で息をするものが一名。

鵜は血相を変えて駆け寄る。何か、鋭利なもので全身をズタズタにされていたその男は、鵜を見るやら目の色を変えた。

「つ、鵜か・・・!?お、お嬢は?お嬢、は、今どこに?お、俺が、俺が安易に連絡なんてしちまったばかり、に・・・お嬢が、ここ、に、来るかもしれねえ」

目の前の男は細い息を吐いては吸って、吐いては吸ってを繰り返して短い言葉を連ねる。

「そうか、貴方が連絡をしてくれたのですね。安心してください。お嬢は安全な場所にいます。ここに来ることはありません」

「そ、そうか・・・良かった」

きつとこの男はずつと悔いていたのだろう。自分が死の淵に晒されながら、それでもなお他人のことを、桐崎千棘のことを思いやっていたのだ。

「くそ・・・あいつら、好き勝手に、暴れまわりやがって・・・つぐ」

「喋らないで！傷口が広がります」

「いいんだ。どうせ、ロクな死に方などしないと、分かっていた。ここに、いる連中、全員な」

がしりと、その男は血まみれになった掌で鶴の手を握る。

「い、いいか。敵は、”ヴァリアー”だ」

短く、それでいて的確に情報を伝えた男は、それで満足してしまっただのか、深い眠りに落ちた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぎゅつと、握った拳に力が入る。

今までに死を見たことがないわけじゃない。仲間の死が初めてというわけでもない。

だが、いつまでたっても

どれほど任務を成功させても

これだけは

慣れなかった。

そしてきつと、慣れてはいけないのだ。

慣れてしまっただけはいけないのだ、

「センパイ。ミーにも下さいよー、そのアイス」

「駄目。これゼーんぶ王子の♪」

何事もないかのように普通に歩いていた。

その二人は、ここが戦場だということを忘れているかのようで、まるで通いなれた通学路を歩く子供のように。

ただ、普通に歩いてきた。

死など、慣れていると言いたげに。

「ぼ、ボンゴレえええ!!」

その姿を視認した瞬間。鵜は自身が持っている二丁の拳銃を構えた。

頭に血が上り敵か味方か、冷静に判別する暇もなかった。

ただ、皮肉にもその異常さには冷静に野生の勘が警告している。

こいつらは、ヤバイと。

く一条邸く

「あらあらくく?もうおしまい?小娘ちゃん」

「……くくっ!」

はあはあと、ポーラ・マツコイの呼吸はひどく荒い。

それもそうだろう。彼女の額は割れ、流血しており、しわ一つなかった制服は所々破け血や土で汚れている。

両手にぶら下がる二丁の拳銃は、この戦闘の間まるでその役割を果たしておらず、お飾りと化していた。

(……引き金すら、引けないなんて!)

乱れる呼吸の中で、必死に思考だけは回転させる。

目の前の男は、ファイティングポーズを崩さぬままに拳を次から次へと繰り出してくる。

ポーラはその一打一打を避けるのに精いっぱい、攻撃まで頭が回

らない。

だというのに、攻撃は休まるところを知らず、どころか精度が増していく。

この拳よりも、次の拳がより重い。さらに次の拳よりも、そのまた次が。

なんて言ってる、今度は足技が飛んでくる。

いなすだけでも、ポーラの体力は底をつき始めていた。

「・・・がつー！」

そうして弱ったところを、渾身の一打で仕留められるのだ。

まるで肉食動物の狩りに怯える草食動物のように。

(より質が悪いのが、その肉食動物が全然本気じゃないってことね)

流れる血を乱暴に拭いながら、ポーラはきつと同時に絶望をも拭おうとしていた。

勝てないと、そう本能が告げているように。

「さーて、そろそろお遊びも飽きてきたし。殺しちゃおうかしらね」

サングラスの奥が怪しく光り、舌なめずりをする様はまるで異様。

「・・・ねえ、最後に教えてくれない？なんで、あなたたちはここを襲うの？」

諦めたように、観念した声でポーラは聞いた。

最早勝ち目はない。相対した時間はきつと十分にも満たないだろうが、それだけで嫌というほど実力差は思い知らされた。

(ホワイトファンク?・・・本当、バカにしてるわ)

自身がどれほど井の中の蛙だったか、前まであれだけ執着していたはずのブラックタイガーですら、目の前の相手には数段劣るとわかる。

天を仰いで、腕はだらしなく地面を向いていた。

「うふ。そうね、メイドの土産に教えてもいいわ。あなた、中々筋はいみちだしね」

ルツスーリアは完全に戦意を喪失したと見るや、ポーラの問いかけ

に答える。

ただし、戦闘態勢だけは崩さないところを見ると、どうやら油断を誘うなんて言うバカげたことは考えないほうがよさそうだ。

「あなた、リングと匣って知ってる？」

「……」(フルフル)

ポーラは力なく首を横に振る。何年も裏社会にいて、本当に聞いたことがなかった。

ただし、心当たりはある。

二か月ほど前、まだ入学したてだった頃に受けた一つの任務。

チンピラを調査するという意味不明な任務で、その片鱗らしきものは味わった。

元々、自分をボンゴレへと追いやったエミールオ、コードネーム「ビアンコ」が来るというので受けた任務だったがそれが予想以上に理解不能で、人知を超えた任務だった。

「最近開発された……まあ、兵器ね。あなたがもっている拳銃とかそんな感じだと思ってもらえれば結構よ」

確かに、あの時みたあれは紛れもなく兵器だろう。

「人間には波動が流れていてね、七種類に分けられるの。晴れ、雨、嵐、雲、霧、雷、そして最後に大空。しめて大空の七属性」

話しているうちに、気分がよくなったのか段々と饒舌になってくるルツスーリア。

「順番に効果は活性、沈静、分解、増殖、構築、硬化、調和。あ、ちなみに私は晴れ属性ね」

「聞いてないわよそんなの」

口にした瞬間、ルツスーリアの蹴りが鳩尾を蹴り抜かれる。

「……がはっほっほっ！」

「いいから黙って聞いてなさいな」

んんっと、仕切り直すようにルツスーリアは言葉を続ける。

「その七つの属性と呼応するように匣兵器は存在するの。基本、自身に流れている波動は一つ。そしてその波動とリング、匣の属性が一致していないと使えないわ」

これで大体わかったかしら？

ルツスーリアは問いかける。うつ伏したポーラに。

「まあ、そうね、仕組みはわかったわ。だけど、それとあなたたちの目的の何の関係があるのよ」

「ああーそうだった、それをまだ話してなかったわあ」

「………」

クネクネと体をよじらせ、ふざけているのかと怒りたくなるがポーラはぐつとこらえる。

「そのリングを、私たちは奪いに来たの」

「リングを……？」

「ええ。そうよ」

ルツスーリアはそう言うのと一段と緊張感を増しながら。

「霧のリング。残された最後のヘルリングをね」

(ヘル、リング?)

依然として、情報は分からないままだが、とにかく。

そのヘルリングというのが目的だということは分かった。

「で？そのヘルリングってなによ？」

「……ふふ、まあ教えてあげてもいいけど。ここまで。調子に乗らないことね。私もベラベラ喋りすぎちゃったわ」

ポーラは内心で舌打ちする。存外早くシャットダウンされてしまった。

だが、ホワイトファングの異名は伊達ではない。

いくら自分の中でそれが意味をなさなくなっても。

勿論、多くの情報を知れるに越したことはないが戦闘を放棄した真の目的はそこではないのだから。

「ああ、言っておくけど。見逃すとか、私そういうことしないタイプなの。狙った獲物はきっちり仕留めないと気持ち悪いじゃない？」

「………そう」

ヨロヨロと、最後の力を振り絞ってポーラはなんとか立ち上がる。

「あら、立つのね。座ってればなぶり殺しにしてあげたのに」

「はっ。ごめんごうむるわよ」

二丁の拳銃を構えた腕に力がこもる。チャンスは一度きり、外せば二度はないことはこの体が証明している。

のどが渇く、口の中がひりつく。体中の水分は抜け、ただ一点のみ彼女は集中していた。

そしてそれはルツスーリアも同じこと、油断せずただ目の前の少女を殺すことだけに全神経を注いでその一挙手一投足も見逃さない。ダンツ!

その音が響いた時には既にルツスーリアの拳はポーラのと数センチまで迫っていた。

一秒後に、決着が決まる。ルツスーリア自身そう感じていたし、なによりポーラがそれを一番肌で感じていた。

そして、ポーラは。

拳銃を捨てた。

「っー!」

一瞬、ほんの一瞬だ。

何もかもを見逃すまいと全神経を注いで注意していたがあげくに、その一瞬を作らされた。

「はああああっあっあっあ!!」

その一瞬でポーラはルツスーリアの懐に潜り込み、上体を抱え込みながら地面へと叩き付ける。

そう、背負い投げだ。

「……がはっ!」

咄嗟のことでもろくに受け身も取れず、加えて自身の勢いそのままに

地面へと叩き付けられたルツスーリアは肺の中の空気をすべて押し出すはめになった。

「こ、の・・・クソチビがあー!」

「今日このときだけは、チビで良かったわ。おかげで体格差を生かせたもの」

が、勿論これだけで勝ったつもりになったわけではない。

「ぐ、おおおお!!」

速攻で、背負い投げからのすかさず腕ひしぎ。

右腕と首元を完全に極めるこの技、決まれば最後抜け出すことは容易ではない。

「こん、のおーガキがあ!!」

が、しかしやはりそれでもまだヴァリアーには届かない。

「ぎゃあああああつー!」

極めていた左足の膝小僧を、思いつきり拳で貫かれ思わずポーラは絶叫する。

その隙に、ルツスーリアは技から抜け出し距離をとった。

「はあはあ・・・ふふ、ちよびつとだけ焦ったわ。いけないいけない。これだから前線から遠ざかると嫌なのよね」

ひよこひよここと、ポーラは右足を引きずりながらもなんとか立つ。確実に皿が割れているはずだが、即座に立てるのは流石としか言いようがないだろう。

だが、それもここまでだ。

(ダメだった。渾身の奇襲も弾かれた・・・!)

そう、最後のチャンスもポーラは決めきれなかった。加えて右足はもはや使い物にならない。

万事休す。

万に一つも、勝ち目がない。

「あなた、本当に殺してやるだけじゃすまないわ」

息は荒く、額には青い血管がビキビキと。

「まず顔面の皮をはいでから、それから死なない程度に肉を削いで全身を茹でながら熱い鉄を口から流し込んで殺すわ」

早口で唾を飛ばしながら、即興で考えられる限りの残虐さをぶつけるルツスーリア。

(終わったわね、確実に)

そんなルツスーリアを見ながら、ポーラは痛みで顔がぐしゃぐしゃになりながらも、頭だけは不思議と冷静でいた。

「なによ、その顔。もつと喜びなさいよお！」

「……………え？」

完全に理性が弾け飛んだルツスーリアの咆哮と、同時。

物凄いスピードで、ルツスーリアとポーラの間を飛んできた物体が、一つ。

その物体は、ちょうど家の外壁にぶつかり瓦礫の山に埋もれた。

「び、ビアンコ!？」

ポーラのいう通り、飛んできた物体の正体はビアンコ。つまりエミーリオだった。

「ちよつと、あんた、大丈夫？」

ひよこひよこ足を抱えながら、瓦礫へと向かいエミーリオを抱き起す。

「ちよつと！スクアアロ！今いいところだったんだから邪魔しないでよ！」

「……………おい、もう終わりか？」

低く唸るように響くその声に、ポーラは身が縮みあがる思いをした。

まるでサメと対峙した子供のようになり、パニックになることすらできず。ただただ、振り向くことしかできない。

「……………はあ……………はあ」

小さな呼吸が物語る、数々の裂傷が与える。その壮絶な戦いの片鱗を。

だが、それほどになっても右手にはいまだに剣が握られていた。

(私は、手放したっていうのに)

そんなエミリーリオの姿に、思わず視界が滲む。

滲むのは体の痛みの所為か、それとも自身のふがいなさからくるものなのか。

「うゝ、おおおい！いつまでも寝てんじやねえぞ立て！お前にまだ、その気があるならなあ！」

スチャリと、剣が構えられる音がする。その切っ先は、ぶれることなくまっすぐと、こちらを向いている。

(どうしよう……！このままじゃ死ぬ。私たちだけじゃない。あの子たちまで)

今は土偶に隠れているはずの小野寺姉妹や風。そして一条楽も、きつと成す術もなく殺されてしまうだろう。

(なんとかしなきゃ、なんとかか！)

瀕死のエミリーリオ。痛みで意識が飛びそうなポーラ。目の前にはほぼ無傷のヴァリアーが二人。

どう考えても、手詰まりだった。

死ぬしかほかに道はなく。死ぬよりほかに方法はない。

この状況の中で死だけが明確で、確実なものだった。

そして、その時。その声の主は訪れる。

「ねえ君たち、僕の並盛で何をしているの？」

並盛中学の風紀委員長兼理事長であり、並盛の秩序そのもの。
誰よりも群れることを嫌い、誰よりも並盛を愛するその男。
名前を。

「……雲雀、恭弥!？」

T o b e c o n t i n u e d .

標的18 Due persone di la
maggior parte paura (最恐の二
人)

「・・・雲雀、恭弥？」

エミリーリオ達との交戦中に、その人物は不意に現れた。

並盛の秩序と恐れられる、最恐の風紀委員長。

「君たち、僕の並盛で何をしているの？」

鋭く光る眼光は、目の前のヴァリアーに。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 私たちはちやーンと沢田綱吉からの
依頼で来てるんだから！」

思わぬ人物の登場に慌てふためくルツスーリアはそうまくし立て
た。

腐っても雲雀恭弥はボンゴレの一員。沢田綱吉の名前を出せば、無
用な争いは避けられる。

そう踏んでのルツスーリアの行動だったが。

「・・・で？ それと、僕の並盛を荒らしたことと、何の関係があるの？」

静かに、だけど確実に雲雀は敵意を向ける。

そう、それは敵意だった。両の手に握られているトンファーがそれ
を明確に物語っている。

「ぐっ・・・！」

そんな雲雀の敵意にルツスーリアは思わずたじろいだ。もう少し
で獲物を仕留めることができたのに。一番楽しみにしていたおかず
を他人にとられた気分だ。

無論、そんな人間は一人残らず殺してきたルツスーリアだ。今回
だって、例外ではない。

基本、ヴァリアーとボンゴレ本部は密接な関係にはない。独立部隊
と銘打っているだけあって、お互いに干渉はほとんどない。

今回は例外的に、ヘルリングという共通の脅威を持ったために共闘

という形をとっているものの実態はそんなものだ。

だから、ここで雲雀恭弥と敵対しても、なんら問題などないのだ。理屈では。

ここはどうしようもなく戦場だ。一つの油断が自分の死期を早め。一つの間違いが、致命的な傷を負う。

それを重々承知しているはずの、確実に歴戦の猛者の部類に入るであろうルツスーリアはごくり、と生唾を飲み込んだ。

自分を上回るほど、目の前の男は戦いに長けている、と。

「ちっ！」

「スクアアロ？」

流石の隊長も、雲雀と戦うのは嫌なのだろうか。大きな舌打ちと共に言葉をぶつけた。

「これは一体どういう了見だあ!?!お前の妨害で、ヘルリングが“敵”の手に落ちたらどうする!?!」

「そんなこと、僕の知るところではないね」

唾を飛ばし、大声を張り上げるスクアアロとは対照的にあくまでも落ち着いている雲雀恭弥。

スクアアロは思う。事実として、目の前の男とはこの数秒後に剣を交えることになるだろう。雲雀恭弥とはそういう男だ。

ならば。

「おい、ルツスは早急にあのガキ共を始末して来い。ヘルリングは確実に破壊しろ」

「ふふ。了解」

スクアアロは素早く、ルツスーリアに耳打ちする。雲雀恭弥と相対して、五体満足でいられると思うほどスクアアロは楽観的ではない。

幸いにして雲雀恭弥は興味がないのか、後から片を付けるつもりなのか、ルツスーリアに対しての動きはなかった。

そして、戦場は急速に加速していく。

まだ見ぬ結末に向けて。

く雲雀恭弥が現れる少し前。ビーハイブ邸く

鶯は拳銃を両手に、目の前の二人組に殺意を向けていた。

どうしようもないほどに仲間がやられた。目の前のたった二人に。

心中は怒りに燃え、頭は殺意で埋め尽くされている。

「しししっ。生き残りみーっけ」

「センパイイ。バトルんならアイスプリーズ」

目の前の二人が本当にヴァリアーかどうかなんて、確かめるまでもなかった。

常人とは決定的に違う。正に生き方そのものが違うのだと殺意で埋め尽くされた頭でも理解できる。

「・・・どうしてこんなことを!!」

怒りと殺意でぐちゃぐちゃになった心でも、それでも問う。なぜ？と。

聞かなければ頭がおかしくなりそうだった。こんなことをする動機が、理由がほしかった。

どんな理由であれ、納得など、到底できないはずなのに。

「あーん？どうしてって、お前それ聞いてどうすんの？」

毛先を遊ばせた金髪にティアアラ。ベルの服装は一切汚れておらず、それが異様さを醸し出していた。

「でもまあ、強いて言うなら？王子の遊び？隊長の方についてつてもつまんなそうだったし」

「うわー、任務を遊びって言っちゃうセンパイ流石です」

ふざけた蛙の着ぐるみに身を包んだもう一人、フランは転がっているビーハイブの人間をちよんちよんと突っついてている。

「だろ？だって、俺王子だもん」

「皮肉を真に受けちゃったよこの人」

ふざけているのかと、鵜は声を荒げそうになった。先ほどから軽口を叩いてばかりで本当にこいつらがこの戦場を作り出したのかと疑いたくなる。

自慢げに話すベルに、悪態をつくフラン。ここが戦場でなければ鵜も仲がいいのだな、などと微笑んでいたことだろう。

だが、現実にはここは戦場で。硝煙と血が立ち込める戦場で。

「貴様は、貴様らだけは……許さない！」

青筋を浮かべて鵜はそう宣言した。宣言することで、自分の中で渦巻いていく感情が確かな力となり、手を、足を、脳をフル回転させる。

「しししっ そうこなくっちゃ」

ベルは自前のナイフに嵐の炎を灯す。

鵜は自身の拳銃を再度握りしめる。

先に動いたのは、鵜のほうだった。

相手はどうやらナイフを武器として使うようだ。こちらは拳銃。常識で考えれば圧倒的に有利。銃弾に勝てる人間などいない。

そう頭ではわかつていた。それが、今まで生きてきた“普通”で今まで生きてきた常識だった。

「なっ……!!」

だが、そんな鵜の人生はいとも簡単に否定される。

引き金を引いて、確実にその銃弾は相手を捉えたはずだった。だてに小さな頃からヒットマンだったわけではない。経験が告げていた。当たると。

「しししっしぎーんねーん」

けれど現実には鵜の経験を嘲笑うかのように目の前に立ち塞がる。

「くっ……!!」

二発、三発と変わらず的確に人体の急所に打ち込むもやはりベルに傷はない。目の前の壁に穴は開かない。

(なんだこれは……! どういうことだ!)

鵜は焦る。それもそうだ。確実に当たったはずの銃弾、だが目の前の敵に傷はない。手品だと言われればそのまま信じてしまいたいようなほど、目の前のそれは現実離れしていた。

「なんだ、もう終わりかよ？」

まるでわざと撃たれていたとでも言いたげに、ベルの笑みは一層凶悪になる。

怖い。瞬時にそう思った。

背筋が凍り、なにも動けない。

ただ、殺意を向けられただけで人はこうも無力になるのかと、その事実には驚いた。

「じゃあこっちの番っ！」

「くそっ！」

我に返ると、ナイフが飛んできた。そうか、そういう使い方をするのかとこんな時でも状況判断だけは忘れない。鶴は自分自身に呆れた。

例え、どれだけ正確に状況を把握したところで圧倒的な実力差が埋まるわけではない。

なんとか倒れこむように回避して、そのまま射線を遮るように建物内に逃げる。

「はあ・・・はあ・・・」

後ろを振り返るとどうやら上手く逃げ込めたらしい。わざと見逃されたような気もするが、とりあえず鶴はほっと一息ついた。

体に傷はない。相対したのもほんの数分だ。

それでも、心はボロボロだった。

一目見てわかる、正に住む世界が違うのだと。

あんな化け物がこの世界にいるなんて知らなかった。噂なんかよりよっぽどひどい。

・・・みんなもこんな気持ちで戦っていたんだろうか。

鶴はふと、共に戦っていた仲間のことを思う。自分よりもその戦場はよっぽどきついものだっただろう。急な奇襲でろくに準備もできずに恐怖と闘いながら仲間たちがやられていく姿を見るのは、どれほどきつかったのだろう。

そう思うと、涙で視界が滲む。

悔しさと、恐怖と、どうしようもできない自分への苛立ちがごちゃ混ぜになってよくわからない。

「みーっけ♪」

壊れた建物の陰から、ベルがひよつこりと顔を出す。

「うぐっ！」

見つかったと同時に、肩にナイフが突き刺さった。

鈍い痛みとともに、同時に？マークが鵜の頭に浮かぶ。

最初に見た時と同様、そのナイフには赤い炎が灯されていた。

最初は火矢のような炎を広げる意味なのかと思っていた。建物が燃えていたのもその仕業かと。

けれど肩に刺さった何本ものナイフは鋭い切れ味はあるものの、炎の熱さを感じない。

「ししっ♪ビーンゴ。おいフラン！アイス残しとけよ」

「あ、すいませーん。もう全部食べちゃいましたー」

「——てめーのほうから殺ってやってもいいんだぜ？」

しめた。チャンスだ。

鵜はベルとフランが再度喧嘩が勃発しそうな雰囲気を感じ、物陰へと逃げ込む。

「ちっ。めんどくせーな」

「それよりセンパイ。なんであのスカンク出さないんですかー？」

「スカンクじゃねえ！嵐ミンクだ!!」

我慢ならなかったのだろう。フランに向けてナイフを数本射出するベル。

そのどれもが綺麗に頭部に刺さるものの、フランの表情に変わりはない。

「王子がこんな所で使うかよ」

結果、イライラが溜まっただけだったが一応フランの疑問には答えるベル。

「あー、マジでムカつくぜコイツ。さくつと殺ってさっさと帰るぞ」

一方、鵜は物陰に隠れながら自らの内に沸いた疑問と戦っていた。

肩に刺さったナイフは、既に抜いた。一瞬、ナイフの炎が膨張したもののやはり変わらず熱さは感じない。

熱さが感じない。と、いうことはこの炎は自分が知っている燃える炎とは違うということだろう。

よくよく観察してみれば、普通の炎とはどことなく色も違う。そういえば、敵の手にも同じ炎が灯っていた。あれは多分、指の指輪から発熱していたはずだ。

いや、熱はもっていないのだから発熱という言い方は正しくないのかもしれないが。

「.....」

鶇はいつの間にか冷静になっていた。

そして、あの炎が何らかの力になっていることは間違いないと鶇は思う。

ならば、一つだけ試そう。

いつの間にか、恐怖は消えていた。

皮肉にも戦場で刻まれた恐怖は、戦場によって払拭していた。

そんな自分に自嘲ぎみに笑みが漏れる。

だが、これでいい。大切なものを守るために、自分は戦うとそう決めたのだから。

戦っていった仲間のために、何よりもお嬢のために。鶇は拳銃を握る。

く一方同じ頃。クロードく

崩壊し始めた建物の中でも、いまだ比較的壊されていない廊下。その廊下の影に、クロードは身を潜めていた。

「ふははははー隠れても無駄だ！お前を仕留めてボスから寵愛を受けるのはこの俺だ!!」

むさくるしい髭のおっさんと、方やスマートにスーツを着こなしていたおっさん。

それだけ見れば、後者の方が上のように感じるが、実際はその逆で。クロードは肩で息を繰り返すくらいには、疲弊していた。

二人の間には誰もおらず、行き交うのは銃弾と言葉のみ。

(・・・ヘルリング、か)

クロードは髭のおっさん。レヴィ・ア・タンから聞き出した情報を頭の中で精査していた。

レヴィはこちらを格下と思っているのか、饒舌によく喋る。

今もなお、上機嫌で笑っているのがその証拠だ。

(ちっ。所構わず暴れおって！)

歯がゆい。クロードは悔しさに奥歯を噛み締める。こうして戦っている間にも、何人もの仲間がやられた。屋敷は崩れ、寝食を共にした面影はもはやない。

だからこそ、何としてでもこの先へだけは行かせてはならない。それはなけなしのプライドだった。

「っ!!」

銃声音が響く。先ほどから何度も心臓を狙っているのだが、当たった試しがない。

クロードの腕が悪いわけではない。銃弾は狙ったところに行っている。

が、すべて弾かれてしまうのだ。

「雷の炎か・・・!」

「ほう、死ぬ気の炎を知っているのか」

レヴィは意外な声で反応する。日本にはまだ、匣兵器もリングの技術もわたってはいないと聞いていたからだ。

「フン。聞いたことがあるだけだ。ヨーロッパでは主兵器だそうだ

な。私も、見るのは初めてだが」

ふざけた兵器だと、クロードは内心で吐き捨てる。

「そうだ。俺の雷エイはそんなじょそこの匣兵器とは違うぞ」

背中に漂っているエイは雷の炎をまとっており、生半可な攻撃は通じない。

レヴィははまだ無傷、対してクロードはスマートに着こなしていたスーツは破れ、所々が黒焦げていた。

「あ！こつちにいたぴよん！」

「はあ、歩き疲れた」

「何言ってるの!?!これからでしょ?」

クロードの瞳に諦めの色が見え始めたそのとき。

その連中はやってきた。

摩訶不思議なお面で顔を隠したその三人。クロードは新手の敵かと警戒する。

「む？何者だ！お前ら！」

だが、敵であるレヴィまでもが困惑しているところを見ると、どうやら敵の味方ではないらしい。

「・・・名乗るわけには、いかない」

「そうぴよん！それが骸様のし——」「っだー！黙りなさいよバカ！」

何かを言おうとした一人が、女性と思しき人物に蹴りを入れられる。

「ふん。何者か、なんて今はどうでもいいでしょ？大事なのは、あなたの敵ってだけよ」

クロードは静かに見守っていた。どのみち、レヴィ一人でも持て余していたところだ。彼らが相打ちしてくれば一番いい。

「ぶ、プリティだ・・・」

当のレヴィは目をハートにして、いささか見るに堪えない顔をしているが。

それもまた、王者の余裕というものだろう。

「・・・君たちは、味方か？」

どうにも調子が狂うクロードが控えめに尋ねる。もし、敵だと言われれば、三対一対一、の構図になる。それは避けたい。そうなれば、一番劣るのはどう見ても自分だからだ。

「・・・まあ、ボンゴレの敵になる気があるのなら、ね」

一番落ち着いた雰囲気を放つ男が答えた。

「ボンゴレの？」

クロードは訝しむ。

が。

「はっ。いかん！俺はボス一筋だ！ボスに褒められる！それこそが俺の生きがい！」

悩んでいる暇はなさそうだ。

レヴィは再度、戦闘態勢に入るようで後ろの炎がより大きくなる。

それを見て、三人は構えた。

とりあえずは敵ではないということは信じてもいいらしい。

(ボンゴレの敵・・・ビーハイブのことを考えるのなら、避けたい事態だ)

が、ボンゴレに不信感があるのは事実。元々よく思っていなかったという土台もある。

「よかろう。今だけはお前たちの手を借りよう」

「なんだぴょん！その偉そうな態度は！」

「犬」

「まあ、いいわ。今のところはね」

含みのある言い方にクロードは気になるが。

「ふん！四対一で勝った気になるなよ！」

当然、敵は待つてはくれない。

そして、同時刻。鵜は自分の中の仮説を確かめるべく、動こうとしていた。

物陰から、ベルを視認する。

「——っ!!」

「しししっ。むーだ」

銃弾は二発。当然のように、ベルは無傷だ。

が、しかし。鵜の頭の中では今までと同じような絶望感はなかった。

(やっぱり!あの銃弾・・・分解”されている!!)

最初におかしいと感じたのは、二回目に引き金を引いた時だ。最初は得も知れぬ違和感しかなかった。が、確かに当たったと感じた感触が嘘には思えずに、その後は注意深く観察してみた。

すると、銃弾が跳ね返っていないということに気が付いたのだ。

些細なことだ。ともすれば、見逃してしまいそうになるくらい些細な事。だが、それは鵜にとって無視できない事実だった。

普通、弾丸を避けるなり防ぐなりすれば弾丸は進路を変え跳弾する。だが、ベルに放った銃弾はすべてそれがなかった。

そして鵜は一つの仮説を立てた。その事象とあの炎は関係があるのではないかと。

先ほどそれは確信に変わった。確かに銃弾はあの炎の壁の前に“分解”されていた。

(そんな敵、どうしろというんだ!)

流石に分解までは予想する由もなかった鵜は驚愕する。弾が炎に触れて分解するなんて聞いたことがない。

いや、きつと弾だけではないのだろう。

「ぐっ、しまった腕が」

先ほど食らったナイフ。あれにも炎は灯されていた。だとすれば、右腕が無事であるはずがない。

ブシュッと血管が破壊され、筋線維が分解されていく感覚に襲われる。

「うぐっあああ」

思わずその場にへたり込んだ。今まで味わったことのない苦痛が彼女を襲う。

「アーイムウィーナー！」

ケタケタと笑うベルはそう宣言する。どうやら遊ばれていたらしい。戦況はとつくに決着がついていたということか。

「いやー、本当にセンパイって意地が悪いですよねー」

「てめーはその減らず口直さねえと地獄に落とすぞ」

「やだなー、褒めてるんですよ」

「聞こえねえんだよ！……っと、放つといっても死ぬだろうが、一応とどめさしとくか。ししっ♪」

あまりに些細なことでベルは忘れるところだった。鵜の命など彼にとつてはそんなものだ。

だから、なんの気もなしに、殺意すら沸かせずにベルはナイフをふるった。

が。

「クフフ。面白いものを見させてもらいましたよ、娘」

そのナイフが、鵜に刺さることはない。

三つ又の槍に、オッドアイ。

を、仮面で隠した素性の知れない長身の男性。

「あん？なんだてめー」

ベルは明らかに今までの奴らとは纏う雰囲気の違いに警戒する。

「いえ、ただの生き残りですよ。このマフィアの、ね」

もう一人の最恐が、戦場に舞い降りる。

やがて、戦場は最終局面へ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

標的19 復活（リ・ボーン）

「・・・派手にやってるね」

黒いフードを目深にかぶり、木の上に佇むのはヴァリアーのマーモン。

「どうやらそこからスクアアローたちの戦いを傍観していたらしい。マーモンの衣服は汚れておらず、戦った形跡は見られない。」

雲雀恭弥が参戦してきたときには、流石に驚いたがそれ以外は特に感情の動きはマーモンには見えなかった。

「そう、僕にとって一番大事なのはお金だからね。こんな一銭にもならない仕事は隊長たちに任せるのが吉なのさ」

マーモンは言葉を発する。

“ 後ろにいるリボーンに向かって ”。

「だからその銃をしまってくれないかい？君と争うつもりはないよ」

「どうだかな、銃を下して即幻術にでもかけられちゃたまらねえからな」

「言つたら。そんなお金にならないことしないよ」

マーモンの言葉を信じたのか、それとも幻術にかけられても勝てる自信があるのかりボーンは素直に銃を下した。

「——くっ!？」

が、結果としてその選択は過ちとなる。

「てめえ」

「ははっ。僕の言うことを素直に信じるなんて、沢田綱吉のところでもるま湯にでも浸ってたかい？僕は確かにお金にならないことはないけど、君は個人的に嫌いだからここで殺すよ」

マーモンの体内から無数の蛇がリボーンに向かって飛んでくる。

リボーンはそれをかわすこともできずにただただなされるがままだ。

「む・・・が・・・」

「あははっ。思わぬ収穫だよ。日本ではこういうの棚から牡丹餅っていうんだっけ？」

いつの間にか幻術にかけたつもりが、幻術にかけられていたようだ。

術士同士の戦いにおいて、幻術にかけられるということは即ち脳のコントロール権を？奪されたに等しい。

「ぐえっ！」

自分の味方だったはずの蛇、ファンタズマに首を絞められ、情けない声と共に悲痛の叫びが林にこだまする。

「わ、わかった！ギブ！ギブアップだ！降参する！」

こんなところで殺されてもかなわない。元々争う理由はないに等しいのだ。さっさと降参を宣言してマーモンはようやく拘束から解放される。

ゲホゲホと首元をさすりながらクローム髑髏を睨み付けるマーモン。

「……………」

一方で、当のクロームはさしたる思いもないよう。

マーモンのほうをチラと見るのみで、その視線は戦場へと注がれていた。

「……………まったく、なんだって君たちがここにいるんだい」

不貞腐れたようなそのマーモンの言葉にリボーンはフツと笑みを浮かべて答える。

「そりゃ、家庭教師だからな。俺は」

「ふーん。あの白いのの？」

ついさつきまで殺しあっていたというのに、次の瞬間からは普通に会話できているこの二人の精神状態はどうなっているのだろうか。クロームは至極真つ当な感想を持ったのだが、アルコバレーノとはそういうものなのだろうと、勝手に納得することにした。

「隊長も君も、なぜあんなにあの白いチビに執着するのか、僕には理解できないね。金のなる木だというのならまだしも」

「別に、執着ってわけじゃないぞ。俺はただ見に来ただけだからな」
「？」

リボーンの言葉の意味がわからずマーモンはクエスチョンマーク

を浮かべる。

「言葉通りの意味だよ。見に来たのさ、あいつが俺の教え子に相応しいのかどうかをな」

不敵な笑みを浮かべるリボンにマーモンは大した興味もないのか、それ以上は何も追及せず注目を戦場へと移す。

一番の山場を迎えているであろう戦場へと。

昔から、命というものに重みを感じなかった。

村の連中を皆殺しにした時も、

暗殺家業に身を染めた時も、

そして今現在も。

だから例え自分自身が死の間際に立たされても、その断崖絶壁のその先を、その一步を、踏み出すことに躊躇いはない。

命は軽い。引き金を引けば吹き飛び、ナイフを突き立てれば崩れ去る。そんな程度のものだ。

そんな程度のものに皆なぜあんなにも固執するのか、俺にはわからないし別にわかろうとも思わなかった。

血だらけになって、全身が痛みでもうなにがなんだかわからなくなっても、死がそこまで迫っているとわかっているとしても、それでも、わからなかった。

命の重みが。

そして、生きることの喜びが。

(動け！動け動け動け動け動け動け！——動け！)

ポーラ・マツコイは期待していた。

今までの人生常にトップ争いをしてきて、ギャングの手足として働いてはいるもののそれなりに充足感を感じることもあったし、自分の仕事に誇りをもってやっていた。

だからこそ汚い仕事もできたし、巡り巡って鵜と和解することもできた。

自分の仕事に、プライドと矜持、信念をもってやっていた。

それは自分自身に期待していたからだ。

自分ならやれると、自分ならできると。実力と実績に裏打ちされた確かな自信の表れ。

自分は今とやれる。自分ならもつと上に行ける。

結論から言えばそれは間違いであった。

もつと上には行けない。「もつと」はない。ここが限界、ここが底。

そう思わせるには目の前の敵は十分すぎて。

(だけど・・・!!)

なんども心が折れそうになった。この一時間にも満たない戦闘で、自分の人生は真つ向からすべてを否定された。

自分は今まで何をやっていたのだろうと後悔して、自分は今までなんだったのだろうと後悔して。

後悔して、後悔した。

諦めようと、諦めたいと、目の前の敵には勝てないとそう何度も自

分の中の言葉は反復する。

「ただ例え、勝負は諦めたって。例え、勝ちも拾えなくなるとして。友達くらいは救いたかった。」

「遊んだことなんて一度もない。放課後に残ってお喋りだなんてしたこともない。」

「それどころか友達だと周りからは思われてもないだろう。」

「勿論、当の本人たちだって友達とは思ってないかもしれない。」

「お互いのことなんてまだ何にも知らない。」

「それでも、話しかけてきてくれた。何度も邪険に扱ったのにそれでも変わらず笑顔で話しかけてきてくれた。」

「思い出すのはそんな思いばかりで、このまま見殺しにできるほどポーラの心は鉄のようにはできていなかった。」

「動けって、言ってるのよ！」

「だけれど、現実残酷だ。」

「そんな思いに、現実を答えてくれない。ただありのままの事実を映す鏡として佇んでいるだけだ。」

「壊れた右足は痛みを発するだけで、敵へと向いてはくれない。」

「痛む頭はこの現状を解決してくれる策を編み出してはくれない。」

「流れる血はただ流れるだけで。」

「痛む体は、ただ痛むだけだ。」

「代償を払うばかりで望む対価などくれはしない。」

「歯がゆい。悔しい。」

「そういつた思いがポーラの頭の中を占拠する。」

「その時だった。」

「ピクリ。と、後ろから何か微妙かに動く気配。」

「.....ピアノコ？」

「ピアノコ、つまりはエミリーリオの指先が微妙に動いたような。そんな気がした。」

「ありえない。自分よりもボロボロで、意識を保っているのが精いっぱいなのは彼がまだ、戦う意思が消えていないなどと。」

「……………」

右手に握られている剣が、カタカタと音を鳴らす。

「ちよ、動かない方がいいわよあんた！ただでさえ、流血しすぎなんだから」

流れる血は、ポーラの比ではない。切り刻まれた無数の切り傷からは応急処置はしたものの、赤い血がこびりついている。

「……………負けるのは嫌だ」

「え？」

ぼそりと、蚊の鳴くような細かい声。

「負けて死ぬのだけは、ごめんなんだ」

それはきつと誰に向けた言葉でもない。自分自身への言葉なのだろう。

負けるのは嫌だ。負けて死ぬのだけは。

生も死も、人生にすらなんのこだわりももたない彼が、唯一こだわるもの。

幼いころに初めて喫した敗北の味。

今まさに味わっている味。

いつ死んだつていい。

誰にどんな惨い殺され方をしたつてかまわない。

だけど。だけど。

負けて死ぬのだけは嫌だ。

負けて、終わるのだけは嫌だ。

ガチャリと、剣を杖にしてエミリーオは立ち上がる。

「なんで、なんであんたが立ち上がるのよ」

ポーラは驚愕の表情で思わず言葉が漏れる。

自分よりも重症のくせに、自分よりも早く立ち上がった。その胆力にも体力にも。

なんでつて思うことばかりで。

荒い呼吸でエミリーオはその瞳をポーラに向ける。立ち上がったせいで傷口からまた血が溢れ出していた。

真っ白い肌に荒々しく赤い絵の具を散らしたようなそんな彼にた

ただ、息を呑むことしかできない。

そんな迫力が、得も言わせない力が今の彼にはあった。

「・・・あのグラサンは、あっちに行っちゃったわ」

ポーラはまだ立つことができずにいる。そんな自分のふがいなさもプライドも悔しさも、全部押し殺してポーラは頼んだ。

目の前の彼に。

直接、言葉に出したわけではない。それでも、それは明白だった。

「・・・・・・・・」

言葉を発することなく、エミーリオは歩く。敵のもとへと。

「あ、あと！敵の目的はヘルリングってやつよ！たぶん、あの子たちの誰かが持つてるんだわ！」

自分が持っている情報はこれで全て。

「はあはあ・・・」

大声をだしたせいか頭に鈍い痛みが。

それでも、変わらず歩を進めていくエミーリオの背中を、ポーラはずっと見つめていた。

「はあい。ガキンチョ共。元氣ー？」

ルツスーリアは先ほどまで戦闘をしていた広い裏庭から数十メートルほどにある土蔵の扉を開け、歓喜の声でそう言った。

雲雀恭弥が出てきたことによる多少の焦りと、ポーラに負わされたダメージがまだ抜けきってはいないものの恐怖を煽ることくらいは造作もない。

「って、あら？誰もいないじゃない」

土蔵に都合、四人ほどが逃げ込んでいたのはしかと見ていた。

「ビーニーに行ったのかしら？」

土蔵の中に足を踏み入れ、しばらく歩き回る。見たところほとんど

物置のようなもので隠れられるような場所はそうない。

やがてルツスーリアは立ち止まり「ここね」と、足場を何度か踏みつける。

どうやらほかの場所との感触が違ったらしい。グニグニとそこだけ空洞を感じる。

とはいえよほど注意しないと気付かないレベルなのは間違いない。今頃、ここに隠れているであろう四人は多少なりとも油断していることだろう。

見つかるはずがないと。

そんな油断を。慢心を。木っ端みじんに砕いてやった時の表情を想像するだけでルツスーリアの顔は愉悦に歪む。

「雲雀恭弥に邪魔されたお楽しみ、こっちで味わうことにするわ。多少食べごたえはなさそうだ・け・ど」

小野寺春は祈っていた。この世に神様がいるのかどうかなんて今まで考えたこともなかったがもしも、もしもいるのならこの状況を助けてほしいと。

土蔵の外からは多少の金属音が遠く響くだけで、その戦闘の状況が何一つわからない。

だから、祈るしかなかった。暗く、狭い、冷たい空気が充満する土蔵の地下で、ルツスーリアに膝蹴りされ痛むお腹を抱えながら。

祈ることしか、できなかつた。

小野寺小咲は混乱していた。今起こっていることは本当に現実なのか、ほっぺをつねればまたいつものように穏やかな朝がやってくるのではないかと疑っていた。

だが、現実はそのような一種の希望を簡単に蹴散らしていく。

ガタン。と、地下からも聞こえる扉が開いた音。誰かが何かをしゃべっている声。状況から察して、どう希望的観測に満ちても、味方が助けに来たわけではなさそうだ。

ここに気絶した一条楽、そして自身の妹とその友達と共に隠れたはいいものの状況が何一つ分かっていない彼女にとってそれはとても恐怖するものだった。

そう、彼女はまさに恐怖していた。

いきなり戦場に放り込まれて、明らかに普通じゃない人たちと知り合いが戦っている。

友達の家が襲われる。

そんな状況に慣れていくはずなどない。

隣にいる春を、無意識に抱き寄せる。春の手は冷たく、また、自らの手も同じように冷たい。

「お姐さん……」

左隣にいる風もまた、恐怖で声がかすれていた。自身の膝には意識のない一条楽がいる。

自分がすっかりしなくては。小野寺小咲はそう思った。この子たちを守る人間は自分しかないのだと。

不思議とそう思うと力が湧いてくる。まともに戦おうなんて思うこともなかったが、それでも、何とかしたい。何とかしようと、不思議と自信は湧いてきた。

「はぁーい♡みーつけた!」

しかし、それは唐突に崩れ去る。

照明のない暗い地下、急に現れた頭上の電灯に照らされ眩しくて目を細める。

「あら、意外と狭いのね。そこじゃめんどくさいから、早く上がってきなさいよ」

声の主は喜びの色を隠さない。声色も、ガタイも、得体の知れなさ

も、その全てが恐怖を煽る材料でしかなかった。

「え、エミー君は？エミー君はどうなったの!？」

恐怖で縛られているはずなのに、春の口から飛び出てきたのはエミーリオのことだった。

最後に見た背中が春の中でフラッシュバックする。

「エミー？ああ、あの白いガキンチョのこと？全然歯ごたえなかったわねー。今頃死んでんじゃないかしら？ま、殺ったの隊長だけ♪」
「・・・嘘」

春の顔は絶望に染まる。それは助けてもらえないという意味ではなく、きつと、純粹に彼のことを心配しているからこそその絶望だろう。「さて、上がる気ないのならこっちから引っ張るわ」

「きやあー」

がしりと、その大きな手が小咲の首根っこを掴む。ポイポイとまるで物のように人間一人の体を簡単に放り投げていくルツスーリアに、やはり普通とは違うのだとまざまと見せつけられた。

「今からあなたたちを殺す、わけだけれどその前に一つだけ聞いておくことがあるわ」

こちらの事情など意にも介さない傍若無人ぶり。そのお構いなしな態度に本当に自分たちはそこらへんに転がっている石ころと同じ扱いなのだと思筋が寒くなる。

「な、なんですか・・・」

「お姉ちゃん」

まるで盾になるように両手を春や風の前にだす小咲。

「あなたじゃないわ」

ぞっとするほど、底冷えした声。

ルツスーリアはこちらへと歩いてくる。どうやら用があるのは一条楽のようだった。

「ほら、いつまで寝てるの？そろそろ起きなさい」

「・・・ぐ・・・う」

ギリギリと、首元を持ち上げ絞め上げるルツスーリア。

一条楽は気絶したまま、苦しそうな声を上げるのみ。

「やめて！一条君が死んじやうよ！」

悲痛な小咲の叫びもルツスーリアには届かない。

「ヘルリングはどこ？言わないと、死ぬわよ」

「……がはっ」

首を絞める力が若干弱まる。今まさに、一条楽の一切の生殺与奪はルツスーリアが握っていた。

「……」

それでも一条楽の口からヘルリングの所在が漏れ出ることはない。気絶したままの彼の口から言葉が漏れることはない。

「まあいいわ。あなたが吐かないってんなら、他の子に聞いてみるとするわ」

どさりと、一条楽を乱暴に投げ捨てて、そのサングラスの奥に光る瞳は小咲たちへと向かう。

その時だった。

開け放たれた扉から、声が聞こえたのは。

「ヘルリングなら、ここにあるぜ」

ルツスーリアは振り返る。その言葉の内容に、ではない。

その声の主に、だ。

神様だなんて崇高な存在なんかじゃない。

むしろ真逆の、悪魔のような嗜虐的な笑みを浮かべるそいつ。

「え、エミー君」

弱弱しく放たれた春の声が静かな土蔵に響いた。

「……驚いたわ。それだけの傷でまだ立っていられるなんて」

ルツスーリアの言う通り、彼の傷はおよそ立っていられるレベルではなかった。ましてしゃべることなどできなさそうな、それほどの壮絶なダメージだった。

弱弱しく呼吸は先細り、体はスタボロ。

それでも、彼は立っている。のみではなく歩き、そして喋っている。

「ほら、これだろ。ヘルリングって」

その彼の右手に光るのは、チェーンが巻き付いたリング。

「……それ、ね」

確証は彼にはなかった。

ただ、戦闘がおこる前。一条楽に手渡されたこのリングが無関係だとも、彼は思えなかった。

本当にヘルリングかどうかなんて彼には些細なことではない。

ただ、勝負の理由がほしかっただけで。

「悪いことは言わないわ。ガキ。それをこちらに渡せ」

ぞっとするほど底冷えした声。

「やなことだ」

それに対して、彼はあまりにも軽い声だった。

「っ！」

「エミ君ー」

瞬間、彼は蹴飛ばされる。

せつかく整理整頓したというのに、彼がぶつかった衝撃で荷物はバラバラに散らばった。

「そうまでしてどうしてあなたは戦うの？それを渡せば、少しは見逃してもらえるかもって思わないわけ？」

ルツスーリアは問う。こんな愚かな奴だっただろうか、と。十年前、ちらりと見た時は何もかもを捨てて生きる修羅に見えなくもなかったというのに。

そして同時に春や風も同じことを思った。どうして、目の前の彼はこんなにもボロボロになってそれでもなお、立ち上がるのだろうか。

「……どうして？んなもん、決まってるだろ。自分のためだよ」

それに、彼は答える。小さな細かい声で。今にも息絶えそうな声で。

自分のためだと。

ずっとそうだった。初めてリングに炎を灯したあの日から。

エミーリオ・ピオツティはずっと自分のために戦ってきた。

負けたくないと思う、唯一とっていい自分の願いに。

その願いのために戦ってきた。

信念と呼べるほど、大層なものじゃない。

生き甲斐と呼べるほど、熱中しているわけじゃない。

それでも、戦うときはいつだって。彼は自分のために戦ってきた。それが最善で。それが、彼が最も力を発揮する瞬間だった。

そしてそれは今も、例外ではない。

だがしかし、いくら戦いの理由を明確にしようとも、彼は死ぬ。

一つの勝利もなく、一つの価値もなく。

ただ、死んでいく。虫けらのように。

それもまさにこの数秒後に。誰の目から見てもそれは明らかで。

万に一つも生き残る術はない。

「ま、及第点ってどこか」

はずだった。

その声は土蔵からはるか遠く。雑木林の中から発せられた。

当然、その声は土蔵の中にいる人間には聞こえていない。

カチリと、その声の主は拳銃に弾を込める。

「イツツ、死ぬ来タイム」

音もなく、銃弾は発射された。一ミリの狂いもなく、恐ろしいほど

正確に。

ただ一人の、眉間を狙って。

「っ！」

ルツスーリアは、いや、その場にいた誰もが突然のことに、何が何だかわからなかった。

倒れて、突っ伏していたエミリーオの眉間に銃弾が直撃したのだから

ら、驚くなというほうが無理な話だ。

やがて、ルツスーリアだけが一つの予想に行き当たる。

そして、その予想は残念ながら当たってしまうのだ。

ルツスーリアにとっては、最悪のシナリオ。

「え、エミー君・・・？」

ピクリとも動かなくなった自分の友達を、情けないほど弱々しい声で呼ぶ春。

「ちっー！」

そして、唯一事情に推測されるが立てられるルツスーリアのみが、緊張感がほとばしっている。

しばらくして、死体が、銃弾で射抜かれたはずの死体が、真つ二つにバリバリと裂ける。

そこから唐突に体が突き破って出てきた。まるでサナギが成虫に羽化するように。

体に一つも傷はなく、額には炎が灯っている。

その死体は、静かな声でこう言った。

「^{リ・ポーン}復活」
と。

n u e d .

T o b e c o n t i

標的20 Evoluzione (進化)

雲雀恭弥とスクアアロの戦闘は拮抗していた。今現在起こっている戦闘の中で間違いなくハイレベルなその戦い。

雲雀恭弥がトンファーで連撃すれば、負けじとスクアアロもその剣技のすべてをもって応戦する。

拮抗した実力は、徐々に、徐々に傾いていた。

「ぐっ……！」

スクアアロは理解していた。自分が防戦一方になっていることを。このままでは押し切られることも。

(ルツスーリアは何してんだあ！そう長くはもたねえぞ！)

エミリーオ相手に長髪をなびかせ、余裕を見せていたスクアアロはもういない。

「なによそ見してるの？」「ちいっ！」

対して雲雀恭弥はあくまでも自分のスタンスを崩さない。いつものようにいつものごとくそのクールな表情は変わらない。

いや、表情が変わらないというのには少し語弊があった。

なぜなら、今この瞬間に雲雀恭弥の表情は崩れたからだ。

そう、雲雀恭弥は笑っていた。

「……あん？」

戦闘の真つ最中に笑う人間をスクアアロは何人か知っている。総じてイカれた奴らだという共通点があることも。

雲雀恭弥がイカレた野郎かどうかは知らない。が、少なくとも今、スクアアロは初めてと喋っていいほど雲雀恭弥の笑みを見た。

嗜虐性が現れた残忍な笑みではあったが。

「……っ!?!」

そんなやりとりをしている最中だった。ルツスーリアが向かったはずの土蔵から扉がぶち破られる音が聞こえてきたのは。

「うゝおおい！何が起こってやがる!?!」

飛んできたルツスーリアが既に伸びているのを見て、思わずスクアアロは声を荒げた。

何が起こってるのか、誰がこんなことをやってのけたのか。
一人しか、当てはまる人物はいない。

「エミーリオ――」

スクアアローは目の前の現実が信じられなかった。

先ほどまで虫の息だったはずのエミーリオが無傷で、しかも額に炎を灯してそこに立っているのだから。

「てめえがルツスをやったのか？」

信じられずにスクアアローは思わず訪ねた。どう樂觀視しても彼がルツスーリアに勝てるなど到底思えなかったのだ。

「……」

エミーリオはその質問に答えない。まだ自分の置かれた立場を把握していないのか。突然手に入れた力に戸惑っているのか、その無表情な顔からは判別ができない。

「答えろお！――てめえがルツスをやったのかって聞いてんだよ！」

返答は相変わらずない。

「がっ……」

代わりに拳が飛んできた。

スクアアローの体はいとも簡単に吹っ飛び、後ろの雑木林の木の幹に激しく衝突する。

とんでもなく重い一撃だ。今まで戦っていたエミーリオとはまるで別人と言っている。

ここから土蔵までは数十メートルはある。その距離を一瞬にして詰め、なおかつ一撃を叩き込むなど数分前のエミーリオからは考えられない。

いや、そもそも。

「その額の炎……」

スクアアローが目の前の光景から導き出す結論は、一つしかなかった。

「チィっ！アルコバレーノめ！」

この戦場のどこかにいるであろうアルコバレーノ、リボーンに向かって恨みごとを吐くスクアアロー。

ボンゴレ十代目の沢田綱吉。彼もまた、額に炎を灯して戦うスタイルだ。その原点はリボンにあるということはスクアアロにとつて今更な話だった。

この共通点、偶然では済まされない。

「……………」

先ほどから、エミーリオは自身の力に驚いているのか固まったままで追撃はしてこない。

（力を使いこなせてはいないのか。ならば、仕留めるなら今のうちだな）

口の中の血を吐き出してから、スクアアロは立ち上がる。

「う〱おおい！聞こえるかあ!?アルコバレーノ!!貴様がどんな意図で俺たちの邪魔するかはどうでもいい!だが!一度敵対したからには”てめえらのお気に入り”、ぶっ壊させてもらうぜ」

いつもの激しく唸る声から、最後はゾツとするほど冷静な声色でスクアアロは宣言をした。

「雲雀恭弥!てめーとは一時休戦だあ!首を洗って待つてな」

「……………好きにすれば」

雲雀恭弥は最早興味を失くしたのか、それとも”別の興味に移った”のか。さほど気にも留めていない様子だ。

それを確認したと同時に僅かなタイムラグもなく躊躇もなく、彼、エミーリオに向かつていく。

今までよりも確実な殺意と共に。

「あれは・・・なに？」

ポーラ・マツコイは満身創痍の体で目の前の光景を必死に理解しようと努めていた。

エミーリオに自身のプライドも友達も何もかもを託して、そしてものの数分もたたないうちにその託した相手が豹変していた。

額には炎が燃え盛っており、およそ人とは思えない力量をスクアアロ相手に発揮している。

いや、人並み外れたという意味では今まで戦っていたルツスーリアやスクアアロ、雲雀恭弥だって十分に人並み外れてはいるが。

それとは違う。何か、本当に不思議な力としか言いようがないものが彼の周りに纏っているようなそんな感覚。

「そういえば・・・」

そこで思い出す、ルツスーリアの言葉を。

この世にはリングと匣兵器というものがあり、それらは死ぬ気の炎で繋がっていると。

数か月前、廃倉庫で戦ったチンピラも、今の彼と同じような炎を扱っていた。

確か、“黄色の炎”は――。

「くっ、がっ」

スクアアロは匣兵器のアアロを開匣し文字通り全力をもってエミーリオを殺しに來ていた。

が。

戦況はエミーリオの優勢だった。

「てめえー！いつの間にかここまで死ぬ気の炎をコントロールできるようになりやがったんだああ!？」

彼の額に灯る炎。黄色く燃えるその炎はどう見ても「晴」属性。

「・・・・・・・・」

「うゝ、おおい！だんまりか!？」

先ほどからエミーリオは武器もなしに己の体一つで戦っている。彼の炎が「晴」でなかったらとつくに死んでいるだろう。

それを知ってか知らずか、彼は躊躇なく踏み込んできていた。多少のケガは活性の性質ですぐに治ってしまふ。

スクアアローは決定打を与えられずにいた。拳を避ければ蹴りが飛び、距離をとろうとしても常にゼロ距離でついてくる。

突き刺そうと押し出した剣は腕を犠牲に止められ、その傷もみるみるうちに回復していく。

右から左に、上から下に、斜めから縦横無尽に繰り出される斬撃はどれもすんでの所で躲され、いなされ、決定打には欠ける。

かといって踏み込めば体術へと組み込まれる。もちろん剣とアアローで応戦はするものの、それを凌ぐ戦闘力が今の彼にはあった。

「っはー油断したな!？」

とはいえ、無能なスクアアローではない。真正面からの攻撃が無理だと悟れば、アアローを陽動に、スクアアローは彼の懐に入る。仕込み銃の射程距離だ。

「っーな馬鹿な!？」

その銃弾を、エミーリオは弾いた。

ただの拳で。

(こいつー！笹川了平クラスの身体能力をもっているというのか!?)

スクアアローは内心で驚愕した。かろうじて表情には出さない当たりは百戦錬磨の経験のなせる業だろうか。

これには流石のエミーリオ自身も驚いたらしい。相変わらず喋りはしないが、ぱちくりと目を瞬かせている。

とっさにやったというのか。反射神経で思わず?!

末恐ろしさにスクアアローは乾いた笑いが漏れる。

その後もグーパーと自身の右手を確かめていたエミーリオだが、問題ないと判断したのだろう。すぐにスクアアロー相手に立ち向かってきた。

一通りの格闘術をマスターしているエミーリオである。そこに晴

で活性化された体が加わればスクアアロをも凌ぐ強さにもなる。

案外、相性がいいのかもな。など、スクアアロは余計な事を考えた。そう、余計な事である。

こと戦場において、目の前の敵以外のことを考えるなど愚の骨頂。まして、戦力的に拮抗しているほどそれは致命傷となる。

一瞬。その一瞬のスキを暗殺者は見逃さない。

「・・・があはっ！」

腹に一発。重い一撃を叩き込まれた。

加えて右ストレートが頬骨を砕き、上段蹴りでつま先が顎を打ち抜く。

「な、めるなあー！」

スクアアロだつて黙つてやられてはいるわけにもいかない。

それはヴァリアアの誇りでも、以前一度勝つたことの驕りでも、ましてや、年下に対する面子でもない。

ただ、純粹に己の技術が、自分の死ぬ気が、目の前の敵に劣っているなどスクアアロはそんなことを決して許さない。

「・・・っ！」

エミリーオの肩口にアアロの強固な牙が突き刺さる。

「死ねっ！」

心臓を一突き。アアロに身動きを止められ、これ以上ないタイミングで死を突いた。

はずだった。

「な・・・に・・・？」

信じられない光景を見て、スクアアロの思考は一瞬停止する。

自らの剣は体を穿つことなく、右手で止められた。

ことではない。

額の炎、確かに、先ほどまで黄色の「晴」の炎だった。

見間違いでも勘違いでもない、それは確かな事実。

だというのに、目の前の男のそれは。

「嵐の炎・・・だと?!」

額に灯っている炎の色は、今現在、紛れもなく赤そのものである。

彼の瞳と、同じ赤。

つまり、属性は「嵐」。

「しまっ！アーク!!」

その特性は、分解。

アークの鋭く上がった牙が突き立てたエミーリオの体から炎が移り、分解されぼろぼろと崩れ落ちる。

このまま近くに入ればやがてその身も朽ち果てるだろうと即座に察したスクアークは自身の匣兵器を匣にしまう。

じっと動かないエミーリオと、ある程度の距離をとったスクアークは冷や汗をぬぐう。

(落ち着け、冷静になれ。"ただ単にこいつは晴と嵐の二属性を持っていた"というだけだ。珍しい話でもなんでもねえ)

基本的に、一人の持つ属性の波動は一つである。が、稀に二つ三つと複数の炎をその身に宿しているというケースもある。

稀ではある。が、以外ではない。少ないというだけで、彼以外にも複数の炎を保持している者はいるのである。

それを土壇場で切り替えたというだけの話だ。なんら臆することはないし、驚くこともない。

スクアークは分析を終えて、再度剣を掲げた。

まだ勝負は序の口だ。負けたわけでも負けに傾いているわけでもない。目の前の敵は雲雀恭弥でもザンザスでもないのだ。

油断はしない。だが、必要以上に過大評価することも、ない。

そう思うと同時にスクアークは今度は自分からエミーリオの懐に潜り込んでいく。

攻守交代。

今度はスクアークが圧倒する番だった。

小野寺春は恐る恐る土蔵の中から外へと出た。
壊れた扉から一歩だけ土に足をつける。

数メートル先には先ほどエミリーオに吹っ飛ばされたルツスーリアが伸びているのが見えた。

何がどうなっているのか彼女にはてんでわからなくて。

何もかもが急で、説明も理解する間もなく状況は転じていって。
恐怖で泣く暇すらない。そんな中で。

唯一知っている。唯一わかっていること。

エミリーオ・ピオツティ。

彼についてだけは知っていたはずだった。

なのに、その彼すら知らない顔を、知らない声を、知らない態度を見せていた。

ボロボロにされて、それでも立ち上がる彼を。不思議な力で今、敵と戦っている彼を。

その一つ一つに、意味も理由も知らない彼女だったが。

「……死なないで。エミ君」

それでも、知らない彼も、知っている彼も、区別なく、差別なく。彼女は祈った。

ただ、無事でいてほしいと、それだけを。

祈っていた。

「——う、ウフフ。私を殺さなかったこと。後悔させてあげるわ」

自身の匣兵器である晴クジヤクで超回復したルツスーリアのその視界には入っていないが。

「ぐ、おおおおお！」

スクアアローは端的に言えば押されていた。

アアローを再度、匣から出す暇すらない。まさに常に攻撃の核となり休むことない怒涛の嵐の名にふさわしい激しい攻撃がスクアアローを襲っていた。

頬が切れ、血が噴き出し、足が砕け、体制が崩れる。

嵐の分解の作用で上手く近づけない。いまだ敗北していないのは雨による鎮静での相殺があるからこそだろう。

炎の相性とかろうじて出力での勝利が、スクアアローの命をつないでいた。

間合いを取って剣で切り付けても晴で超回復し、嵐に切り替えて攻撃してくる。

先ほどまでとは打って変わった戦闘スタイル。まるでそうできるのを今知ったとでも言うような。

加えて足技、空手、ボクシング、サバット。それらは確実に今まで身に着けてきた経験、獲物無しでできる戦闘スタイルそのすべてを使ってスクアアローを圧倒している。

一人の限界、スクアアローはそれを感じていた。

だが運はどうやらスクアアローの方に味方していたらしい。

「——がつ!?!」

後ろからの突然のニアアタック。鋼鉄の固い感触がエミーリオの後頭部を襲った。

脳震盪による意識の剥離。

「フフ、卑怯、だなんて言わないでね？死ぬ気弾のほうがよくほど卑怯なんだから」

「ルツス！てめえ生きてやがったのかあ！」

単純に戦闘力としても、エミーリオに一撃を食らわせたことも手伝ってかスクアーロの声はいささか喜色の色が見えた。

「まあ、危なかったけどね」

ひび割れたサングラスは片方のガラスがない。

泥と傷と血だらけのルツスーリアと、体を引きずり疲労の色が隠せないスクアーロ。

だがそれももはや気にすることはない。気絶しているエミーリオにとどめを刺せばすべては終わりだ。

最後にヘルリングを回収してイタリヤに帰る。

その任務を達成するため、スクアーロは容赦することなく、ためらうことなく、照準を真下に、地面に突っ伏しているエミーリオの首元に定める。

せめて一思いにやってやろう。

そう考えて一気に一刺し。

首の骨を折って、まるでポンプのように血が噴き出す。女子供の悲鳴と突き刺した剣の感触がスクアーロの体に染みる。

はずだった。

「なに!?!」

突き刺したはずの体はまるで砂のようにさらさらと飛んでいく。

砂のように見えたそれから微かに紫色の炎。

「まさか……!」

スクアーロをただ黙って見守っていたルツスーリアから思わず声が漏れる。

「霧の、炎。幻術か!」

目の前の現実からそう判断せざるを得ない。が、それはありえないとスクアーロの脳みそは否定していた。

霧の炎を扱える、しかも少なくともスクアーロとルツスーリアの二人を同時に幻術にはめる実力の持ち主などこの場にはいないはずだ。

そしてそれはある意味では事実であった。確かにこの場所に幻術

を扱える人間はいなかった。

今この時に覚醒した人間を除いて。

「馬鹿な・・・ありえねえ！」

スクアアロの脳みそは急速に演算しだす。

この生き死にをかけた戦場で急速に成長していく人間というのはいる。沢田綱吉という男がそうだった。

戦うたびに強くなり、計算以上の急成長を遂げていく男。

“だが、目の前のそれはそんなものを遥かに超えている”。

成長なんてスピードではない。

これは、これはもはや――。

「Evoluzione（進化）だ」

目の前の男、エミーリオの額の炎が紫色のそれとなるのを視認してスクアアロは思わずそう呟いた。

「三つの属性を持っているってどういうの!?あのこ！」

ルツスーリアの悲痛ともとれる叫びにスクアアロは苦い顔で答える。

「三つで済めばいいがなあ」

これまでに確認できているのは晴、嵐、霧、の三つだ。

しかも、本人はどれを扱えてどれを扱えないのかをまるで分っていない節がある。

つけこむとすればそこしかない。これ以上増やされてたまるか。

奥歯をギリギリとかみしめて、スクアアロはルツスーリアと共にエミーリオと相対する。

エミーリオは不思議な感覚に包まれていた。

今までの冷たく、硬い自分の死ぬ気の炎とは違う。柔軟性があつて

暖かいそんな炎を感じていた。

動けば動くほど新たな発見に満ちていて、自分の知らないところを次々に 見せられているような。

そんな感覚。

死ぬ気弾。その存在をエミリーオは知らなかったが、それを撃つたのがリボンだということはなんとなく察しがついていた。

こんなトンデモ代物を持ち合わせていそうだとそんな理由だったが。

死ぬ気弾は死ぬ間に後悔したことを実行に移す弾だ。

では、彼は、エミリーオは何を後悔したのか。

(死ぬ気で、あいつらに勝つ！)

そう、それが彼の後悔だった。

何もなかった人生に、いつ死んでもいいとさえ思っていた人生の中で唯一、彼が譲れなかったもの。恐怖を感じていたもの。

敗北の味、負けたまま終わること。

それだけは嫌だった。それだけが嫌だった。他にどれだけ惨い終わりを迎えようと、どれだけ悲惨な最期を迎えようと。

それに勝るものはなかった。

だから、死に行く中で後悔したのは負けたまま終わるといふ事実だった。

何も無い空っぽな人生でも、守るものも、執着も、絡み合う糸なんてない空虚な人生でもなく。

それよりも。

負けて終わることが彼にはどうしようもなく我慢ならなかった。

額の炎は灯る。

そんな気持ちに応えるべく、死ぬ気の炎は燃え盛る。

「春!!」

そして、彼は叫んだ。

「えっ？」

呼ばれるなんて思っていなかった彼女は呆けた表情でエミーリオを見る。

「刀!!こっちに投げろ!!」

春が両手に大事そうに抱えていた日本刀。エミーリオが持っていたもの、土蔵の中で転がったままのやつを思わず持っていた。

「……わかった」

春は困惑した表情から一転、何かを決意したような固い顔になる。

「させるわけないじゃない!!」

ルツスーリアは当然、邪魔をしようとエミーリオと対峙する。むぎむぎ獲物を与えてやることなどない。その余裕はもはやとうに失われている。

「なっ!!」

それに呼応するかのようにエミーリオの額の炎の色は変わる。

紫から、今度は青へ。

「まだあるっていうの……!?!」

戦場において手数というのはそれすなわち戦局を握る力そのものだ。

真の強者と相対するとき、一線級の手数を、殺しの手段をいかに持っているかが生死を分ける。

その点において、今現在のエミーリオは正にこの戦場を一人で手玉に取っていた。

「……っ」

青色の炎。属性は「雨」その特性は鎮静。

エミーリオの右手から放たれた掌底にありつたけの雨の炎を撃ち込まれたルツスーリア。

超回復した体の細胞を急速に鎮静化させられ、意識が揺らぐ。

「くそ……が……」

唇を強くかみしめ、サングラスの奥から滲む強い視線も虚しく、ルツスーリアはここで倒れた。

「……ちっ」

その隙をついて後ろから斬りかかったスクアーロだったが霧の炎で紛れられる。

「エミー君!!」

そうこうしてらうちに、春から日本刀が投げ込まれエミーリオの手に収まる。

額の炎は紫から今度はバチバチと轟轟しい雷へ。

その特性は「硬化」

「うゝおい、刀を強化してんのか」

明らかに、先ほどまでよりも使いこなしている。このまま長引かせれば確実にその力はスクアーロ達にとって脅威となるだろう。

「ひっさびさだぜえ。ここまで血沸き肉躍るってやつは」

残忍な笑顔を浮かべて、スクアーロは剣の切っ先をエミーリオに向けた。

そして、もう一度宣言する。

「生きるか死ぬか、殺し合いといこうじゃねえか」

「……そうだな。殺ろうか、殺し合い」

そして彼もまた、同じ人殺しの目で向かい合う。

「つくく。てめえ逆境では素直になるタイプだな」

沢田綱吉は冷静になり、跳ね馬は逆境で頼もしさを発揮するタイプだった。

エミーリオは、どうやら素直になるらしい。開き直るともいうが。

「……っー」

「はああああー」

開戦の合図はなく、言葉もない。どちらからともなく斬り合いが始まった。

スクアーロの剣技はまず間違いなく剣士の中ではナンバーワンだろう。山本武とはいいい勝負だが、やはり純粋な剣技のみに絞れば彼に軍配はあがる。

対して、エミーリオの剣技は言うほど対したことはない。

多くの暗殺術をその手に持っている彼は、逆に言えば一つのもを極めたことはない。よってその道のプロには負ける。

だからこそ、なおのこと彼は手数を、戦略を増やすのだ。負けないように。

それは保険でもある。

一つで負けても、二つ目で、それで駄目なら三つ目といったように切り替えができるように。

ただ、今の彼は少し違った。

「ぬうつ・・・!!」

ほんの数時間前、剣技で圧倒したはずの相手にスクアードは押されていた。

剣技そのものが格段に飛躍したわけではない。やはり厄介なのは炎の使い方。

ここぞという場面で霧で隠し、雷で強化し、隙あらば嵐で防御を食い破ってくる。

そして。

「うゝおおい！そろそろ打ち止めだろう!!」

また一つ、彼の手数は増える。

文字通りの意味で、増殖する。

額に灯るは雲の炎。増殖の特性を持つ炎だ。

その炎で彼は無数に刀を増殖させていた。

一本一本を使い捨てるように、時にナイフのように投げ、時に折られ、それは剣士にはあるまじき戦闘スタイルだった。

自らの刀を放棄するということは自らの流派すら否定することになる。

一つの剣と共に頂点を目指すのが剣士という生き物だ。

だというのに、目の前の彼はそんな剣士を嘲笑うかのように使い捨て、吐き捨てる。

「・・・っ!」

ついに、その音が戦場に響いた。

幾重にも蓄積されたダメージと、雷で強化された刀による一方的な

連撃がとどめとなって、スクアーロの剣は折れた。

まるで相打ちとでもいうようにひびが入ったその刀をエミーリオは即座に捨てる。

左手に構えたもう一本でスクアーロの心臓を穿とうと全体重を載せて、彼は足を踏み出した。

ドス。

鈍い音だ。骨と金属がかち合い、肉が避ける音だ。

だが、それは心臓を穿つ音ではなかった。

間一髪、切っ先を逸らしたスクアーロの機転だった。

だが。

「うぐっ」

右肩に突き刺さった刀と、勢い余って倒れこんだエミーリオ。

もう一刺し、刀を雲の炎で増殖させてもう一刺しすれば完全にエミーリオの勝利だ。

絶望的状况からの土壇場で盤面をひっくり返した。

その奇跡のような状況と、目の前にある勝利に、エミーリオは“安心した”。

「あえ？」

だからというわけではないかもしれない。単純に、もう限界だったのかもしれない。

真意はそれこそ撃った本人、リボンにしか見えていないのだろうが。

エミーリオの額から死ぬ気の炎は消失した。

「あ……ぐ……」

今までの反動が来たのだろう。視界は霞み、体に力は入らない。先ほどまでの万能さはどこにもなく、あるのはただ薄れゆく意識だけだった。

「がっ!!」

そんなエミーリオを見逃してくれるほど、目の前の敵は優しくな

い。

今にも倒れこみそうな彼の体を、スクアアローは一蹴りで吹っ飛ばしその態勢と、戦況を吹っ飛ばす。

「こんな、とこで・・・」

確実に、今意識を手放せば負ける。どころか殺される。

最悪だ。最悪のシナリオだ。

一番恐れていたことなのに。一番嫌な幕引きを迎えたくなくて力を得たのに。

それは偶然で意識したものではなかったけれど、それでも確かに一度は勝利に手が届いたのに。

結局、自分はこういう人生だったのだ。手を伸ばすことすらなく、唯一諦められないものでさえこうして手から零れ落ちていく。

ああ、まるで自分の人生の縮図のようだ。自分の人生がこの一瞬にすべて詰まっている。

後悔しながら、エミリーオは、ようやくその戦いからしがみついていた戦場から滑り落ちた。

「クフフ。予想以上の収穫です。君は十分、この僕にその力を見せてきてくれましたよ」

そして、まるで入れ替わるように戦場にその身を表すのは。

「六道・・・骸」

「ええ、お久しぶりですね。スクアアロー」

そして、長かった戦場は終わりを迎える。

continued.

To be

標的21 Fine (終息)

「……………知らない天井、つって」

エミリーオはその場で静かに目を覚ました。

真っ白い自分と同化するかのようになり、白で埋め尽くされたなんとも殺風景な部屋だ。

そこが病室であるらしいことはなんとなくわかった。

白いベットに、まるで死装束のような真っ白い衣服。

壁は白で覆われていて、清潔感があるといえば聞こえはいいが、なんだか不気味に感じた。

唯一色のあるものといえば、部屋の隅に寂しくおかれた花瓶に指している花くらしいものだ。

「いつつ……………」

所々どころか、全身を襲う痛みを耐えながら、彼はなんとか起き上がる。

「あん？」

そして気づいた。自身の足にある違和感に。

「……………すー……………すー……………」

なんだか重みを感じるといえば、そこで綺麗な寝息を立てている人物が一人。

小野寺春。

「なんでやねん……………」

思わず関西弁になるくらい彼は混乱していた。

そこにいたのは紛れもなく彼女そのものだ。

なぜ、彼女がこんな所で寝ているのか。そもそもなぜ自分は病室のベットの上なのか。

湧き上がる疑問に明確な答えは得られない。

なんとなく思い出せるのは、一条邸での出来事と眉間に銃弾を撃ち抜かれたこと。

そして、その後起こった自分の圧倒的力。

あんな経験は初めてだった。戦場を手玉に取って、その優位性が揺

らぐことはない。予想外の出来事が起きても、それを上回る予想外の出来事が自身に起こり。

けれどその力に驕ることはなく、常に頭が澄み渡っている。

なんとも気持ちのいいものだった。

なんてことを考えていると、不意に部屋の扉が開く。

「あら・・・起きたの」

出てきたのは花を持った風。驚いたというような顔ではなく、なんだもう起きたのか、という残念そうな表情だ。

「起きちゃ悪いかよ」

「別に、そんなこと言っていないじゃない。性格悪いわよ?」

「おめえに言われたくねえ言葉堂々の第一位だよ」

まったくもってあんな戦いのあつた後だとは思えないほど、いつも通りな二人。

そう戦いは終わったのだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そして、会話は途切れ沈黙がやってくる。

風は次の一言をどう発せばいいのか悩んで。方やエミリーオはその沈黙を意にも介さない。

「なんだおめーら。辛気臭いぞ」

「ぐはっ!!」

そんな沈黙を破って飛びでてきたのは。

「CHAO^カOS^スだな」

「てめえ・・・」

しっかりとエミリーオの顔を踏みつけて、無事床に着地したのはりぼーン。

飛んできた方向を見ると、天井裏がパツクリと空いている。どうやらそこから飛び降りてきたらしい。

「今更なにしにきやがった」

「ふっ。今更・・・か」

「んだよ」

意味ありげな視線を送るリボーンにわけがわからないエミーリオ。

「まあいい、どうせすぐにわかる」

「……ああそう」

ここで追及しないあたりが、彼らしい。不服そうな顔は隠す気はないようだが。

「それよりも、知りたいんじゃないかねえのか？」

「なにをだよ」

「あの後、戦いの結末をさ」

リボーンは帽子をクイと上げ、小さな笑みとともにエミーリオを伺う。

「けっ。何でも知ったような口ききやがって、てめえから聞くなんざ御免こうむるね」

エミーリオはだがしかし、その提案を蹴つ飛ばす。

「まあ聞け。あの後、六道骸が現れてからの話だ」

六道骸。その名前を聞いて、ピクリとわずかながらに反応する。

「興味あり、ってか？」

「……うるせえな」

先ほどとは、明らかに態度が違うエミーリオにリボーンは視線を送りながら続きを話す。

「あ、あの。私、外にいますね」

そんな空気に気圧されたのだろう。確実に場違いな雰囲気を感じた風は、そそくさと病室から出ていこうとする。

が。

「いや、いい。お前も聞いておけ」

リボーンの静止に、風はそれ以上どうすることもできず。また、ちよつとはあの戦いがなんだったのか知りたいという気持ちがあったのだろう。

扉にかけた手を放し、隅っこに佇んだ。

そして、話は二日前に遡る――。

「クフフ。予想以上の収穫です。君は十分、この僕にその力を見せつけてくれましたよ」

「六道……骸」

突如として戦場に現れたその男。

六道骸はいつも以上のその笑みを携えてやってきた。

「てめえ、何しに来た、つてう」 おおおい！」

スクアアロのその敵意も素通り六道骸は力を使い果たし倒れこんでいるエミリーリオを抱きかかえる。

「いえ、ただ仲間を回収しに來ただけですよ。キミに殺される前にね」
「ま、まって……あの子、ヘルリングを、持つてるわ」

かろうじて残った意識で振り絞ったルツスーリアの言葉にスクアアロは大きく目を見開く。

てつきり一条楽が持っているのだと思っていたが、これだからボンゴレ本部は信用ならない。

「ちっ！」「おや、やめておいたほうがいい」

今彼を逃せば、また捜査はゼロに戻る。不自然なタイミングで現れた六道骸といい、信用ならない奴が多すぎる。

ヘルリングはやはり、ヴァリアーが管理した方がいい。そう思い、剣の切っ先を六道骸へと向けるスクアアロだったが。

「予想以上にこの子が頑張ったようだ。今の君では僕たちには勝てませんよ」

クフフと笑う六道骸に虫唾が走るほどブチギレそうになるスクアアロだったが、だが、また彼のいうことも正しいというのも心のどこかではわかっていた。

予想以上に消耗し、予想以上に善戦された。

結果的に勝利だったものの、現状を見ればそれも敗北に限りなく近い勝利だ。

だがしかし、だからといってここではないそうですか。と逃がすわけにはいかないのである。

「ゴングチャンネル！」

「っ!？」

いかないのであるが、完全に死角からの攻撃にスクアーロは攻撃を捌くことができない。

「こい、っ!!」

かろうじて、仕込み銃で反撃したものの、肩から受けた傷はドクドクと痛々しいほどに血が流れていた。

「クフフ、では皆さんまた会う日まで、さようなら」

霧に囲まれ、この場から去る準備を始める六道骸を誰も止められない。

いや、いた。

一人、この場で傷一つ受けず体力を消耗していない人間が。

一人だけいた。

「逃がさないよ」

「おや、そういえば君がいましたねえ。雲雀恭弥」

並盛の最恐の風紀委員長、雲雀恭弥。

「君と殺り合うのは少々骨が折れる。また今度相手をしてあげますよ」

「そりや残念だな。今なら俺も参加できるんだが」

その声が六道骸の耳に届く。

ゆっくりと振り返って、戦場に相對するのはアルコバレーノ、リボン。

「まったく。次から次へと・・・」

今日初めて、真剣さを灯すその顔はゾツとするほど冷たい。

「ふむ・・・まあ。いいでしょう。犬！」

「なんらびよん？ムクロさま！」

「あつちに残っている千種とM・Mを拾って帰りますよ」

そう告げると六道骸はおもむろに、リボーンに抱えていた荷物を投げよこす。

「さすがにこのメンツ相手では自分が逃げるので精一杯なので、ソレ頼みましたよ」

言いながら、六道骸は手にした三つ又の槍をクルクル回し、それと同時に右目の数字も高速で回転しだす。

「ちよつと。逃がさないって言ってるでしょ」

しびれを切らしたのか、六道骸に突っ込んでいく雲雀恭弥。

だが、それを読んでいたのだろう。先ほどから予め用意していた行動に六道骸は移る。

飛んでくるトンファアをいなしながら。

「六道輪廻。畜生道」

「っ!!」

足元からボコボコと無限に湧き出てくる蛇。その蛇たちに絡み取られ、雲雀恭弥は動くことができない。

「では、改めて。また会いましょう。そう、遠くない日にね」

それだけ言うと、六道骸は去り際に。

「・・・クROOM含めて、ソレの教育、よろしくお願いしますね。アルコバレーノ」

そう言い残して、六道骸と犬は戦場から消え去っていった。

「・・・ロール」

「キュピー」

しばらくして、雲雀恭弥は自身の匣兵器のロールを使い蛇を駆逐する。

その際に、黒いスーツも所々が破けてしまったようで「・・・フン」トンファアを翻しながらもう用はないと、同様に戦場から立ち去っていった。

そんな一部始終を、一番近くで見っていたのがポーラ・マツコイである。

痛みと、けだるげと、朦朧とした意識の中でまだ意識を手放さないというのは彼女がまた、暗殺者であるというプライド、その一点のみだったであろう。

「おい！ポーラ！ポーラ大丈夫か!？」

「・・・つぐ、み」

自分の名前を呼ぶ声、紛れもなく鵜誠志郎である。

(ひどい怪我だ・・・肋骨も、足も折れてる上にこの外傷。ポーラがここまでやられたのを私は見たことがないぞ・・・)

「あんだ・・・なんでここに?」

「それは後で話す！それより病院！きゅ、救急車！救急車つて・・・あれ?119?110?どっちだ!？」

満身創痍な友人の姿にパニくる鵜。

「ま、つて」

そんな携帯を取り出す鵜の腕を、弱々しくけれど確かに遮るポールの手。

「なんだ?どうしたというのだ?」

遮る理由がわからずに、鵜は困惑する。

素人目に見たってどう考えても、それは早急に手術が必要な類のケガだろう。一分一秒が惜しいこの時に、それを遮るほど大事なものなんて鵜にはわからなかった。

すると、ポーラは。

「見届け、たいの」

「なんだつて?」

その理由を聞いても、やはり鵜にはわからない。

見届けたい?一体何をだというのだろう。と。

「せめて、あいつよりも、長く」

この状況の、その中心にいるのは紛れもなく彼だ。
その中心にいたいと思うわけじゃない。
けれど、彼は。

あれだけのことをやってのけたのに、自分は結局こうやってうずくまっているしかできない。

その悔しさを、一秒でも長く刻み付けておかなければ。
と、白い髪の彼女はそう思ったのである。

「……そうか」

その意図を完璧に汲み取ったわけではないが、また鷗もその悔しさの一端くらいは味わうものとして、またポーラの友人として、その友人の気持ちを優先することにした。

「ただし、危ないと思ったらすぐに救急車を呼ぶからな」

「ええ……」

そして、二人は戦場へと目を向ける。

急速に収束していく戦場へと。

「……さて、その剣、降ろしてもらおうかスクアーロ」

アルコバレーノ、リボーンは自身の後頭部に突き付けられている切っ先を感じながら言葉を発した。

「うゝおい！冗談じゃねえ！言ったはずだぜアルコバレーノ。てめえらのお気に入りぶっ壊すってな」

「ああ、確かに聞いたな」

「だったらー！」

そう言いかけて、スクアーロは口を噤んだ。
なぜなら。

「だったら、殺し合いでもするか？」

殺し合い。

その言葉の重みは常人のそれとは比較にならない。

なにせ、それを発しているのはこの世で一番殺しが上手い人物だ。

「……どうするきだ。ソレ」

ぐぐもったような声で尋ねるスクアアロ。

「そいつはどっちのことを言ってるんだ？」

「……」

「エミーリオのことか？それともヘルリング」「に決まってるだろ」

間髪入れずに答えたスクアアロにリボーンは笑みを崩さない。

あくまでも余裕、あくまでも優位な立場は変わらない。

「心配いらねえさ。ヘルリングはちゃんと俺の手で管理する」

「いいや、ヘルリングは危険な代物だ。二度と人の手に渡らぬよう封印したほうがいい」

「そんな方法が、この世界にあるとでも？」

できるのならとつくにやっている。言外にそう告げて、リボーンはエミーリオを抱えたままこの場を立ち去ろうとする。

「うゝおおい！どこに行きやがる!!」

「病院だ。お前もさっさと行つたほうがいいぞ。その傷浅くねえだろ？」

「……今は見逃してやる。次はねえぞ。うゝおおい！姿を見せろマーモン！」

「な、なんでわかつたのさ」

完全に幻術で姿を隠していたはずのマーモンを怒鳴りつけるスクアアロに、びびりながらもマーモンは木陰から姿を現す。

「てめえはルッスを運べ、俺はベル達に連絡をつける」

「えー、なんでボクがそんな金にならないこと……を……」

スクアアロの鬼の形相に、段々と言葉尻を失っていくマーモン。やがて最後には洩々、ルッスをおぶって行くことにした。

そして、茂みに消えていく際に二人は小声で話をする。

「てめえがここに来たってことは、幻騎士の所在が分かったってことでいいんだな」

「まあ、概ねそうだね。ただし、奴さんも馬鹿じゃない。どいつが幻騎士なのかは会ってみないとわからないよ」

ただ、とマーモンは言葉を付け加える。

「幻騎士がこの並盛にいるってことだけは確かだよ」

「また並盛か」

スクアアローは戦っていた時よりよっぽど険しい表情で。

「ここで一体なにをしようってんだ」

戦場からまた一人帰還していくのであった。

気づけば辺りは真っ赤に染まりカラスが叫び鳴く。

夕焼けに照らされた戦場はこうして、終わりを迎えた。

「———ということだ」

リボーンの話をただ黙って聞いていた二人、いや、寝ている春も加えれば三人ではある。

「あっそう」

自分が気絶している間にそんなやりとりが、なんて彼は微塵も感じない。

自分があの状態から生還した時点である程度の察しはつく。

わからないのは。

「なぜ助けたりしたんだよ。アンタに僕を助ける義理なんかないだろ」

「俺はお前の家庭教師だからな」

「ほぎけよ。教えてもらったことなんざ一つもねえよ」

「なんだ、拗ねてんのか」

「ぎっけんな」

質問した答えにはなっていないのに、リボーンは早々と話を切り替える。

「まあいいじゃねえか。改めて、今回の件で俺はお前の家庭教師だ。ケガが治ったら死ぬ気でやれよ」

これ以上なにを吠えても無駄と感じたのだろう。エミーリオはため息をつくばかりで、最早口答えするきにもなれない。

そんなエミーリオを見て満足したのか、話は終わりだとばかりに「じゃな」と、扉を開いてリボーンは立ち去る。

「リボーン君って、結局何者？」

それまで黙っていた風がようやく口を開くが。

「俺が知るかよ」

最強の赤ん坊、元、アルコバレーノ。橙色のおしゃぶりを持っていたのも今は昔の話だ。

てか、リボーン君で、にあわねー。

「失礼、します」

なんて思っていると、入れ替わるようにしてやってきたのはクローム髑髏。

手に持っているのはお見舞いの定番。バスケットに入ったフルーツだった。

「起きて大丈夫・・・？」

「来たのか・・・大した事ねえよ」

そんな二人をぱちくりと驚いたような目で見るのは勿論、風しかない。

「ちよちよちよ！」

右の耳を引っ張り顔を近づける彼女に、しかめっ面で返す。

「んだよ」

「クロームさんといつ知り合ったの？あんた学校じゃ私たち以外しや

べらないじゃない」

「あー・・・」

そういうえば、学校では会話をしたことがなかった。する必要がなかったというのもあるが、両方とも、まあもともと積極的に人に関わっていくタイプじゃない。

「まあ、ちよつとな」

説明するのもメンドイ、上手く躲すのもメンドイ。ので、適当に濁した。

「そ、そう」

風もそれ以上は追及してこず、結果としてはよかったのだが。その時の風のなんともいえない表情が。驚いたような面食らったような、戸惑った表情が気になった。

「あんだよ」「い、いや」「歯切れ悪いな、言いたいことあんなら言えよ。いつもは言わなくていいことまで言うくせに」「なによ！ちよつと驚いただけでしょ！」

そしてまた、口喧嘩へとヒートアップ。

「つて違う！そんなことを聞きたいんじゃない！」

風はどうやら、聞きたいことがあったらしい。両手をブンブン振り回して抗議を続けていた。

「あれなに!?!」

「なにが?」

「あの時はパニックで気が付かなかったけど、よく考えたらあんな凄い爆発あつて人が一人も来ないつておかしくない!?救急車とかパトカーとか野次馬とかもつと来るでしょ!?!あんな住宅街なんだから!それに一条先輩の家の人も誰一人戦いがあつたなんて知らないつていうし!笑われるし!家はいつの間にか修復されてるし!つてちよつと聞いているの!?!」

矢継ぎ早に早口に、耳の近くで大声を出されたもんだからエミーリ才は思わず耳を塞いで半分以上聞いていなかった。

「あ、それ。私」

「はいいい!?!」

すると思わぬ所から答えがやってきて、風は少々大きいリアクションで返してしまう。

「爆発と家は幻術で隠してて、家の人たちも幻覚を見せてたから……」
あ、でも。家は本当にもう直ったよ。

そんなことを真顔で返す目の前の少女にしかし不思議と彼女は納得できた。

なにせ、あんな凄い戦いを。超人的なそれを目の前で見てしまったのだ。幻術だの幻覚だの言われてもピンときてしまう。

「……ちよつと顔洗ってくる」

頭を抱えて、フラフラと出ていく彼女にご愁傷様という気持ちはけれど全くない彼であったが、いっぺんに色々なことが起こって今まで普通の人として暮らしてきたのに参っているのは理解できた。

「私、変なこと言ったかな」

「さあな」

じつと扉を見つめるクロームと、反対に窓を見つめるエミーリオ。

「私、ちよつと行ってくるね」

「あ？ああー、そう」

一瞬なんのことかわからなかったが、きつと風のもとに行くのだろう。

別にクロームのことよく知っているというわけではないが、それでも、それはなんだか珍しいことのように思えて。

その背中を少しばかり、見つめたりなんかしてみたりして。

「……で、いつまで狸寝入りしてんだてめー」

「あいて」

ポコツと春の頭をはたくエミーリオ。

「えー、ばれたの?」

えへへとしまったという顔で春に、エミーリオは視線のみを返す。

「いやー、なんだか起きるタイミング失っちゃってさー」

春はばつが悪そうな表情で、やがて、その表情は段々と湿り気を帯びてくる。

「・・・ありがとう」

潤んだ瞳で、さて何を言われるのか。罵倒されるのか、それともなんでもないように無視を決め込んで話をするのか。

そう予想していたエミリーリオは驚いた。

まさか、感謝されるとは思ってもみなかったからだ。

「・・・礼なんて、そんな筋合いねえだろ」

「あるよ。だって、ちゃんと私たちを守ってくれたじゃん」

「お前らを守った覚えはない。俺はただ負けたくなかっただけだ」

戦う覚悟を決めてから。その気持ち揺らいだことはない。

死んでいいとは思っても、負けていいとは思えないから。

「うん。でも、私どこも痛くなかった。そりゃ怖かったし、エミ君やポーラちゃんが傷ついているのを見て心が痛かったけど。私の体に傷一つついてない。それは二人が守ってくれたからだよ」

だから、と春は言葉が続ける。

「ありがとう。生きててくれて」

十全な笑顔で、心からの笑顔で、彼女は感謝を述べる。

けれど、彼には返す言葉が見当たらない。まっすぐな気持ちに返す、まっすぐな気持ちに彼には見当たらない。

自分が生きていることに感謝などされたことなどないから。

だから、言葉が出てこなかった。

「でも、もうあんな無茶しちやダメ！ね？」

「・・・るっせーよ」

「あ、私、みんなを呼んでくるね。きっと心配してると思うから。元気な姿を見たら喜ぶよ」

「いいよ、別に」

「そんなこと言わないの」

ね、すぐ戻ってくるよ。と春は軽快に皆を呼ぶべく病室を後にす

る。

結局、ヘルリングは手元がないし、得たものなんて限りなくゼロに近い。

が、もともと自分が持っているものなぞたかが知れている。

それに、一時だけだが不思議な力の体験もすることができた。

今回は何も失っていない。それだけで納得することにしよう。

なに、自分を誤魔化し騙すのには慣れている。

だからまあ、とりあえず今は生きていくという事実を素直に受け取るのも、たまにはいいかもしれない。

そう彼は一人ごちて、この一件はようやくの終息を迎えるのであった。

薄暗い廊下、そこに人影が二つ。

「まさか、六道骸に雲雀恭弥まで出てくるとは。現実とは想定通りにはいかないものだ」

「いかなさいますか?」

「スクアールくらいは仕留めてほしかったが、まあいい。これでボンゴレ内部に亀裂が入ったことだろう。もともと、ヘルリングなどという代物に期待したことなど一度もないしな」

言葉を発していた一人はそれに、と続きを口にする。

「面白い存在も見れた」

「彼のことですか」

「ああ、あの憎きボンゴレが秘匿していた子供だ。調べる価値はあるだろう」

「おーい！橘ー!? エミーリオが意識取り戻したってよ!」

廊下の先から聞こえてくるのは、男の声。

それに応えるべく、人影の一つは返事をする。

「はい！楽様ー！今行きます!!」

T o b e c o n t i n u e d .

修行編

標的22 オンセン

あの戦いから早一か月が経とうとしていた。

「あ！エミ君来た!!」

「だーから、来なくていいって言ったのに」

家の目の前にいる春と風。

困った顔を隠すこともなく前面に押し出すエミーリオは、他の者はとつくに衣替えをした半袖の白いシャツが彼だけまだ真新しい。

「そりや来るよ！エミ君退院の日教えてくれなかつたんだもん!!」

プリプリと怒っている春に横眼をそらすエミーリオ。

エミーリオのケガはどう見てもひどいもので、全治三か月以上はかかるといわれていたのにリハビリもそこそこにエミーリオは強引に退院していた。

戦闘中ケガは晴れの活性で治していたとはいえ、退院できるほどに回復したわけではない。

だから、彼の体はまだ健康体とはいいがたく、白いシャツから伸びる腕やチラリとのぞく、くるぶしにはまだ包帯が痛々しくまかれてい

る。
「・・・杖は？いいの？」

風は心配しているのかしていないのか、その表情からは読み取れない。
「いらねえ。邪魔だし」

また返すエミーリオの言葉にも感情は乗っていない。あくまで事務的に返すのみだ。
「まだ入院してたほうがよかつたんじゃない？」

「へーへー、早く出てきて悪うござんしたー」

「・・・」

そんな二人の微妙な空気には気づかず、春はまだ怒っていた。

「ポーラちゃんはちゃんと教えてくれたのにー」

「どうやらポーラも既に退院しているらしい、同じ病院であったのもかわらず一度も会っていない。」

「エミーリオ的にはてつきり色々と質問攻めにあうかとも覚悟していたのだが、それがなくてほっと一安心というところだろう。」

「ただでさえ毎日のように春が見舞いに来て心休まらなかったのだ。そんなことをされてはエミーリオは病院を変える決断をしていた。」

「退院パーティーも計画してたのにー」

「まだ言ってるのか」

「どうやら余程不服らしく、珍しく愚痴が止まらない。」

「あーそうだー!」

「いいことを思いついた。そんな春の表情に、エミーリオは悪い勘しかしない。」

「今日やればいいんじゃない?」

「ほれみたことかと、彼は天を仰ぐ。」

「いらねえって」

「一応の抵抗を見せるエミーリオ。」

「だが。」

「よーしー!そうと決まったら皆のスケジュール聞かなきゃ!まずはお姉ちゃんとー、クロームさんと、――」

「春はまったくもってこちらの話を聞いておらずその脳内ではすでに会場をどこにしようか、誰を呼ぼうか、そんなことではいっぱいだっただ。」

「だーから、まず主役の話の聞けや」

「弱々しく放たれるその声も、当然届きはしない。」

「(愁傷さま)」

「立ち止まるエミーリオをすたこらと追い抜かして、風はそう一言つぶやいた。」

学校では特に変わりはなく、話しかけてくる友人などもないためその包帯について怯えられることはあれど、問いただされることもなく一日を終えた。

「やつべえ」

のだが、問題点が一つ。

授業についていけない。

それもそうだ。元々サボりがちであったのに加えこの一か月ろくに登校すらしていない。このままだと進級すら危ういかもしれないレベルなのだ。

加えて赤点などろうものなら退学とはいかなくとも、停学くらいにはなるかもしれない。

進路指導の教師にそう言われ、進路指導室に呼び出されたエミーリオはそんな想像が頭をよぎる。

ただでさえ目立つ容姿をしているのだ。できるだけそういったことでは目立ちたくはない。

今日何度目かの深いため息をつき、彼は部屋の引き戸を引いた。

「フツ、来たか」

「・・・あ？」

てつきりエミーリオは教師がいるのだとばかり思っていたが、現実、そこにいたのは進路指導の教師ではなく。

黒いハットと似合わない学生服に身を包んだりボーンだった。

「・・・」

加えて、無言でこちらを見つめるポーラ・マツコイ。

「おいおいおい、どういう状況コレ？」

あまりにも急で思考が追い付いていない。

「俺が教師にお前ら呼び出すように頼んだんだ」

中央に鎮座しているリボーンは呆けているエミーリオにそう告げる。

「なんでそんなややこしいやり方？普通に呼び出せねえのかアంతは」

「俺が普通に呼び出して素直に来るとは思えなくてな」

いつまでもキザったらしいその態度にエミーリオはガシガシと頭を乱暴に搔く。

「で？何の用だよ」

言いたいことは山ほどあるが、今は本題を聞くのが先だ。

先ほどからずっと黙っている彼女、ポーラと一緒にいるのも気になる。

「いったら？ここからは本格的に家庭教師してやる。お前ら二人をな」

「!?」

「！」

確かに、入院していた時、リボーンは家庭教師を引き受けるとそういつていた。

が。

「二人？」

そう、てつきり。いやどう考えてもエミーリオ一人の家庭教師だとばかり思っていたが。

隣をちらと見ると、ポーラもまた驚いているようで目を真ん丸に見開いている。

「そうだ。お前らはまだまだ未熟だからな。マンツーマンで教えてもらうと思うなよ」

どこまでも上から目線に腹が立つがリボーンがそういうならそうなのだろう。

なにせ、彼はエミーリオの家庭教師なのだ。彼のいうことはそれすなわちすべてが正義になる。

「なんだ？やけに素直だな。もっと突っかかってくるかとおもった

が。案外、敗北を知って殊勝になったか？」

「んなんじやねえよ。つか、元々僕は素直だ」

直属の上司になるというのなら、その命令には従おう。いつもと同じ。なんら変わりはない。

「そうか。そっちは？」

リボーンはポーラの方に向きなおし、意思を尋ねる。

「勿論、あの最強のヒットマンに教えてもらえるならなんでも」

ポーラはそこで今日初めて声を出した。透き通るようにまっすぐに、なんの雑念もそこには混じっていない。

その言葉に、リボーンは小さい笑みをこぼすだけ。言葉はない。

「つうか、なんでよりによってコイツと一緒になんだよ。なあ？」

話は終わったとばかりに、立ち去ろうとするリボーンにエミーリオはようやく一つの不満を垂らす。

「……………」

てつきり、ポーラも同様に不満を垂らす、もしくは騒がしく突っかかっていくものかと思っていたのだが、帰ってきたのは無言のシカトのみ。

「……………」

拍子抜けを食らったようにエミーリオは首を傾げた。

そんなエミーリオのことなど視界に入っていないかのようにポーラはさっさと部屋を後にしてしまう。

「……………」

そんなポーラの態度が気に食わなかったのだろう。額に青筋を浮かべてエミーリオは拳を固める。

「フツ。仲良くやってんじやねえか」

「どこがだー！」

コイツは一体どこに目をつければ今のが仲良くしているように見えるんだ？本気でわからん。

ポーラへの怒りがリボーンに向いたところで、リボーンは「ああ、そうだ」と一つ付け加える。

「修行の場所は、もう決めてある。早速明日からそこに行っておけよ」
そういつて渡されたのは住所が書かれた紙切れが一つ。
どうやらここで修業が始まるらしい。

成す術がなかったあの戦い。辛うじて追い返したものの、それは勝利とは言い難く。

あの奇跡のような力がなければエミールオたちは確実に皆殺しだった。

固めた拳を再度握りしめて。

長い入院生活、ただ黙って寝ていたわけではない。

何度も頭の中でシミュレーションして、悔しさを、ムカつきを、忘れないように心に刻んだ。

さあ、ここから一矢報いてやろうじゃねえか。

珍しく前向きにそう決意しながら、紙切れをぐしゃりと握りつぶした。

「で？なんでそれがここになるんですかねえー」

広がる絶景。雄大な自然。立ち昇る白い湯気。琥珀色の温泉。

そう、エミールオは今温泉に来ていた。

「いやー、いい湯だな。楽ー」

「そうだなー。集ー。やっぱ露天風呂は格別だなー」

さらに詳しくいえば、エミールオ一行は、といったほうが正しいが。「ほらー、お前もそんなところ突っ立ってないでこっち入れよー、マジ気持ちいいぞー」

一条楽だけでなく、舞子集までいやがる。

しかも当の本人であるリボーンはここにはいない。

本当にリボーンのことを考えていることがわからない。これがなんの修行だっというのか。

まさかこの温泉に特別な効能がある。ということだろうか。炎の出力を上げる、みたいな？

「さて、そろそろ温泉の醍醐味を味わうとしますかー」

「醍醐味ってなんだよ集」

「そりゃきまってるじゃん。のぞきだよ！の・ぞ・きー」

「やめろって!!」

ここにきていたのは一条と舞子だけでなく、なぜか春や小咲姉妹、風、橘万理花、桐崎千棘までいやがる。

本当に、何を考えているのやら。エミーリオにはその先端すら見えない。

少しだけ考え込んだエミーリオは不意に馬鹿らしくなって考えるのをやめた。

ちゃぽんと右足を湯につけて、じんわりと体全体があつたまつていくのを感じる。

やがて全身がお湯につかると、意識もしていないのに「あゝ」と声が出る。

「はは、おっさんみたいだな」

「やかましい」

聞かれていたのかと、若干の恥ずかしさを隠すように湯に浸かる。

こうしてただぼーっと空を眺めていると一体全体僕は何をしているのだろうか、考えると殺したくなってくるので思考を無理やり違う方向に向かっていく。

「つか、お前はよく平気だな。家があんななつたっというのによ」

エミーリオは一条楽に疑問をぶつける。

自分の家が戦場になったのだ、加えて一撃でスクアーロに気絶させられたことは男としてはやはり応えるというものだろう。

だというのに、この男はもうヘラヘラと何事もなかったかのように笑っている。

まったくもって理解できない。

「ん？ああ、家のことなら心配すんな。すぐ直ったし、誰も死ななかつたしな」

快活な笑顔でそう言う一条楽。

心配していると思っっているのかこいつは。ていうか疑問とか沸かぬえのか。とんだおめでた野郎だな。

呆れてものも言えないエミーリオはとりあえず肩までお湯に浸かった。

「なんでこう僕の周りはムカツクやつばっかなんだ」

ブクブクと勢いで顔を半分まで沈ませ、そう呟くエミーリオ。

「ていうか、俺はお前のほうが心配だぜ」

「あ？」

急に何を言い出すんだとエミーリオの声は不機嫌さを隠すこともない。

「ちゃんと健康に気を使ってるか？肌白いとはおもってたけど、本当に病気とかじゃぬえだろうな」

ああ、そういうこと。

普段は目立たないようにこれでも白い服を着てごまかすとか長袖シャツを着るとか、些細には隠してきたが。

ここは温泉。つまり裸一丁だ。隠すも何もない。

「ん？本当だ。でもよー楽。意外とエミーリオって筋肉あるぜ」

「それ、俺も思った」

うわー、うぜー。えっぐいうぜー。

ただでさえ余計な心配されてイラついてんのに、こうも体を凝視されちゃ休まるもんも休まらない。

「普段どうやって体鍛えてんの？」

「何食ったらそんな体白くなるん？」

質問攻めに遭うエミーリオ。

「ああ！しつこい！！てめらに答えるもんなんぎ一つもぬえよ！」

たまらずエミーリオは温泉から上がった。ただっぴろい露天風呂がなぜか狭く感じる。

「あ、悪かったよー」

一条楽と舞子集の軽い謝罪を無視しつつ、エミーリオは一人脱衣場の扉を後ろ手に閉めた。

「つたくよー。冗談じゃねえぜ」

ブツブツと文句を言いながら、エミーリオは貸出無料の浴衣にそでを通す。

修行だと思っていたエミーリオは当然着替えなんて持つてきていない。

本当ならこんな浮かれた格好なぞしたくはないが、郷に入っては郷に従えという言葉もある。

なににせよ諦めるのは得意だ。

「……あ」

タオルを首にかけ、喉が渴いたので自販機にでもとのれんをくぐるとそこには丁度同じタイミングで出てきたポーラ。

ああそうだ、忘れていた。当然こいつだっているのだ。

心なしか多少やつれている気がする。

大方同じように質問攻めにでもあつて早々と退場してきたのだろう。

「――、」

フイト、あからさまに視線を外しつかつかとエミーリオの横を素通りする。

ムカ。

先ほどのストレスも相まってより一層その無視に腹が立つエミーリオ。

「おいこらー！なんなんだよ昨日から露骨に無視しやがって」

思わずポーラの右手を掴む。

「……離して」

「言いたいことあんなら言えよ」

「別にないわよ！離してよ！」

まったくもって自分がなぜこんなにもヒートアップしているのかわからない。きつと日頃のストレスの蓄積だろうとは思うが。

「……………」

じつとポーラの目を見つめる。さつきから逸らされまくっているのが気に食わなくて。

「痛いって言ってるのよ！」

「エミ君……………」

大声をだしていたからだろうか、心配そうな表情を抱えた春が持っていたタオルをぼさりと落とした。

「何やってるのバカバカ！エミ君は女の子の暴力を振るうようなひとじゃないと思ってたのに！一条先輩みたいな！」

「いたた！ちよ！ま！なに!？」

何を勘違いしているか知らんが、顔を真っ赤にさせた春がポコポコとエミリーリオをタコ殴りにしている。

「せっかくリボン君が退院パーティーに温泉を勧めてくれたのに——！」

「はあ!?なんじゃそりゃ！」

初耳な情報に耳を疑うし、そりゃいったいどういうことだと問いただしたいが。

「あーおいこらー！」

その隙を逃さないのはポーラだ。

腕を引つpegがしたかと思うと、ダッシュで逃げて行ってしまった。「くそっ」

もやもやしたままポーラの背中を目で追う。一体なんだというのだろうか、このもやもやもポーラのあの態度も。

「つかいつまで殴ってんだてめーは！」

「うわああん！エミ君がグレたー！」

泣きじゃくりなおも回す腕を止めない春に深いため息をつきながら。

「ああくそ、こなきやよかつたぜまったく」
後悔の念に埋もれていくエミリーリオであった。

一方その頃、並盛のとある山奥。

「押忍！今日から稽古をつけていただくことになりました！鶴誠士郎です！よろしくお願いいたします！」

軍服姿に身を包んだ鶴が直立不動で敬礼しながら自己紹介をしていた。

なぜなら。

「声の大きさは合格点だなコラ！」

コロネロ。元アルコバレーノであり、青色のおしやぶりを持っていた男。

迷彩柄の軍服に身を包んだ彼の体格は中学生くらいにもかかわらず、持っている風格は猛者のそれである。

「リボーンが珍しく頼み事するから何かと試ってみれば・・・」

ガチガチに緊張している鶴を見て、コロネロは笑みをこぼす。

「久々に鍛えがいのありそうな奴だぜ、コラ！」

T o b e c o n t i

n u e d .

標的23 In formation (修行中)

「オラオラオラ！動きが鈍ってきてるぜ！！コラ！！」

「はい！！」

並盛のとある山奥で鷓征士郎と特訓しているのはコロネロ。

「この程度の銃弾も避けられないようじゃまだただぜ！コラ！」

「くっ！！」

鷓の頭上から降り注ぐのは銃弾の雨あられ。

遙か頭上、見晴らしのよい丘の上からコロネロはマシンガンを連射

していた。

「数分前」

「よし、お前を鍛えることはやぶさかではないぞ。コラ」

「あ、ありがとうございます！！」

目の前には最強の軍人と名高いコロネロ。鷓は軍人ではないにしろ、その名は色々な界限で耳にしている。

特に銃火器の扱いにおいて彼の右に出る者はいないだろう。と。

その名声と確かな実力に密かに憧れと敬意を持っていた鷓は、偶然とはいえ今日会えることに非常に緊張していた。

それはもうガチガチになるほどに。

「ただし、やるからには弱音も反論も一切認めない。超スパルタでいくぞ！コラ」

「はい！」

どう見ても自分と同じくらいの年頃にしか見えないコロネロに完全に鷓はすくみあがっていた。

今まで自分を鍛えてくれたのは幼少の頃からクロードのみであり、そもそもほかの人に指示を仰ぐということも初めてなのだ。

それに最強のヒットマン、リボーンにコロネロを紹介され腑抜けたところは見せられない。

色々な条件が重なり、鷓はかつて経験したことがないほどに緊張していた。

自覚なきほどに。

「よし、それじゃあ早速始めるか。コラ」

コロネロの合図とともに修業が開始されるも。

そんな緊張じゃ上手く体を動かせるはずもなく。

「はあ．．．はあ．．．はあ」

「．．．．．」

地べたに無様に這いつくばって呼吸を乱している鵜をコロネロはどうしたものかと思下ろしていた。

「お前の事情はよく聞いてないけどな。そんなんじゃ先が思いやられるぜ。コラ」

当然、鵜だつて理解している。

こんな機会など滅多にないことを。自分が恵まれていることを。だからこそ結果を出さなければいけないことを。

そしてなにより。

もう二度と大切なものを失わないように、今よりもっと力をつけなければならぬことを。

けれどそう思えば思うほど、動けば動くほど。相反するように体は言うことを聞いてくれない。

もう傷はいえたはずなのに。どこも痛いところはないのに。

「少し休憩だ。コラ」

「い、いえ！まだやれます！もう少し続けさせてください！」

鵜はコロネロに反論する。自分はまだやれる。こんなものではないのだと。

しかし。

「言っただけだぜ。〃反論は認めない〃と」

「．．．．．はい」

鵜は目に見えてしよげているが、それでも素直にコロネロに従う。「どうしたもんかな」

コロネロは頭をガシガシと乱暴に搔いてため息をつく。

すじは悪くない。どころか良い。軍人、暗殺者、格闘家。様々な達人を見てきたコロネロ、人を見る目はあると自負している。

目の前の彼女は、鍛えればそうした達人達とも対等にやりあえる可能性は秘めている。

が、その可能性が花開くのかどうかはまた違った話だ。なにも、戦闘に限った話ではない。

スポーツでも勉強でも、才能を生かしきれないことなんて多々ある。

(けど、この俺が指導してやってるんだ。出来ませんでしたじゃ許さないぜ、コラ)

木陰で休んでいる鵜を見ながら、コロネロはそう感じていた。

そして、それが数分前の出来事。

本当に少しの休憩を挟んで、コロネロと鵜の特訓は再開していた。

「ぐっ……うう!!」

休むことない銃撃に鵜の体力もそろそろ限界だ。

足は鉛のように重く、肺は燃えるように熱い。

頭は思考を停止し、口の中は砂漠のように枯れていた。

それでも、それでも動くことはやめない。完全に立ち止まることだけはしたくなかった。

一刻も早く、誰よりも強くならなければきつとお嬢を守ることはできないだろうと。

その一心で。

「よし！とりあえず基礎体力は申し分ないようだな。コラ！」

そのコロネロの一言と共に銃撃が止む。

「たはー」

やっと一息つけると、鵜はその場に倒れこんだ。

汗で前髪は額に引っ付き、長袖のシャツを腕捲りしてもなお、体の熱は逃げてはくれない。

肺は空気を欲しがり、心臓は今にも飛び出しそうで、呼吸は短く早い。

今まで鍛えてきた自負はあった。サボっていたつもりも、手を抜い

たこともない。

けれど、その修行のどれもとは今のは違う。

何が違うのか、それは明白だ。

「ほら、水分補給はちゃんとしとけよ。コラ」

「あ、ありがとうございます」

それは緊張感。

憧れのコロネロを前にしている、という緊張感ではない。

いや、最初に書いたようにそれもあつたが体を必死に動かしているうちにそれは上書きされていた。

消えた、というよりは上書きされた。

そしてでは何に上書きされたのかといえば。

もしかしたら、本当に殺されるのではないかという緊張感にだ。

クロードとの特訓も、それなりに緊張感があつたが。

しかしそれはまだ優しいものだったのだと鵜は今更ながらに気づいた。

一歩間違えば本当に死ぬかもしれない。その思いがどれほど体に重くのしかかってくるか。

それは自分で考えているよりも遥かに重い。

けれども。

鵜とて今までぬるま湯のような平和に浸っていたわけではない。

戦場の悲惨さを、戦闘の無慈悲さを。

知らないわけではない。

「もう一回。お願いします」

それでも足りなかった。あの金髪ティアラ王子には手も足も出なかった。

足りないのだ。きっと、何もかもが。

頭を下げて、鵜は息が整つたと同時にコロネロに頼み込んだ。

「おいおい、まだ体力戻ってないだろ。コラ」

コロネロは目を見開いて窘める。あれほどの銃撃をかわし続けるのは精神的にも体力的にも辛いはずだ。

ちよつと寝転がったくらいで回復する程度のことではない。

「いえ、もう大丈夫です。それよりも、早く続きを」
とてもじゃないが、コロネロにはそうは見えない。コロネロをだませるほどに彼女の嘘はうまくなかった。

ただのバカなら戦場ではいの一番に死んでいく。
見込み違いだったか。

そんな思いを念頭に置きながら、コロネロは口を開いた。
「どうしてそんなに急ごうとする？まだ修業は始まったばかりかだぜ？
コラ」

鵜が焦っていることなど誰が見ても明らかだ。その理由をコロネロは知りたかった。

「……急ごうとしているわけではないんです」

鵜はそんなコロネロの問いかけに静かに答える。

「ただ、今のままじゃあいつらがもう一度来た時、私はお嬢を守れないんです」

段々と言葉尻に心が灯っていく。

「ヴァリアーに勝つには、今のままじゃダメなんです」

ヴァリアー。あいつらの底なしのような強さ、きつとあの戦いでは本気を見ることがすらなかったあいつら。

そんな化け物みたいな連中に勝つには、並大抵では敵わない。

自分を鍛えてくれる師は、並大抵から大きく外れた大物だ。

だったらもうあとは、自分が頑張るだけでいい。シンプルで実に頑張りがいのある状況じゃないか。

「そうか、ヴァリアーか……」

コロネロはその名前を聞いて、何か思うことがあるのか思案顔になる。

「よし、お前の理由はよくわかったぞコラ！となれば俺も生半可な気持じゃお前に応えられないな」

コロネロは、鵜の顔を上げさせて言葉を続ける。

「もし、自分のためつー理由だったら俺はお前の家庭教師を降りてた。だが、お前の理由は“死ぬ気”に値する理由だった」

「死ぬ気？」

聞きなれぬ言葉に、つい鵜はオウム返しの疑問を口にする。

「ああ、敵から大事な人を守りたいのなら。ましてやその敵がヴァリアーだってんなら。修行方法を変えないとな。コラ」

コロネロの笑みに鵜は言葉の半分も理解できていなかったが、次のコロネロの一言で鵜の不安は吹っ飛んだ。

「だから、これからは俺がお前の家庭教師だ。よろしくな」

「——はい！師匠!!」

先ほどまでの暗い顔はもう鵜にはない。

少しの会話と、インターバルを経て、より密接に修行は再開を迎えた。

そしてそんな師弟関係が結ばれているころ。

こちらもある山奥。並盛とは少し離れていた。

「くそっ、歩きづらいつたらねえぜ」

山中を道の整備もされておらず正に自然に囲まれた山をエミーリオは登っていた。

「……きやー!」

「はは、やっぱ家に帰って勉強でもしてれば良かったんじゃないの?」

ポーラとともに。

温泉から数日後。今度は本当にリボンからの手紙で修行の日時と場所が伝えられた。

それがこの山。ポーラと共にこの山頂に行くのがリボンからの指令である。

そんなポーラが足を滑らせ、小さな悲鳴を上げたのをエミーリオは嘲笑するように笑った。

この山は所々道が整備されていない険しい山で、一步踏み外せば即奈落の底へと叩き落されるだろう。

「・・・・・・・・・・」

そんなことは百も承知だろうポーラは、エミーリオの嘲笑も無視してまるで自分のほうが早く歩けるとばかりにズンズンと先に行ってしまう。

「あんにやろお」

ビキビキと額の血管を浮き上がらせるエミーリオのそんな姿もここ何日かでもう見飽きた。

元々そこまで二人はしやべっていなかったのだが、ポーラが勝手にライバル視していたのがこれまでの二人の関係だった。

そこにあのヘルリング争奪戦を経て、ポーラの心境に変化があったのだろう。今まで突っかかっていたのが嘘のようにポーラはエミーリオを無視していた。

それがどうにも彼は気に入らなくて。たまに挑発しては無視されてイラつくという日々を過ごしている。

今回も同じように、ポーラはズンズンと山奥の奥に進んでいた。

それに負けじとエミーリオもすぐに追いついてはポーラを抜いた。

「ふっ・・・」

振り向き様にこれ見よがしにドヤ顔をするエミーリオ。

「~~~~~!!」

とても腹が立った。そう顔に書いてあるポーラはさらに歩くスピードを上げ再度エミーリオを抜き返す。

「フツ」

短い笑い。意趣返しのようにその笑いを返すポーラはほくそ笑んでいた。

「ああ!?!」

その笑いを見るや否やすぐに追いつき、追い越すエミーリオ。

今度は笑いを返す暇もなく、すぐにポーラも追いつき追い越す。

そして今度はエミーリオが。という風に追い越し追い越されのデットヒートを繰り返していた二人だが。

「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・・・くっそ・・・・・・・・・・きつ」

思ったよりも山登りというのはハードだったらしく、加えて余計なレースによりペース配分も乱された二人は山頂の地べたに座り込んでいた。

「なんだ、二人とも情けないぞ。これくらいで息が上がってちやな」
そんな二人のもとにきつと最初からそこで待ち受けていたのだからリボーンが声をかける。

「うる・・・せえつ」

上下する肩と同時に声を吐き出すエミーリオと、息も絶え絶えながらなんとかエミーリオより先に立とうとするポーラ。

そんなポーラの意図にエミーリオも即座に気づき、彼もまた整っていない呼吸のままに立ち上がろうとする。

「ぐっ」「あつ」

小さい呼吸が二人同時に口から漏れる。

「どっち!?!」

「・・・息びったりだな。お前ら」

どちらが先に立ち上がったのか、第三者のリボーンに同時に尋ねるさまを見て、リボーンはニヒルに口角を上げる。

「俺の方が先に手が地面から離れた」

「はあ!?!私の方が先に背筋を伸ばしたわ!私の勝ちね!」

そんなリボーンを無視して二人は勝手にヒートしてしまう。

が、途中で普通にしゃべっていたことに気付いたのか、ポーラは「あ」という風に口を紡ぐ。

「ん?なんだお前ら。まだ仲直りしてなかったのか」

「つか最初から仲良くねえよ」

リボーンの問いに間髪入れずに否定するエミーリオ。

「まあいい。どのみち、これから二人には行動を共にしてもらおうからな」

「はあ!?!」

またもやシンクロして異議を唱える二人。

「意味が分かりません!なんでコイツと!!」

「おいおい!それはこっちのセリフだね!なんでコイツと!?!」

リボーンはその言葉の意味を問いかける二人だが、帰ってくるのは冷たい事実のみ。

「いいか。お前らに足りないものは圧倒的に協調性だ」

心当たりがあるのか、二人ともその言葉に押し黙る。

「あの戦いで感じたはずだぞ、一人じゃ限界だつてな」

「はっ。そうか？結局、俺一人くらいしか活躍してねえじゃねえか」

「なによ。一番ボロボロだったたくせに」

「負けっぱなしでボロボロだった奴よりマシだね」

「なに・・・ふん」

「ああ、また黙んのかよ」

「おい、ちよつとうるせえぞ」

低い声。重いその雰囲気二人、というか主に喋っていたエミーリオが黙る。

「つたく。お前らまさか一人で強くなる気か？」

リボーンの間いは二人ともに考えるまでもなかったようで。

「たりめーだ」

「はい」

間髪入れずに答えるその目には強い意志が宿っていた。

「そうか、まあそれでやってみればいい」

リボーンは諦めたのか、それとも最初から説得などしていなかったのか。

なんとなく後者のような気が、エミーリオはしていたがとにかくあっさり引き下がった。

「多少休憩したら、早速修業を始めるからな」

リボーンはそう言うとして一人で山を下りて行った。

「いや、登った意味は？」

そう呟いたエミーリオの言葉にはやまびこすら帰ってこない。

こう言っては矛盾しているようだが、別にエミーリオは是が非でも一人で強くならなければいけない理由はない。

それならそもそもリボーンに指示を仰いでいる時点でダメな気がする。

ではなぜそんなことを言っているのかといえば。

「んっんっんっ。ぶはっ」

休憩と言われて即座に水を飲みに行ったポーラに尽きる。

あれに頼るのだけは御免だ。末代まで調子に乗られる気がする。

強くなれば何でもよかったのに、他人なんぞにこんなにかかを思うことは初めてだ。

ふと、そんなことを思った。

登ってきたルートから反対方向に少し降りた場所。

今までとは少し景色が違い、多少開けた場所に出る。

そしてその中央に鎮座しているのは大きな崖。

数十メートルはありそうな崖が天高くそびえていた。

「ここで、お前らに朗報だ」

「登れっていうんだろ？」

「ええ!？」

リボーンの手を待たずしてエミーリオは口を開く。

その彼の言葉にポーラは驚いた風に声を上げたが。

「……ここは、今のボンゴレ十代目が特訓した場所でもある。お前らにできるかな？」

リボーンは今までずっとただじっと過ごしてきたわけではない。

家庭教師をやるか、その判断として二人を今までじっと観察してきた。

当然、なにでやる気を出すかは把握している。

「……フーン」

そしてリボーンの思惑通り、一人は目の色が変わった。

「ちよつと！正気!?命綱も無しにあんな崖登れるわけないじゃない
！」

「じゃあお前はそこで指加えてみてろよ」

スタスタと気の迷いなど見せず、彼は崖のほうへと歩いて行った。

「~~~~!!もう！ホントバカ!!」

そしてもう一人の目の色も変わる。エミリーオがやるとなれば、
ポーラがやらないわけがなかった。

「フツ。ま、ほんとはもうちつと小さい崖だったがな」

そんなリボーンの呟きも二人の耳には入っていない。

二人の背中を見守るリボーンは被っている黒のハットを指で押し
上げて。

「修行の第一段階。スタートだな」

そう、呟いた声も当然、彼らの耳には届かない。

To be continued.

標的24 Segno di risoluzio
ne (覚悟の印)

「ねえ、あれさあ・・・」

「どういうことなんだろうね」

「なにしたんだよあいつら」

「喧嘩じゃねえの」

聞こえてんだよヒソヒソ話が。

クラスメイトからの好奇の視線と、怯えるような声を一身に受け止めているエミリーリオは内心で毒づく。

教室は授業が始まる前の喧騒とは少しだけ毛色が違う空気だ。

その空気を醸し出しているのはまず間違いないエミリーリオであり。

そして。

「ねえ、大丈夫？ポーラちゃん」

「どうしたのそのケガ」

春と風、二人に心配されているポーラだろう。

「あーもう！大丈夫って言うてるでしょ!?鬱陶しいのよ!」

そんな態度を受けるのが嫌なのだろう。一際大きな声で否定するポーラ。その体にはこれでもかというくらいに包帯が巻かれており、時折覗く生傷がそれが嘘じゃないことを証明する。

それはエミリーリオもまた同様であり、その状態が異常すぎるので教室は二人が入ってきたときから騒然としていた。

「え、えつと。エミリーリオのその怪我・・・」

「ああ?」

「ひえっ!」

特にこの一コマに集約されているように、エミリーリオの凄みに気おされ何も会話できない空気が一番の重苦しい原因だろう。

「はーい、授業始めますよー。ってなにそれ?」

先生が入るや否や、開口一番に尋ねる。当然だろうが。

「ああ、気にしないで。授業に支障は出ないようにするから」

「……右に同じくー」

いかにもだるそうに答えるエミーリオと、毅然と振る舞うポーラ。「そ、そっか。うん、大丈夫ならいいんだー」

いかにも関わりたくないという意思がダダ漏れな教師にそれはそれでどうなんだと思うクラスメイト一同だったが、藪から出てくるものが蛇以上のものだったら敵わないのでそつとしておくことにした。

そして、ポーラの言う通り重症のまま二人は普通に授業を乗り切ったのであった。

「ん、んー」

「はっ。もう疲れたのかよダセエなあ」

くわーつと大きく伸びをしたポーラの腕がエミーリオの言葉とともにピタリと止まる。

「あーら？それにしては私よりも包帯の量が多いこと」

嘲笑全開で嘲るポーラの顔に、エミーリオはぐつと言葉が詰まる。

実際、ポーラよりも怪我が多いのは一目でわかるほどだった。

「……上等だ。今日ではめえより上に行ってやるよ」

「おほほ、冗談はその包帯だけにしてよね」

「ちっ！行くぞおらー！」

「命令しないでよ!!」

二人はズンズンと放課後のチャイムが鳴り終わるや否やどこかへと消えていく。

「ねえ。風ちゃん。二人ともどこに行くんだらうね」

「さあ？案外仲良くゲームセンターでも行ってるんじゃない？それより今日は春の家で遊ぶんでしょ？」

「うん……エミー君とポーラちゃんも誘おうと思ってたのになあ」

二人が消えていった背中を寂しそうに見つめる春に。

「また今度、誘えるわよ」

少しばかりの嫉妬を覚えながら、風はそう言った。

「ぜえはあぜえはあ」

「ぜえはあぜえはあ」

二人の必死な呼吸がピタリと合っている。この山奥に来るだけで、変な意地の張り合いをしているせいで無駄に体力を使っている二人である。

加えて、今から行うのは命綱無しの崖のぼりである。上を見上げるだけで首が痛くなってくるようだ。

「よし、今日もやるか」

「い、良いわねえ。ちょうど体動かしたかったの」

ガクブルの膝でなんとか立つ二人。よろけながら、手を、指を、崖の一端にかけ始める。

それがここ一週間ほどの二人の習慣だった。

「おめえら、バカなのか？」

四日目に放ったリボーンの一音である。毎日小競り合いを続ける二人に呆れた調子で言い放った。

「ああ!? バカじゃねえよ。ただコイツが無駄に突っかかってくるだけだ」

まるでポーラがいなければそんな事しないと聞いたげに。

「なによー! いつも仕掛けてくるのはアナタでしょ!？」

そんなポーラも同様に、エミリーリオがいなければもつと大人しいと言いたげだ。

(まあ、互いに負けたくない相手がいるってのは重要、か)

ぎゃーすかぎゃーすかと言いが再開したところで、リボーンは静かな木陰へと移動しながらそう思った。

それから二人は飽きもせず毎日同じように小競り合いを繰り返してきているが。

「思ったより、進みが早いな」

見上げるリボーンの頭上の遥か上。

崖の半分以上の場所に、二人はいた。

小さな窪みに手をはめ、足をかける。また同じような窪みを探しては、を繰り返して登っている。

現時点で、一歩リードしているのはポーラのほうだ。体一つ分ほどの僅かな差だがそれでも勝っている。

「きゃー！」

油断した、わけではないだろうが。ポーラが足場としていた窪みが崩れポーラの体は真つ逆さまに落ちていく。

「くうー！」

何度も体を打ち付けて、なんとか途中でナイフをブレーキ替わりに地面に突撃だけは避けられた。

こうして体に傷をつけるものの、未だに二人とも地面に接触したことはない。

「なんとしても地面にだけはつくもんか！」

「はっ！無様に転がってればいいものを！」

悪役のような残酷な笑みを携えながら、上を目指すエミーリオ。にしても、ただの崖のぼりがここまできついとは思わなかった。

さっさと死ぬ気の炎を使った訓練をしろよと思わないでもないエミーリオだが、どうせ肉体を鍛えてないと死ぬ気の炎をいくら操れたって無意味。と言われるのは目に見えている。

それくらいに状況分析はできた。どの道、全部が足りないと実感したところだ。どこからだつて強くなつてやるよ。

「あり？」

雑念に囚われ、ガラガラガラと今まで登ってきたほぼ全てをフイにってしまうエミーリオ。

「あ、アブネエ」

すんでのところでなんとか地面に接触だけは回避したものの、また

「一からやり直しだ。」

「あつはっはー！下ばかり見るからそうなるのよー！」

「にやろおー！」

爆笑しているポーラに追いつこうと、エミリーオはまたスピードを上げた。

「あ、あと一歩・・・！」

「はあ、あああああ！」

日も落ち、辺りが真っ赤に染まってきたころ。

ほぼ同時に、崖の頂上の淵に手をかけた二人。

青筋を浮かべながら、なんとか自身の体を地面へと投げ出す。

「や、やった・・・」

「・・・はは、やったわ」

この一週間、毎日同じようにこの崖へと向かっていったのだ。達成感や充実感といったものもひとしおだろう。

そう、感極まってつい二人でハイタッチしてしまうくらいにはテンションが上がっても仕方がない。

「・・・う／＼／＼」

「な、なによ／＼／＼」

我に返ったときの二人の顔の赤さは、夕陽のせいではないことは確かだ。

「さて、青春のページを刻んでいるところ悪いが、修行は第二段階へと移行するぞ」

「全然悪くないですからー早くいってもらって大丈夫です!!」

「ていうか、刻んでねえしそもそも青春なんて名前の本なんざ持ってねえっつの」

「そうか、まあいい」

案外早く引き下がるリボン。その真意はこの修行を通じて協調性を身につけてほしいというリボンの願いからだったが、押し付けすぎるとこの二人は引いてしまうので程々に、が重要なのだ。

「次からはいいよ、死ぬ気の炎を使った特訓だ」

キタキタキタ！

内心で欲しいおもちゃが手に入った子供のようにはしゃぐエミリーオ。内心で、というからにはそれが表面には表れてないということを目指す。

ぐつたりと地面に横たわり、最後の体力もハイタッチで全部持ったかされた。

全身が痺れてるし、足にも手にも力が入らない。辛うじて動いているのは肺だけで、他のすべては何より休息を欲していた。

横を見ると、ポーラも同様で。

最早言い合いをする気すら起きない。

「・・・と、言いたいところだが、こりや明日以降だな」

んなことねえよまだできる。

そう強がることもできないエミリーオは、舌打ちしながら素直に従うしかない。

「ああ、もう・・・」

歯噛みするポーラは、悔しがることくらいはできたようだ。

「もうちよつとで・・・アンタに勝てたのに」

そつちかよ。炎の特訓ができなくて悔しがってたんじやねえのかよ。

呆れたように呟くエミリーオ。

勿論、心の中で。

「あー」

どさりと、家の畳に倒れこむエミーリオ。なんとか家まで帰ってこれたがもう一步も動けない自身がある。

ここ一週間の疲れというやつが、一気に襲ってきた感覚。このまま泥のように眠りたい。

「大丈夫？」

目線を上にあげると、なぜだかエプロン姿のクローム髑髏。

「ああ」

言葉になっていない声を上げて、手をひらひらさせることで意思表示するエミーリオに、クロームの表情から心配の色はさらに濃くなる。

「お風呂、入ってるよ」

「うあー」

ついに、手もだらりと下げられ、完全に寝る気だ。

クロームを頼みますよ。

脳内で響くその六道骸の言葉に、反吐を吐きながらエミーリオは深い眠りについた。

「んあ？」

ピーチクパーチク、小鳥のさええずる声で起きるエミーリオは爆発したような寝ぐせの髪と寝ぼけた頭で考えた。

えつとー？昨日は何をしてこうなったんでしたっけ？

「朝ご飯、できてるよ」

「うん」

味噌汁のいい香り、ご飯の温かさを感じながら食卓を囲む。

ズズズと味噌汁をすすり、ご飯を口に運ぶ。

ふと、我に返った。

なんか、これ新婚みたいだな。

「……ふざけんな！」

突発的な大声に、クロームはビクウ！と肩を震わせた。

「ああ、いや。悪い」

自分の考えに自分で寒気がした。ないない。ありえない。

くそ、なんか、こつちに来てから調子狂うことばつかだ。自分もつと環境に順応するタイプだと思っていたのに。

はあ、と一つ大きな息を吐いてから納豆をかきこむ。

「修行、大丈夫？」

「ああ？ああ、まあな」

日に日に体を巻き付ける包帯は増えていくばかりで、心配そうなクロームの表情はそれに比例するように増していく。

「私に、出来ることある？」

こう聞いてくるが増えてきた。が、返答は変わらずに。

「ねえよ」

こう返すのが最早、定例と化していた。

「そう」

そして、沈黙が支配する。

二人の間に会話がないことなど珍しくないのに、そんな沈黙はなぜだか胃がキリキリする。

「……飯」

「え？」

ぼそりと呟くエミーリオの声に、クロームは俯いていた顔を上げる。

「飯、作ってくれりゃあそれでいい」

クロームがくるまで、エミーリオのキッチンにはもうひどいものだった。

カップ麺、コンビニ弁当、十秒チャージ、e t c.

残骸という残骸が置きっぱなしで、リビングに物がない分それはより一層目立った。

だから、クロームが来てからまともな食事にありつけるというのはそれだけでマシなのだ。

口にしたことはなかったし、するつもりもなかった。
はずなのだが。

ああ、くそ。

赤くなっていると自覚する顔を隠しながらエミーリオは悪態をつく。

これもそれも、アイツらのせいだ。

アイツらがいるからこっちまでぬるま湯に浸ってしまおう。変えられちゃう。

望んでなんかないのに。

「さて、それじゃこれから修業は第二段階に入る」

傷も癒えていない中、リボーンは二人の前でそう告げる。場所は相変わらずの山奥だ。

流石に疲れたのか、二人は今のところ会話を交わしてはいない。いざごぎもちよつかいも出していかないが、その代わり今まであった連帯感みたいなものも綺麗さっぱりなくなっていた。

(・・・なにかあったのか?)

思惑とは少しずれたリボーンの胸中は複雑だが、仲違いをしているというわけでもなさそうだ。

ただ単に疲れているだけだろうとあたりを付けたリボーンは修行の説明に入る。

「いいか、これからは死ぬ気の炎を扱う。特にポーラはその扱いに不慣れなところもあるだろうからな」

ポーラは名指しされ、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「ポーラ、死ぬ気の炎についてはクロームからレクチャーを受けているはずだな」

いつの間にか、そういうことになっていたらしい。エミーリオは知らなかったが、大したことでもないとかぶりを振った。

「はい。死ぬ気の炎は7つの種類があつて、晴、嵐、雨、雷、雲、霧、

大空の七つです」

前回の対戦からルツスーリアに聞かされた情報と、入院中にクロームに補足してもらった情報。

それこそ死ぬ気で頭に叩き込んだ。

「よし、じゃあその死ぬ気の炎を発現させる条件は？」

だからこそ、リボーンは問う。それこそが一番重要だと言うように。

「覚悟」

そしてポーラもまた同様に即座に答えた。それが一番重要だと言うように。

「フン。知識は大丈夫なようだな」

安心したのか、不敵な笑みを浮かべるリボーンにフンスつとドヤ顔をエミーリオに向けるポーラ。

「それじゃあまらずは、リングに炎を灯すところからだな」

だが、エミーリオはそんなポーラに気づくことなくリボーンの言葉に耳を傾けていた。

いや、傾けているわけでもない。何か、考え事をしているかのようにはぼーっとしていると云った方が正しい。

先のポーラの表情も無視というよりは本当に気づいていないように。

「ねえ、ちよわっ！」

「とりあえずリングはこちらで用意したぞ。まずはお前が何の属性なのかを知る必要があるからな」

ポーラがそんなエミーリオを不審に思い、声を掛けようとした矢先、七つのリングが飛んでくる。

慌ててキャッチすると、既にエミーリオは隣にはおらずスタスタと木陰のほうへと移動していた。

「なによ、もう・・・」

そんなエミーリオに不満げな表情をするも。

「どうした？」

「い、いえ！なんでもありません！」

時間は待つてはくれない。

即座にリングを一つ嵌めて、ふーつと一つ息を吐く。

エミリーオのことは今は無視だ。自分のことに集中しなきや。

そうひたすらに念じて。

「……ダメだな。次」

どうやら晴は反応がなかったらしい。

次に渡されたのは雨のリング。

……これもダメ。

なんてことを六回繰り返した。

「な、なんで出来ないのよお！」

もう半泣きスレスレ状態のポーラに厳しい目線を送るリボン。

「死ぬ気の炎は誰にでも灯せるわけじゃねえ。相応の覚悟が必要だ。

が、今手にしているリングはその中でも最低ランク。出力こそない

が、一番灯しやすいリングだ」

その説明で、さらにポーラの心に追い打ちをかけるリボン。

そして、ポーラは最後のリングを手にする。

真っ赤に染まったその石が、心なしか重く感じる。

「うぐぐぐ」

これで灯せなかったら。そう思うと、指にはめるのすら恐ろしい。

覚悟、そう、覚悟だ。

落ち着いて、深呼吸をして。もう一度大切なものを確認するように

思い出す。

負けたくないと思った気持ちを、あの時の胃がひっくり返るような

悔しさを。

そして——、いや、いい。これはやめだ。

少しの恥ずかしさを隠すように、ポーラはリングをはめた。

「——っ!!」

「フツ。出たな」

真っ赤な炎。嵐の炎が、リングを明るく照らしている。

覚悟が、伝わったらしい。

(あ、あの子たちのおかげ?)

その炎を見ながら、脳内に映し出されている二人の女の子。
炎よりも真っ赤になった顔を見ながら、リボーンは満足げに笑っ
た。

そして、修業は過酷さを増していく。

T o b e c o n

t i n u e d .

標的25 Notte di intrigo (陰謀
渦巻く月夜)

修行を初めて、早一か月が過ぎた。

梅雨の停滞した空気はいつの間にか過ぎ去り、教室の中にはこれから来る夏に浮かれている、そんな空気が充満していた。

「なあ、楽。どの競技にでるよ」

「そうだなー、どうせ運動部の連中が張り切るんだろ？余ったやつでいいよ俺は」

二年のクラスは今現在、一学期を締めくくる最大の学校行事。体育祭に向けて話し合いが行われていた。

「いいのかよー、そんなこと言つて。二人三脚とかにでもエントリーすれば小野寺と一緒にになれるかもしれないぜ」

ニマニマと一条楽をからかう舞子集。

「なっ！何言いだすんだよ！」

そんな集の期待通りに顔を真っ赤にしながら楽は否定する。

大体、仮にエントリーしたとして小野寺が二人三脚にエントリーするとは限らないし、仮に小野寺がエントリーしたとしてパートナーになるとは思えないし仮に。

「うるせえー！そんなのは話術でどうにでもするんだよ!!」

「んなことできてたら苦労しねえんだよ！」

大声で反発する集に楽も自然と声が大きくなる。

そのことに気づいてチラと視線を後ろにずらす。

「、」
「!」

(よかった・・・)

どうやら小野寺は友達と談笑しているようで、こちらには気づいていないらしい。

ほっと一息ついて、元凶である友人を締め上げる。

「ぐ、ぐえっ。わ、悪かったって」

まったくもってこの悪友はこれだから油断ならないのだ。

悪いといいつつ顔のにやけは消えていない悪友に、楽は呆れつつ時間に進んでいった。

そして、昼休み。

「ダーリン、ちよつと」

「なんだよハニー」

持参した弁当を早々に食べ終え、手持ち無沙汰になっていたころ桐崎千棘に呼ばれた。

「いいからちよつと来て」

「??」

要領を得ない千棘に困惑しながらも、おしどり夫婦で通っている楽に断る選択肢はない。

「おい、どこに行くんだよ」

階段を下っていく千棘の背中からは物々しいオーラが。

一体全体なんだというのだろうか。心当たりなんか一ミリもない楽は変に不安になりながら、それでもついていくしかない。

階段を下り、一つ下の階、一年生の教室が並ぶ階に降り立った千棘。どうやら用事はここにあるらしい。

「あ、いた」

その中の教室の一つを覗き込む千棘は、傍から見て大分不審だが。

「だーから、何だっつてんだよ」

イマイチ状況が掴めずにいる楽に、ようやく千棘は説明する気になっただけらしい。

「ほら、エミーとポーラちゃん。最近ずっとケガしてるみたいなの」「……………え?それだけ?」

もつとなんか、こう重大な秘密を打ち明けられるのかと身構えていた楽は千棘の言葉に目を白黒させる。

ドアからこっそり覗いている千棘の後頭部しか見えないが、どうや

ら心配しているらしいことは伝わってくる。

「それだけってなによ。変でしょ？あんなケガ、毎日増えてるのよ？」

「あー、大丈夫じゃねえの？」

楽はポリポリと頭を搔きながらポロリと言葉をこぼす。

「・・・何を根拠に言ってるわけ？」

ジロリと睨みながら、顔を上げる千棘。

「根拠ってほど、確かじゃねえけど」

そう前置きして、楽は言葉を続ける。

「でも、アイツなら大丈夫な気がするんだ」

さほど、話をしたわけでもない。昔から知っているというわけでもない。

それでも、なんとなくそう感じる。

安心感とも信頼とも違うのだろうか。

「なにそれ、男同士の友情ってやつ？」

「いや、そーいうのとも違うんだけどな」

そんな不確かなものを口にするのもどうかとも思ったが、でも本当にそう思うのだから仕方ない。

千棘は不満そうだが。

モソモソと一人で弁当を食っているエミリーオと、不満を言いながら人に囲まれているポーラ。

楽が心配しているのはどちらかというところ、こっちのほうだろう、友達とか、いるのかな。と。

「まあ、学校に来てる内は大丈夫なんじゃねえの？」

「・・・そうかな」

心配そうな千棘の顔は解消されることはないが、それでも先ほどまでの焦りは消えたらしい。

「なんだよ。やけに気にかけてるじゃねえか」

それが楽には引つかかる。

そこまでの接点があったのだろうか。と。

「そりゃそうでしょ。私達、助けてもらったんだから」

「あ、それもそうか」

もうあの襲撃から二カ月以上が経とうとしている。

記憶は薄れ、ただの日常に戻っている今。あれが本当に現実にあつたことなのかすら楽にはよくわからなくなっていた。

組の人間にいくら尋ねても返ってくる言葉は変わらず「そんなことはない」という。

楽自身も襲撃後すぐに気絶させられたこともあつて、どこか現実感に欠けていた。

しかし、それは千棘も同様なはずで。

「私、ずっと保健室で寝てた。自分の家が襲われてるって言うのに、呑気に」

「それは、仕方ないだろ」

硬い表情の千棘。最近はそのような表情が増えてきた。

何かを考えているような、そんな表情が。

「ううん。そんなことない。私がつと強ければ、みんなを助けられたかもしれない」

「強ければって・・・」

ギヤングの娘とはいえ、千棘は普通の女の子だ。きつとそれを彼女の父親も願っているだろう。

そんな普通の女の子の、きつとそれは願いではないのだろう。

「鶯にだけ、あんな思いをさせずに済んだ」

ああ、そうか。

目の前の彼女の本意はそこにあるのだろう。唯一無二の親友に一人で辛い思いをさせてしまったと。

それがわかったからこそ、楽はそれ以上何も言えずに視線をエミーリオたちに戻す。

相も変わらず、エミーリオの周囲だけ流れる空気が違う。

「お嬢！こんな所におりましたか」

そうこうしてるうちに、どうやら昼休みが終わったようだ。時間を知らせるチャイムが鳴り響くのと同時に、鶯が現れる。

「鶯！あんたまたまた怪我が増えてんじやない！」

千棘の大きな声がチャイムに負けず劣らず響く。

それも無理なからう。エミーリオやポーラに遜色ないレベルで、鷓もまた体はボロボロだ。

「大丈夫です！お嬢！それもこれも修行の中での勲章ですから！」
なぜだか、鷓は誇らしそうに自らの胸を張る。

修行とは一体何なのか、詳しいことは知らない。楽は一人疎外感を感じることがない。

「さあ、教室へと戻りましょう」

鷓の声からは、確かに悲壮感や悲痛なものは感じられない。

むしろ、瞳はキラキラと生き生きとしているようにすら感じられた。

「う、うん」

「どうした？」

そんな楽の感覚と千棘だってそうは変わらないはずだ。楽なんかよりもよっぽど長く一緒にいるはずなのだから。

「楽。私、決めたわ」

急な言葉に、なにを？と思わないわけでもない。楽だったが。

「そっか」

千棘の顔を見て、楽はそれ以上何も言わない。

思うところがないなんてそんなわけはないのだ。

きつと、自分なんかよりもよっぽど――。

「で、あいつらいったい何しに来たんだ」

最後の一口をパクリと食べ終わり、エミーリオは呟く。

「さあ？大方手のかかる後輩でも見に来たんじゃないかしら？」

そんなエミーリオの言葉に皮肉を混ぜて投げ返すのはポーラ。

「ああ、お前とかな」

「あんたのことよ」

間髪入れずに返す彼女に、エミーリオはむっとしながら。

やがて今日もまた変わらぬ放課後がやってくる。

・
・
・

もはや、山登りにも慣れ息切れすることもなくなったころ。

「おい、またいねえんだけど。アイツ」

「仕方ないわ。自主練しとけてことかもしれないし」

ここ二、三日。崖登りを成功し、ようやく次のステップ。つまりは“死ぬ気の炎”を操る修行に入るのだとばかり思っていたのに。

実際蓋を開けてみれば、それを言い渡されたのはポーラのみでありエミーリオは手持ち無沙汰そのものである。

だからだろうか、ポーラは満足気な表情で言い渡された練習メニューをこなしている。

それもまた、エミーリオのフラストレーションを溜める原因となっていた。

といっても、ポーラがしているのは初歩の初歩。まずは炎の出力を安定させることに重きを置いている。

すぐに追い越されることはないだろうが。このままでは時間の問題なのは火を見るよりも明らかだ。

「……」

このままここにおいても意味はないと判断したのか、くるりと体を反転させエミーリオはその場を後にした。

「な、なによ。ちよつとばかり勝ち誇っただけじゃない」

怒っていると思ったのか、少し声のトーンを落としたポーラの声はエミーリオには届かなかったが。

「おい、クローム」

「……どうしたの？」

エミーリオは山を降りたその足で自身の家へと帰ってきていた。クロームは驚いた顔で同居人を迎える。

エプロン姿におたまをもって味噌汁の味見をしている姿に一瞬エミーリオは期待が揺らいだが、構わずクロームに問いかけた。

「リングが手に入る所、どこか知らないか？」

リボンが修行場に姿を見せないのには心当たりがある。

それは、ポーラが嵐の炎を顕現させた時のことだ――

「そういえば、お前はなんで炎を使わなかったんだ」

リボンが心底不思議だと言いたげな顔でエミーリオに質問した。

林の木陰の下は思いのほか涼しく、修行で火照った体に吹く風が気持ちいい。

「はあ？わけわかんねえこと言ってるじゃねえぞ」

しかし、この二人の間にそんな爽やかさなどは微塵もなく。

そんなリボンに半ギレでエミーリオは口を開く。

「「テメエら」が俺からリングと匣を没収したんだろうが」

今更何を言ってるんだ。そうエミーリオは付け足して抗議する。

「……何の話だ。それは」

あ？と、エミーリオはそこでようやくリボンの顔を見上げた。

その顔はハットによって隠れてはいるが、動揺しているらしいことは感じ取れる。

「何の話って――」

そんなめつたにない反応に驚きつつもエミーリオは素直に、事の顛末を話す。

「日本に来る前に、ボスに没収された。だと？」

「ああ、そうだよ。こっちにはリングと匣の技術はまだ伝わってないから――理由でな」

が、結局はそれも嘘っぱちだったわけだが。

だがしかし、これはいったいどうゆうことなのだろうか。てっきりエミーリオは上の命令。つまり沢田綱吉の命令でそうしたのだとばかり思っていた。

エミーリオが所属していたのはファミリーの中でも末端の下部組織。上の命令がなければ動くこともできないそんな組織のはずだ。

「……」

考え込む仕草をしているリポーンをみて、ようやく今エミーリオの中にも疑問が広がっていった。

なぜ、自分からリングと匣を没収したのか。

いやそもそも始まりからたどれば可笑しなことだらけだ。

沢田綱吉からの突然の手紙。それまではあったことももちろん連絡を取ったことなんて一度たりともなかったのに。

確かに、十年前。謎の地震と共に妙な記憶が流れてきたことはあった。

そこでは十年後に白蘭という敵を倒すために沢田綱吉たちと共闘していた自分がいた。

が、それは現実とはならず、事実として白蘭なんていう敵の存在は現れず。裏社会を取り仕切っていたのは巨大なボンゴレだ。

だというのに、沢田綱吉はわざわざ連絡を取ろうとしてきた。まるで旧知の友人のように。

中身が白紙だったということにも、もっと気を配るべきなのだ。普段ならばもっと慎重に取り扱っていたはずなのに。

しかも、それを渡してきたのはどのどいつだった？あのヴァリアーだぞ。

独立暗殺部隊ヴァリアー。よほどのことがないかぎりボンゴレの本部と手を組むなどない。それが、手紙を渡すというお使いをするだろうか。

思えば思うほど、考えれば考えるほどに疑問はわいてくる。

最初から疑問だったのは依頼内容だ。わざわざ下部組織の一殺し屋でしかないエミーリオになぜ日本まで飛ばして、こんな高校生どうしの恋愛をどうにかしろだなんて。

それに、何度か送ったレポートにしたって返信などまるでない。催促の連絡も、依頼の方向性も何もかもだ。

「……やめた」

そこまでいって、エミールは思考を放棄した。

大体が自分の仕事ではない。そう割り切って。

末端の自分がすることは、疑問を思うことではなく。任務に忠実であることだ。善悪を考えるのではなく、いかに確実に遂行するかを考えることなのだ。

それが組織であり、それが社会だ。

彼のように学もなければ道徳も、倫理観すらない人間が考えることではない。

「——おい、ポーラ」

リボーンが、遠くの木陰で休息しているポーラを呼ぶ。

そうだ。そういう仕事は、きつとりボーンのような人間がするべきなのだ。適材適所という言葉があるように、人間与えられた役割というものがある。

エミールは人形。与えられた命令のみ動き、操る糸のさきに手がないと動くことすら許されないそんな人形。

だから、今は本当に居心地が悪い。

与えられた命令が投げやりで。半端な自由を与えられているのが気持ち悪くてしょうがない。いつそ、無様に横たわっていたほうが楽なほかに。

地面には揺れる影がゆらゆらとたゆたっていた——。

——そんなこともあって、エミールはきつさとりリングを手に入れたほうが早いと方法を模索していた。

リングがないことの不便さは身をもって知ったところだ。

そも、こつちに技術が伝わっていないからという理由ならとうの昔に破綻している。

「リングって・・・四丁目の角の雑貨屋さんなら知ってるけど」

「いやそういうリングじゃねえよ！」

アクセサリーじゃなく死ぬ気の炎を灯せるリングを教えてくださいって言ってんだよ。普通わかんたら。

「んだよ。知らねえならいいよ」

前になにかできることはないかと言われたことを気にかけていた。

わけではないのかもしれないが、クロームは頼られたことが素直にうれしくて。

「うん、知ってる」

「・・・なら最初からそう言え」

頼ることの恥ずかしさを隠すように前髪を抑えながらそう発するエミリーオに「ごめん」とクロームは謝ってから。

エプロンを脱いで、コンロの火を止めた。

何をしているのかとエミリーオはポカンとしていると。

「じゃ、行く」

「え？今から？」

外を見る。暗くはないが、もうすぐ夕焼けこやけでも聞こえてきそうな太陽の位置だ。

「早いほうがいいでしょ？」

「まあ、そりゃ・・・」

いつまたヴァリアーたちが襲ってくるとも限らないのだ。ヘルリングを狙っている以上は。

「で、どこにいくんだよ」

「うーんと、マッドサイエンティスト？」

「は？」

よくわからない答えに白黒となりながら。

また一人、エミリーオは出会うことになる。

世紀のマッドサイエンティストに。

e d .

T o b e c o n t i n u

標的26 「Anello conscatola
(リングと匣)」

「帰れ」

開口一番に、目の前のマッドサイエンティスト。

“ヴェルデ”は冷たく言い放った。

「おいこら、こちとらこんな偏狭な地までわざわざ出向いてやったんだ。話くらい聞いてくれたっていいだろ」

クロームに連れられ、寝台列車に乗り半日かけてようやくたどり着いたのはここがどこかともわからぬ田舎町。

その何もない土地で一つ、ひどく異質な真っ白い研究室にどうやらお目当ての人物はいるようだった。

並盛と違い、土地があまりまくっているこの場所で一体全体どんな奴がいるのかと思えば。

無精ひげに丸眼鏡。とても高校生とは思えない老けた顔。身なりに気を遣うということを知らない白衣は所々汚れが目立つ。

そんな男だった。

「そちらの事情などは知らんよ。私はもう金輪際六道骸とは関わらないと決めているのだ」

強い意志を感じるその口調には過去になにかあったのだろうと予測するのはそう難くない。

まあ、クロームが連れてこれるようなツテなんて六道骸関係しかないだろうということも、想像に難くなかったわけだが。

連れてくる以上は、てつきり良好な関係なのだとエミリーオは思っていた。

「そこを、なんとか。お願いします」

クロームが健気に頭を下げるものの、ヴェルデの目はそれを捉えてすらいらない。顕微鏡で何かを覗くことに集中しているようだ。

まあ、六道骸のことを少しでも知っているのなら良好な関係を築け

る人間などそうはいないだろう。

だから、エミーリオは早々に見切りをつけてクロームに小声で話す。

「なあ、もう手っ取り早く力づくでいいんじゃないの？ 科学者なんて頭でっかち放っておいてよ」

「だめ」

が、エミーリオの提案は聞いてはもらえずクロームは首を縦には振らない。

「聞こえているぞ野蛮人」

「うげ」

一ミリもこちらに顔を向けなくせに、耳だけはあざとく情報収集をしていたようだ。

ばつが悪い表情のエミーリオは、こうなったら包み隠さずいくしかない。

「アンタが何者かは知らんが、こちとらリングが欲しいだけだっつもの。金ならあるから、さっさと出してくんね?」

とても頼みごとをするような人の態度ではなかったが、それでも一応取引の体は保つ。

「ふん。金など腐るほどある。本当にリングがほしいなら、相手の情報くらい仕入れておくんだな」

ぐつ。とヴェルデの言葉に奥歯をかむエミーリオ。

「……もういい！ 別にてめえにどうしてももらわなきゃならないわけじゃねえんだ」

言い返す言葉もなく、荒げた声とともに、どう見てもイラつくエミーリオはさっさとその場を後にしようとする扉に手をかける。

まったく、とんだ無駄足だった。最近、いや。この日本に来てから乱されることばかりだ。

そんなことばかり考える。今までに経験ないほどに。

「だが」

扉を開こうとした瞬間。ヴェルデの声がそれを遮った。

「ああ!?! なんだよ」

そんなヴェルデに、まるで狂犬のようなギラついた瞳で返す。

「金などいらんが、研究者にとっては情報が命だ。情報が全てを制するのだ」

その後ろ姿は相変わらずこちらを見もしないが、どうやら交渉する余地くらいはありそうだ。

「・・・まわりくどいことすんじゃねえよ。どうでもいいけど」

口とは裏腹に開いた扉を今一度閉めるくらいの言葉ではあったので。

エミーリオはイラつきながらも一度ヴェルデに向き合う。

とはいえ。

「なんだ。なんの情報が欲しいんだよ。俺みたいなたつ端からよお」

こんな偏屈研究者の欲しがる情報なんぞわかるわけもないし、加えて先程のやり取りで多少口が捻くれる。

「ふん。それを提供するのがそちらの仕事だろう」

そして口が捻かれているのはヴェルデも同じ。

「チツ」

と舌打ちして、エミーリオは頭を動かした。

先も言った通り研究者が欲しがる情報などエミーリオにはわからないし、そもそもコイツがなんの研究をしているのかすらわからない。情報だというのなら、こちらのほうが不足している。

そこで改めて、エミーリオは研究室の中を見渡した。

なんに使うのか見当もつかない機材が大中小様々な形で置かれている。

「あ？なんだこれ」

その中で、一際異彩を放っていたのが今エミーリオが手にしている物体だ。

匣兵器、のような代物だがいかんせん真つ白すぎてどの属性の匣兵器なのかわからない。

何にでも例外というものはあるものの、普通わかりやすいように属性の色と匣兵器の色は共通している。

意図的に隠している、というわけでもなく元から色が付いていない真つ白い匣兵器だ。

これが何なのか、わかるわけもないエミーリオだが、どうやら観察した意味くらいはあったようだ。

「ヘルリング」

試しに仮説を検証するべくボソリとエミーリオは呟いた。

「・・・ほう」

どうやらエミーリオの立てた仮説は正しかったらしく。

あれほど無反応だったヴェルデの瞳の奥が怪しく光る。

今手元にある匣兵器がなんなのか、エミーリオには知る由もないが見てみればチラホラと匣兵器はそこかしこに転がっている。

匣兵器はそれ一つでは何の意味もない。リングとワンセットで初めてその効果を発揮するのだ。

と、いうことは。

そのリングの中でもきわめて強力できわめて特異な“ヘルリング”。

それに興味がない。なんてことは可能性としては低いはずだ。

「ヘルリングのことを何か知っているのかね？」

「さあ、どうだろうな」

形成逆転といったところか、意地の悪い笑みを浮かべながらエミーリオはヴェルデの次の言葉を待つ。

「取引とは信用第一だ。君が野蛮じゃないという証拠を見せてくれないと、情報は渡せないね」

くっ。

今度はエミーリオの顔が歪む番だった。是が非でも先に情報を得ないと渡さない気らしい。

信用なんざこちらにもないが、このまま硬直状態に入ったところで被害を被るのはエミーリオのほうだろう。

第一印象というのは大事だというが、まさかこんなところでそれらしい知らされることになるとは。

頭で文句を言いながら、エミーリオは渋々口を開く。

「行方不明になってた最後のヘルリングをリボーンが持つてんだよ」

「なに!?リボーンが!？」

大きな音を立てて椅子から立ち上がるヴェルデ。どうやら想像以上にヘルリングに関心があったらしい。

「そうか・・・ヘルリングが。フッフ」

気味の悪い笑みを浮かべて、ヴェルデは思考の世界へとダイブしている。

「おい、信用云々はどこいった?」

「フン。そう焦らずともブツは逃げんよ」

エミーリオの言葉に即座に返す当たり、思考はすでに終了していたらしい。

変人も奇人もある程度見てきたつもりだが、目の前の人間はその中でもぶつちぎりだ。

「この裏手に雑木林がある。その奥地にひっそりとした洞窟があるのだ」

またもや研究に体は戻って、ヴェルデはそれだけを口にする。

どうやら行って来いということらしい。はつきりと口にしないのはその性格ゆえか。

「・・・めんどいなあ」

ずっとリングだけ渡してくれりやあいんだよ。なんでまた移動しなきゃならんだ。

ぶつくさ文句を言いつつも、それでもいくしかないのが現状で。

「いっ」

クロームに短く促されながら、エミーリオは目的地へとトトロト歩いたのであった。

「んで？本当にここにあんだろーな。リングは」

「わからない」

素直にヴェルデの言う通り洞窟とやらに来たが。

雑木林のなかに、ひととき大きく目立つ洞窟。

こんな所に本当にリングがあるとは到底思えない。胡散臭さがMAXだ。

そこまでわかっていながら、それでもここに頼るしかないというのがエミリーオにはどうも腹立たしい。

「まあいいさ。なけりやあないで、あのヤローをぶっ飛ばすだけだしな」

そう言いながらエミリーオは躊躇なく洞窟の中へと入っていく。

「あ、待って」

そんなエミリーオの後を付いてくるクロームに。

「いいよ。そこで待ってれば。リング取りに行くだけなんだし」

「だめ。危ないから」

クロームの瞳は強くこちらを見返している。どうやら引き下がるつもりはないようだ。

洞窟内をちらと覗いてみても、大した奥行もないようだし“ヴェルデ”が何か仕掛けていない限りは危険なことなどないと思うのだが。

「はあ。勝手にしろ」

それを説得する労力を考えれば、諦めたほうが早い。

・
・
・

洞窟内を数分歩いた所で、エミリーオは口を開く。

「今更だけどき。本当にリングなんてもんがあんの？こんなところに」

中は入り口で見た時よりは広く。しゃがんでいた体勢も今は二人が普通に歩ける広さにはなってきた。

どうやら下るにつれて深く広くなっていくらしい。

「わからない」

まあ、クロームがわかつているのならわざわざあんな奴に会いには
いかないが。

そんなことはエミーリオにだってわかつてる。

わかっているにしても聞いてしまうのは、この洞窟。そしてヴェルデの
不気味さからか。

「……おお」

洞窟を進んで数分。

キラキラとした細やかな光に照らされた大空洞が眼前に広がって
いた。

「どうやら、ここが行き止まりらしいな」

大空洞の先に道はなく、壁を叩くも重厚な感触が返ってくるばかり
だ。壁の向こうには道はない。

振り返っても一本道だったわけで、ここが終着点なのは誰が見ても
明らかといえよう。

と、なると。

「おいおいおい、マジでねえじゃねえかリングなんて」

口ではとやかに言いつつも、内心では期待していた彼はそれを裏切
られ呆氣にとられる。

これじゃあボスに頼んでリングを返してもらったほうが早かった
んじゃないだろうか。そうだ、どうせ匣兵器だって結局は返してもらわ
なければならぬんだから、そっちのほうが好都合だったじゃない
か。

そう考えが及んでいたエミーリオは一瞬、完全に気を抜いていた。

「エミーリオ！後ろ!!」

「ん？———っ!」

リングを見つける緊張、洞窟という限定的シチュエーション 状況で行き止まりに
ぶち当たったこと。リングがないと知ったときの軽い脱力感。

その一瞬を狙われた。得体も知れない物体に。

思いつきり薙ぎ払われ、壁にたたきつけられる。天井から落ちる砂
ぼこりに洞窟が崩れやしないかとヒヤリとするくらいの余裕はまだ

エミーリオにはあった。

「くそっ！なんなんだ一体?!」

リングがない苛立ちと、修業が進まないもどかしさ。対してポーラの順調な仕上がりには沸く焦燥感。

様々な感情が入り乱れて、エミーリオは奥歯を噛む。

こんな時にどうすればいいかなんて、彼には分らなかつた。彼の人生は、それを教えてはくれなかつた。

だから、力に頼るしかない。感情のままに力をふるうしか選択肢がない。

予期せぬ敵の襲来に力の限り睨み付けるエミーリオはようやく敵の姿を視認した。

「サソリ?」

洞窟内をカサコソと動き回っているのはどうみてもサソリだ。ただし。

全長二メートル程の常軌を逸した強大なものだが。

「な、なんでこんなのが・・・」

クロームの疑問ももつともだが今はそんなことをゆっくり考察している暇はない。

「ぐっ——!」

このサソリ、図体の割には素早く。図体通りの力があるので攻撃をかわすので精一杯だ。

ヒット&アウェイで反撃する隙がない。

「せめて飛び道具があれば——!」

生憎とそう都合よくはないのがエミーリオの人生で、今あるのといえ、仕込んでいた短刀が二本のみ。

急だったことも、また、リングを貫いに行くだけということもあり武器の準備なんてロクにしていな。

「くっ!はあ!!」

それでもなんとか短刀二本で攻撃を凌ぐくらいはできるようだ。

「オラオラオラァ!どうした来いよ!串刺しにしてやるからよ!」

凌げるとはいってもリーチの問題は依然として片付いておらず、そ

のスピードと長い尻尾が厄介だ。

「クローム！お前は手を出すなよ！」

短刀をもう一度握り直し、まるで忍者のように柄を握る。

あいては巨大とはいえたかがサソリだ。その一匹狩れないんじやあ、スクアアロに勝つなど夢のまた夢だ。

それがわかつていいるからこそ、エミーリオの声は反響しクロームに届く。

「さて、と」

大声に驚いたのか、わけもなく動き回るサソリに向かい直して、エミーリオは思考を回転させる。

先程までとは違い、それは明確にこれまでの経験からくるものだったし、これまでの人生そのものだった。

「読めてんだよっ！」

天井を巡り一直線に向かってきたサソリに対し、平行線上に刃を入れる。

これまでの攻撃で分かったことは二つ。

一つ目は相手はただのサソリだということ。何か不思議な力を使ったり、ましてや“死ぬ気の炎”なんて使わない。

これならやりようはいくらでもある。手持ちの武器でだって十分だ。

そして二つ目。

「ちっ！固ってえな!!」

直線的な攻撃に刃を断ち入れるものの、そのどれもが致命傷とはいえない。難しい。

どうやら異常なのはその大きさだけではなく、表皮も相当にコーティングされているらしい。

が、それもさしたる問題ではない。

二つ目に分かったことは、このサソリは臆病であるということだ。

今も、攻撃してくるエミーリオから逃げようとカサカサ忙しく動き回っている。

が、唯一の出口である道をエミーリオが塞いでいる関係上、結局は

また排除しようと攻撃してくるのみだ。

絡め手を使うわけでも、複雑な動きをするわけでもない。スピードに惑わされそうになるが、その動きは単純明快だ。

「刺さった!!」

ならいくら早かろうが関係ない。その動線に合わせて刃を置いておくだけでいい。

と、言うほど簡単ではないはずだが、その動体視力とサソリについていける体力は紛れもなく修業の成果だろう。

本人は、そんな些細なことには気づいていないようだが。

「ギャアアアス！」

短刀が一本もろに腹に刺さったことで、初めて奇声のようなものを発するサソリ。

思わずサソリはそのまま仰向けに地面に倒れこんだ。

「おーおー、でけえ声で泣いちゃって」

耳をつんざくような嫌な音に顔をしかめながら、エミーリオは残るもう一本も突き刺し、引き裂く。

「~~~~!!」

声にならない声で、サソリは最後の抵抗を見せるが既に勝負は決している。

ユラユラと動く尻尾以外は。

「危ない!!」

今まで、エミーリオの言う通りにただ黙って見守っていたクロームだったが、その不穏な動きにいち早く槍で尻尾を薙ぎ払った。

壁にたたきつけられた尻尾の切れ端。その本体は今度こそズシン!という音を立てて倒れこむ。

「大丈夫だった?」

三つ又の槍を抱えたまま、クロームは心配そうな顔でエミーリオの髪をかき上げる。

「・・・邪魔すんな。あれくらい避けられたんだよ」

その手を強引に払いのけ、エミーリオは呻くように言った。

「ごめん」

そんな彼に謝るクロームを見て、ガリガリと頭をかくと。

「どつちにしろ、結局リングなんてねえじゃねえかよ。あの腐れ野郎どつきまわしてやる」

その怒りの方向を、マッドサイエンティストに向けたところでどこからともなく声が聞こえる。

『ほお。倒したのか、存外骨のある輩だったのかもしれないな』

「ああ?」

その声の主は、どこかで聞いたことのあるその声にキョロキョロとあたりを見まわしてしまう。

『ちなみにいうと、どつきまわすのはもう少し思慮深くなってからでも遅くはないぞ』

ああ、確信した。このどことなく人を小馬鹿にしたような声はヴェルデなのだ。

「……これか」

いつの間にか、ポケットに忍ばされていた小指大のスピーカー。どうやら研究所と繋がっているらしい。

「で? 思慮深くつつうのはどういう意味だ?」

『その辺りで光が細かく反射しているのがわかるだろう? どれでもいいから一つ取ってみたまえ』

どつかで見ているのかと疑いたくなるが、そんなことは今はどうでもいい。

瘻ではあるが、ヴェルデの言う通りキラキラ光る反射物を一つ掘り出してみる。

「石? って、まさかこれ」

『そう、そのまさかだ。リングの石のその原石だよ』

これが、死ぬ気の炎をともしリングの原石。

「いや待て。これをどーしろっつーんだよ! 俺がほしいのは原石じゃなくてリングそのものだったの!」

こんな手のひらサイズの原石があるなんて言われても、それをどうこうする技術などあるはずもない。

『そんなものは知らんよ。約束通り、私はリングを渡したからな』

どこの一休さんだ。この野郎、素直に渡してくるとは思ってたけどな。

にしても効率が悪すぎる。今度は何？これを加工してリングにしてくれるやつを探せって？どんな出来の悪いRPGだよ。

なんて、ため息をついていると、悪いことというのは重なるもので。

『ああ、そうだ』

終わったと思っていた通信がまだ続く。

「んだよ。もうお前に用はないんだよ」

『そうか、親切心で忠告してやろうと思ったのだがな』

「チツ。言えよ」

『先程倒した失敗作だがな、』 まだまだいるから心してかかるように
“ 『』

「・・・はい？」

意味がわからず、思わず素っ頓狂な声をあげてしまうエミリーリオだが。

数秒後、その真意がわかる。

「エミリーリオ、何か。聞こえない？」

「なんだっていう——」

クロームの声に振り向いたエミリーリオは、そこで目を真ん丸に見開いた。

天井から床から、何から何までびっしりと敷き詰められた巨大なサソリ群を目にして。

『いやはや、困っていたのだよ。次世代の匣兵器を作ろうとしていたのだがね。実験に失敗はつきもの、失敗作をそこに捨てていたらとんでもない量になってしまって。君たちが来てくれて助かった』

ヴェルデの声もはや届かない。

目の前の事実には、脳の処理演算はブレーカーが落ちる寸前だ。

「くそだらああああああ!!」

絶叫が洞窟内にこだまするのも、そう時間はかからないことだった。

そして、そんな大量発生した害虫駆除にエミリーオたちが精を出している頃。

「さて、仕事もひと段落だな。そろそろ行こうか。日本に」

「ええ、そうですね。 ” 十代目 ” 」

大きな運命の輪が、また一つ。
動き出していく。

T o b e c o n t i n u e d .

標的27 Feud (確執)

「それじゃあ、俺がいない間、留守は頼んだよ。ランボ」

「ええ、任せてください。それで？どこに行くんですしたっけ？」

「このアホ牛！何度も言っただろうが！」

「はは」

イタリヤのとある町のとある一室で。

裏社会を取り仕切っているそのボンゴレマファイアのボス。

沢田綱吉は出かける準備をして、牛柄のシャツが似合う天然パーマの男。ランボに笑いかけていた。

その隣には同じく出かける準備をした獄寺隼人が、鬼のような形相でランボに今一度今回の遠征の概要を話す。

「いいか！今回は俺だけじゃねえ、十代目もここを離れるんだ。その隙に動こうって輩がもしいたらお前が止めるんだぞ！」

「へいへい、わかってますよ。獄寺氏」

その気のない返事と顔にわなわなと拳を震わせる獄寺だったが、飛行機のフライトの時間もある。目の前のアホ牛に時間をかけてはいられない。

「大丈夫だよ。バジル君や、ラルたちもいるし。いざって時は連絡してくれるさ」

「・・・そうですね。アホ牛以外守護者がいないってのは不安ですが」

六道骸は信用なりませんしね、と付け加え獄寺は外に用意させた車に乗り込む。

「・・・」

六道骸、今の所目立った行動はしていないがどうも六道骸のファミリーが日本で動いているという情報もある。

真実のほどは確かではないにしろ、獄寺の言っただとおりにか疑わしいのは確かだ。

が、今回の遠征の目的はそこではない。

もっと、前から計画していたことなのだ。今変更も延期もできない。

そう思いなおして、綱吉も車に乗り込む。

「安全運転で行きますから安心して寝てください十代目！」

「あ、獄寺君が運転するんだ……」

「当然！他のやつらに十代目のお命をおいそれと預けさせるわけにはいきません！」

そうして一人の少年の運命を決めるカギを握った大人たちは。

遠く離れた故郷、日本へと帰ってくることになる。

一人の少女は強くなりたいと願っていた。

なにも出来なかったあの日から。

なにもわからなかったあの日から。

強くなりたいと、ただそれだけをずっと思っていた。

「本当に良いのですか？お嬢？」

「ええ。いつも鷓にやっているように。私にも稽古をつけて頂戴」

そんな少女の目の前には、いつものような強引な顔ではなく。珍しく困ったような表情で少女を見つめるクロードがいる。

そう、その少女たる桐崎千棘はクロードに頼み込んで、修行をつけてもらおうとしたのだ。

「鷓も、私の知らないところで頑張ってるんだ。もう、あんな思いはしたくないの」

千棘の真剣な表情に、クロードはしかし苦い返事を返す。

「お言葉ですが、お嬢。奴はきっと今お嬢を守るために、お嬢を傷つけたくないから頑張っているのでしょう。その思いを踏みにじってしまうのではないですか？」

厳しいことを言うクロード。

キラリと光るその目の奥に映る千棘は少しうつむいて。

「そんなのは見てればわかるわ。でも、それじゃあ私は嫌なの。自分だけが安全な場所で誰かが傷つくのを見てるだけなのは我慢ならぬいの」

再度見据えた両の目ははつきりとした意志を感じる。

クロードとしては鶯の気持ちと同じだ。大事な大事なこのギャングの一人娘にわざわざ危険なことをさせるわけにはいかない。

きつと力をつければ、いざという時に真つ先にこの人は先陣を切つてしまうだろう。

そういう人だ。

そうわかつている。

「はあ。わかりました。いいでしょう」

「ホント!? やった! ありがとうクロード!」

深いため息をついて、クロードはやや諦めた様子で了承した。

この勢いだと、きつと断つても自力で修行しようとするだろう。そうなるならまだこちらの監視下に置いておいたほうが安全か。

そう考えた結果だった。

「ただし」

クロードはそう大きな声で千棘をたしなめると、条件を出してきた。

「稽古をつけるのは、私ではありません。私が紹介する人物に頼みます。それでもいいなら、もう私は何も言いません」

「え、ええ!? クロードが鍛えてくれないの?」

その条件に多少は面食らったのか、しょんぼりとする千棘にぐつと奥歯を噛みしめるクロード。

（いけない! ここで甘やかしたら何の意味もない! お嬢の期待に添えなくなるぞ!）

涙をのんでクロードは言葉を続ける。

「い、いいですか。私ではお嬢のご期待には添えませんが」

「ええー? なんでよ? 私がクロードがいつて言つてんのに」

「ぐほっ」

先程から千棘が発する言葉の一つ一つがクロードの心にクリティカルヒットする。勿論、いい意味で。

だが、何度も言っているようにここで喜んではいけないのだ。

「んんっ。私では、お嬢を鍛えることができません。どうしても情と
いうものが出てきてしまいます」

「そんなこと言ったら、鶯だってそうじゃないの?」

「あれは、最初からそういう目的で接してありましたから。情は沸いても目的があるのです」

千棘とは違う、と暗に込めて。クロードはそのまま続けた。

「ですから、私ではない人物にお願いしないとお嬢の願いはかなえられません。ええ、大丈夫です。信頼できる人物ですから」

「うーん、クロードの言い分はわかったわ。納得もした。で?その信頼できる人物ってのは誰のことなの?」

当然沸くこの疑問にクロードはたった一言、簡潔に述べた。

「ボンゴレ晴れの守護者。笹川了平です」

そう、たった一言。

「エミー君。最近学校来てないね。体育祭の練習もあるのに」

「そうね・・・」

またかよあのバカ。

「え?」

気温が徐々に上がり段々と夏の訪れを感じさせようとしてくるこの季節。

夏服と冬服が入り混じるこの中途半端な教室にすでに半袖の春と、

いまだ長袖の風はエミリーリオのことについて話していた。

ぼそりといった風の言葉を聞き取れずに、春は聞き返す。

「それより次の授業移動教室でしょ？早く行こう？」

「え？あ、うん」

いつも通りの笑顔なのに風は一人で先に廊下を行ってしまふ。

いつもはべったりすぎるくらい一緒に行動しているのに。

「どうしたんだろ・・・？風ちゃん」

なんだかその妙な感覚に戸惑いながら、けれどその正体がわからない春は頭を悩ませるしかない。

「あ！ポーラちゃんは、何かわかる？」

「なんでアタシに聞くのよ」

いやそうなの、というよりは本当に困っているような顔でポーラはスタスタと春の横を素通りする。

そんなポーラに足早に追いつきながら、春は会話を続けた。

「だあって、ポーラちゃんが一番エミー君と仲いいでしょ？」

「はあ？」

今度は心底嫌そうに彼女は顔を歪ませる。

「誰が！誰と！仲いいですって!?!」

「えー？仲いいようー、いつも二人で帰ってたじゃん」

「あれはそんなんじゃない！って何回も言ったでしょ!?!」

春だけでなく、クラスメイトにも何度も言ったことを声を大にしてもう一度いうポーラ。

逆に言えばそれだけクラスに馴染んでいる証拠でもあるのだが。

エミリーリオと違って。

「じゃあ何してるの？」

「それは・・・」

「ほら、教えてくれないじゃん」

少々不貞腐れたのかぶーたれる春に、言葉が詰まりながらポーラだって心の中で叫ぶ。

（そりやそうでしょうよ！ヴァリアーがまた来たたら今度こそ死んじやう！そのために修行してるなんて・・・カツコ悪いじゃない！私はもっ

とスマートでいたいのに！)

次に来た時、颯爽とやっつけてこれが本当の実力だと思われるため。ポーラは苦渋を飲むしかない。

そんな心境を知る由もない春は一人歩きながら呟く。

「なんか、寂しいなあ」

その言葉はポーラには届いていた。

「はあ、まったく。あんた相当のお人好しね」

「ええ？そうかなあ？」

「そうよ、アタシやアイツみたいな面倒な人間の相手をしようと思うなんてアンタくらいよ」

「そうでもないよ？風ちゃんや一条先輩とか、他にもいっぱいいるじゃない」

「その中でもアンタは特によ」

「そうかなあ？と同じ言葉を呟いて、うーんと唸っている春を見てため息をつくポーラは。

「そうよ、ほんとお人好し」

立ち止まっている春にポーラはいう。

「でも、そういうの嫌いじゃないわ」

「・・・うん！」

暗くなっていた彼女の表情がみるみるうちに明るくなって。

それを狙っていたのか、ただ単に言いたいことを言ったのかは春にはわからなかったが。

でもその言葉は確実に春の心に届いていたのだった。

「そうだよね・・・よし、決めた」

そしてまた一人の少女が決意をする。

大勢の人間が、次々にそれぞれの気持ちを固めていく中。白に埋め尽くされた一人の少年は、何を思うのだろうか。

「で？ここがそのなんつったつけ？」

「タルボおじいさん」

「そうそう、そのじいさんがいるつっ—家だな」

白い少年。エミールオとクローム一行のリング獲得の旅はようやく終わりを迎えようとしている。

ヴェルデの下でリングの原石をゲットしたエミールオは各地を這いずり回って、ようやくそれを加工し研磨してくれるというじいさんの元へとたどり着いていた。

「本当にこれがリングになんのかよ」

ここまでたどり着いたからこそ、現実を振り返って心配になる。

ヴェルデが嘘をついていた、ただそれだけでこれまでの苦労は水の泡になる。

「たぶん・・・そう」

おまけに連れ添っているクロームがこの調子だ。

どこにも確定情報がないこの現状に不安を持つなどというほうが無理な話だ。

「つつても行くしかねえけど」

とはいえ、エミールオに選択肢はない。どの道行くしかないのだ。

歩を進めて、まるで廃墟のような家へと進んでいく。

「ごめんください」

おずおずと扉を開き、クロームの声が家に伝わる。

「——来ると思っておったよ」

そのボロボロの廃墟から現れたのは、まるでトサカのような頭に黒いバンダナで目を覆ったおじいさんだった。

どう見ても普通じゃないその恰好、随分と年をとっているように見えるし、来ると思ってたとはどういう意味だろうか。予知能力者だとか言わないよな。

ボケてんじゃないのかと疑いたくなる所作だが、エミールオは構わず口を開く。

「アンタが死ぬ気の炎のリングを精製できるタルボのじいさんでいいんだよな?」

「・・・いかにも。わしが彫金師のタルボじゃ」

しわがれた声によぼよぼの足腰、そのすべてから年齢を感じさせるじいさんはしかしはつきりとした対応でそう言った。

「そうかい、じゃあわかるよな? 僕らが何をしに来たのか」

「はて、何をしに来たのかのう?」

とぼけた様子でキッチンからお茶を汲みにいくじいさん。

そんなじいさんの言葉にエミーリオはまたかと天を仰ぐ。

ヴェルデといい、なんでこう速攻で目的だけを果たすような簡潔なやつがいないんだ。

「おじいちゃん、手伝う」

「おお、ありがとう」

そして一緒になって説得するはずのクロームもこのぎまだ。介護しに来たわけじゃねえんだぞ。

心の中の沸々としたものが湧き出てくるのを感じながらエミーリオはそれでも我慢して口を開く。

「・・・リングの原石を持ってきた。こいつを加工して使えるようにしれくれ」

できるだけ感情を殺して目的だけを簡潔に述べる。今まで当たり前前やってきたことのはずなのに、なぜかいやに疲れた。

「原石?」

するとじいさんは原石という単語に反応し、つかつかと足早にこちらにすり寄ってきた。

ちよいちよいと杖を振って。

「見せてみい」

と、いのでエミーリオは取り敢えず手に入れた原石を、七つ手のひらに乗せる。

「嵐、晴、雨、雷、雲、霧、そして大空。しめて七つのリングの原石だ」

手のひらに乗るほどの小石レベルの大きさの七色の石が七つ。

「・・・なるほど、これは確かにリングの原石じゃ」

おお、と、ここで初めてエミーリオは感嘆の声を漏らした。

なにせあのヴェルデの言葉のみでここまでできたのだ。半信半疑だったが今ようやく真実だという確証が得られた。

「で、これをリングにしてほしいと?」

じいさんはエミーリオの言葉を確かめるように繰り返す。

「ああ、そうだよ」

同じことを聞くなよ、そう顔にでているエミーリオだがなんとか言葉には表さないように気遣う。

そんなことをしている自分に気持ち悪さを感じながら。

「じゃ聞くがの、リングを手にしてお主はどうするつもりだ?」

「どうする、だあ?」

思えば、ここで既にエミーリオは限界だったのかもしれない。

今まで考えることもなく、ただ任務をこなして来ればよかった。ただ与えられたことをそれ以上でもそれ以下でもなくこなせばよかった。

考える必要がなかった。意味がなかった。

考えていたら、人なんて殺せなかったから。

だがどうだ?この任務に就いてから、日本に来てから。いやもつといえど春や風、一条楽や桐崎千棘と出会い関わっている内に知らず知らず考えてしまっていた。

その余裕ができてしまっていた。

なぜ?

そのシンプルな、それでいて答えの出ない問いを。

「リングを手に入れる、その目的じゃよ。それをただ、話せばよいのじゃ。?偽りなくな。なに、簡単じゃろう?」

きっと皆は普通にそれをやってきた。小さい頃から、だからもうこの年になってそれに悩むことはない。

「目的、って」

だけど、やってこなかった人間は、やってこなかったエミーリオは。どうすればいいのかなんて、わからない。

「んなもん、力がほしい。以外にあるかよ」

「ならば不合格じゃ。その答えではリングを作ることはできん」
「ああ!？」

エミーリオの答えは却下され、熱いお茶をすするタルボのじいさんに苛立ちを隠しきれなくなってくるエミーリオ。

「なんでそんなこと、見ず知らずのじいじいに言われなきやいけねえんだよ」

本当はわからなかった。リングを手にする目的なんて、不便だから、力がほしいから、それ以外には見つからなかった。

いやきつと、本当はそれだって自らの本物の願いではないのだ。それに気づいていないエミーリオは激しく動揺していた。

だって、それはエミーリオの人生を否定する言葉だ。

力づくで、それだけで生きてきたエミーリオの人生を真つ向から否定する言葉だ。

「とにかく、その先のものを見つけてこん限りはリングは渡せん」
「.....」

取り付く島もないじいさんに呆然とただ立ち尽くすエミーリオ。

こんな展開になるなんて、リングを手にしようと出掛けた夜からは想像していなかった。

たださくつと忘れ物を取りに行くような感覚だったのに、それがどうしてこうなった。

「.....あー、いや。もう。どうでも」

十秒ほどだっただろうか、そうしてドロドロと自分の体内を駆け巡る感情をそのままにしていたエミーリオは。

その一言で片づけて、生気のない任務に明け暮れていた日々のような瞳に戻る。

そうだ。元来自分は何にも執着しない人間だったのだ。リングを手にはできなかったからと言って何を落胆することがあるのか。

ただ、死が近づくというそれだけじゃないか。それだって自分にはどうでもいいことのはずだ。

「じゃ、世話になったな」

そう言い残して、なんの重みもなくなった。ここに入る時は微かに

あつたそれすら無くしてエミーリオは一人、ふらふらとその家を出て行った。

「まっつて、エミーリオ」

「よせ。いまは一人にしてやるのじゃ」

「でも、お爺さん」

駆け寄ろうとするクロームにタルボのじいさんが待ったをかける。

「なんでもかんでも寄り添えばいいというわけじゃない時もある。今は、少年が成長するために考える時間が必要じゃ」

ちやんと、考えていればよいがの。

そう付け足して、じいさんはゆったりと家の中を歩きだす。

「どこに行くの？」

「作業場じゃよ、こいつを彫金せないかんのでの」

ヒツヒツヒと甲高い笑い声を残して、どうやら地下にあるらしいそこに向かったタルボのじいさん。

「まったく、今時原石から持って来るやつがいるとはもう。あの沢田綱吉ですらリングの状態であつたというのに」

そう、笑い声が混じった言葉を残した。

「・・・頑張つて、エミーリオ」

そしてただ、そう呟くしかないクロームはいなくなったエミーリオがいた場所を。

いつまでも、いつまでも見つめていた。

やがて、誰かが何かを抱えたまま。

体育祭はやってくる。

To be continued.

a :」(序章が終わる時)

「体育祭だー！ー！ー！ー！！」

「うおおおおお！！」

「やるぞおおおおお！！」

「がんばるぞおおおおお！！」

「いやもう暑苦しい！静かにしな！男子共！」

並盛高校の一年生の教室ではジューズやらお菓子やらが机に一通り並べられていた。

外は快晴、放課後のゆるさはそこにはなく皆一応にやる気に満ち満ちている。

「まったくもう、なんでこう中身のない盛り上がりを見せれるのかしら。本当男子ってバカ」

見るからにキツチリしていそうな前髪を髪留めで留めた女の子は実行委員なのだろうか、騒ぎ立てる男子共を牽制しながら紙コップを片手にコホンと一つ咳払いをする。

「えー、体育祭も明日に迫りここまで皆で頑張ってきました。明日は悔いが残らないように精一杯、今日は騒ぎましょう！」

おー！という掛け声と共に前夜祭もどきの簡単な決起会は始まった。

皆が各々の友人たちと談笑する中で、二人の少女は窓際で黄昏ている。

「ううう、結局前日までエミ君来てくれなかった」

「仕方ないよ。来ない人のこと考えたって」

口を尖らせた春とそんな彼女を思いやる風。

二人のクラスメイトであるエミーリオは結局一度も体育祭に関する練習に参加してはいなかった。

元々人付き合いをする方ではなかったせいか、クラスでも彼を気に

留めていたのは彼女たちくらいで今もそのことに言及している人はいない。

「家まで行ったのにい、どこに行っちゃったんだろ？エミ君」

「……」

小さな風のため息を春は聞き洩らして、なお会話を続ける。

「せっかく決心したのになあ」

「……決心って、なにを？」

もうずっとこんな調子だ、エミーリオが学校に来なくなってから、もうずっと。

「えへへ、それはねえ。題して！エミ君とクラスメイトの輪繋いじやおうぜ！計画!!」

まるで妙案とでも言いたげに自信満々にいう彼女に微笑ましくなりながら「それで？」と風は先を促す。

「体育祭って、さ。やっぱり特別だと思うんだよね。学校入ってから一番最初のおつきいイベントだし。だから、エミ君が皆と仲良くできる機会じゃない？それを私たちでサポートしちやおうって計画よ！」

ふーん、と風は彼女の言葉を聞いてもテンションが上がらない。仰々しく発表した割には案外普通だとか、そもそも私“たち”ってなに？とか。アイツには余計なお節介だと思おうよとか。

色々と思うところはあるけれど。

でも、風は知っている。

それらすべてを例え自分が懇切丁寧に教えたって、きつと春は同じことをやるのだろうということ。

きつと彼のためを思って、考えて、そして行動に移してしまうのだろうか。

だから、なんだか負けた気になっているのだ。

だから、こんなにも面白くないのだ。

そして一番面白くないのは。

そんな彼女の献身も、そんな彼女の思いやりも。

何もかもに気付いていない、気付こうとしないエミーリオに対してが。

一番、腹が立つのだ。

「どう思う？風ちゃん」

「・・・いいんじゃない？春がしたいようにやれば」

だから仕方ない、多少投げやりな言い方になってしまうのも。

「そっか！」

春の笑顔を眩しいと感じてしまうのも。

もううんざりだった。

答えのない問いを繰り返すばかりで一行に事態は進行しない。

大体が土台無理な話だったのだ。いきなり畑の違う任務を任せられて、結局その任務だつてこなせてなどいない。

他人と関わることなどほとんどなかった彼にとって、それはとてつもなく重労働だった。

体ではなく心の。

そのくせ考えることをやめることはできず、関わることをやめることはできなかつた。

どちらだつてやろうと思えばできたはずなのに、続けるよりもやめるほうが簡単なはずなのに。

なぜ？

その問いだつてやっぱり答えは出ない。

「・・・疲れた」

夜遅く、結局一人で帰ってきたエミーリオは憔悴しきつた顔で家の前で佇む。

あとは鍵を取り出して家に帰って、布団にくるまって寝ればいい。

ああ、そうしよう。もうどうでもいいからただ、今は純粹に睡眠が欲しかった。

疲れた体を引きずって、外気にさらされた体を振り払って彼は扉に手をかける。

「あ?」

そこで気付いた。鍵がかかってなかったことに。

出るときに掛け忘れたのか、それとも先にクロームが帰っているのか。

もし後者だとしたら、嫌だな。

今はクロームだけじゃなく誰とも会いたくない。いや、今も。と言ったほうが正しいのか。

一人がよかった、一人でよかったのに。

そう、最初からケチがついていたのだ。最初に会ったのがアイツだったからそこからすべて歯車が狂っていったのだ。

「あ!帰ってきた!!」

扉を開けて、いるはずのない人物の声が聞こえて。

「春・・・?」

「なんだか久しぶりだね!エミ君!」

その声と、その仕草と。

その顔に。

今一番会いたくなかった彼女に、エミーリオは眩暈すら覚える。

「あのね、クロームちゃんが家にきてさ鍵を渡されたんだよ。あの子の力になってほしいって。意味はよくわかんなかったけど」

聞いてねえよ。

そう口にするのも億劫で、エミーリオはただ立ち尽くす。

「帰れよ」

ようやく絞り出した蚊の鳴くような声で、エミーリオは拒絶の意を示す。

「・・・え?あ、ごめんね。急だったよね。でもね、一言だけ、明日の体育祭のことなんだけど——」

「帰れって言ってんだよ!!!」

自分の出した声なのに、ビリビリと空気が振動するのを不快に思う。

自分の中でこれほど大きな声が出るんだとその時エミーリオは初めて知った。

「あ……、ごめんね。無神経だったね」

何もかもが初めての経験で、どうしていいのかわからないその様子は。

まるで泣きわめく赤子のように、どうしようもないものだった。

見たこともない春の顔。ぐしゃりと曲がった彼女の表情に、エミーリオは何も言えずにいる。

「あの、ね。あの、明日。来てね、体育祭。皆、待ってるから」

最後に絞るように放たれたその言葉は、それでも強い意志が宿っていて。

その言葉をおいて逃げるように走り去る春の顔を、もうそれ以上、エミーリオは見るができなかった。

そんな何人もの想いが幾重にも交差する中で。

その日はやってくる。

「おお、鷓じゃんか。なんだか久しぶりな気がするぞおい」

「ふん、一条楽。いいな、貴様は能天気で」

いつもピシッとシワ一つ無い制服は、今日ばかりは特別に白赤のコントラストが映える体操着に身を包んでいる。

鷓征四郎は、そんな中でも一際目立っていた。

その美貌に、ではなく。

「どうしたんだよ。その傷」

「なんでもない、強いて言えば勲章だ」

「なんじゃそりゃ」

明らかに異質な、他の生徒よりも数倍も多い生傷を携えてる体だ。

ここ数週間、体育祭の練習と並行して修行を敢行していた鷓の体は傍から見てもボロボロだった。

あのいつも千棘にべったりだった鷓が、その千棘の元を離れていたというのも驚きだが。

「一番はそれをつい先日まで知らなかった自分に、楽は驚いていたんだよな」

ポンと、肩を一つ叩き物知り顔で声を掛けるのは眼鏡が太陽光でキラリと光る舞子集。

「仕方ねえだろ、喋るのも久々なんだし」

「いやー、それにしても何してたの？体育祭の練習、ってわけじゃなさそうだけど」

「ふふふ、それは秘密だ。師匠との約束だからな」

「師匠？」

その時の鷓の脳内には、師匠であるコロネロの言葉が蘇っていた。

「いいかコラ。俺との修行は周りの誰にも言っちゃいけねえ。なぜだかわかるか？」

「いいえ！わかりません師匠！」

「隠れて修行をし、密かに力をつけ、そしてピンチになったとき颯爽と現れる！それが男のロマンだからだ！」

「なるほど！ロマンですね！」

「そうだぞ！コラ！」

正直に言っつて、師匠の言っている一ミリ程だつて理解はしていなかった鷓だが長い修行の成果で完全にイエスウーマンと化していた。「そういえば、桐崎さんもここ最近授業では寝てるし、放課後はすぐ帰るよな」

なんか知らんの？彼氏は。

そう尋ねられる楽だが。

「いいや、千棘も、なんかここ最近連絡とれねえんだよな」

いや、そういつも連絡を取っているわけではないのだが。カモフラージュするのに必要最低限だけだったのが、最近ではそれすらない。

まあ、もう恋人のフリも長くなる。それくらいでバレることはないと言えるのだが。

それにしても、心配だ。

「つて、なんで俺が心配しなくちやならねえんだ」

ガシガシと頭を掻きながら楽は提案する。

「取り敢えず、クラスのとこに行こうぜ。千棘はその内来るだろ」

「あ、一条君。もうすぐ整列だよ?」

「なにしてるのかしら?早くしてよね」

「お、小野寺!ああ、今行く!」

丁度いいタイミングで、声を掛けてくれた小野寺小咲と一緒に楽は自分のクラスの輪へと入っていった。

「ねえねえルリちゃん」

「なにかしら?メガネ」

「いやそれ君もやん、つてツツコミは置いておいてさ。どう思う?」

「なにがかしら?」

小野寺と共にきた宮本ルリは舞子の言葉にそっけない。

「・・・いいや、今日は体育祭日和だなと思ったんだけど、そう思わない?」

数秒の間で舞子が何を考えたのか、宮本には知る由もなかったが、その問いが珍しく、真剣なものであったのだと彼女は後になって気づいた。

「そうね、いい天気だわ」

「おろ?珍しく素直だねルリちゃん」

だから至極真つ当な返しをしたのだが、それもどうやら無駄だったらしい。この男には。

「あ!まってよ!ルリちゃん!」

頭上を見上げれば、雲一つない快晴。

確かに今日は、体育祭日和だ。

「結局、来なかったわね」

「・・・私のせいだ」

同じグラウンド内で、一年生が固まっている箇所で。

風と春は会話していた。

「春のせいじゃないよ。アイツはそーゆーヤツなの。人の好意とかなんとも思わないのよ」

落ち込む春を励まそうと頑張る風だが、なかなかうまくいかない。そも、何があつたのかと問いただしてみても答えてくれないのだからそれも当然なのかもしれないが。

こんなことは初めてだ。春との間で隠し事など、今までなかったのに。

「そんなことないよ、私が悪いんだよ。勝手に押し付けちゃった」

春は、いい子だと思う。

根は素直だし、友達思いで、明るくて、笑顔が絶えない、ちよつと男に対しての耐性とかないけど。それを差し引いてもいい子だと思う。

そんないい子だから、物凄く思うのだ。

「あんな男に振り回されて、彼女の笑顔が無くなってしまふのは。

本当にムカツクのだと。

「・・・そっか、春はいい子だもんね」

「風ちゃん？」

その時、いったいどんな表情をしていたのか風自身はわからなかったけれど。

それでもきつと、いい顔はしていなかったのだろうなということだけは、わかった。

「よし、春は頑張ったんだもんね」

そしてだからこそ決意する。

彼のためではなく、目の前にいる彼女のために。

「安心して、春。私がアイツを引っ張ってもここに連れてくるから」

「風ちゃん?でも——」

きつと昨日の夜になにかあったのだろう。それくらいの察しはバカでもつく。

「大丈夫だよ春。私、春よりも性格悪いの」

春にこんな顔をさせるアイツに、グープンチを浴びせてやるために。

彼女は、笑顔でそう言った。

ポーラ・マツコイは疲弊していた。

今までずっと、一人で生きてきて。まあ、鵜という目標はあったけれどそれでも、自分は自分自身の力で生き抜いてこれたのだと思っていた。

それが、日本に来てから気づかされることばかりだ。

料理はできない、家事はできない、掃除も、洗濯も。

唯一できた殺し屋としての技能すら、ここでは何の役にも立ちはしなかった。

生きていく力というものが自分にはとてもつもなく欠けているのだと、そう思い知らされた。

落ち込んだりもしたけれど。悩んだ時もあるけれど。

でも、それでも。

そういう時はできないと言ってもいいのだと、そう最近はあるように思ってきた。

ほんの少し、ほんのちよっぴりだけ。

そう思う。

「あー、もう。ほんとアイツどこいったのよ」

だからこそ、一人で修行をするのは辛かった。愚痴を言うのも、張り合うこともできずに、一人で黙々とする修行はとても辛かった。

「今度見つけたら絶対連れてくるんだから」

いつの間にか、彼はポーラの中でいてくれないと困るようなそんな対象になっていた。

ちよつと前までは、ラッキー、これで私が一步リードした。そんな風に考えていただろうに。

「つて、あれ？風・・・？」

ちよいと遅れて校舎に入ったポーラはすれ違うようにして走り去っていった女の子の背中を目で追う。

「凄く、怒った顔してたわね」

彼女のそんな顔を見るのは初めてだった。いつもニコニコと笑顔の絶えない優しい子だという印象だったから。

「アイツ・・・なのかな」

そんな顔をさせるのは、そんな顔を見せてしまうのは。きっと、アイツ以外にいないから。

ポーラは、それを嫌なことだなと、そう思った。

『これより第56回並盛高校体育祭を始めます』

体育祭の委員長の掛け声とともに、透き通る青空の下では喧騒が響く。

各種種目は、どこか緩い空気感の中でつつがなく進行していく。

「おお、千棘。珍しいな遅刻だなんて」

「ああ、うん」

そんな中で桐崎千棘の顔は晴天とは裏腹にとても曇っていた。

「・・・どうした？」

こういう時いつも誰よりも率先して動くような彼女のその顔に、態度に、一条楽は不安げに訊ねる。

偽物とはいえ恋人の、それもそんな顔をされてしまったては訊ねる他にない。

「ううん、大丈夫。私は大丈夫よ」

見たところ、外傷はない。誰かに何かを言われたのか、一条楽の知らないところで何かがあったのか。

思えばここ最近、一条楽の周りには自分の関わらないところで事態が進行しているが多かった。

自分の家が襲われたこともしかり、その後の鶴や千棘の不可思議な行動しかり。

「あーもう！そんな顔すんな！」

ビシリ！とほっぺを指でグリグリされる一条楽。

「本当に大丈夫よ！今日遅刻したのだから、ちよっとボクシングジムに寄ってから来たら思いの外時間かかっただけだし！」

「ぼ、ボクシングジム？お前、そんなんに通ってたのか」

「そうよ、そこで、ちよっとあの子のことを聞いちゃったの」

さっきまでの暗い顔はどこへやら。一条楽の不安げな顔を見た千棘は一瞬にしてまた元のやかましさを取り戻す。

それを優しさと呼ぶのかどうかは、わからないが、少なくとも一条楽は有難いとそう感じた。

「あの子？」

「エミリーリオのことよ。でももやしには言わない、言いふらすことじゃないし」

「そっか、いや、いいんだ。一人で抱え込んでるんじゃないよ」

「ふん、そうよ、今は小咲ちゃんや鶴だっているんだし。大丈夫よ」

そっぽを向いて彼女は恥ずかしげにそういった。最後に言った小

さい言葉はきつと、届かなくてもよかったのだろうか。

(聞こえたっつの)

なお、そつぽを向く彼女に小さく笑みがこぼれる。

「あ、そういうえば思い出したけど。さつき風ちゃんに会ってね。エミー、最近学校に来てないんだって」

ふと、千棘は何の気なしに口を開く。

「まあ、体育祭とか柄じゃないんだらうけどね。それで風ちゃんが走って探しに行ってた」

「……学校に、か」

確かに、言われてみれば最近エミーリオの姿を見ていない一条楽。学年も違うしそういうものだと思うっていたけれど。

「——うし、行くか」

「え？」

その千棘の言葉を聞いて、一条楽は腰を上げる。

「いや、そういう家を守ってくれたお礼、まだ言ってなかったと思ってさ」

「探しに行くんなら——」

「大丈夫だよ、お前はもうすぐ出番だろ。俺も自分の出番までには戻ってくる」

「でも」

「お前が、アイツの何を聞いたのかは知らないけど。でもさ、やっぱり思い出だと思うんだこういうのって」

その言葉に、千棘は深くうなづく。かつて自分もそうだったから。一人で、一人でいいのだと思いつつも。でも、やっぱりだめ。

「だから、アイツと一緒に出番までには戻るよ」

「うん、わかった。ちゃんと見つけてきなさいよ！もやし！」

「おう！」

とにかく、一人になりたかった。

考える時間が欲しいわけじゃあなかったけれど、頭を整理する時間が欲しいわけじゃあなかったけれど。

一人になりたかった。誰とも話したくはなかったし、誰とも会いたくもなかった。

家はだめだ。クロームがいつ帰ってくるかもわからないし、前夜の春のこともある。なんとなく近づきたくなかった。

街もだめだ。今は雑踏に群がる群衆ですら目に入れたくない。

だから一つしかなかった。選択をするまでもなく、それしかなかった。

「あーあ、なにやってんだろーな、俺は」

「はあ・・・はあ・・・、見つけた」

だから純粹に驚いた。“そいつ”が現れたことに。

まず誰にも見つからないはずだった。誰も立ち入れないはずだった。

修行に使っていた山。その中腹にある少し開けた崖。

何回も落ちそうになってポーラと共に踏破したその崖の上からエミリオは並盛という街を見下ろしていた。

「ふんだ。アンタの行き先なんて、たかが知れてるのよ」

風がいた。汗水たらしてここまで登ってきた風がいた。

山登りなんてしたことないだろうに、ここまで登ってくるのも、ここまで探してくるのも相当の体力を使っただろう風が。

そこにいた。

「何しに来たんだよ」

「約束したの、春と」

会話は微妙に噛み合ってはおらず、二人の目線は交差しないまま。

「アンタを体育祭に連れ出すって、でも——」

ああ、体育祭。確か、そんなものがあつた。

忘れていたというよりも、そもそも気に掛けていなかった。最初から興味もなければ行く意味もなかった。

目線をそらしたその瞬間、彼女は誰よりも踏み込んでくる。

「っ!!!」

歪む視界と、ミシリ、という音が頭蓋骨に響いて、続いて体が放り出されてようやく、エミーリオは自身が殴られたのだと分かった。

「その前に」発殴らせてもらうから」

言う前に殴ってんじやねえか。その言葉すらエミーリオの口からは出てこない。

遅れてどうやら口の中を切ったらしいことに気付く。独特の鉄の味が舌先に広がる。

「アンタ、春を泣かしたよね。あんなにいい子を、あんなに、”エミーリオを思いやってくれていた子”をアンタは泣かしたんだ」

仰向けに転がりながら、つんぎくほどに耳に入ってくる風の声。それほど大きな声ではないはずなのに、それはなぜか痛く響いた。

「私は絶対、それを許さない」

春は涙を見せなかったけれど、そんなのは彼女にとっては些細なことだった。

「許さねえって? おいおい、お前、一体俺の何なんだよ」

彼は、とつくに糸が切れていた。だから歯止めというものはとつくなくなっていった。

まるで満杯になったコップから水があふれだしていくように、それはきつと自然なことだったのだろう。

「いい子? 思いやってくれてる? 知ってるよそんなこと」

そんなことをされたことがなかったから、だからこそ余計に敏感にその感情は伝わってきて。

「だけどなあ、わかんねえよ。わかんねえんだよ。どうしたらいいかなんて。そんなこと教わってねえんだよ。必要だったことがねえんだよ」

殺しの技能さえあればいいと思ってた。事実、今まではそれだけでよかつたのに。

それだけでよかつたのに。

「頼んでねえよ。ありえねえよ。わかんねえよ。そんなん。ぎげんなよ」

どうしてという疑問ばかりが付いてきて、その癖その答えは出て来ちやくれない。

どんだけのストレスを与えりや気が済むんだ。気が狂いそうだ。

「なによ、エミリーオらしくない」

「あ?」

上を向けばいつまでも明るい太陽が照らしつけてきて、時折穏やかな風が吹く。

崖を背に彼は彼女を見上げる。

「そんな殊勝なタマじゃないでしょ、アンタは。そんないい人間じゃないでしょ、アンタは」

一歩ずつ、一歩ずつ彼女は歩みを進めた。

「周りの人間まで考えられるようなそんな出来た人間じゃあないでしょ、アンタみたいなもんが出来るのなんて精々自分のことを考えるくらいで精いっぱいよ」

「わかつたような口を聞くんだな」

「ええ、わかつてるのよ。だって、私も同じだもん。出来た人間なんかじゃないもの」

一瞬、俯いて、けれど彼女はもう一度顔を上げる。

「だから、アンタはアンタのままでもいいのよ。自分のこと考えてりやいいのよ。今迄みたいにか」

太陽に照らされたその顔は、泣いているようにも笑っているようにも見えて。

「はは」

久しぶりに、本当に久しぶりにエミリーオは心から笑った。

短い笑みだったが、それでも。

「なんで、お前に説教されてんだ僕は」

不思議とどこの誰の言葉よりも、世界中のありがたい言葉よりも、腑に落ちて、ストンと胸の中に溶けていく。

なるほど、確かにそれはその通りだ。

なんて絶対に口には出さないけれど。

「だからほら！やり返してきなさいよ！アンタはやられっぱなしでそこで寝てるまんまのヤツじゃないでしょ！」

好き勝手に言いがって。きつと、いや絶対にエミーリオを取り巻くめんどくさいあれやこれやなんてこれっぽっちも知りはないのだからうけれど。

まるで見てきたかのように当てはまってしまふ。そのことがどうしようもなく他人事のように可笑しかった。

なんだか両手を広げて目をつぶって「覚悟を決めました」って顔をしている。

の、割には手足は震えてらっしゃいますけども。

あーあ、なんだかなあ。

眩しい太陽はいつだって頭上で輝いている。鬱陶しくもその輝きは僕らのことなどちっとも考えてはくれない。

ただ、それはそこにあるだけで。誰の指図も受けずに、誰の思惑もない。

そんな太陽が、今は、なんだか、暖かくも思えた。

「だけどやっぱ鬱陶しいなあ、あっちいし」

「・・・うん？」

一人呟いたその言葉は誰にも届かずに、自分の中で霧散する。

いつエミーリオからの反撃がくるのか、ビクビクしていた風はそんな彼の独り言に思わず目を開ける。

「ぐーううー」

その瞬間を狙っていたのか、偶々なのか。だとしたらあまりにもぴったしに。

綺麗にそのお腹に膝蹴りが入る。

「ったくよお、言われなくてもするつつーんだよ。やられっぱなしは、

性に合わねえ」

そうだ、そういうえば思い出した。

エミーリオという人間は負けず嫌いだったのだと。

「それで、いいのよバカ」

地に伏しながら、風はそう呟く。

「・・・行つてくるよ」

「うん、私も、後で行く」

既に祭りは始まっている。

だがしかし、まだ終わってはいない。

そう、祭りが終わっていないのなら彼が行く意味もあるのだろう。

「はあつ、はあつ、はあつ、つたくエミーリオのやつどこ行つたんだ？」

一条楽は走っていた。心あたりを探そうにもそういうえば俺はあいつのことを何も知らないのだということを知った。

だが。だからといって歩みを止めるわけにはいかない。いや、だからこそより早くより長く走らなければ。

アイツのことを知ろう。好きな食べ物は何で、嫌いな教科は何で、休日は何をしていて、何をしている時が一番楽しいのか。

それを知ろう。そう思った。

「一条楽？」

いつもの通学路、川にかかる橋の上でその声が聞こえた。

「エミリーリオ!? お前! 探したんだぞ!」

ガシリと両肩を掴んで離さない一条楽に嫌そうに身をよじらせながら、しかしエミリーリオはこう言う。

「・・・そうかい。そいつは“丁度よかった”」

右端の口角が吊り上がる。底意地の悪い笑みが一条楽を襲う。

「ずっと考えてたんだ、どうすればアンタらを破局に追い込めるのか」
一条楽には何のことかわからない。ただ一つわかるのは、エミリーオはそれを説明する気などはないということだ。

「でもやめた。考えるのをやめた、難しいことを考えるほどどうやら俺の頭は優秀ではなかったらしい」

おもむろにエミリーリオは着ていた学生服を脱ぐ。

その白いシャツから見える白い素肌が纏っていた無数の暗器。

そのすべてを取り払い、彼は川に投げ捨てる。

靴下の裾、ズボンの下、ベルトの間。

少しの時間をかけてそれら全てをパージして、身軽になったことを示すかのようにピョンピョンと二度三度と飛び跳ねて見せる。

「何を・・・?」

ドボンドボンと川の音をBGMに彼は口を開く。

「だからさあ、喧嘩しようぜ。“一条センパイ”」

「ケンカあ?」

ピンと張りつめられた緊張感はその一言で多少緩む。

ナイフやら拳銃やらを取り出したときはどうなることかと思っただが。

「もちろんステゴロ。ただし、アンタが負ければ

――」

一体何がしたいのだ。一条楽にはんとわからなかったが彼の言葉に耳を傾けるしかなかった。

今、この現場の主導権は完全にエミリーリオにあった。

「桐崎千棘とは別れてもらう」

「・・・はあ!!?」

思わず素っ頓狂な声を出してしまいうくらいには驚いた。なぜここで彼女の名前が出てくるのか。

「いいじゃねえか。どうせ偽物の恋人だろう?」

「なんでそれを!?!」

「――」

どうやらそれに答える気はないらしい。その意味深な表情は、戦闘態勢をとる彼の体は聞いていた。

やるのか? やらないのか?

と。

「・・・なんかわかんねえけど。わかった、やるよ」

事態のパーセントだって呑み込めてない一条楽だったが。

言いたいことは山ほどある、次から次へとわいてくる一条楽だったが。

エミリーリオの周りにあつたとげとげしき。

完全になくなったわけではないが、それでもそれが緩和したと思っただから。

だから受けた。

結局のところ。

男は、千の言葉よりも一の拳なのだ。

「はは、そうこなくっちゃあな」

そうだ、最初からこうしてればよかったのだ。

自分にできることなど限られているのだから。

力づくで、結局のところそれしか知らないのだから。

けれどそうだ。悲しむ必要も落ち込む必要もない。

それしか知らないのなら、その知っていることを武器にすればいいのだ。

それしか知らないのなら、知ることから始めればいいだけなのだ。

ただ、それだけのことだったのだ。

「うおおおおおおお!!」

「らあああああああ!!」

いつの間にか、体育祭は佳境へと入っていた。

種目もその大半を消化し、残るは大詰め学年対抗リレーのみだ。

「うろうろう、どうしよう！結局エミ君来てないよお！」

「……来るわよ。アイツは来る」

春たちのクラスでくじ引きで選ばれたのはポーラに春、そしてエミリーオだった。

焦る春に、ぎゅつと唇を噛み締める風。

今までは彼が出場する競技も誰かがこっそり二回出たり、なんやかんやで誤魔化せたが。

流石に今回ばかりは難しい、なにせ名指しなのだから。

『出場する選手の皆さんは所定の位置について準備してください』

アナウンスが流れ、人の波が移動する。

「どうすんのよ！始まるじゃない！」

流石の実行委員も大声をだすしかない。

「とにかく、順番をアンカーにずらしてもらおうから。春たちはなんとか、時間稼いで！」

「何言ってるんの風、時間稼いでったってそんなの——」

「わかった」

「春!?!」

正直、ここまでくると厳しい。春の言葉に驚いている委員も、他のクラスメイトも、事情を察した周りの一年生も、

そう感じていた。

きつと、この三人以外は。

実行委員の声を遮って、春もポーラも所定の位置へと向かう。

「ちよー！何？なんか考えがあるの？」

あまりに迷いのない足取りに思わず彼女は期待を寄せてしまう。

この最終種目の学年対抗リレーは例年消化試合の体を要している。それもそうだろう、普通にやれば学年が上の方が勝つのは道理だ。

だからこれは得点もそう高くない、勝つのは最後に二チーム出る三年生のどちらかで、思いで作りという、そういう趣旨の元だと誰もが理解している。

だからこそ、そのリレーにアンカーが欠場など三年生の顔に泥を塗る行為に等しい。

「考え？ないわよそんなの」

「ちよつと〜!!」

もしエミリーリオが来なければ実行委員の女の子は、そのシワ寄せをもちに受けるだろう。

涙目で抗議する彼女と、風はもう、祈るしかない。

メンバー変更は効かない。今迄のインチキもばれてしまうから。

『それでは、第一走者はスタートラインまで来てください』

「あああ……」

もはや事ここまできればあとは、神に任せるしかない。

第一走者は、ポーラ・マツコイ。

二度三度と、屈伸をして。まるで自分の体の調子を尋ねるようにパンパンと体を叩いていく。

ゆつくりと靴ひもを結び、できるだけ長く間合いを取る。

「おいおいー！その一年本気だぞー！」

「白井ー！一年に負けんなよー！」

大きな歓声と笑い声に混じり、アナウンスが聞こえてくる。

『それでは、よーい……』

全員、体に力が入り歓声もやむ。

ポーラができるのはここまで。

一つ、長い息を吐いた。

『スタート!!!』

「ワーワーワー!!」

いけー!とか、やれー!だとか。

沢山の声とともに各組一斉にスタートした。

「終わった。完全に終わった」

うなだれ、最早レースを直視することすらできない実行委員のその裏で。

「まったく。モヤシまで帰ってこないじゃない!」

校門の前で、全ての種目を無事終えた桐崎千棘がせわしなく一条楽の帰りを待っていた。

「つて、ん?なににかしらあれ」

上る太陽と被って、上空から何かが下りてくる。

ツバサが生えてる?

なんて間抜けな感想を抱くと同時に、その正体がわかった。

「モヤシじゃない!!」

空から降ってきたのは一条楽だった。

「鷹?」

ツバサが生えていたように見えたのは鷹で、どうやら彼をここまで運んできたらしい。

「あんた、なんでそんなボロボロなの?」

「がペペ・・・。あれ?千棘?」

上空から落とされただけじゃないボロボロさが彼にはあった。

「ああ、これか。ケンカした」

へへへと、少し気恥ずかしそうにそっぽを向いて笑う彼に彼女は。

「——そう」

と、だけ返す。

「聞かないのか?理由とか」

「べつにー、アンタの顔みりや大体わかるわよ」

「・・・そか」

差し出された手を握って、一条楽は立ち上がる。

「・・・こんなことすんのは、今回限りだぜ。コラ」

上空に旋回する鷹を見上げながら。

一条楽はグラウンドへと向かうのであった。

——そしてリレーはやがて大詰め。

一学年十人で十周するこのリレーで今バトンが渡ったのはもう八人目。

「もう無理！私先に謝ってくる！」

「まって、まだ。もうちよっと」

リレーが始まってからずっとこのやりとりをしている風と実行委員。

他のクラスメイトはもうとつくに諦めていたその時。

「あ」

彼は現れた。

ボロボロの肌と、それに不釣り合いなほどに綺麗な体操服で。

「遅い——」

「仕方ねえだろ。やらなきゃいけねえことがあったんだ」

グイグイと伸びをして、彼はトラックに目を向ける。

「俺の出番は？」

「次の次」

「りよーかい」

そう言うと、彼は何事もなかったかのようにごく自然に歩いていく。

そんな様子に驚きあつけにとられていた実行委員は。

「つてーちよっと謝るくらいしなさいよー！」

「ごめん、みんな。あとで絶対謝らせるから」

風の意志がこもった声に、それ以上彼女はもう何も言えない。

「ん」

バトンが九人目にわたり、いよいよエミリーリオの出番だ。

「なにこれ」

既に走り終えたポーラから手渡されたのは赤いハチマキ。

「アンカーはみんなそれ巻くのよ」

「ふーん」

確かに、言われて見れば全員色違いのハチマキを額に巻いている。

白、青、緑。

ああ、俺は赤組なのか。

そんなことも知らなかった彼は、枯れた笑いを漏らす。

「で？なにその怪我」

「あん？喧嘩だよ」

「・・・バツカじゃないの」

所定の位置について、全員バトンが来るのを待つばかりだ。

最後まで傍にいるのはポーラのみとなり。

「その様子だと負けたんだ」

去り際に、思わずいつものように軽口を叩いてしまった。

「うん」

「え———？」

その返答を確かめる時間はもうない。

振り返れば、もう彼はバトンを受け取る体制で。

「エミリー——————く——————ん!!!!」

大きな声といっしょに、赤いバトンが渡る。順位は三着、前との距

離は微妙に離れている。

必死の形相で走ってくる春のその言葉には答えずに、彼は振り向き

ざま少しだけ笑った。

まるで「まかせろ」そう言ったように春には聞こえた。

そして—————。

「すごいよ！本当に勝っちゃったよ!!」

「はあー、三年生の顔見れないわ。私」

体育祭は無事に終了し今年も盛り上がったそれはもう後の祭り。

日は落ち掛け、今だ興奮の冷めやらぬ打ち上げの中。

「すごいなエミリーリオ！あそこから一着になっちゃうんだもんよ！」

「ほんともう凄かった！足早かったんだね！エミリーリオ君！」

その主役たる人物の周りには珍しく人が群がる。

「あーもう！うっぜえな！」

「あつはは、まだツンケンしてるー」

「ねえ、なんでこんな肌白いのー？化粧水何つかってるん？」

比較的女子の割合が多い中、質問攻めに遭いながら体の至る処をわちやわちやと触られる。

「はいはい、もう。皆やりすぎ」

パンパンと、手をたたきながら過熱しすぎていく空気を落ち着かせる風。

「ごめんごめん、エミリーリオ君つてもっと怖い人だと思ってたからさあ」

「そうそう、ちよつとやりすぎちゃった」

「あははー。ごめんねえ、風。旦那とつちやってー」

「な！だ、誰が!!」

思わぬところからの不意打ちに、思わず顔を赤らめる風。

「だつてー、いっつも一緒にいるじゃん？」

「そ、それなら春だつて！」

「んむ？ふあふあひ（わたし）？」

口いっぱいにお菓子をほお張り、振り向く春はどうやら話を聞いていなかったらしい。

「春はねえ」

「一条センパイだもんねえ」

「・・・あの人の名前を出さないでよね。せつかくの打ち上げなのに」

「ありや、機嫌悪くなっちゃった」

「・・・って、エミーリオ君は？」

「あれ？」

女子共の話がそれた隙を狙って、エミーリオは教室からの脱出を果たしていた。

「あ、アイツ〜！まだ謝ってないのに！ごめん！すぐ連れ戻してくる！」

「あはは、もういいよ〜」

「でも行ってらっしゃい」

ハタハタと手を振られ、温かい目で彼女は見送られた。

「つたくよお。鬱陶しいっつーの」

廊下を独り歩き、ふいに運動場を見渡す。

後片付けも終わり、残っているのはもう体育祭の残り香だけ。

結局、これでよかったのだろうか。

任務としても。自分としても。

変わったことは何もない。リングはゲットできずじまいだし、修行に至っては途中で投げ出したまんまだ。

一条楽にはニセモノの恋人を知っているとバラしてしまったわけだし。

「あーあ、こっからどうっすっかなあ」

多少黄昏たくなるような状況で。

「なにしてんのよ」

「ポーラ」

そういえば、教室にはいなかったなコイツ。

「お前こそ、いーのかよ。教室に顔出さなくて」

「・・・今から行くわよ」

ん？なんか変な顔してんな。

これは、緊張？なんで？

よくわからないポーラの表情に首をかしげていると、その答えは彼女の口から告げられる。

「アンタを呼んでる人がいるから、今すぐ校門に行きなさい」

「・・・はあ？」

呼んでる？俺を？誰が？

心あたりと言えば、リボン、くらいか？修行サボってたし。

「いいから、行ってきな」

「あ、おい」

ぐいぐいと背中を押してくる彼女の顔はうまく隠れていて見えな
い。

仕方なしに、エミリーオは言われた通り校門へと赴いた。

「つて、誰もいな——」

そこで、彼の足は止まる。

門の向こう側、学校の敷地を一步外にでたそこにその人物は立っ
ていた。

「やあ、〃久しぶり〃で、いいのかな？」

「・・・沢田・・・綱吉」

ボンゴレ十代目、イタリヤマファイアを統べる男。

物腰柔らかかそうな表情、オレンジがかった髪の毛。得も言われぬ
オーラ。

沢田綱吉が、そこにいた。

「てめえ、十代目に向かって呼び捨てたあなんだ！」

「あんたは、獄寺隼人か」

銀髪と目つきの悪さですぐに分かった。ボンゴレの右腕、忠実な仕
事人。

ちらと横目で確認する。この住宅街には不釣り合いに高
級そうな黒いリムジン。

あれで来たんだろう。しかし、なぜ？

十年前、妙な地震の折に頭の中に入ってきた十年後の記憶。

そこで十年後のエミリーオは白蘭という敵と戦うため、目の前の沢田綱吉たちと共闘していた。

その時の記憶と目の前にいる人物は一致しているから、その記憶は間違いではないのだろう。

だが、十年たって彼はその時見た記憶の中の自分とはまったく言っていないほど違う人生を歩んでいる。

もはや別人と言っても過言ではないほどに。

だから、いまこの世界で沢田綱吉たちに会うとは思ってなかった。

「いや、〃初めまして〃でいいんじゃないねえの」

「てめえ・・・！そろそろいい加減にしねえと」

獄寺の血管が切れる前に、綱吉は右手で彼を制する。

彼は少し不服そうに、しかし一歩下がった。

「うん、それで今日はある任務の話をしに来たんだ」

「任務？」

「ってーとなにか？あの、一条楽と桐崎千棘を別れさせるっつーアレ？」

「ううん。それじゃない。というか、そんな任務はない」

「・・・は？」

「それは、今回の任務のためのブラフっていうか。平たく言えばウソなんだ。ごめん」

「う、う、ウソおおお!!」

珍しく大声を上げるエミリーオは驚愕で開いた口が塞がらない。

だってそうだろう？今までなんのために悩んできたのか。その任務にどれだけ四苦八苦させられたか。

それが嘘だっていうんだから、そりゃ驚くわ。

つか、何のために俺は喧嘩したんだ。

現実を理解すればするほど、どんどんと肩の力が抜けていく。

「・・・で？任務って何？」

「受ける気はあるかい？」

言っている意味が分からず、彼は頭の中で考える。

なに？拒否権とかあんの？俺みたいなたつ端は「はい」って頷くだ

けだろうがよ。

「この任務は、今までのどれとも違う。これまでの親しい人たちはしばらく会えないし、とても過酷だ。君にとつては」

君にとつて？またムカツク言い回しだな。

そもそも、内容も教えられてないのに判断なんかできるわけねえんだ。

つまりこれは、覚悟を聞いている。

俺の中の気持ちを聞いているんだ。

一瞬、親しい人と言われて幾人か浮かんだけれど。

「やれと言われれば、俺はなんだってやるさ」

もう迷わない。できることしか、俺はやらない。

「そうか。それじゃあこれにはいつて」

一瞬、ちらりとエミリーリオの後ろを見たような気がしたけれど。

そんなことを構う間もなく、彼はなんだか筒状のような代物にすっぽりと体をしまい込まれる。

「これは十年バズーカと言つてね、これに撃たれると十年後の自分と入れ替わる。昔は5分が限界だったけれど、今はもうその時間制限は改良されてなくなった」

「ちよ、待てよ。何の話？」

一向につかめないエミリーリオはなんだかともないことが起くるんじゃないかという不安しかない。

「うわつとつと」

ひよいと、バズーカの上から何かが投げ込まれた。

「もしも、どうしようもなくなったら。最後の手段としてそれを噛むといい」

「いやだから！もうちよつと説明しろよ！」

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

ボン。

大きな音が、バズーカ内に響き渡った。

そして、彼は、エミリーリオは。

十年後へと、旅立っていった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

めだかボックス編

標的29「Mondo sconosciuto」(知らない世界)

「……は……？」

急な事態に、脳みそはまだ理解が追いつかない。

こういう時はゆっくりと一つ一つ思い出しながら行くといいと、誰かが言っていた気がする。

そう、確か俺は体育祭に出てわちゃわちゃとクラスメイトたちからもみくちゃにされていたのを逃げだしていたはずだ。

そこでポーラに連れられて、沢田綱吉にあった。

「うん、覚えてる」

どうやら記憶に齟齬はないらしい。

あの意味不明な出来事も、しつかりと思い出される。

十年バズーカで打たれた、そのことを。

「ということは、ここは十年後ってわけか？」

改めて、そこで辺りを見回す。

どこかの地下空間だろうか。辺り一面真っ白で何も無い。

広さはそこそこのものがあるようだが、なんの用途かははっきりしない。

そもそも、なぜこんなところにいるのか。

これも沢田綱吉の差し金か、はたまた意味はないのか。

(いや、考えていても仕方がない)

情報が少なすぎる今は、どれだけ考えたところで推測の域は出ない。

ならば行動するしかあるまい。少しでも有益な情報を得るために。

「まずはここが十年後なのかどうかから調べねえとな。あれが本当に十年バズーカだったのか確かめたいし」

その確証を得られなければ、エミリーリオは動けない。

なにせ信用も信頼も彼は沢田綱吉に対して抱いてはいなかったのだから。

「ふむふむ」

取り敢えず、エミーリオは自身がいる部屋を調べていた。ペタペタと壁を触っていき、扉の有無を調べる。

そして目覚めた当初から抱いていた懸念が段々と現実的になるのを彼は感じながら、やがて一番最初に目印として靴を置いた場所へと戻ってくる。

「おいおい、まじかよ」

たらりと垂らした冷や汗が頬を伝って地面に落ちる。

「この部屋。扉がねえ」

その、ただ一点のみの事実を肝を冷やししながら。

とにかく、彼は考えた。

あの後何週もより丁寧な扉を探したが、やはりお目当てのものは見つからない。

「どういうことだ……ここに俺がいるってことは入ってきた入り口はあるはずだろう……」

部屋の中央に胡坐をかいて、エミーリオはブツブツと現状を確認す

る。

「それとも塞がれたのか、なんで？ 一体だれが何の理由で？」

現状確かなのは、自分が謎の部屋に密室で閉じ込められていること。ただそれだけだ。

「くっそ、一体全体十年後の俺は何をしたってんだ？」

ここが十年後だと仮定するとして、こんなわけのわからんところに閉じ込められるほどのことって一体なんだ？

それとも、自分からここに入ったということでもあるまい。もしそうならそれこそお手上げだ。

ごろり、と堅い床に寝っ転がり天井を見つめる。

長いため息を一つついて、エミーリオは発想を変えた。

一旦ここから出ることは諦めて、自身の身の振り方について考えてみる。

「ここが十年後だろうがそうじゃなかろうが、結局何の目的か、それを知らないきや意味がない」

あの沢田綱吉がわざわざ出しゃばってきたんだ。無意味なことをするような暇人でもないだろう。

そこには必ず意味があり、目的がある。

だとするなら、やはりこの状況も無意味ではないはずだ。出るにしろ、出ないにしろ。

と、そしてもう一つ。

「この謎のキャンディー、だな」

カシヤカシヤと二度三度、振ってみる。

キャンディーケースにはいった緑色の丸いそれは音を立ててこすれていた。

これがなんなのか、あの一瞬で渡され説明も何も無いのにわかるわけがない。

だが、やはり先に言ったようにこれが無関係で無意味だとは思えない。もしそうだったらマジで一発殴る。

「今は、くっそ、信じるしかねえのか」

歯齧みしながらエミーリオはそう呟いた。

ほかに持っているものはない。

リングも匣兵器もない。せめてあの時、あのジジイから無理矢理にでもリングを受け取っていればよかった。

今更ながらの後悔に苛まれ、また一つため息が出る。

ため息をすると幸せが逃げるといふのが本当なら、彼はこの瞬間にも大量の幸せを逃がしていることになるだろう。

「こんな手詰まりで、どないせーっちゅうねん」

何もできな過ぎて寝ることしかできない。武器だって、一条楽と喧嘩した時に勢いで全部捨ててしまった。

まったく、なぜあんな馬鹿なことをしたのか。己のことながらに理解できない。

そう、理解できなかった。なぜあんなことをしたのだろうか。体育祭のことも、喧嘩のことも、それもこれも。

風のせいだ。あの少女が言ったことが未だに心から離れない。

そんなことを考えながら、そう言えばここ何日寝てなかったことに気付き。

瞼は沈み、意識は段々と自らの手から零れ落ちていった。

『あれあれあれえ？ちよつとちよつと、もうお昼だっというのにこの子ってば眠り姫は美少女だから許されるんだぜ？』

ん？なんだ？

あれから何時間が経ったのか、そもそもこんな部屋じゃあ今が何時で何時間眠ったのかもわからんが。

そんな中でとてもじゃないが心地よいとは言えない、そんな眠りを声の主は妨げてくる。

ぼーっとする目覚めのまどろみの中で、眩しさに目を細める。

『やあ。おはよう』

黒髪に学ランの少年、人懐っこいようなそうでないような、何とも言えない笑顔を貼り付けたその少年。

いつの間にかいたのか、というかどうやってこの部屋に入ってきたのだろう。

エミリーリオの寝顔をしやがんでのぞき込んでいたその少年は、おもむろに立ち上がって。

『君のことは聞いている。僕の名前は球磨川禊。大したことのないそこから辺にいる噛ませ犬だぜ☆』

るんっ。

と、ぼつちり決めたキメ顔で彼は、球磨川禊はそういった。

「ああ、そうかい。ところであんた、どうやってこの部屋に入ってきたんだ」

くわーっと、あくびしながらエミリーリオは会話を試みる。

目の前の球磨川禊はなんなのか、この部屋にわざわざ現れたんだ。そこらの通行人とはわけが違う。

明確な意志と、目的があるのは火を見るよりも明らかで。

『おいおい、人に会う時はまず自己紹介だろ？』

「あ———？」

螺子。

一瞬で、螺子が飛んできた。

考える暇なく、避ける間もなく。

エミリーリオは串刺しにされた。

「……がっ!?はっ!?はあ、はあ、はあ……」

なんだ?何が起こったんだ?今、確かに俺は螺子に貫かれて?

一瞬の出来事過ぎて頭が混乱していた、しかし確かなのは混乱する頭は無事にあるということだ。

確かに先程貫かれたはずの頭が。

『なーんてね!ウソウソ!怒ってないよ?』

一瞬見せた最悪の笑顔から、今はまた貼り付けたようないい笑顔を見せている。

その手には螺子どころかなにもなく、細い腕はとても人体を貫くような造りをしてはいない。

「……すみませんねえ。エミーリオ、エミーリオ・ピオツティっていうんですよ。俺の名前は」

さっきのが何だったのか、そしてここがどこなのか。わからない以上無暗に敵は作るべきじゃない。

状況判断くらいはできるんだ。こう見えても。

『うん!いい名前だ!よろしくね!』

「ああ……よろしく」

その怖いような笑顔に、エミーリオは引きつったそれしか返せなかったが。

「それで、ここは一体全体どこなんだ?」

『おっと、そんなことも知らないのかい?』

意外そうにそう煽ってきた球磨川禊は、それでもうんうん頷き丁寧に説明を加える。

まるで知らないことを尊んでいるように。

『そうだね、ここがどこかという質問に馬鹿正直に答えるのなら、ここ

は箱庭学園。ちょっとばかり変な奴らが集まる学園さ』

箱庭学園？当然だが聞いたことも見たこともない。

「あの部屋のごとは知ってるのか？」

『知っていると言えれば知っているし、知らないと言えれば知らないなあ』
イラツと、しないこともないが、その思わせぶりな態度に付き合う
と話はいつまでも平行線だ。

先の見えない暗い廊下を歩きながら、エミリーオは特技の一つ、感
情をオフにして話を聞いた。

「つまり？」

『あの部屋には一度行ったことがあるからね。扉がなかっただろう？
それは僕の作業なのさ』

「アンタの？」

『うん！』

明朗快活なその笑顔は嘘をついている風には見えない。

この目の前に突然現れた男を全面的に信用するのもどうかと思
うが、それでも今はそれにすぎるしかないのだからしょうがない。

騙されているのなら、そんなときはそんなときだ。

「てことは、俺にも会っているのか？」

『さあ？』

「曖昧だなあ」

『僕が見たときは、全身を拘束されて袋に入れられている状態だっ
からね、生きてるのか死んでるのか、そもそも人間なのかもわからな
かったよ』

・・・なるほど、少しだけ理解できた。

やはり、あそこは何かの収容所だったわけだ。

十年後の俺は“何かがあつて”そこに入れられていた。

その何か、を、目の前を歩いている球磨川は知らないのか興味があ
さそうだ。

『それじゃあ、これも知らないだろう？』 フラスコ計画』

「・・・当然、知らないな」

摩訶不思議なその計画の名前には心当たりなんぞあるわけがない。

もしかしたら、十年前の僕にしかできないことがあつてだから飛ばされたのかも思った。

それなら合点がいくからだ。まるで、十年後の世界に飛ばされた中学生のころの沢田綱吉たちのように。

だが、その計画の名前を聞いてもこの俺は何もわからない。

と、なると、この線は薄くなる。

『じゃあ特別スベシヤル、異常者アフノーマルとして過負荷マイナス。ここら辺の言葉に聞き覚えはあるかい？』

「・・・笑つちまうほどねえなあ」

一応考えてはみたものの、ボリボリと頭をかいてしまうほどにはその言葉たちに心当たりはない。

『うんうん、なるほどねえ』

だがそんなエミリーリオにも怒ることも呆れることもなく、球磨川はただ嬉しそうに頷くだけだった。

(気色悪いなあ)

あまり人のことをそんな風に思ったことは興味がないという理由でなかった、エミリーリオだが、この時人を初めて気持ち悪いと思ったかもしれない。

そんなことには気づかず、エミリーリオはそれでも会話は続ける。

「で、それはなんなんだ？当然、教えてくれるんだろう？」

高圧的にも取られかねない(いや実際そうだった)が、それでも球磨川は喜んで答える。

『もちろん！持たざるものには慈悲の手をつてのが僕のポリシーだからね』

言葉だけを聞けば、なんたる善人だと辟易していたところだが。

どうもこの人間の言葉を額面通りには受け取ってはいけない気がする。すると、ここ数分で既に思い始めてきたエミリーリオである。

『そうだね、全部一から教えてあげてもいいんだけど。今は時間が惜しい。だから僕ら過負荷マイナスのことだけ、簡単にだけど説明してあげるね』

んんつと、わざとらしく咳払いをしてからもったいつけてできる限

り高慢に球磨川は高説し始めた。

『とは言っても過負荷^{マイナス}つてのは、結構忌み名の通りでね。皆何かしら人に疎まれるような欠点を持つている人たちのことだよ』

先ほど言っていた言葉の中で一際異彩を放っていたそれは、説明を聞いてもあまりピンとは来ない。

『ほら、例えば何をやってもダメな子っているじゃない？運動をやらせても、勉強をやらせても、友達の輪の中に入ろうとしても、何をやっても裏目。そんな出来ない子つてのが世の中にはいるでしょう？』

「それがアンタらだつて？」

『いやいや、そこまで良くは言って無いさ』

良くは？

その言葉の端つこに怪訝そうな顔をしたエミーリオのことを見逃さず、球磨川は語る。

『さつき言つたらう？^{マイナス}過負荷^{マイナス}つてのはその名の通り”——”^{マイナス}なのさ。

自分が出来ないだけじゃなくて、周りまで出来なくさせてしまう。自分がダメになるだけじゃなくて、周りまでダメにしてしまう。そういう連中のことさ』

両手を広げ、とんでもないことを誇らしげに語る球磨川の顔は真っ黒に澱んでおり把握が付かない。というよりは“したくない”と言つたほうが正しいか。

「ふーん……」

なるほど、概要はわかった。

だが内容が分からない。

なにせ、自分が何をすればいいのかその大事な部分が分かっていないのだから。

『それにしてもさー君の格好もまた奇抜だよね！めだかちゃんや高貴ちゃんも奇抜だったけれど、君はそれとは違う意味でまた人目を惹く。なんだい？そんなに必死にキャラ付けてお前主人公にでもなるつもりかよ』

中傷と侮蔑、それを皮肉交じりに繰り出してくる球磨川にしかしエミーリオは屈さない。

そんなことはこの姿で生まれた時から受けてきた。

「それで最後にもいつこ質問なんだけどよ、さっきのあの螺子。なんだあれ？」

『……』

わざとらしく間を作って、球磨川は何かを考えている。

『うん、なるほど。今ようやく、僕がここに来た理由が分かったよ』

「はあ？」

質問に答えてないのはお互い様だが、エミリーオはあからさまに不躱な態度だ。

『まあまあ、怒らないでくれよ。君も何も知らないようだけど。僕だってなんで君とこうして仲良く歩いているのかわかってないんだからさ』

これも弱者の宿命だよな。

なんてやれやれとかぶりを振りながら、球磨川は呟いた。

『そうだね、出口もそろそろだし。最後の質問にはちゃんと答えよう』
廊下を歩いて、エレベーターに乗り、廊下を歩いて、階段を上り、廊下を歩いて、そして廊下を歩いている現在。どうやらちゃんと目的地には向かっているらしい。

途中何度も球磨川をタコ殴りにして情報を吐かせようかと考えたが、あの螺子の一件がどうにもそれをためらわせた。

『さっき言った過負荷マイナスの話だけれど、あれにはちよつとだけ続きがあつてね。突出した才能つてのは良くも悪くも周囲を巻き込むんだ。人はそれをスキルと呼ぶ』

「さっきのそれもそうだと？」

『そう、察しがいいね。ただ、スキルつて呼ぶとなんか良さげな能力な気がするけど、僕らは腐つても過負荷マイナス。数学じゃあマイナスにマイナスを掛けるとプラスになるけれど、現実はその単純じゃあない』

やがて廊下は突き当り、大きな扉を球磨川が開ける。

太陽光が一気に差し込んで、思わず眩しさに目を背けた。

『マイナスにマイナスを掛けたって、一緒に墮落していくだけさ』

そんな眩しさの中で、その暗闇は。球磨川禊はただ、笑っていた。

『ようこそ箱庭学園へ。歓迎するよ。エミリーオちゃん』

「ああ、歓迎されるよ。球磨川禊」

まだ、何もかもが分からない中で。

ようやく、彼の二つ目が始まる。

標的30 「球磨川禊」(M i s o g i K u m a g a
w a)

「君に恨みはない。だから殺す」

『やだなあ、僕は悪くないのに』

ピンチはチャンスの裏返しだ。

そんな言葉があるけれど、きつとそれは正しくない。

正しくないというよりは、その先にあるものを説明していない。

「暗器使い、宗像形。殺人衝動の異常、^{アフターマル}押しまいる」

『やっだー、君ってばやっさしー。ちゃんと初めましての人には自己紹介できるんだ』

ピンチはチャンスの裏がえし。

そしてそれは。

『だけどごめんね。君の出番はここで終わりだ。噛ませ犬ちゃん』

チャンスを掴んだところで、何も得られはしない。そんな虚しい勝利。

そんな感想を、エミリーオは目の前の惨状を見て抱いた。

血、血、血、血、血。

流れる血。飛び出る血。固まる血。

おおよそ惨状と呼ぶにふさわしいその現場で、エミリーオはただただ突っ立っていた。

『やあ、おまたせ。ちよつと掃除だけ終わらせたよ』

球磨川禊は変わらない笑顔でそう言う。

「いやいや、待つてはないんだがな」

あの白い箱のような部屋から出てきて、開幕。

エミリーオ達は何物かもわからない人物たちから襲われた。

いや、襲われたというよりはこちらから一方的な不意打ちをしたというか。

おおよそ死角からの攻撃を逡巡することすらなく繰り出して、約十名ほどをさっさと倒してしまったのは間違いない球磨川だ。

「びっぴなびっぴいっちはっ。」

事情なんか一つも分らないエミリーオは、ただ球磨川禊のやる行いを傍で見ているだけだった。

加わることはせず、かと言って止めることもせず。

我関せずとただ突っ立っていただけだった。

『さあ？よくわかんないや』

てつきり、何かの因縁があっただからあれだけ動けたのだと思っ
た。

やってることは暗殺者のそれで、人をここまで暴力的になぶり殺しにできる何かが。

だが、目の前の男は首をひねらせてわからないという。

多分、本気で言っているのだろう。

この数時間、たった数時間しか知りえないがそれでも十分だった。

彼がいったいどんな人間なのかは。

それほどまでの、強烈な個性。

「そうかい」

そんな個性を、その一言で片付けてしまうエミリーオも、それはそれで十分イカれているのだが。

(にしても、あの攻撃。死角を的確についていく嫌な攻撃だ。あれほどのもの、暗殺者でだってそうできるもんじゃない)

事情はともかくとして、エミリーオはひとまず冷静に戦況を分析する。

よっぽどのがない限り、基本的に人数というのは＝暴力だ。

特に1対10なんて絶望的な戦力差、そうそう覆せるものじゃない。
い。

つまり、球磨川禊にはそれを覆すだけの“何か”があるのだ。

まったくもって、その何かつてのが何なのかはわからないのだが。

『それじゃあちよつと手伝ってくれるかい？』

「手伝う？何を？」

『球磨川禊演出家の演出をさ』

そんな遠回しなことを言うのが、どうやら球磨川禊という男らしい。

手伝え、そう言われてエミリーオは言葉どおり手伝った。

『よいしょ、よいしょ』

球磨川が（相変わらずどこから出しているのかわからない）螺子を使って襲った人物たちをつるし上げていくのを。

この行為の意味を、エミリーオにわかるはずもなく。

「つたく、何やってんだろうな僕は」

ついには、仕事のスイッチを入れる証でもある一人称すら変わってエミリーオは黙々と人をつるすという奇怪な仕事をこなしている。

ちら、と、横目で球磨川を盗み見ると鼻歌なんかを歌いながら大層機嫌がよろしいらしい。

演出家の意図は、この世界の素人であるところのエミリーオには読めない。

全員をつるし上げ終えて一息ついたころだった。

彼女たちがやってきたのは。

「プラスチック裏の六人が、チーム負け犬が全滅・・・？」

「な、なんだこりゃ・・・。何がどうなったら、こうなるんだ？まさか、相打ちにでもなったのか？」

ぞろぞろとエレベーターから出てきた集団。

その中の快活そうな男子が目を白黒させながら、動揺していた。

見れば集団内の誰もが彼と同じ反応で、どうやら彼らにとつて今しがた討ち取られたこいつらは相当信頼があつたらしい。

仲間だったのかどうかまでは定かではないが。

『いいや、相打ちじゃあこうはならないね』

そんな中で、この惨状を事件と呼ぶのなら。

その犯人がいけしやあしやあと名乗り出る。

『十四人全員が同じように串刺しにされている。これは明らかに第三者の仕業に違いない。一体どういう目的があつてこんな面白半分の惨状を演出したのかはサツパリわからないけれど』

・・・本当にいけしやあしやあと。

「誰だ！」

『おおっと、早とちりしないでおくれ。僕が来たときにはもう、こうなっていたんだ。だから』

きつと、ただ名前を名乗るよりもよっぽど彼の自己紹介にふさわしい。

『僕は

悪くない』

その一言を。

『めだかちゃん、久しぶりっ。僕だよ』

「——っ！球磨川っ・・・!？」

めだかちゃんと呼ばれた女の子の球磨川を見る目は、人を見るそれではない。

黒髪が腰までなびく凜とした少女。なぜかボロボロなのは彼女だけではなく、その後ろにいる連中も同じくボロボロだ。

一貫して我関せずの立場を続けてきたエミリーリオだが、流石にここまで状況が進んで触れられないわけがない。

「それで？球磨川よ。そのそいつは一体誰だ？」

立ち位置として、エミリーオと球磨川、めだかちゃんという女の子たちは向かい合っているので敵視されるのもしかたない。

が、エミリーオとしては今の少ない情報量で敵味方をわけてしまうのはいかんせん危険だ。

そもそも、エミリーオがここにいる目的がわからない以上、どう動いたら正解なのかなどわかるわけもないのだが。

『ああ、この子かい？僕の無二の親友さ』

なんていう思惑を、きつと悟っていたのだろう球磨川は間髪入れずに手を打つ。

「・・・誰が親友だ」

『ちよつとシャイボーイでね、皆、よろしく仲良くしてあげて』

「・・・」

ほれ見たことか、一斉に相手さん方が僕をじろりと恐ろしい風貌で睨み付けてくるじゃないか。

返答しない方がよかったか。

もう遅い後悔をしながら、それでも会話は続く。

「それで球磨川？貴様は一体なんの目的でここにいる」

『やだなあ、そんな怖い顔しないでよ。めだかちゃん。僕ってば今日付けで箱庭学園に転校してきたんだからさー。同じ学園の仲間だぜ？』

『今日は理事長室に行きたかったんだけど、道が分からなくなってるね。よかったら教えてくれないかい？』

「箱庭学園に転校だと？」

どうやらその事実は彼ら彼女らにとってはショックだったようだ。動揺が隠せていない。

いや、それは最初からそうだった。球磨川禊という男が現れてからずっと。

『そういうこと、それはそうとめだかちゃん。今、生徒会長やってるんだって？あの時の僕のように』

「・・・ああ、あの時の貴様を反面教師にな」

どうやら球磨川とめだかちゃんは昔からの知り合いらしい。雰囲気

気を察するにそんな人間がそちらにももう二、三人いそうだ。

『ふーん、そっか。ま、頑張ってね。応援してるよ』

その言葉を最後に球磨川禊はくるりと反転し歩き出す。
理事長室の場所、わからないんじゃないのかよ。

そう言いたくなるほどには確かな足取りで。

『じゃ、行こうか。エミリーちゃん』

「・・・だいぶ恨むぜ、球磨川」

この状況、ちよつとやそつとじゃ覆せないこの雰囲気を用意して
作ったことに。

『やだなあ、エミリーちゃん。そんな焦った顔しちゃって』

そんなエミリーオを見てニコニコ笑う球磨川と、多少の覚悟の上で
一緒に歩き出すエミリーオ。

『ま、取り敢えず敬語つかえよ。先輩だぜ?』

「・・・へーへー。球磨川先輩」

コツコツと廊下を二つの足音が木霊する。

「それで? 球磨川先輩、状況説明くらいはあるんでしょうね?」

『黒髪が綺麗な女の子が黒神めだかちゃん。その女の子を一途に慕っ
ているのが人吉善吉ちゃん。やけにキラキラしていた長身の男の子
が阿久根高貴ちゃん。後は僕は知らないなあ』

『いや、僕が聞いているのはそういうデータ情報じゃあなくてですね』
なぜ、あの連中あんなにボロボロだったのか、なぜ、あそこまで恐
怖と敵対の感情を持たれているのか。

まあ、どうでもいいか。

だってもう戦況は決している。ここから何かが変わるのは天地が

ひっくり返る代物だ。

あり得ないとは言わない。この現実、いつだってありえないことが起きている。

事実として今ここにエミリーリオがいるのが証拠。

『エミリーリオちゃんも不服だろうけど、諸々詳しいことはこのおじいちゃんに聞いてよ。僕なんかよりよっぽど詳しいんだからさ』

そう言つて、球磨川先輩は扉を開ける。

やっぱり理事長の部屋知ってたんじゃないですか。

その言葉は呑み込んで、エミリーリオはその部屋に足を踏み入れた。

「やあやあ、球磨川禊君。待つていましたよ」

その部屋の中央、一目でわかる高級そうなソファにゆつたりと腰を掛けているお爺さん。

全体的に皺が深く、白い髪の毛は年齢を感じさせている。

「・・・エミリーリオ君も、無事に目が覚めたんですね」

「——俺のことを知っているのか」

その細い目がこちらを捉えエミリーリオの名を呼ぶ。

途端に切れかけていたエミリーリオのスイッチは押され、声にも真剣味が宿った。

「ええ、知っていますとも。君をあの部屋にやったのは私ですから」

『どーでもいいんだけどさあ、お茶の一つでも入れてくれないかな？』

僕、喉が渴いてるんだ』

そりや一体どういうことだ。

そんなセリフを吐く前に、いつの間にかソファに座っていた球磨川先輩が会話を遮る。

「おっと、これは失礼」

「お茶を入れながらでいい、知ってることを教えてもらおうか」

ここまでほとんどゼロと聞いていいほどの情報できたエミリーリオにとって、目の前の老人は貴重な情報源だ。

ここはどんな手段であれ、知っていることを教えてもらわなければならない。

「ほっほっほ、そう慌てなさるな」

「ちっ」

相手に主導権を握られているこの感覚、いつになっても慣れないものだ。

「とはいえ、あなたのことについて知っていることは多くはありませんよ。私は」

「知っていることでもいいと言ったはずだぜ」

『悪いんだけどさあ、理事長センセ、手短に頼むよ。今日の僕は割と忙しいんだ』

黙ってお茶をすすっていた球磨川先輩だったが、痺れを切らしたのか理事長の余裕さが鼻についたのか会話に割り込んでくる。

「・・・そうですか、それでは仕方ありませんね」

球磨川先輩の嫌なプレッシャーにより、すこし冷や汗を垂らしながら理事長は口を開く。

「でも本当に、エミリーオ君のことは詳しくはないんですよ。私は、ある人物に頼まれて君をあ部屋へと入れてあげたのです」

もつとも、その時の君はそこまで若くはなかつたんですね。

それだけ言うと、理事長はまたほっほっほ、と高笑いをあげる。

(頼まれた？十年後の俺をあ部屋にいれるように?)

その情報は現状を進展させるのは足らず、ただ混乱をもたらしただけだ。

うなだれて、考え込むしかない。

そんな僕を尻目に会話の矛先は球磨川先輩へと移る。

「それで？球磨川君、君の目的も聞いておきましょうか」

『目的？そんなのは決まっているじゃないですか。この学園に巣くうアブノーマル十三組の連中を一人残らず抹殺します』

さざりと、とんでもないことを言つてのける球磨川先輩。

これには流石の理事長もあつけに取られて返す言葉がない。

『だってあいつら』

『気持ち悪いでしょ?』

まったくもって普通の表情。

そうか、これが球磨川禊か。

自分のことで手一杯だったエミリーリオですら、そんな感想を抱くほどだ。

当の本人である理事長の心情は押し付けて図るまでもない。

「・・・球磨川君、あなたはこの学園に招かれた意味をちゃんとわかっていますよね？」

「どうやらその球磨川の真意は理事長にとってはよくないことらしい。」

『もちろんですよ、誰も悩むことなく誰も困ることない平等で平和な世界を作る』

『その素晴らしい思惑に僕は大きいに共感します』

さらっとでたが、エミリーリオにとってはその情報も貴重なものだ。頭を垂れて、今後の未来に押しつぶされている場合ではない。

今はどんなことでも糧にすべきだ。

『ただ、どうでしょう。そんな世界を作るために、わざわざ完璧な人間を作るとするのは、僕にはちよつと効率が悪いように思えますね』

完璧な人間を作る？

それが、この理事長の目的か。

こつちにはそれを吐き出させておきながら、自分はこのうのうと隠し通そうとしているのだからこの老人も中々にタフである。

『何事も、作るより壊す方が簡単ですよ』

「つまり？」

『エリートを皆殺しにすればいい、そうすれば世界は平和で平等です』

またまたとんでもないことを平然といいのける。

が、もうこれくらいではエミリーリオは驚かなくなってきた。感覚がマヒしてきたとも言えよう。

『軍事兵器とかー、悪法とかー、不公平なシステムとかー。ああいうのって基本的にエリートが考えてエリートが作るでしょう？』

だから、そいつら全員消してしまえって？

言うのは簡単だが、横にいる球磨川先輩は本当にやってしまいそうなの。

そんな現実味がある。

「・・・わかりませんね。どうしてそこまで目の敵にするのです？ エリートを」

『えー？理由？理由ですか、弱りましたね』

大仰に手を振って、球磨川先輩はわざとらしく困った顔をする。

『あ、そうだ！ エリートに両親を殺されたからってのはどうです？』

『実の妹がエリートに攫われたからとかー、実の親友だと信じていた エリートに裏切られたってのも萌えますよねー。うーん、どれにするか迷うなあ』

意味なんてない。

今の言葉のすべてがたつたその一言に集約されていた。

「そんなことを許すはずがないでしょう!？」

仮にも教育者、そんな誇りがあるのか理事長は机をたたいて講義する。

瞬間だった。

刹那、その言葉がぴったり当てはまるその時間。

理事長の胸には串刺しになった螺子が数本。

「!？」

当の理事長も、何が起こったのかわかっていない。

だがエミリオオは見ている。横で、確実に。

球磨川先輩によって投擲されたその螺子が。

(あれだ、あれを確かに俺も受けた)

あの時の攻撃が夢でもなんでもなかったことが今証明される。

『老人なら攻撃されないと考えた？』

『黒幕ぶってれば安全だと思っただ？』

『僕がかわいらしい顔立ちだから』

『おしやべりの最中なら死なないと思っただ？』

そして最後の一撃を、球磨川先輩はハイキックで決める。

『甘えよ』

「はっ!？」

そしてエミリオオの時と同じく、まるで何事もなかったかのように理事長の体は元に戻っていた。

『……が、その甘さ、嫌いじゃあないぜ』

なぜここでいいセリフを？

と、誰もが思ったことだろう。

『心配しないでくださいよ、理事長。あなたは取り敢えず愚か者の方に入れといてあげます。僕は弱いものと愚か者の味方だ』

それは、裏を返せばエリートとは敵対するという確固たる意志の表れで。

いつの間にかエミールオは自分のことを忘れて、球磨川先輩に対する言い知れない不安感でいっぱいだった。

(……たくよお、こんな人間会ったことないぜ)

経験からくる対処ができない人間なんて初めてでどうしていいかわからない。

『ま、楽しみにしててくださいよ。エリート共は僕が一人残らず螺子伏せてあげますから』

そう言つて、球磨川先輩は理事長室を後にする。

ついでにエミールオは怖い笑顔になつている理事長に尋ねた。

「俺をあそこに入れるように頼んだのは、どこの誰だ？」

「……ふっ。球磨川君といい君といい、まったく。……いいでしょう、教えてあげます」

大分憔悴しきつているその顔で、それでも理事長は教えてくれる。

「入江正一。私は彼に頼まれてあなたをあそこにいれたのですよ。と
いってもつい昨日の話ですが」

「——入江、正一だと……？」

こうして、エミールオは巻き込まれていく。

大いなる流れと、その中に点在する小さな流れに。

To be continued.